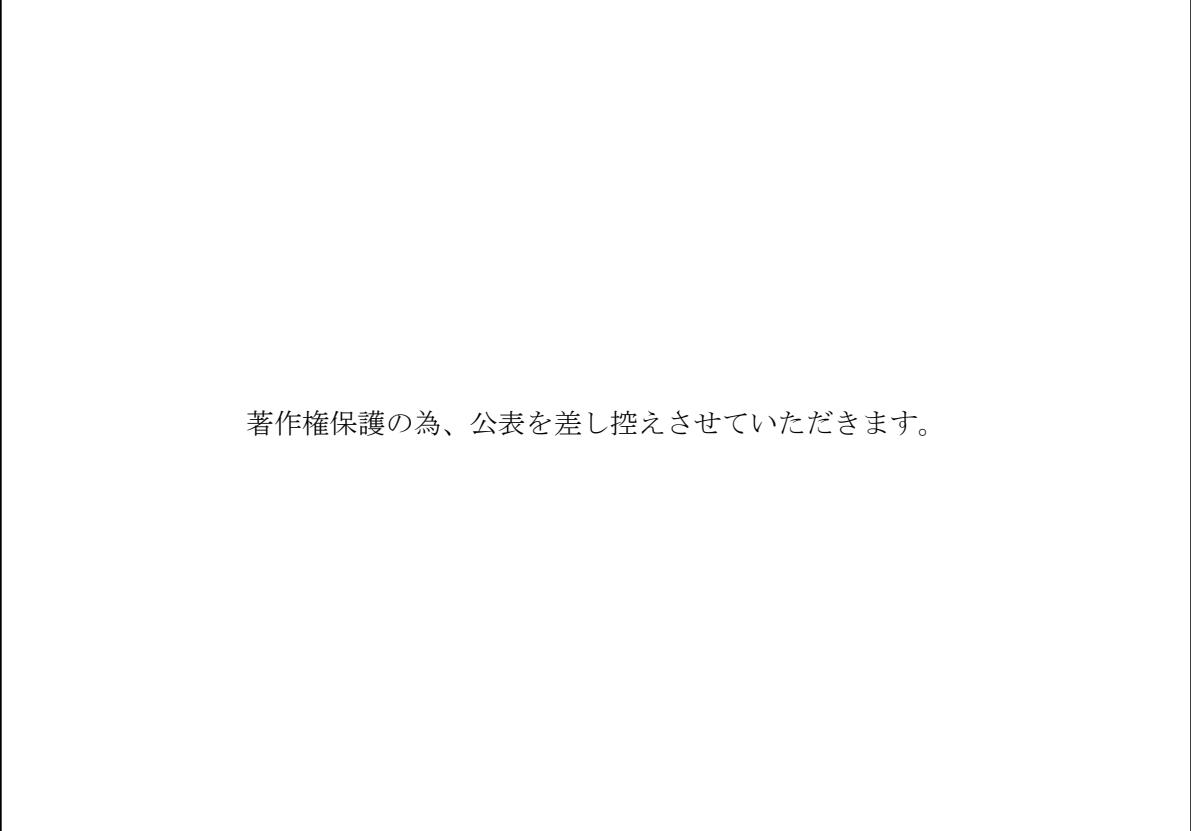


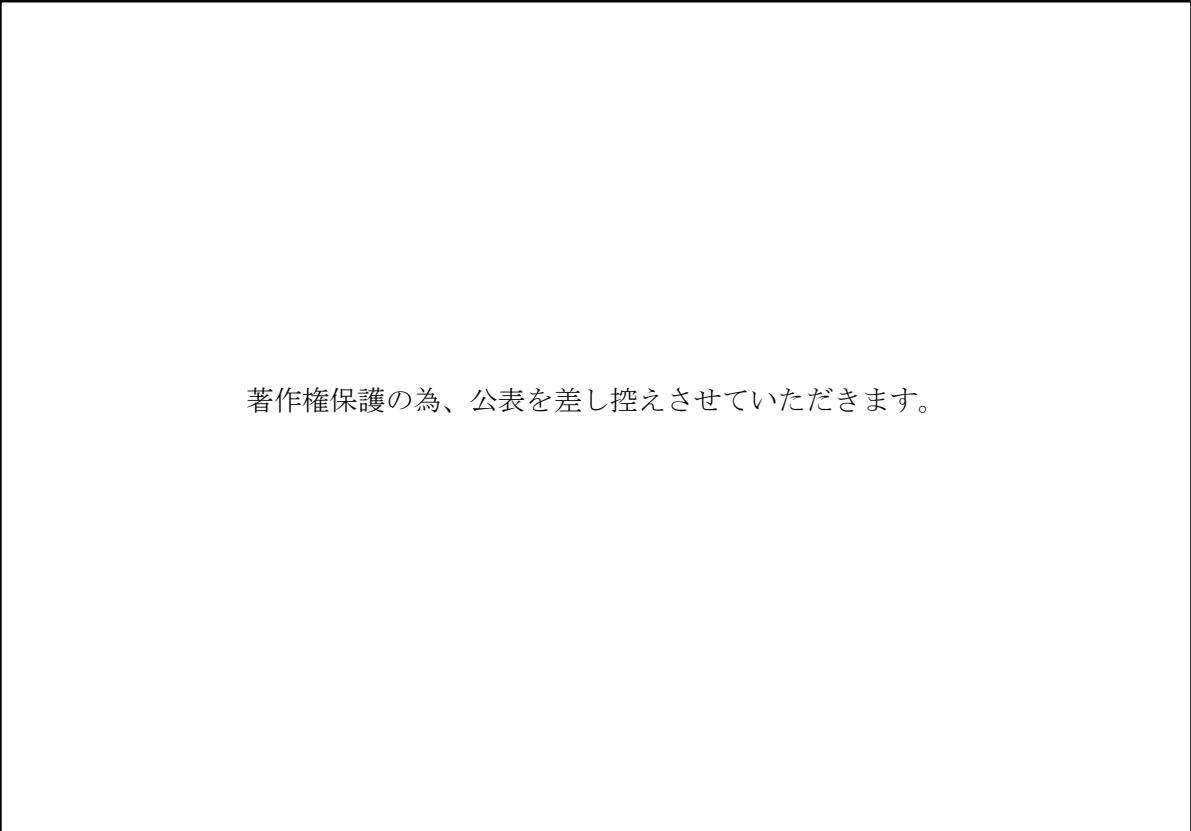
瀬長グスク他範囲確認調査報告書

－ 瀬長グスク他範囲確認事業 －



著作権保護の為、公表を差し控えさせていただきます。

卷頭図版1 昭和20年の瀬長島(米軍撮影空中写真 沖縄県教育委員会『沖縄県史県土のすがた図説編』より)



著作権保護の為、公表を差し控えさせていただきます。

卷頭図版2 現在の瀬長島(平成16年撮影 豊見城市役所税務課所蔵)



卷頭図版3 遺構検出状況



卷頭図版4 遺物出土状況

序

本報告書は、平成17～18年度にかけて豊見城市教育委員会が実施した瀬長島内における埋蔵文化財の範囲及び確認調査事業の成果を記録したものです。近年、本市では、開発等に伴って埋蔵文化財に関する照会や協議調整が急速に増加しております。本事業は豊見城市字瀬長にある瀬長島内の埋蔵文化財の分布状況およびその性格を把握するために、文化庁の補助を受け、実施した事業であります。

1988年発行の『豊見城村の遺跡』では、瀬長島北東部を「瀬長古島遺跡」、瀬長島丘陵部を「瀬長グスク」として報告されています。今回の調査では島を6区画に分け調査を実施いたしました。調査の結果、「う地区」及び「お地区」では遺構としてピット群や集石遺構等が確認されています。出土遺物としても土器、中国産陶磁器、タイ産陶器などの輸入陶磁器や沖縄産陶器、瓦、石器、銭貨、青銅製品、貝製品など貴重な資料が数多く発見されています。特に本市で初めて高麗系瓦が出土いたしました。このような多くの成果をまとめた本報告書が多くの方の文化財に対する意識の高揚を図るとともに、文化財保護思想の普及並びに、地域の歴史研究などの学術研究の一助として多方面にご活用されることを期待します。

末尾になりましたが、発掘調査の実施にあたり多大なご協力をいただきました瀬長自治会、また、資料整理作業に従事し本報告書刊行にご協力いただきました皆様、さらに、発掘調査及び資料整理において多大なるご指導・ご協力を賜りました関係各位に心から感謝申し上げます。

平成20年3月

豊見城市教育委員会
教育長 大城 重光

例　　言

1. 本報告書は平成17～18年度に実施した「瀬長グスク他範囲確認発掘調査」の成果をまとめたものである。

2. 調査は平成17年度から文化庁の補助を受け、豊見城市教育委員会が実施した。

3. 本報告書に使用した地形図は、豊見城市役所発行の1/10,000の地形図及び平成17年度に新開技研に委託した地形測量図1/500を使用し、加筆したものである。

4. 瀬長島の旧地形図は1947年に米軍が作成したものを複写し使用した。

5. 出土遺物の鑑定、同定を下記の方々にお願いした。記して謝意を表します。（敬称略）

陶磁器 金武正紀氏（今帰仁村埋蔵文化財発掘調査アドバイザー）

古 瓦 上原 静氏（沖縄国際大学准教授）

貝 類 名和 純氏（潟の生態史研究会会員）

石 質 大城逸朗氏（地質学専門家）

獸 骨 久貝弥嗣氏（宮古島市教育委員会嘱託員）

なお、貝類については名和純氏、獸骨については久貝弥嗣氏より玉稿を賜った。記してお礼申し上げます。

6. 発掘調査の実施及び報告書発刊に際し、下記の方々からのご指導・ご助言を賜った。記して感謝申し上げます。

長田亮一氏・新田重清氏・比嘉邦昭氏・宮城晃氏・長嶺操氏（豊見城市文化財保護審議委員）阿波根直孝氏・喜屋武俊彦氏（前豊見城市文化財保護審議委員）盛本勲氏・金城透氏・知念隆博氏・瀬戸哲也氏（沖縄県教育委員会）金城亀信氏・山本正昭氏（沖縄県立埋蔵文化財センター）大城秀子氏・城間宣子氏・宜野座隆行氏（南城市教育委員会）大城一成氏・城間千栄子氏（糸満市教育委員会）宮里信勇氏（浦添市教育委員会）金城達氏（八重瀬町教育委員会）

7. 本報告書の編集は伊波かおり、名嘉山美野の協力を得て大城竜也が行った。

8. 本報告書の執筆分担は下記のとおりである。

大城竜也 第 章～第 章第1、2節8、第 章第3節～第9節、第 章 第 章

伊波かおり・名嘉山美野 第 章第2節1～6

久貝弥嗣 第 章第2節7

名和 純 第 章

パリノ・サーヴェイ株式会社 第 章

9. 資料整理は下記のメンバーで行った。

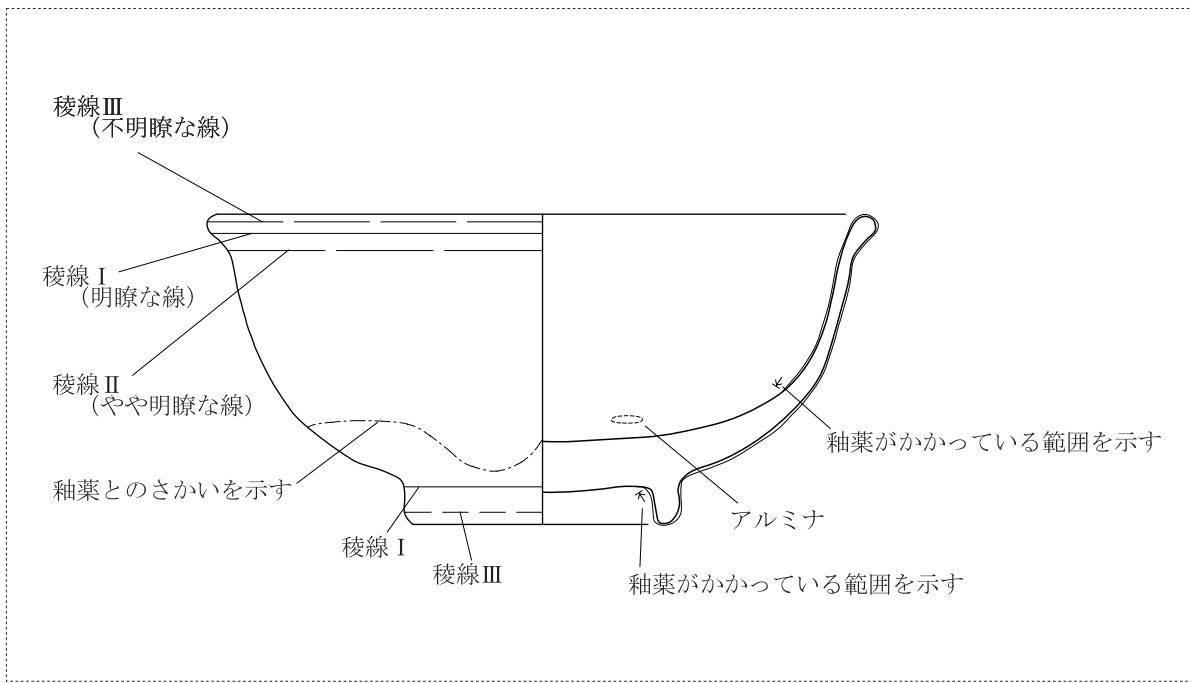
実測・トレース・拓本等：伊波かおり、名嘉山美野、知念明奈、赤嶺直亮

10. 遺物の写真撮影は糸満市教育委員会の協力を得て行った。記して感謝申し上げる。

11. 発掘調査で得られた遺物及び実測図・写真などの記録は、すべて豊見城市教育委員会文化課に保管してある。

凡　例

- 1 . 発掘調査に伴う地区割および測量・実測は、平面直角座標系第 系による国土座標を基に行ってい
る。また、本書で表示している北は、座標北を指す。
- 2 . 基準高は全て海拔高を用い、メートル単位で表示した。
- 3 . 遺構実測図は、対象により適宜縮尺を変え掲載し、図ごとにスケールで表示した。
- 4 . 遺構実測図内で表示した岩石の記号は、次のとおりである。
S : 琉球石灰岩、AS : 安山岩質スコリア、FS : 砂粒砂岩、SS : シルト岩
- 5 . 遺物番号は1番から通し番号を付与した。本文・挿図・写真図版の番号は一致する。
- 6 . 遺物実測図の縮尺は、必要に応じて異なる縮尺を用い、その旨のスケールで表示した。
- 7 . 地層の土色は、小山正忠・竹原秀雄編『新版 標準土色帖』2006年度版 農林水産省農林水産技術会
議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修を準拠した。
- 8 . 遺物の色調は、上記の文献並びに長崎盛輝著『新版 日本の伝統色 - その色名と色調 - 』を準拠した。
- 9 . 引用・参考文献は、各章や節の末尾に記した。
- 10 . 本書に掲載する遺物実測図の表現は、原則として下記の通りに統一した。



目 次

巻頭図版

序

例言

凡例

第 章 調査に至る経緯

第 1 節 調査に至る経緯.....	1
第 2 節 調査体制.....	1
第 3 節 調査経過.....	2

第 章 位置と環境

第 1 節 濱長島の位置.....	5
第 2 節 地理的環境.....	5
第 3 節 歴史的環境.....	6
第 4 節 民俗的環境.....	7

第 章 調査方法

第 1 節 グリット設定と発掘方法.....	11
第 2 節 地区の設定.....	12

第 章 範囲確認調査の概要

第 1 節 基本層序.....	15
第 2 節 出土遺物.....	17
第 3 節 あ地区.....	60
第 4 節 い地区.....	66
第 5 節 う地区.....	73
第 6 節 え地区	136
第 7 節 お地区	140
第 8 節 か地区	155
第 9 節 海岸踏査	158

第 章 その他の遺跡	163
------------------	-----

第 章 濱長グスクから出土した貝類の生息環境	165
------------------------------	-----

第 章 理化学分析成果	167
-------------------	-----

第 章 総括	173
--------------	-----

報告書抄録

卷頭目次

- 卷頭図版1 昭和20年の瀬長島
卷頭図版2 現在の瀬長島
卷頭図版3 遺構検出状況
卷頭図版4 遺物検出状況

挿図目次

第1図 沖縄本島及び豊見城市の位置	3	第37図 H 15 - キ 南壁	74
第2図 瀬長島の位置	4	第38図 H 15 - シ 東壁	75
第3図 琉球国之図	7	第39図 H 15 - シ 南壁	75
第4図 1947年の瀬長島	8	第40図 H 14 - テ 東壁	76
第5図 発掘調査区	9	第41図 H 14 - テ 南壁	76
第6図 グリット設定図	13	第42図 H 14 - テ 遺構平面図	77
第7図 基本層序図	16	第43図 H 14 - テ・ト 南壁	78
第8図 青磁1	25	第44図 H 14 - テ・ト 柱穴遺構平面図	79
第9図 青磁2	27	第45図 H 14 - テ・ト P 1	81
第10図 青磁3	29	第46図 H 14 - テ・ト P 2	81
第11図 青磁4	31	第47図 H 14 - テ・ト P 3	81
第12図 白磁	33	第48図 H 14 - テ・ト P 4	82
第13図 青花・黒釉陶器・褐釉陶器	35	第49図 I 13 - コ・ソ 東壁	83
第14図 あ地区地形図	60	第50図 I 14 - サ 北壁	84
第15図 あ地区簡易層序断面図	60	第51図 I 14 - ク 北壁	85
第16図 J 5 - サ 南壁	61	第52図 I 14 - ク 東壁	85
第17図 J 5 - サ 西壁	61	第53図 I 14 - セ 南壁	86
第18図 J 6 - ア 南壁	62	第54図 I 14 - セ 西壁	86
第19図 J 6 - ア 西壁	62	第55図 J 13 - オ 東壁	87
第20図 I 7 - カ 南壁	63	第56図 J 13 - オ 南壁	87
第21図 I 7 - カ 西壁	63	第57図 J 14 - キ 南壁	88
第22図 あ地区出土遺物	65	第58図 J 14 - キ 西壁	88
第23図 い地区地形図	66	第59図 L 13 - ア 西壁	89
第24図 い地区簡易層序断面図	66	第60図 L 13 - ア 北壁	89
第25図 C 17 - キ 北壁	67	第61図 O 10 - ソ 北壁	91
第26図 C 17 - キ 東壁	67	第62図 O 10 - ソ 東壁	91
第27図 C 17 - セ 北壁	68	第63図 O 9 - ト 西壁	92
第28図 C 17 - セ 東壁	68	第64図 O 9 - ト 北壁	92
第29図 C 18 - ユ 北壁	69	第65図 N 6 - ト 北壁	93
第30図 C 18 - ユ 東壁	69	第66図 N 6 - ト 東壁	93
第31図 F 17 - ユ 北壁	70	第67図 J 12 - コ 西壁	94
第32図 F 17 - ユ 東壁	70	第68図 J 12 - コ 北壁	94
第33図 い地区出土遺物	72	第69図 M 12 - ア 東壁	95
第34図 う地区地形図	73	第70図 M 12 - ア 南壁	95
第35図 う地区簡易層序断面図	73	第71図 う地区出土遺物1(青磁)	102
第36図 H 15 - キ 東壁	74	第72図 う地区出土遺物2(青磁)	105
		第73図 う地区出土遺物3(青磁)	108
		第74図 う地区出土遺物4(青磁)	111
		第75図 う地区出土遺物5(青磁)	114
		第76図 う地区出土遺物6(白磁・青花)	117
		第77図 う地区出土遺物7 (褐釉陶器・黒釉陶器・カムイヤキ) ...	120
		第78図 う地区出土遺物8(グスク系土器)	123
		第79図 う地区出土遺物9(古瓦)	126
		第80図 う地区出土遺物10(金属製品)	128
		第81図 う地区出土遺物11(石器)	131

第82図	う地区出土遺物12(貝製品)	134
第83図	え地区地形図	136
第84図	え地区簡易層序断面図	136
第85図	L 5 - 才 北壁	137
第86図	L 5 - 才 東壁	137
第87図	L 4 - ノ 北壁	138
第88図	L 4 - ノ 東壁	138
第89図	K 3 - ス 検出状況	139
第90図	お地区地形図	140
第91図	お地区簡易層序断面図	140
第92図	K 8 - ケ 西壁	141
第93図	K 8 - ケ 北壁	141
第94図	J 9 - ス 北壁	142
第95図	J 9 - ス 東壁	142
第96図	I 10 - イ 北壁	143
第97図	I 10 - イ 東壁	143
第98図	H 10 - ツ 西壁	144
第99図	H 10 - ツ 北壁	144
第100図	G 11 - ス 北壁	145
第101図	G 11 - ス 東壁	145
第102図	G 11 - ス 遺構平面図	146
第103図	G 11 - ス P 3	147
第104図	G 11 - ス P 4	147
第105図	F 12 - シ 北壁	148
第106図	F 12 - シ 東壁	148
第107図	E 13 - 才 北壁	149
第108図	E 13 - 才 東壁	149
第109図	D 14 - ソ 南壁	150
第110図	D 14 - ソ 西壁	150
第111図	お地区出土遺物	153
第112図	か地区地形図	155
第113図	か地区簡易層序断面図	155
第114図	L 10 - 才 東壁	156
第115図	L 10 - 才 南壁	156
第116図	J 11 - ネ 北壁	157
第117図	J 11 - ネ 東壁	157
第118図	海岸踏査調査区	158
第119図	海岸踏査確認遺物	161
第120図	戦争遺跡分布図	163

表 目 次

第1表	遺物出土一覧	19
第2表	遺物分類一覧	37
第3表	脊椎動物遺体出土一覧	44
第4表	貝類出土一覧(巻貝)	49

第5表	貝類出土一覧(二枚貝)	53
第6表	あ地区遺物出土一覧	64
第7表	あ地区遺物観察一覧	64
第8表	い地区遺物出土一覧	71
第9表	い地区遺物観察一覧	71
第10表	ピット遺構出土遺物一覧	82
第11表	う地区遺物出土一覧	97
第12表	う地区遺物観察一覧1(青磁)	101
第13表	う地区遺物観察一覧2(青磁)	104
第14表	う地区遺物観察一覧3(青磁)	107
第15表	う地区遺物観察一覧4(青磁)	110
第16表	う地区遺物観察一覧5(青磁)	113
第17表	う地区遺物観察一覧6(白磁・青花)	116
第18表	う地区遺物観察一覧7 (褐釉陶器・黒釉陶器・カムイヤキ)	119
第19表	う地区遺物観察一覧8(グスク系土器)	122
第20表	う地区遺物観察一覧9(古瓦)	125
第21表	う地区遺物観察一覧10(金属製品)	128
第22表	う地区遺物観察一覧11(石器)	130
第23表	う地区遺物観察一覧12(貝製品)	133
第24表	お地区遺物出土一覧	151
第25表	お地区遺物観察一覧	151
第26表	海岸踏査確認遺物一覧	159
第27表	海岸踏査遺物観察一覧	160

図 版 目 次

図版1	脊椎動物遺体1	45
図版2	脊椎動物遺体2	46
図版3	貝(1)巻貝	57
図版4	貝(2)巻貝	58
図版5	貝(3)二枚貝	59
図版6	J 5 - サ 南壁	61
図版7	J 5 - サ 西壁	61
図版8	J 6 - ア 南壁	61
図版9	J 6 - ア 西壁	62
図版10	I 7 - 力 南壁	62
図版11	I 7 - 力 西壁	63
図版12	あ地区出土遺物	65
図版13	C 17 - キ 北壁	67
図版14	C 17 - キ 東壁	67
図版15	C 17 - セ 北壁	68
図版16	C 17 - セ 東壁	68
図版17	C 18 - 又 北壁	69
図版18	C 18 - 又 東壁	69
図版19	F 17 - 又 北壁	70

図版20	F 17 - ヌ 東壁	70	図版66	う地区出土遺物 6 (白磁・青花)	118
図版21	い地区出土遺物	72	図版67	う地区出土遺物 7 (褐釉陶器・黒釉陶器・カムイヤキ) ...	121
図版22	H 15 - キ 東壁	74	図版68	う地区出土遺物 8 (グスク系土器)	124
図版23	H 15 - キ 南壁	74	図版69	う地区出土遺物 9 (古瓦)	127
図版24	H 15 - シ 東壁	75	図版70	う地区出土遺物10 (金属製品)	129
図版25	H 15 - シ 南壁	75	図版71	う地区出土遺物11 (石器)	132
図版26	H 14 - テ 東壁	76	図版72	う地区出土遺物12 (貝製品)	135
図版27	H 14 - テ 南壁	76	図版73	L 5 - 才 北壁	137
図版28	H 14 - テ 遺構検出状況	77	図版74	L 5 - 才 東壁	137
図版29	H 14 - テ・ト 南壁	78	図版75	L 4 - ノ 北壁	138
図版30	H 14 - テ・ト 遺構検出状況	80	図版76	L 4 - ノ 東壁	138
図版31	H 14 - テ・ト P 1	81	図版77	K 3 - ス 検出状況	139
図版32	H 14 - テ・ト P 2	81	図版78	K 8 - ケ 西壁	141
図版33	H 14 - テ・ト P 3	81	図版79	K 8 - ケ 北壁	141
図版34	H 14 - テ・ト P 4	82	図版80	J 9 - ス 北壁	142
図版35	I 13 - コ・ソ 東壁	83	図版81	J 9 - ス 東壁	142
図版36	I 14 - サ 北壁	84	図版82	I 10 - イ 北壁	143
図版37	I 14 - ク 北壁	85	図版83	I 10 - イ 東壁	143
図版38	I 14 - ク 東壁	85	図版84	H 10 - ツ 西壁	144
図版39	I 14 - セ 南壁	86	図版85	H 10 - ツ 北壁	144
図版40	I 14 - セ 西壁	86	図版86	G 11 - ス 北壁	145
図版41	J 13 - 才 東壁	87	図版87	G 11 - ス 東壁	145
図版42	J 13 - 才 南壁	87	図版88	G 11 - ス 遺構検出状況	146
図版43	J 14 - キ 南壁	88	図版89	G 11 - ス P 1	147
図版44	J 14 - キ 西壁	88	図版90	G 11 - ス P 2	147
図版45	L 13 - ア 西壁	89	図版91	F 12 - シ 北壁	148
図版46	L 13 - ア 北壁	89	図版92	F 12 - シ 東壁	148
図版47	L 12 - コ 調査前状況	90	図版93	E 13 - 才 北壁	149
図版48	L 12 - コ 検出状況	90	図版94	E 13 - 才 東壁	149
図版49	N 12 - 力 調査前状況	90	図版95	D 14 - ソ 南壁	150
図版50	N 12 - 力 検出状況	90	図版96	D 14 - ソ 西壁	150
図版51	O 10 - ソ 北壁	91	図版97	お地区出土遺物	154
図版52	O 10 - ソ 東壁	91	図版98	L 10 - 才 東壁	156
図版53	O 9 - ト 西壁	92	図版99	L 10 - 才 南壁	156
図版54	O 9 - ト 北壁	92	図版100	J 11 - ネ 北壁	157
図版55	N 6 - ト 北壁	93	図版101	J 11 - ネ 東壁	157
図版56	N 6 - ト 東壁	93	図版102	海岸踏査遺物確認状況	159
図版57	J 12 - コ 西壁	94	図版103	海岸踏査確認遺物	162
図版58	J 12 - コ 北壁	94	図版104	戦争遺跡確認状況 (L 3・H 13地区) ...	164
図版59	M 12 - ア 東壁	95			
図版60	M 12 - ア 南壁	95			
図版61	う地区出土遺物 1 (青磁)	103			
図版62	う地区出土遺物 2 (青磁)	106			
図版63	う地区出土遺物 3 (青磁)	109			
図版64	う地区出土遺物 4 (青磁)	112			
図版65	う地区出土遺物 5 (青磁)	115			

第Ⅰ章 調査に至る経緯

第1節 調査に至る経緯

豊見城市は、沖縄本島の南西部に位置する市である。市の総面積は17.77km²、総人口55,039人（男25,484人、女26,000人）で、世帯数が16,920世帯である。（平成19年11月末日現在）

県庁所在地の那覇市と隣接するために近年、人口も急増し、平成14年4月1日に市制施行を実現した。（第1図）

瀬長島は、本市唯一の島である。戦後、那覇飛行場の弾薬庫として米軍に接収され、昭和52年に返還された返還軍用地である。本市は返還後、数度にわたる開発計画を作成し、コミュニティー・スポーツ広場やサンセットパーク、市道整備事業を進め、平成18年度には空の駅物産センターなど公的な施設整備が行われてきた。こうした中、平成17年3月には沖縄振興特別措置法に基づく沖縄県観光振興計画において、瀬長島をはじめ字瀬長、字与根、字豊崎が「エアウェイリゾート豊見城」として、観光振興地域に指定された。

また、国土交通省、沖縄総合事務局、沖縄県で構成する那覇空港調査連絡調整会議が設置され、那覇空港の能力向上策の総合的調査を進めている。那覇空港を離発着する航空機が年々増加し、平成27（2015）年頃には空港能力が限界に達し、滑走路の利用に余裕がなくなることが報告されている。そのため、空港拡張整備事業が計画され、平成14年10月には滑走路増設案の4案が検討され、4案すべてが瀬長島の形状を変更する必要があると示している。

これら瀬長島の大規模な開発計画に対応するため、平成17年度より文化庁の補助を受けて国庫補助事業として予算化し、「瀬長グスク他範囲確認事業」として着手した。

第2節 調査体制

試掘調査による瀬長グスク他範囲確認調査は平成17年度～平成18年度にかけて実施し、資料整理及び報告書作成にかかる業務は平成17年度～平成19年度にかけて実施した。調査体制は下記の体制により実施した。

事業主体 豊見城市教育委員会

事業責任者 教育長

志田 安徳（平成17年度）

“

大城 重光（平成17年度～平成19年度）

事業総括 生涯学習部 生涯学習部長

宜保 剛（平成17年度～平成19年度）

“

文化課長

天久 光宏（平成17年度）

“

“

宜保 馨（平成18年度～平成19年度）

事業事務 文化課

文化係長

嘉数 浩（平成17年度）

“

“

与那嶺 豊（平成17年度～平成19年度）

調査業務 文化課

文化係主査

大城 竜也（平成17年度～平成19年度）

調査業務 文化課

臨時職員

仲宗根 亨（平成17年度）

“

“

久貝 弥嗣、伊波 かおり（平成18年度）

資料整理業務 文化課

文化係主査

大城 竜也（平成17年度～平成19年度）

“

“

赤嶺 直亮、伊波かおり、知念 明奈、

委託業務 測量・磁気探査・土工

臨時職員

名嘉山 美野（平成19年度）

“

有限会社 新開技研（平成17年度）

“

有限会社 日章技研（平成18年度）

発掘労務作業
古瓦胎土分析

(社) 豊見城市シルバー人材センター
パリノ・サーヴェイ株式会社

発掘調査協力

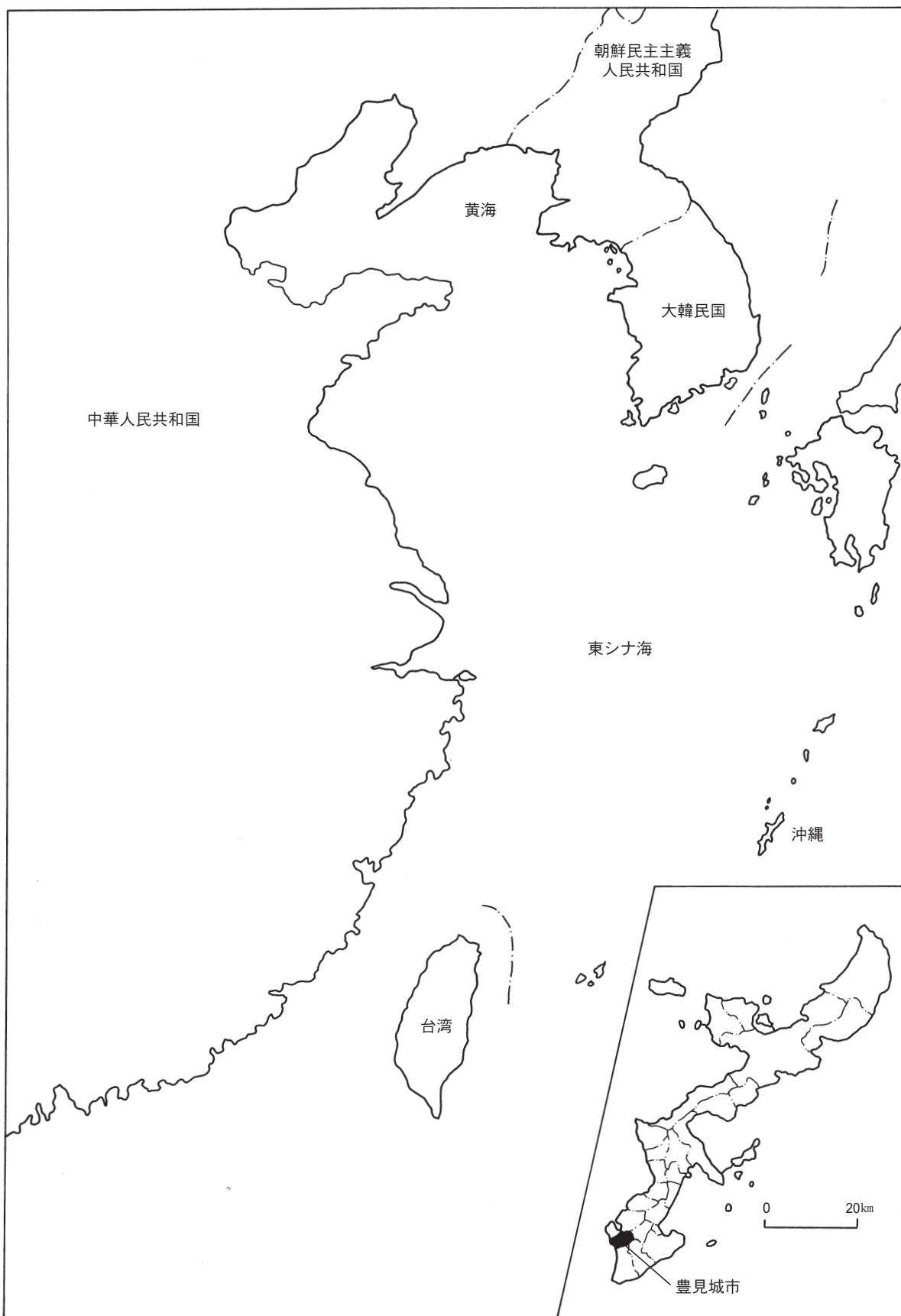
宇瀬長自治会、大城達宏（総務課秘書広報係長）、儀間淳一、稻福政斎、瑞慶覧峰子、久田千春、赤嶺みゆき（文化課嘱託）

民俗調査に際しては下記の方々にご協力いただいた。記して感謝申し上げます。（敬称略）
高良喜美、上原信一

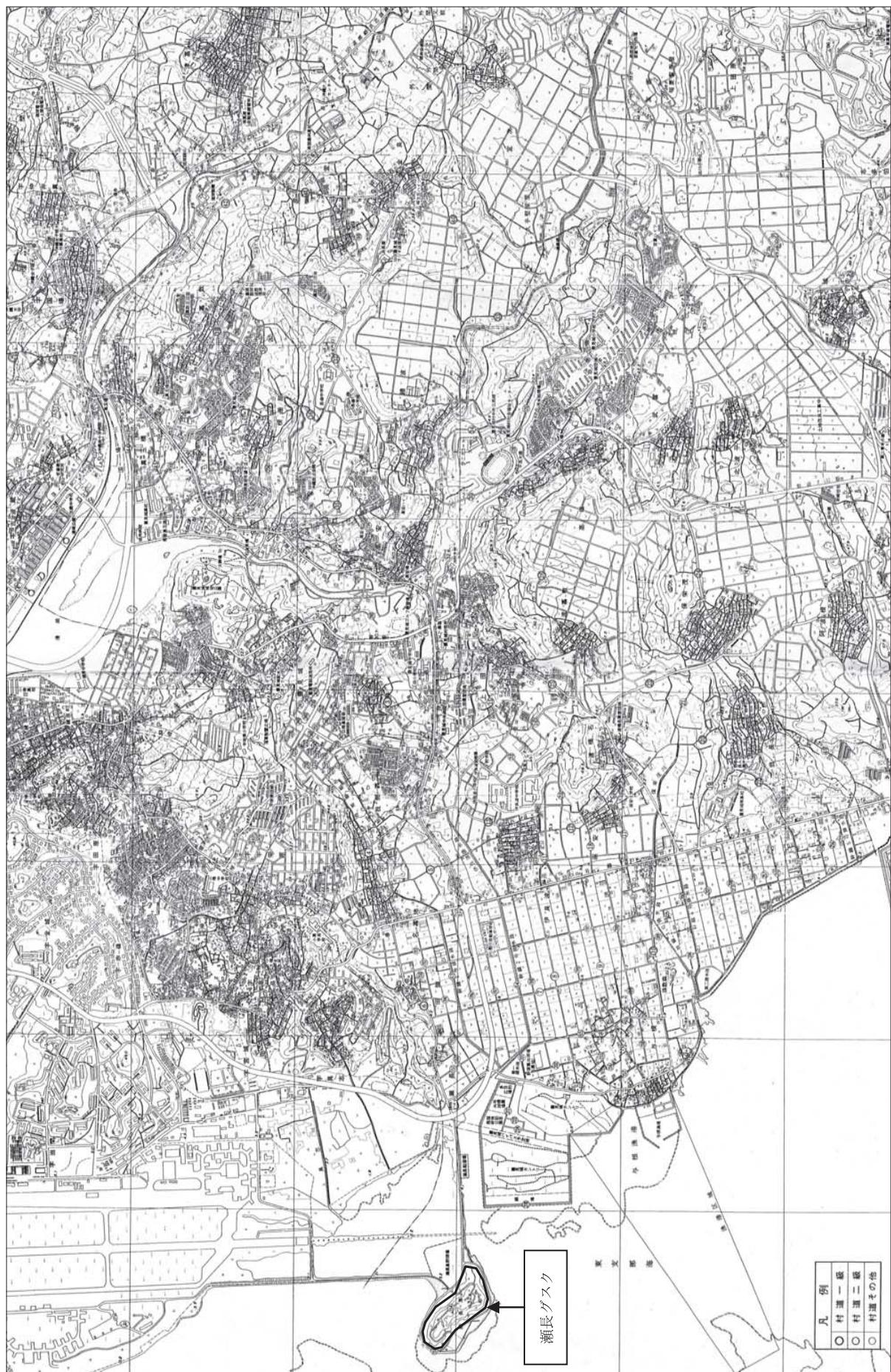
第3節 調査経過

調査では、市内の埋蔵文化財の有無確認を行う際にバックホーを用いて試掘調査を進めてきたことを元に、今回の調査もバックホーを用いて調査を進めることとした。しかし、瀬長島の大半は航空法第49条及び第56条の3により高さ制限が設定されており、調査で使用する重機が航空機の運航に障害をきたす恐れがあることがわかり、着手する前に国土交通省大阪航空局那覇空港事務所と調整する必要があった。当初、調査地区を西区と東区の2区に分けて調査する予定だったが、丘陵東側の制限区域の調査許可が下りず、調査計画を変更せざるを得なくなった。そのため、平成17年度は丘陵下を中心に調査することとなり、平成17年8月8日～11月7日の期間で調査を行った。17年度の調査終了後から次年度の調査の実施に向けて、再度、国土交通省大阪航空局那覇空港事務所と協議を行った結果、丘陵東側での調査は重機を使用せず手堀作業で調査することで許可が下りた。また、第2丘陵面の調査についても許可がおり、平成18年度は平成18年7月3日～9月29日の期間で、平成17年度に調査が行えなかった丘陵部と前年度に遺構が確認された地区を中心に調査を行った。海岸線でも遺物が拾えることが沖縄県の調査で報告されていたので、平成18年10月23日に海岸全体の踏査を行い、平成19年3月22日と同年4月19日には調査地区を限定し、踏査を行った。（註1）

註1 『沿岸地域遺跡分布調査概要（I）』 沖縄県立埋蔵文化センター 2006年3月



第1図 沖縄本島及び豊見城市の位置



第Ⅱ章 位置と環境

第1節 濑長島の位置

豊見城市は東シナ海に面した沖縄本島南西部に位置し、北側に県庁所在地である那覇市、東側に南風原町・八重瀬町、南側を糸満市と隣接している。

本市は長方形状を呈し、東西に6.8km、南北に5.5km、総面積19.45km²である。人口は55,039人（平成19年11月末現在）で那覇のベットタウンとして人口は年々増加傾向にあり、都市化が著しく進んでいる。平成14年3月31日に94年（1908年の町村制施行から）にも及ぶ村制を絶じ、平成14年4月1日から「豊見城市」に昇格した。

地形的には東シナ海の平野部とそれを取り囲む丘陵部に分けることができ、畠、原野、山林、住宅などが広がっている。内陸部は北東から南西に饒波川が流れ、それと平行して南風原町、那覇市との境界に国場川が流れ、県内でも有数の野鳥の渡来地である漫湖で合流している。

本市の地質は主に泥灰岩土壌（シルト岩）・琉球石灰岩・島尻マージ（赤土）が分布している。その土壤は肥沃で都市近郊農業が盛んに行われるようになった。

瀬長島のある豊見城市字瀬長は字田頭・字与根・那覇市具志の3カ字に隣接し、豊見城市的西に位置している。瀬長島は国道331号線の西側に位置し、字瀬長の沖合にある。

第2節 地理的環境

瀬長島は那覇空港の南約1.5kmにあり、面積は182,272m²、最高標高32.8m、周囲1,527mの豊見城市唯一の島である。

瀬長グスクは、豊見城市北西部の標高32.8mの砂岩及び琉球石灰岩の瀬長島丘陵地に立地する。北側には那覇空港などの平坦地及び具志川が延び、南側は与根平野が広がることから、自然を巧みに利用した立地である。

瀬長グスクは周辺一帯では高所に位置するため、グスク内からは北には那覇港、東には小禄丘陵、渡嘉敷グスク、平良グスク、南には珠数森、保栄茂グスク、阿波根グスク、西には慶良間諸島を望むことができる。

瀬長グスク周辺の地質は、第三紀鮮新世の島尻層群の泥岩・砂岩を基盤とし、第四紀更新世の琉球石灰岩が上層に分布する。透水層の琉球石灰岩と島尻層群泥岩との境で水分が湧き水として現れる場所が数ヵ所存在する。

このように瀬長グスクは、防敵や視界、水の確保などのグスクの重要な要素を備えていた場所に立地しているといえる。

第3節 歴史的環境

瀬長島の北東側には平坦な地形が広がり、「古島（フルジマ）」と呼ばれている。そこは、かつて集落があった場所、先祖が生活していた場所と伝えられている。その場所は、昭和20年まで瀬長の人々が生活をしていた。また、島中央部に丘陵があり、そこに「瀬長グスク」があったと伝えられている。

瀬長グスクの築城年代については、これまで分布調査による現地踏査や聞き取り調査しか行われておらず、詳細なことは不明であった。瀬長グスクの様子については、琉球王府が1713年に編集した地誌『琉球国由来記』によると、「瀬長按司ハ王位の御婿ニテ…（巻八・那覇由来記イベガマノ事）」とあり、また、「往古ハ瀬長按司居住ノ跡アリ…（巻十二・各処祭祀）」と瀬長按司がいたグスクであったとする記述がある。その後、1731年に編集された地誌『琉球国旧記』によると、「中山王、精兵を発して攻め滅ぼす。

（巻之五・古城）」とあり、瀬長按司が反乱を起こし、当時の中山王に討ち滅ぼされたとする記述がある。
(註1)

また、東恩納寛淳は、1471年に作成された「海東諸国紀」の「琉球国之図」の中で「阿義那之城の図示する位置は恰度瀬長島で古へここに瀬長城があつた筈であるが…」と述べている。

島内には按司墓、三様御嶽（ミサマウドゥン）、上ヌウマンチュー、下ヌウマンチュー、竜宮繼宮（リュウウグチング）、ウタキの6つの拝所と御月井（ウチチガ）ー、按司井（アジガ）ー、産井（メーヌカ）ー、波平井（ハンザガ）ー、知念井（チニンガ）ーの5つの井泉があり、知念井は、組踊「手水の縁」の舞台になつた井戸といわれている。

瀬長島の御嶽については、『琉球国旧記』によると、瀬長嶽、志茂田の嶽、赤崎嶽が「瀬長山に在り（附巻之三）」となっており、瀬長山が瀬長島であるかどうかは不明である。

瀬長島は昔、アンジナと称されていた。これは砂島の上に丘があり、そこに瀬長按司が城をかまえたので、按司のいる砂島から転じてアジシナジマ、それからアンジナになったと伝えられている。また、鳥鳴かん島（といなかんしま）とも称されていた。鶏を飼うと必ずハブが鶏を食べに山から下りてきたといわれている。このことについて、和文学者の平敷屋朝敏が仲風節の中で「うき世鳥なかぬ　しまのあらば」と瀬長島をかけて歌つたといわれている。

去る沖縄戦では、旧日本軍の沿岸砲台が置かれたこともあり、瀬長島は米軍による集中砲火を浴び、焦土と化し、戦後、島が米軍の那覇飛行場の拡張整備や補助施設（弾薬庫）として長期にわたり接收されたため、島の地形が大きく変貌している。そのため、島内にあった拝所や井泉は、豊見城警察署の隣にあるアカサチ森の下に瀬長区民によって移されている。

本市は現在のところ分布調査で確認された遺跡の殆どがグスク時代～近世の遺跡であるが、伊良波東遺跡が本市でもっとも古く、貝塚後期～グスク時代の遺跡と考えられている。

註1　『豊見城村史 第9巻 文献資料編』　沖縄県豊見城村　1998年3月

第4節 民俗的環境

平成18年度の調査を行う前に、戦前の瀬長島の状況を把握するため、平成18年6月3日に瀬長区民から聞き取り調査を行った。瀬長グスク、拝所、井泉等の位置や戦前の状況を把握することを調査の目的として行った。

まず、瀬長グスクについては、瀬長島の人々は瀬長グスクを東西に分け、東グスク（アガリグスク）、西グスク（イリグスク）と呼んでいた。瀬長グスクがあった場所は、琉球石灰岩が散乱していたという。また、東グスクと西グスクの境目に人ひとりが通れるような道（トートミーグワー）があったとのことだった。現在、瀬長グスクがあったとされる丘陵の高さより戦前の瀬長グスクがあった丘陵はもっと高かったという。このことについては、昭和24年に米軍が作成した地形図と現在の瀬長島の地形図を比較することにより確認することができた。

戦前、島内にあった上ヌウマンチュー、下ヌウマンチュー、リュウウグチング、ウタキ、按司墓の5つの拝所については、米軍接收時代の掘削などにより島の地形が大きく変貌していることなどから正確な位置を確認することはできなかった。しかし、現在、島内に設置者不明でいくつかの拝所が設置され、その拝所の位置が戦前の瀬長島にあった拝所の位置と近いことなどから確認することができた。位置を確認することができた拝所は、上ヌウマンチューと下ヌウマンチュー、リュウウグチングの3つの拝所は島の西端に位置していたことがわかった。按司墓については、現在、コンクリートブロックで丘陵中腹の平場に設置されているが、本来、その場所ではなく、丘陵中腹の岩陰を利用して石積みで囲うような形であり、石積みの上から按司墓の中を見ることができたという。また、按司墓の中には、厨子甕等はなく、白い板があつたという。

井泉については、戦前までは島内に按司井（アジガ）ー、産井（メーヌカ）ー、知念井（チニンガ）ー、御月井（ウチチガ）ーの4つの井泉があったという。按司井については、按司墓の近くにあり、生活用の

井戸として利用されていたという。また、産井は、水質が悪く、生活用の井戸としては利用されず、産水や若水として利用されていたという。知念井や御月井は、集落から離れたところにあったため、生活用の井戸としては利用されなかつたようである。戦前の瀬長集落の家々には井戸があり、按司井の利用頻度は低かつたようである。

その他の拝所としては、ミサーヤー(三様)御殿とヤトクルーがある。ミサーヤー御殿は、島の南東側にあり、子宝岩の近くにあった。岩陰を利用して、その中に3つの厨子甕を安置して瀬長按司に関する三人が葬られており、その厨子甕を拝んでいたという。また、ヤトクルーは、人骨が野ざらしで置かれていた場所をそう呼んでいたとのことだった。この場所は、台風などの嵐の時は骨が流されることもあったという。昭和初期に九州帝国大学の金関丈夫教授が調査の際に瀬長島から人骨を持ち帰ったとの記録が残っていた。(註1)その人骨がヤトクルーから持ち帰ったのかは確認できていない。当時、島には墓はなく、瀬長の人々のお墓は那覇市具志地区との境目にある丘陵一帯にあり、現在は「田頭・瀬長北側古墓群」として位置づけられている。

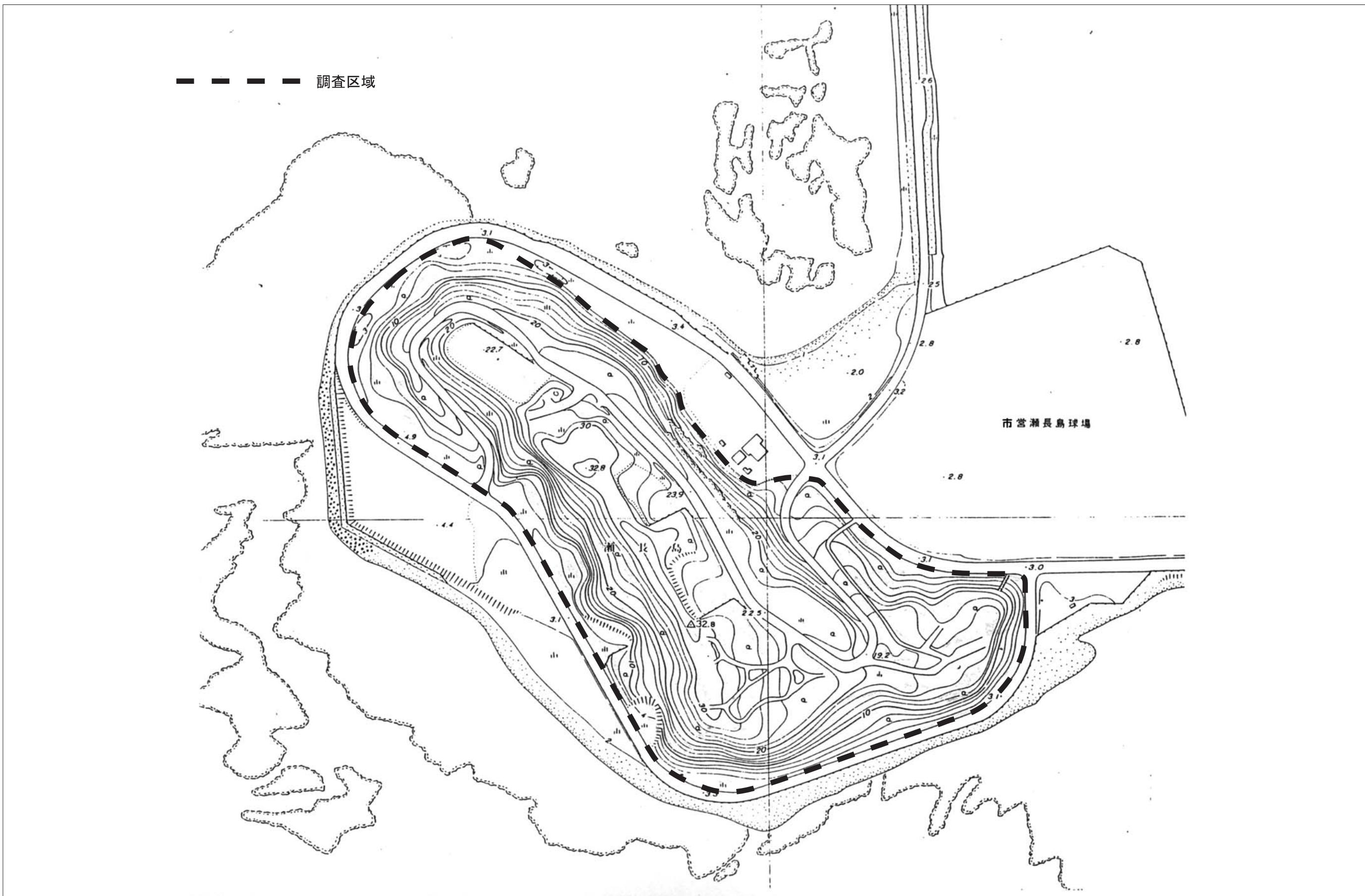
註1 金関丈夫「琉球の旅(十五)」『歴史と地理』第29巻第4号 肇文社星野書店 1930年

著作権保護のため、公表を差し控えさせていただきます

第3図「琉球国之図」(申叔舟著「海東諸国紀」より一部掲載 沖縄県立図書館所蔵)

著作権保護の為、公表を差し控えさせていただきます

第4図 1947年の瀬長島（米軍作成地図）



第5図 発掘調査区

第三章 調査方法

第1節 グリット設定と発掘方法

これまでにも述べたように、瀬長グスク他範囲確認事業は、大規模な開発が予想される瀬長島内の埋蔵文化財の所在・範囲・性格を明らかにするために、試掘・確認調査を実施し、当該地域における埋蔵文化財の保護のための資料を作成することを大きな目的としている。これにより、埋蔵文化財の基本的な所在が把握でき、試掘調査と一部並行させながら実施する範囲確認調査により、開発事業を円滑に実施する上で重要となる、遺跡の性格・範囲の把握等が可能となる。

本調査においては、瀬長島の丘陵部を対象とした調査区割りを行うことからスタートさせた。

まず、世界測地系 X=19650、Y=14350、を基準として30m×30mの大グリットを設定し、その大グリットの中でさらに6 m×6 mの小グリットを設定した。大グリット内に設定された小グリットは、北側から南側に向けてア～ナ行の調査区として設定した。

調査区を設定した後は、掘削作業に先行して不発弾等の危険物や地下埋設物の有無を確認し、安全に調査を進行させるための磁気探査を実施した。探査方法としては、経層探査を用いて行った。探査機器の有効深度が探査面から地中- 1 m迄であることから、深度 1 m毎に探査を実施し、重機による掘削作業を 1 m毎に停止して、探査により異常反応がないことを確認した上で掘削作業を再開するということを繰り返した。逆に、探査結果により異常反応が得られた場合は確認探査を実施するという流れとなる。確認探査とは、異常反応があった箇所を手堀りで確認することで、これらを除去後、再度探査を行い異常反応がないことを確認して掘削作業を再開する。確認探査により検出された異常物が不発弾等の危険物である場合は、地域の警察に通報して、危険物の種類・規模・状態によって、警察もしくは自衛隊が処理を行う。幸いにも、今回の調査では、大きな事故に至るような不発弾・埋設物が発見されることはない少なかった。磁気探査をクリアした後は、重機または手堀りによる掘削作業を行うが、試掘方法としては、4 m四方の試掘坑を重機で掘削する方法と 2 m四方の試掘坑を手堀りで掘削する方法で行った。

調査では、原則として表層から基盤層（岩盤または泥岩などの基盤層）まで掘削することとした。重機掘削による堆積層及び遺構等の破壊を最小限にするため、数cm単位で掘削を行った。堆積状況や遺物の出土状況に注意を払いながら作業を進行させ、遺物包含層や遺構が検出された時点で壁面及び床面の清掃を行い、調査対象壁面の記録写真を撮影し、壁面図を作成するという流れとなる。手堀り掘削も重機掘削と同様の流れで作業を行った。また、状況に応じて検出された遺構を調査・記録後、サブトレーンチを設けて掘り下げる形で作業を継続して、下層の堆積状況や基盤層を確認する場合もあった。これは、本調査が埋蔵文化財の有無確認のみを目的としているものではなく、瀬長島の地層及び地形を確認することによって、戦前の瀬長島の地形を把握することも大きな目的の一つとして位置付けているためである。

第2節 地区の設定

本調査で設定された各グリットは、その立地条件から大きくあ～かの 6 地区に分けられる。地区名は、隣接するグリット間の関係性をより明瞭に理解するために、報告段階で設けたものである。

あ地区は、瀬長島東部の丘陵下に立地しており、J5ーサ、J6ーア、I7ー力の3グリットから構成される地区である。本地区は、現在の「空の駅」周辺にあたり、I7ー力地区においては、現在、「空の駅」の駐車場として利用されている。

い地区は、瀬長島北西部の丘陵下に立地しており、C17ーキ、C17ーセ、C18ーヌ、F17ーヌの4グリットから構成される地区である。現在は、一部で草木が覆い茂り、丘陵斜面地の一部では豊見城層や断層を確認できる場所である。

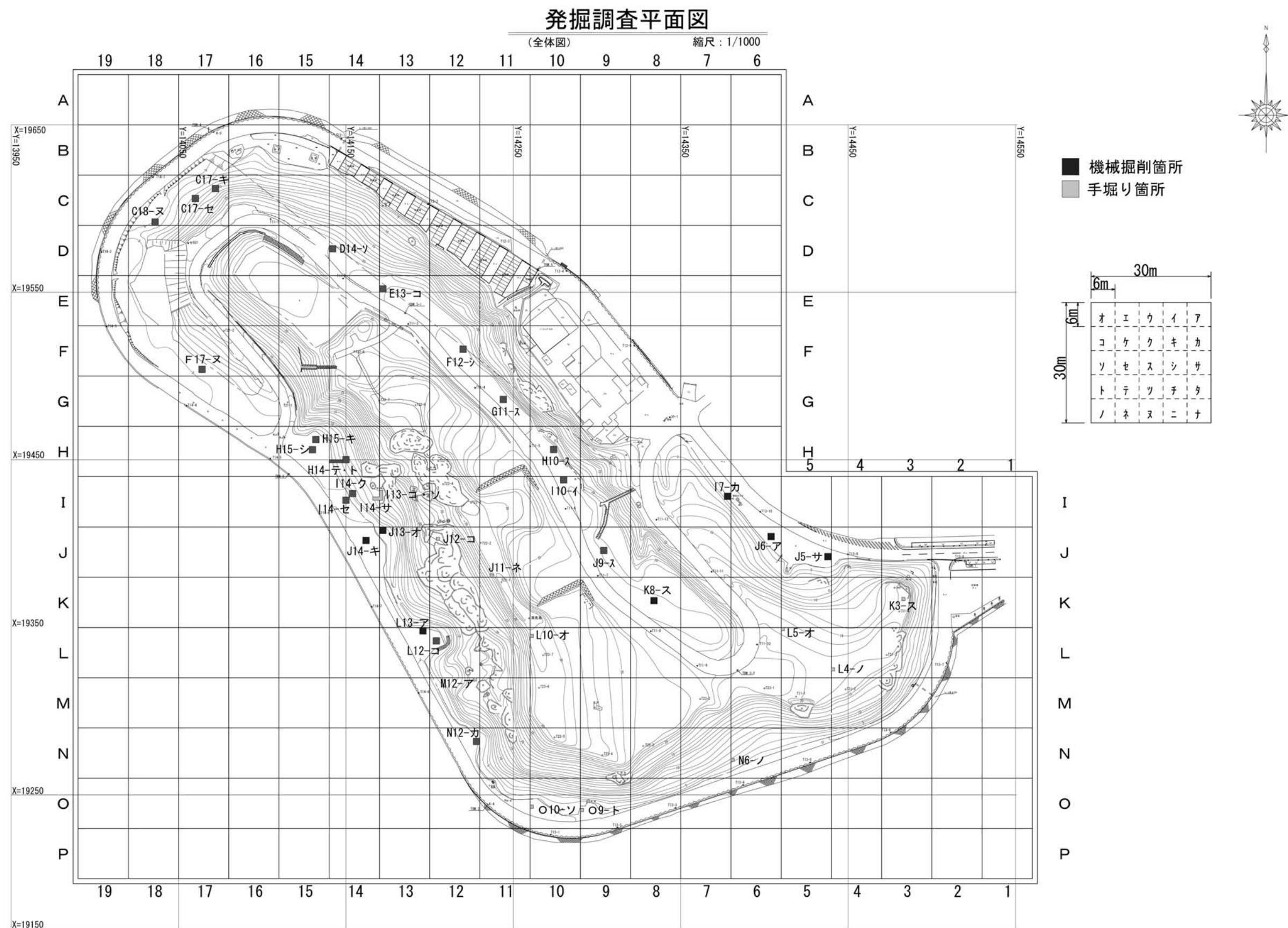
う地区は、瀬長島南西部の海岸線付近の丘陵下に立地しており、H15ーキ、H15ーシ、H14ーテ、H14ート、I13ーコ、I13ーソ、I14ーサ、I14ーセ、I14ーク、J13ーオ、J14ーキ、L13ーア、L12ーコ、N12ー

カ、O10 - ソ、O9 - ト、N6 - ト、J12 - コ、M12 - アの19グリットから構成される地区である。特に H15 - シにおいては、丘陵上からの二次堆積土層が厚く堆積しており、海岸からの砂層と相まって混砂シルト質の土質を形成している。また、O10 - ソ～N6 - トにおいては、新砂丘層の下に基盤の砂岩と琉球石灰岩の混礫層が確認できた。

え地区は、第2丘陵面の南東部に立地しており、L5 - 才、L4 - ノ、K3 - スの3グリットにより構成される地区である。本地区は、米軍接收時代の削平が大きく、基盤の琉球石灰岩層まで及んでいた。

お地区は、第2丘陵面の東部に位置しており、K8 - ケ、J9 - ス、I10 - イ、H10 - ツ、G11 - ス、F12 - シ、E13 - 才、D14 - ソの8グリットから構成される地区である。特に I10 - イ、H10 - ツ、G11 - スにおいては、グスク時代の旧表土層が堆積しており、その下には島尻マージ層が形成していた。また、E13 - 才においては、米軍接收時代の削平の影響が大きく、基盤である島尻層群豊見城層まで及んでいた。

か地区は、瀬長島中央部の頂上付近に位置しており、J11 - ネ、L10 - 才の2グリットから構成される。本地区は、え地区同様に基盤の島尻層群豊見城層まで米軍接收時代の削平を大きく受けている。



第6図 グリッド設定図

第IV章 範囲確認調査の概要

第1節 基本層序

1. 分層概念

瀬長島の地形の形成過程については、地理的環境でも述べたとおりである。基本層序は、これらの地理的環境と各層位の時期と生活を考慮して大きく～層に分層した。各グリットにおける層序は、この基本層序の解釈の範囲内で捉えることができるものの、混入物や色調、質などにおいて若干の違いが認められる。そこで、各グリットの層序に関しては、独立して層位観察を記述するものの、基本層序との関係性を述べることで、相互の関係性の理解に努める。

2. 基本層序

層：現在の腐食土。10YR2/3黒褐色。シルト質土。2～3cmの石灰岩礫を含む。

層：米軍接收時代の造成土。

層：近代～戦前にかけての耕作土。10YR5/3～5/4にぶい黄褐色。細砂。白色粒子（石灰岩粒？）を比較的密に含んでいる。頂上部周辺を主体に確認される層であり、その質、混入物によって細分される。

層：グスク時代の旧表土層。10YR3/4暗褐色。シルト質。

グスク時代を示す層は、頂上部周辺と北西部、北東部で確認される層である。しかしながら、その形成過程や質、色調の違いなどで3つに分けられる。

- 1層：北西部で確認される層である。海岸線に近く、砂質が混在する丘陵上部からの二次堆積層（一部旧表土面を含む）として捉えられる。
- 2層：第2丘陵面において、確認される層であり、マージを母体として、土壤化したグスク時代の旧表土面として捉えられる。
- 3層：北西上部で確認される層で、北西下部より上位に位置し、シルト質の二次堆積層として捉えられる。

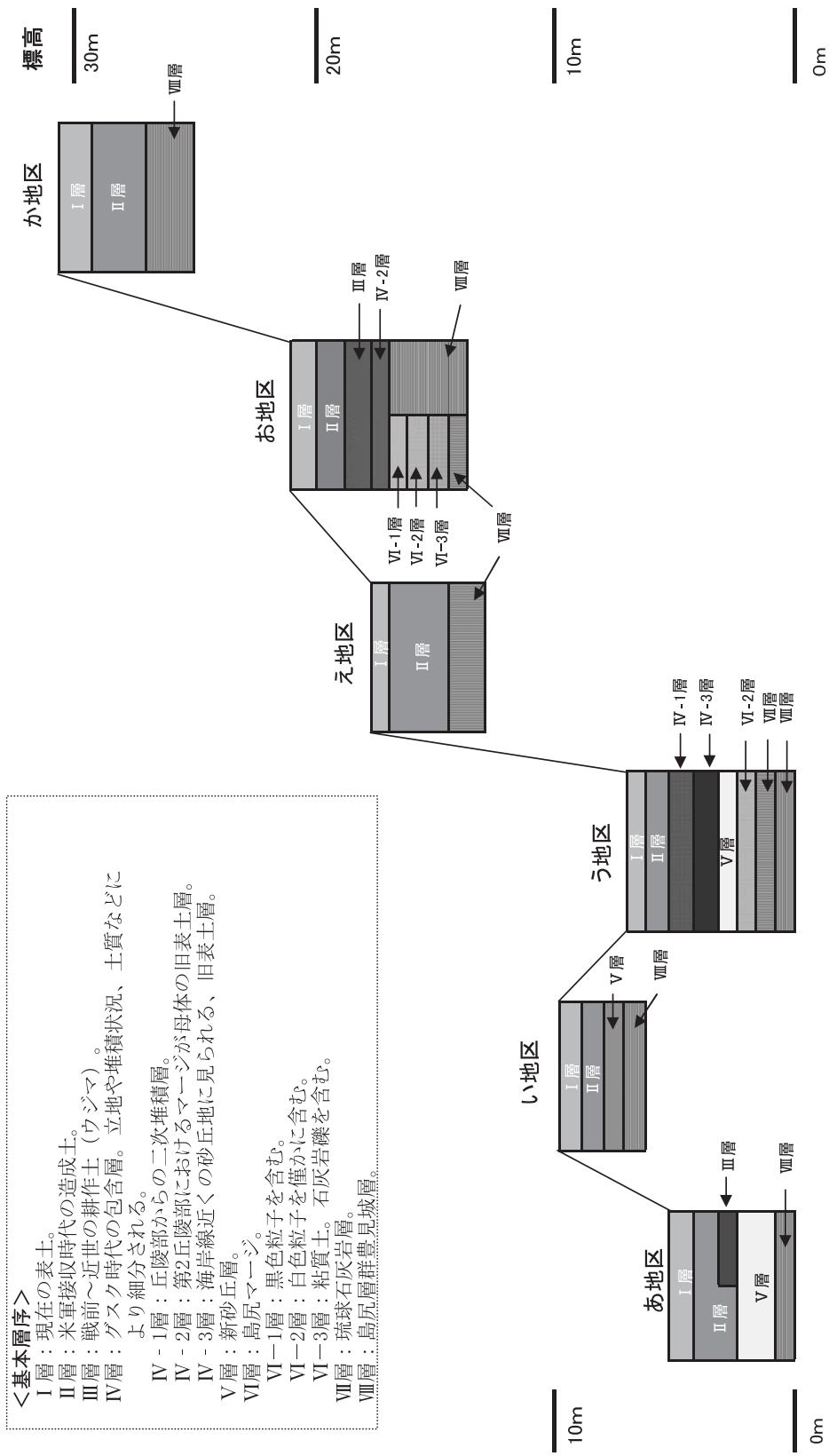
層：新砂丘層。北西～南西部の海岸線で確認された砂質層である。

層：島尻マージ層。土質により3つに細分される。

- 1層：7.5YR4/6褐色。シルト質。極僅かに黑色粒子（マンガン？）を含んでいる。
- 2層：7.5YR4/4褐色。極細砂～シルト質。1mm以下の白色粒子（石灰岩粒と考える）を僅かに含む。
- 3層：10YR4/6褐色。粘質土。基盤の琉球石灰岩の直上に堆積し、20cm大の石灰岩礫を含む。

層：琉球石灰岩。一部が風化し、10YR6/8明黄褐色、シルト質土を形成している。主として頂上部周辺で確認されている層である。

層：島尻層群豊見城層。調査区の北側及び頂上部付近に見られる層である。細粒砂層（ニービ）と泥岩（クチャ）が互層になって堆積している。層の一部分には、2～4cm程度の細粒砂岩（ニービヌフニ）が水平堆積する層も認められる。



第7図 基本層序図

第2節 出土遺物

1. 遺物の種類別概観

平成17（2005）年度、平成18（2006）年度の瀬長島の発掘調査（瀬長グスク他範囲確認調査）では、第1表に示したように中国産陶磁器を主体にグスク系土器、カムィヤキ、タイ産褐釉陶器、沖縄産陶器、本土産磁器など、各地域、時代の多様な陶磁器類が出土している。

遺物は各地区のグリット・層序ごとに選別を行い、産地・種類・器種・器形・部位等で分類し、集計をおこなった。ただし、自然遺物のスコリア及び軽石は、第1表により有無を示した。

（第1表は全地区における遺物出土状況である。）

1 中国産陶磁器

イ、青磁

青磁は265点出土しており、碗が220点ともっとも多い。青磁の産地は福建省及び浙江省からとなつておき、福建省が190点、そのうち泉州窯系が11点出土しており、浙江省龍泉窯系は64点出土している。14世紀後半～15世紀のものが主体である。出土地点は、福建省系がい・う・お地区、浙江省龍泉窯系がう・お地区となっている。

ロ、白磁

白磁は15点出土しており、碗が9点得られている。白磁の産地は福建省となり、閩清県一帯を産地とするビロースクIV類を主体に邵武窯系・泉州窯系などが出土している。14世紀中葉～16世紀中葉のものが主体である。い・う・お地区から出土している。

ハ、青花

青花は3点出土しており、16世紀～17世紀となる。う・お地区から確認された。

ニ、黒釉陶器

黒釉陶器は15点出土している。1点のみ胎土の違いから産地不明とするが、14点は福建省南平市茶洋窯系である。いずれも14世紀後半～15世紀頃と考えられる。福建省南平市茶洋窯系の黒釉陶器はう地区から出土しており、産地不明はお地区からの出土である。

ホ、褐釉陶器

褐釉陶器は15点出土しており、15世紀頃のものが主体である。う・お地区から出土している。

2 東南アジア産陶磁器

シーサッチャナライ窯の褐釉陶器が2点出土し、15世紀と考えられる。う地区から出土している。

3 日本産陶磁器

イ カムィヤキ

奄美徳之島産カムィヤキは、4点得られている。

ロ グスク系土器

土器は50点出土しており、胴部小破片が多数であるが、口縁部3点と底部が1点出土している。

ハ 近世陶磁器

沖縄産陶器は、施釉された上焼系と釉薬をあまりかけない荒焼系がある。前者は59点出土しており、碗がもっとも多い。後者は189点出土しており、壺、甕などの大型品が多い。あ・い・う・お地区から確認された。また、陶質土器がう・お地区から18点出土している。

そのほか、本土産陶器と磁器が出土している。肥前系の染付が2点出土しており、17世紀～18世紀である。あ・う地区から確認された。

4 瓦

瓦は、698点出土している。明朝系瓦が大半を占め、高麗系瓦が3点（個体数2点）得られた。明朝系瓦には、還元焰焼成と酸化焰焼成の二種類があるが、そのほとんどが酸化焰焼成である。出土地点は、い・う地区から確認された。

5 金属製品

金属製品は、8点出土している。材質で大別すると鉄製品と銅製品が得られた。鉄製品は角釘が3点、釘状製品が1点得られた。銅製品は鏃、八双金物、錢貨、簪がいずれも1点づつ出土している。出土地点は、う地区となっている。

6 石器及び石製品

石器総数は11点で、石斧、敲石兼凹石、敲石、砥石などがある。石製品が1点得られている。人為的に粒状の鉱物を練って成形されていると思われる資料を石製品とした。出土地点は、あ・う・お地区となっている。

7 貝製品

貝製品は、総数13点が得られた。大別して装飾品と実用品に分けられる。装飾品は玉類で、マガキガイの丸玉が2点、マダライモガイの臼玉が1点である。実用品はタカラガイ製品（貝錘）が9点、ヤコウガイ製品（貝匙）が1点出土している。出土地点は、う地区である。

8 木製品

木製品は、用途不明の木片が4点出土している。出土地点は、あ・う地区となっている。

9 自然遺物

イ、節足・脊椎動物

節足・脊椎動物は、魚類・爬虫類・鳥類・哺乳類が出土している。魚類が最も多く、う地区のH14-トからの出土する。

ロ、貝類

貝類はコンテナ14箱と大量に出土しており、腹足綱（巻貝類）が109種、二枚貝綱が54種、合計163種と多種にわたっている。う地区からの出土がコンテナ11箱と多い。

礁池干潟および礁池に生息する貝が、とくに多く出土している。

ハ、スコリア及び軽石

スコリア及び軽石が検出された。出土地点は、う地区となっている。層序ごとに計量を行い、重量を記した（第11表う地区遺物出土一覧1c）。

スコリアは、とくにH15-シのEL=4.200~3.250mより出土しており、軽石は少量である。スコリア及び軽石についての詳細な検討は、本発掘に委ねる。

第1表 出土遺物一覧 1a

地区名	グリット名	遺物名	青磁	白磁	青花	黒釉陶器(天目)	褐釉陶器など	カムイヤキ	グスク系土器	沖縄産施釉陶器	沖縄産無釉陶器	陶質土器	本土産陶器	高麗系瓦	明朝系瓦	金属製品	鐵線	鉄塊	鉄片	ナイフ?	青銅パイプ	銅線	砲弾破片	銃弾	石器	石製品	貝製品	木製品	木片	焼土	ガラス片	はりがね	プラスチック	硬貨	レンガ	ジップ	薬莢	タイル	スコリア	軽石	出土遺物層序計
あ地区	J5-サ	層									2					2																				4					
		層									1	2			3																				6						
	I7-カ	層															1				2														3						
		層																2				1													8						
	C17-キ	表採														5																			5						
	C17-ケ・C18-ヌ	表採															1																		1						
	C17・18	表採	1									2		5																					8						
	C18-ヌ	層										1					1																		2						
い地区	F17-ヌ	表採									7	1	26			42		3																	79						
	G17	表採															1																		1						
	H15-シ	層	1																																	1					
		廃土																																		0					
		表採	1																																	1					
		層	9		1	1																													12						
		層	18		2		1										2	1																	28						
		層	13		2	1		1																											18						
		層	2																																	2					
		層	4														4																		10						
		層	6		1		1																												8						
		層			1		4																												5						
		層	2		1			1																											4						
		層			1			1																											2						
		層	2					1																											3						
		②層							1																										1						
		②層							1																										3						
		廃土	37	3		3	1	10	2	3	1	1	1			28																		93							
う地区	H14-テ	表採	9		1	1		2	3	18			16	19		42																		111							
		層									1					1																			2						
		層			1		1		1		2	11	1	10	4	1	71																	106							
		層	2					1		5	3		3	19		18			1															54							
		層	26	1				2	1	8	3					7																		50							
		層						1								1	2																		4						
		層	1																																	1					
		層	3								1																								4						
		層	3								1																								4						
		層	1								1																								2						
		層									1																								1						
		層									1																								1						
		廃土	3																																	3					
	H14-ト	表採	1			1																														3					
H14																																									

第1表 出土遺物一覧 1b

2. 出土遺物分類

分類は中国産陶磁器及びタイ産陶磁器について行った。中国産陶磁器は、青磁・白磁・青花・黒釉陶器・褐釉陶器に分類できる。タイ産陶磁器は、褐釉陶器が出土している。

分類については『今帰仁城跡発掘調査報告Ⅱ』（註1）（以下『今帰仁Ⅱ』）を基準に、これまでに発表されている研究成果などにより若干の考察等を加えつつ行った。

中国産陶磁器

青磁は、素地、釉調などにより福建省系と浙江省龍泉窯系の二つに分けた。器種による分類では、福建省系、龍泉窯系とも、碗、小碗、皿、盤、杯、香炉、壺の7器種となっている。量的には、福建省系の碗が多く出土した。

白磁は、福建省閩清県一帯と福建省泉州窯系、福建省邵武窯系が確認できた。器種は碗、皿、杯の3器種で、碗は福建省系と福建省泉州窯系、皿、杯は邵武窯系である。

青花は、江西省景德鎮窯系で、器種は碗、皿、小杯の3器種である。

黒釉陶器は、中国産と福建省南平茶洋窯系との二つに分けられる。器種は碗と袋物が出土している。袋物は胴部小破片のため実測を割愛した。

褐釉陶器は、壺の1器種となっている。

タイ産陶磁器

褐釉陶器は、シーサッチャナライ系窯の壺が、1器種となっている。

参考文献

(註1) 金武正紀 宮里末廣ほか『今帰仁城跡発掘調査報告Ⅱ』今帰仁村教育委員会 1991年

1. 福建省系及び福建省泉州窯系青磁

(1) 碗

碗は、青磁の中で最も多く出土し、無鎬蓮弁文碗、無文外反碗、底部が得られた。器形と文様、素地、底部内外面の施釉範囲等の特徴から分類を試みた（底部施釉範囲分類はP 30に記載した）。以下、分類概念を記述する。

① 無鎬連弁文碗

器形は肉厚のある体部に直線的に立ち上がる口縁部、畳付の釉は搔き取らない。

外面の文様は片切彫りで弁先の尖った幅広の蓮弁文を描き、蓮弁は盛り上がりを失う。素地は白色で、灰緑色の釉を施釉している（第8図1）。『今帰仁II』の無鎬蓮弁文碗dに類似している。上田分類では、B類II bである（註2）。

無文外反碗

無文外反碗は、福建省系と素地に特徴のある福建省泉州窯系、玉縁口縁で大振りな佐敷タイプを含む3つに分類を試みた。さらに、福建省無文外反碗Iは口縁の形態により3つに細分した。

② 無文外反碗 I (福建省系)

素地は灰白色・灰黄色の粗粒子で白・黒粒の混入物をわずかに含む。釉薬の色調は、黄みの明るい灰緑色、明るい灰黄緑を呈するものが多い。見込みに印花文を施すものがある。

I-a 器形は、腰部が豊かに張る。内面に印花文を施すものもある。

印花文は、文様を凸状にあらわす陽印花（第8図2）と、凹状のくぼみに釉をため文様をあらわす陰印花（第8図3）がある。型造りの人形手タイプ、型押文。比較的厚い釉を施釉する（第8図4）。

上田分類Dにほぼ該当する。

I-b 器形は、胴部から直線的に立ち上がり、口唇部を外反する（第8図5）。

I-c 口径が比較的広く大振りで、薄手の外反口縁碗。灰色でやや粗粒子の素地に、薄い失透釉を施釉（第8図6）。類似資料は、『今帰仁I』（註3）の外反口縁碗A II cである。

無文外反碗II (泉州窯)

張りのある腰部をもつ大振りの碗である。素地は黄灰色の粗粒子で、白・黒粒の混入物を含み、釉薬の色調は黄みの明るい灰緑色である。成形が雑である（第8図7）。

無文外反碗III (福建省)

口縁部が玉縁状に肥厚し、張りのある腰部をもつ大振りの碗。外底を露胎し平坦に仕上げる。見込みを釉剥ぎするもの、印花文を施すもの、無文のものがある。素地は灰白色・黄灰色の粗粒子で白・黒粒の混入物を含む。釉薬の色調は、黄みの明るい灰緑色、灰黄緑を呈するものが多い。いわゆる佐敷タイプ（第8図8）。『今帰仁II』の玉縁口縁碗aにあたる。

(2) 小碗

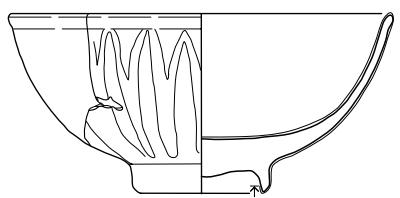
少量出土している。口縁部小破片のため、詳細は不明であるが、器厚が薄い。

③ 無文外反小碗

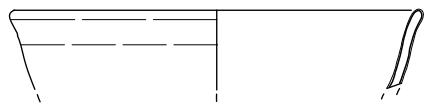
器形は、外反口縁である（第8図9）。

(註2) 上田秀夫 「14~16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁器研究』No.2 日本貿易陶磁器研究会 1982年

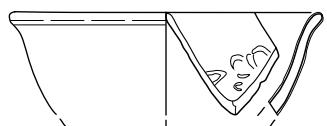
(註3) 金武正紀 宮里末廣ほか 『今帰仁城跡発掘調査報告I』 今帰仁村教育委員会 1989年



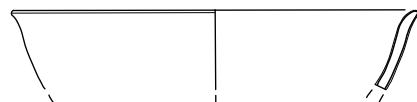
1. 無鎬蓮弁文碗



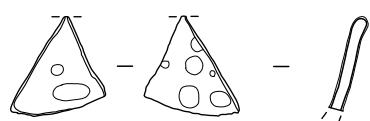
5. 無文外反碗 I-b



2. 無文外反碗 I-a (陽印花)



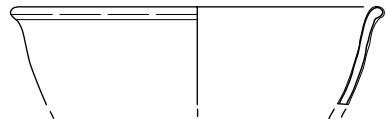
6. 無文外反碗 I-c



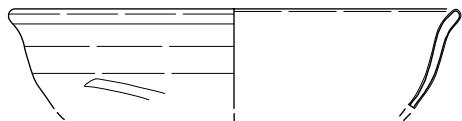
7. 無文外反碗 II



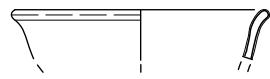
3. 無文外反碗 I-a(陰印花)



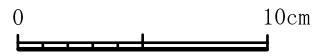
8. 無文外反碗 III



4. 無文外反碗 I-a



9. 無文外反小碗



第8図 青磁碗・小碗

(3) 皿

直口口縁無文皿、腰折れ外反皿、口折皿が出土している。

無文直口皿

口唇部を肥厚させ、胴部からまっすぐ立ち上がる器形である（第9図10）。

無文外反皿

緩やかに外反する口唇部をもつ（第9図11）。

無文口折皿 類似資料は、『今帰仁』の口折皿である。

内体面から鍔上面へ折れる部分が明瞭な稜をもつ無文皿である（第9図12）。

(4) 盤

盤は、鍔縁盤、直口口縁盤、底部が得られた。鍔縁盤の器形は、高台から直線的に口縁部に至り、口縁鍔端はつまみ上げられる。『今帰仁』の鍔縁盤群に類似している。底部は三つに分類した。

鍔縁盤 - a

籠彫りによる幅広（約10mm前後）の蓮弁文を内体面に丁寧に廻らせる（第9図13）。

鍔縁盤

2本以上の櫛で内体面に蓮弁文を廻らし、外体面は無文とする（第9図14）。

直行口縁盤

器形は体部から直線的に開き、口縁部を微弱な玉縁口縁とする。内外体面は無文とする（第9図15）。

『今帰仁』の直口口縁に類似しており、『首里城京の内跡』（註4）で報告されている。

盤底部分類 盤底部a 茅笥底に近い外觀を呈するもの（第9図16）。

盤底部b 高台をもつもの（第9図17）。

盤底部c 茅笥底を呈し、底部の厚みが約3cmと厚く、淡緑色の釉を高台際・畳付外側まで施釉、内外面とも無文とするもの（第9図18）。

(5) 杯

茅笥底杯が得られた。口縁部片と底部が出土し同一固体と思われる。

茅笥底杯

底部は茅笥底で直口口縁となる。明るい灰黄緑色の釉を高台際・畠付外側まで施釉、内外面とも無文である（第9図19）。『今帰仁』の茅笥底小杯に類似している。

(6) 香炉

香炉は、三足香炉の口縁部資料が得られた。

三足香炉

直立する体部から口唇が凹む寄口口縁となる（第9図20）。『今帰仁』の香炉類に類似している。

(7) 壺

壺は、盤口壺と酒会壺が得られた。口縁部及び胴部資料のため、全形はうかがえない。酒会壺は、胴部小破片のため実測を割愛した。

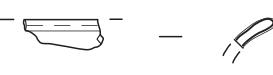
盤口壺

鍔縁盤の口縁部を内側につまみあげた口唇部を持つ壺である（第9図21）。

（註4）金城亀信『首里城跡 - 京の内跡発掘調査報告書（ ）』沖縄県教育委員会 1998年



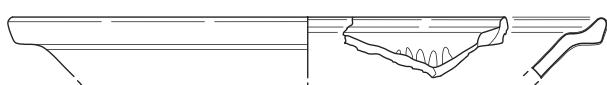
10. 無文直口皿



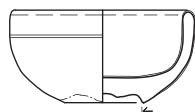
11. 無文外反皿



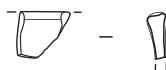
12. 無文口折皿



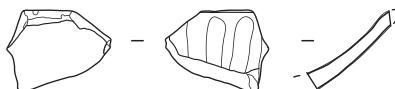
14. 鍔縁盤 II



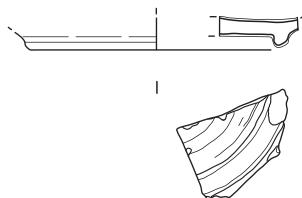
19. 暮箭底杯



20. 三足香炉



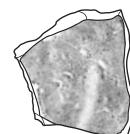
13. 鍔縁盤 I-a



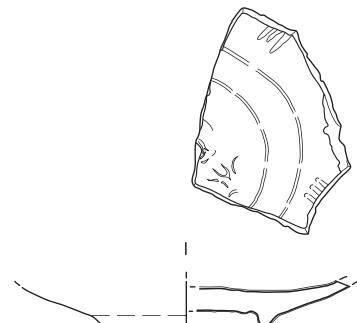
17. 盤底部 b



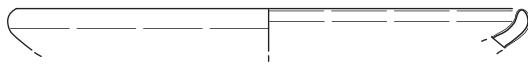
15. 直行口縁盤



18. 盤底部 c



16. 盤底部 a



21. 盤口壺



第9図 青磁皿・盤・杯・香炉・壺

2. 浙江省龍泉窯系青磁

(1) 碗

龍泉窯系青磁の中でも多く出土し、雷文帯碗、蓮弁文碗、無文外反碗、底部が得られた。器形と文様、素地、底部内外面の施釉範囲等の特徴から分類を試みた。以下、分類概念を記述する。

雷文帯碗

器形は直口口縁で、比較的厚い釉を施釉する。亀井が4類型したうちのDタイプ（註5）に類似している。山田城跡の資料ではBとDタイプが見られ、14世紀後半～15世紀前半と編年している。外面口縁部付近に片切彫りによる雷文帯を廻らし、体部に区画を設けているようである。内面には刻花花文を配し、見込み部分に陰圈線2本を廻らせており、上田分類では、C-aに該当する（第10図22）。素地は灰白色の微粒子で、黒・茶色粒の混入物を含む。釉薬の色調は、黄みの明るい灰緑である。

蓮弁文碗

底部に近い胴部小破片のため、実測を割愛した。

無文外反碗 - a

器形は、腰部が豊かに張る。上田分類Dにほぼ該当する。比較的厚い釉を施釉する（第10図23）。

(2) 小碗

無文外反小碗が得られた。

無文外反小碗

器形は、外反口縁である（第10図24）。

(3) 皿

皿は、無文直口皿、稜花皿が得られた。

無文直口皿

器形は浅く、底部からの立ち上がりは直線的で、口唇部を微弱に外反させる（第10図25）。『今帰仁』の直口口縁無文皿に類似している。

稜花皿

強く屈曲する腰部から外反する口縁部がつく器形である。内面に草花文を施し、口唇部に刻みを入れるもの〔稜花皿a〕（第10図26）と、入れないもの〔稜花皿b〕（第10図27）に分けられる。『今帰仁』の腰折れ外反皿dに類似している。

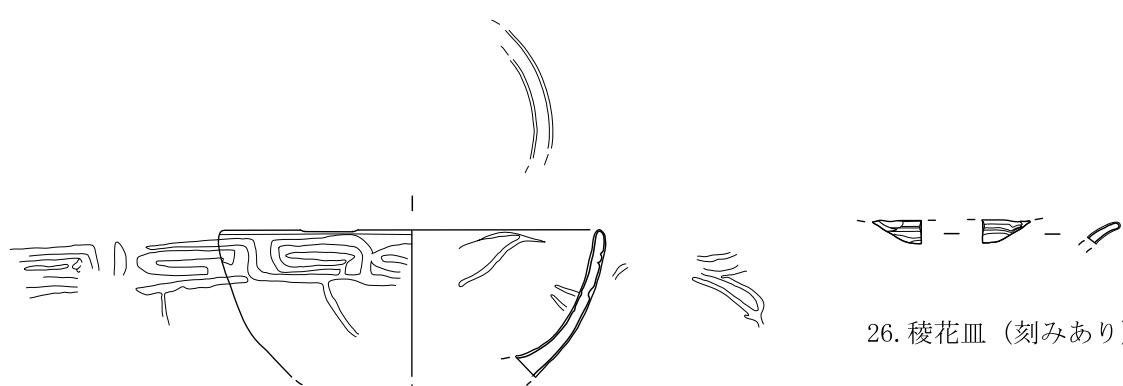
(4) 盤

盤は、鍔縁盤が得られた。

鍔縁盤 - b

比較的細い（約5mm前後）籠彫りの蓮弁文が内体面に廻らされる。底部は碁笥底に近い外觀を呈する（第10図28）。類似資料は、『今帰仁』の鍔縁盤cである。

（註5）亀井明徳「日本出土の明代青磁碗の変遷」『鏡山猛先生古希記念古文化論叢』 1980年



22. 雷文帶碗

26. 稜花皿 (刻みあり)



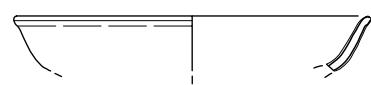
23. 無文外反碗 I-a

27. 稜花皿 (刻みなし)



24. 無文外反小碗

28. 鍔縁盤 I-b



25. 無文直口皿



第10図 青磁碗・小碗・皿・盤

(5) 杯

無文直口杯の口縁部資料が得られた。

無文直口杯

器形は、直口口縁の杯である（第11図29）。類似資料は、『今帰仁』の碁笥底小杯である。

(6) 香炉

香炉は、三足香炉が得られた。口縁部資料である。

三足香炉

器形は、直立する体部から口唇が凹む寄口口縁となる（第11図30）。類似資料は、『今帰仁』の香炉類である。

(7) 壺

壺は、酒会壺の胴部資料が得られた。

酒会壺

酒会壺の器形は、胴部片のため詳細は不明である（第11図31）。

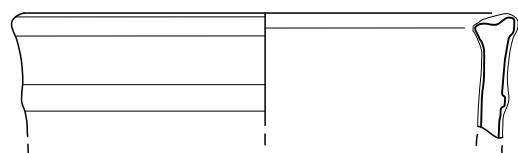
青磁碗底部施釉範囲分類

置付	高台内	見込
施釉		・・・・・ 第72図23、第75図57
施釉	A 総釉	-
	B 無釉	a 総釉・・・・・ 第71図12、第72図24、25、第75図56 b 無釉・・・・・ 第73図35 c 蛇の目無釉・・・・・ 第73図36
	C 蛇の目無釉	- a 総釉・・・・・ 第72図26 b 無釉・・・・・
無釉	A 総釉	-
	B 無釉	a 総釉・・・・・ 第72図27、第73図37 b 無釉・・・・・ 第72図28 c 蛇の目無釉・・・・・ 第72図29

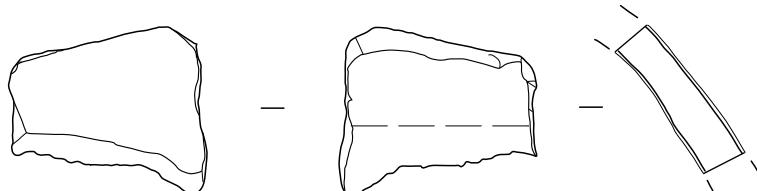
本分類は、『首里城跡 城の下地区発掘調査報告書』2004年の分類等を参考に、出土状況にあわせて若干の加除を行って分類した。



29. 無文直口杯

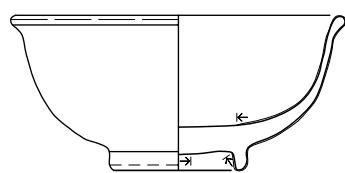
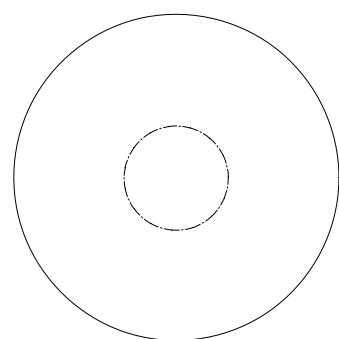


30. 三足香炉



31. 酒会壺

第11図 青磁杯・香炉・壺



青磁碗
底部施釉範囲凡例



3. 福建省系、福建省泉州窯系・邵部窯系白磁

(1) 碗

碗は、ピロースク 類、無文外反碗、底部が得られた。器形(口縁の形態、底部など)と素地等の特徴から分類を試みた。以下、分類概念を記述する。

ピロースク 類 (福建省閩清県窯系(義窯・青窯)註6)(14世紀後半~15世紀前半)

器形は、腰が張り体部が大きく外に開き、口縁が外反する。素地は灰白色で堅く、釉色は緑明オリーブ灰色(第12図32)。『今帰仁』の類似資料では、無文外反碗a。

無文外反碗 (福建省泉州窯系註7) (15世紀中~15世紀後半)

張りのある腰部をもつ大振りの碗である。高台は平坦に仕上げる。全体に雑なつくりで、外面には轆轤痕が確認でき、高台内を「の」の字状に削りとる。素地は明るい灰色の粗粒子で、1mm~3mmほどの白色・赤色・黒色(雲母?)鉱物を多量に含む。内底から外面の腰まで、黄みの明るい灰黄緑色の薄い釉が施釉される。内底部に窯道具痕が見られ、底部はピロースクに類似している(第12図33)。『首里城』の用物座・木曳門からも類似資料が出土している。

底部 (福建省) (15世紀後半~16世紀)

底部は今帰仁タイプに類似している。見込みの内底釉は薄く、蛇の目焼き取りをされており、外面は露胎である。高台は「ハ」の字状に開き、畳付外端の面取りはない。外底の高台際を箇で削って三角状に凹める(第12図34)。

(2) 皿

皿は、直口口縁抉入高台皿が得られた。

直口口縁抉入高台皿 (福建省邵部窯系) (15世紀後半~16世紀)

高台に4カ所、弧状の抉りを入れたものである。無文の直口口縁皿で、腰部から僅かに丸みを持ちながら開くように口縁に至り、口唇部を舌状に整える。外底の削りは浅い。内底から外面の腰まで透明釉が施され、細かな貫入が見られる。見込みには重ね焼きの目痕が残る。素地は淡黄色の軟質で、赤色・黒色の混入物を含む(第12図35)。『今帰仁』の類似資料では、抉入高台皿。森田分類のD群(註8)。

(3) 杯

杯は、八角杯と外反?口縁抉入高台杯が得られた。

八角杯 (福建省邵部窯系)

体部は八面に面取りされ、口縁部で外反する。素地は淡黄色で粗粒子、茶・黒色の混入物を含む。内外面とも口縁部は透明な釉が施され、細かな貫入が見られる(第12図36)。森田分類D群(註7)。

外反?口縁抉入高台杯 (福建省邵部窯系) (15世紀後半~16世紀)

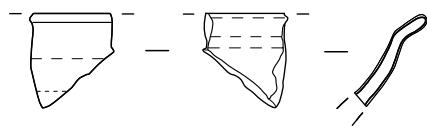
高台に4カ所、弧状の抉りを入れたものである。素地は淡黄色で粗粒子、茶・黒色の混入物を含む。内底に透明釉を施し、細かな貫入が見られる。見込みには重ね焼きの目痕が残る(第12図37)。『今帰仁』の類似資料では、外反口縁杯。森田分類D群(註8)。

(註6) 森本朝子・田中克子「沖縄出土の貿易陶磁の問題点 - 中国粗製白磁とベトナム初期貿易陶磁」

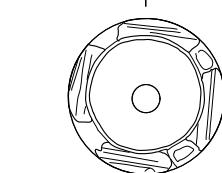
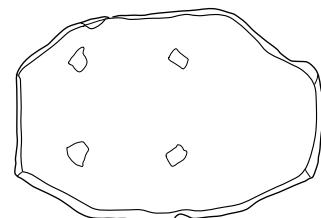
『グスク文化を考える』沖縄県今帰仁村教育委員会 2004年

(註7) 山本正昭「泉州窯系磁器から見た琉明関係 - 消費地からの視点で - 」『貿易陶磁研究』No.24 2004年

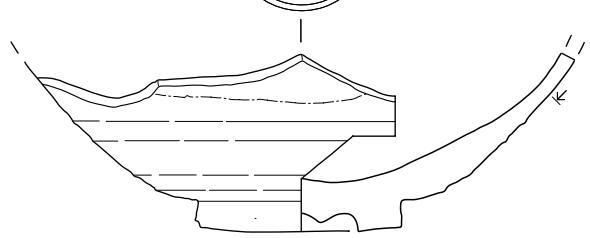
(註8) 森田勉「14~16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2日本貿易陶磁器研究会 1982年



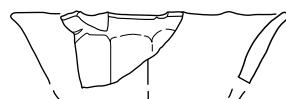
32. ビロースクIV類



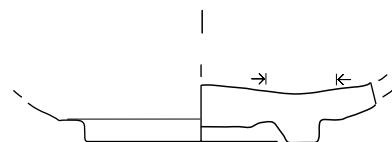
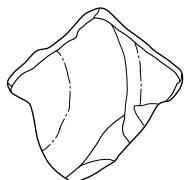
35. 直行口縁抉入高台皿



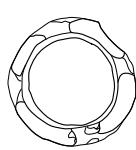
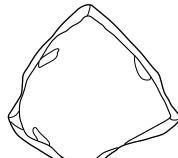
33. 無文外反碗



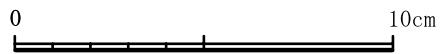
36. 八角杯



34. 碗底部



37. 外反? 口縁抉入高台杯



第12図 白磁碗・皿・杯・八角杯

4. 青花

青花は、碗、皿、杯が得られた。

- (1) 碗 (景德鎮窯) (16世紀～17世紀頃)

碗

底部が得られた。高台脇と高台内に2条の界線に入る。素地は、白色の微粒子で茶・黒の混入物を含む。畳付けを欠損している。外面は透明な釉を施し、内面は無釉である。コバルトの発色はやや鮮明である。底部資料の為、文様構成及び器形は不明(第13図38)。

- (2) 皿 (中国) (16世紀後半頃)

皿

直口口縁皿が得られた。口縁部は、外面に圈線を廻らせ区画した中に唐草文を描き、内面には横の線文を施す。透明釉を施し、素地は明るい灰色の微粒子で茶・黒の混入物を含む。コバルトの発色はにぶい(第13図39)。『今帰仁』の青花皿。小野分類皿E群(註9)。

- (3) 小杯 (中国) (16世紀～17世紀頃)

小杯

外反口縁杯が得られた。口縁部資料で、外面に文様を施し、内面に1条の界線を廻らす。透明釉を施し、素地は灰白色の細粒子で、茶・黒の混入物を含む。コバルトの発色はやや鮮明である(第13図40)。『今帰仁』の小杯に類似している。

5. 黒釉陶器

黒釉陶器は、碗と袋物が得られた。中国産とした黒釉陶器は、胎土が灰白色で、白・赤褐色の混入物を含む。福建省南平茶洋窯系の胎土は灰黄色・淡黄色の粗粒子で、赤褐・黒・白色の混入物を含む。釉調は禾目と柿釉の2種類ある。

- (1) 碗

天目茶碗が得られた。胎土と釉調により分類した。器形は森本分類の類に類似する(註10)。

禾目状天目(中国産)

器形は胴部資料の為、不明である。素地に黒釉の釉薬を厚く施釉し、表面は褐色を呈し、禾目文様を作り出している(第13図41)。

禾目状天目(南平市茶洋窯系註11)

器形は、口唇部で軽く角度を変えて直線的に立ち上がるものと内湾気味に終わるものがある。黒色の釉薬を基調に、赤みの暗い灰黄色が禾目状の文様となっている(第13図42)。

柿釉天目(南平市茶洋窯系)

器形は、口縁部で軽く角度を変えて立ち、外底は浅く上げ底風に削り、畳付け外縁に面取りを施す。胎土が黄みの明るい灰黄赤色で、赤みの暗い灰黄色の釉を施す(第13図43)。

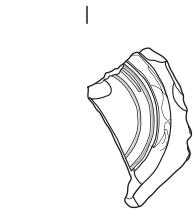
- (2) 袋物

胎土が明るい灰色である。胴部小破片の為、実測は行っていない。

(註9) 小野正敏「14～16世紀の染付椀・皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No.2日本貿易陶磁器研究 1982年

(註10) 森本朝子「博多遺跡群出土の天目」『唐物天目—福建省建窑出土天目と日本伝世の天目—』茶道資料館 1994年

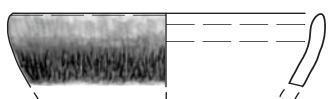
(註11) 折尾学・森本朝子「天目茶碗再考—出土遺物から見たその変遷—」『東アジアの考古と歴史 下 岡崎敬先生退官記念論集』同朋舎出版 1987年



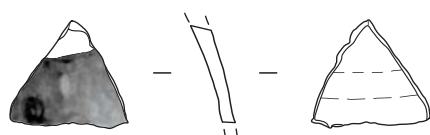
38. 青花碗



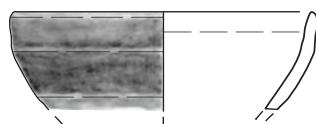
41. 黒釉陶器碗 (禾目状天目・中国産)



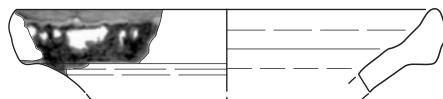
42. 黒釉陶器碗
(禾目状天目・南平市茶洋窯系)



44. 褐釉陶器壺 (中国産)



43. 黒釉陶器碗
(柿釉天目・南平市茶洋窯系)



45. 褐釉陶器壺
(タイ産 シーサッチャナライ窯系)

0 10cm



39. 青花皿



40. 青花小杯

0 5cm

第13図 黒釉陶器・青花・褐釉陶器

6. 褐釉陶器

褐釉陶器は、中国産とタイ産の壺が得られた。

(1) 壺

中国産はすべて胴部片の為、全形を知ることは難しい。タイ産は壺の口縁部が得られた。

壺（中国産）

胎土が橙色系のものは泥質で、灰色系のものは砂質である。いずれも赤褐色・黒色・白色粒の混入物を含む。釉は浅黄・オリーブ褐色で、内外面に白化粧を施すものもある。内面に調整痕が残る（第13図44）。

壺（タイ産 シーサッチャナライ窯註12）

口縁部と胴部が得られた。器形は、口縁部断面形が三角形を呈している。胎土は灰赤色と灰黄色で、混入物は赤褐色・黒色・白色粒を含む。釉薬は口縁部に流し掛けをされており、胴部付近は露胎している（第13図45）。類似資料は、『首里城跡 - 城の下地区発掘調査報告書 -』に掲載されている。

（註12）向井 瓦「タイ黒褐釉四耳壺の分類と年代」『貿易陶磁研究』No.23 日本貿易陶磁研究会 2003年

第2表 遺物分類一覧 1a

第2表 遺物分類一覧 1b

龍泉窯系 青磁 分類案表				地区	う地区																								合計					
				グリット	H15-シ						H14-テ		H14-ト				H14周辺	I13-コ		I13-ソ	I14-サ			I14-ク			I13・I14	L13-ア	I10-イ	H10-ツ	G11-ヌ			
				層序	表採	層	層	層	層	層	廃土	層	層	層	P層	層	表採	~層	廃土	層	層	層	層	層	層	廃土	層	層	廃土					
産地	種類	器種	名称	部位	時代																													
龍泉 青磁	碗	雷文帯	口縁部	15c前半								2		1				2			1	3	2	1	2	1					15			
			胴部	15c前半				1				2									1	1			2		1				8			
			胴部	15c前半～中葉																											1			
		連弁文	胴部	15c前半～後半																											1			
		無文外反	口縁部	14c後半～15c前半		1			1		2				2						2	1									9			
				15c後半																											1			
				15c前半～後半							1																			1				
		底部	胴部	15c前半～後半		1				1	2	2			1		1				2			1						12				
			無文直口皿	14c後半～15c前半							1					1														2				
				15c前半～中葉	1																									1				
				15c前半～後半							1									1										2				
		小碗	無文外反	口縁部	15c前半～後半									1																	1			
					16c前～後半																										1			
		皿	稜花皿	口縁部	15c前～後半																										2			
				a	15c中葉～後半									1																	1			
				b	口縁部																										1			
		盤	鍔縁盤	b	底部	15c前半																									1			
		杯	直行		口縁部	15c前半～後半																									1			
		香炉	三足香炉		口縁部	15c前半～後半																									1			
		壺	酒会壺		胴部	14c後半～15c前半		1																							1			
				合計	1	2	1	1	1	1	7	7	1	1	2	1	1	1	2	1	1	8	7	1	3	3	2	1	3	1	1	1	64	
					14						8		5				1	3		1	19				6		3	1	1	1	1			

第2表 遺物分類一覧 1c

白磁

種類	器種	名称	産地	部位	年代	地区		い地区				う地区				お地区				合計
						グリット		C17・C18	H15-シ	H14-テ	H14-テ・ト		I14-サ	I10-イ						
						層序	表採	廃土	層	層	層	層	層	層	層	層	層	層		
白磁	碗	ビロ-スク類	福建省 閩清県 窯系	口縁部	14C 中葉			2			1								3	
		ビロ-スク類		胴部	14C 中葉					1	2								3	
		ビロ-スク類		胴部	15C 前												1		1	
		無文外反碗	福建(泉州窯)系	底部	15C 中葉～後					1									1	
	皿	今帰仁	福建省系	底部	15C 後～16C 中葉		1												1	
		直口口縁抉入高台	邵部窯系	完形	15C 後～16C 中葉						1								1	
		邵部窯系		胴部	15C 後～16C 中葉													1	1	
	杯	邵部窯系		底部	15C 後～16C 中葉		1												1	
		不明	福建省系	底部	15C 後～16C 中葉														1	
	八角杯	邵部窯系	口縁部	15C 後～16C 中葉															1	
		外反？口縁抉入高台	邵部窯系	底部	15C 後～16C 中葉					1									1	
					合計		1	3	1	3	4	1	1	1	1				15	
							1	3	1		7	1	1	1						

青花

種類	器種	産地	部位	年代	地区		う地区				お地区				合計		
					グリット		H14-テ		H14-テ・ト		I10-イ						
					層序	層	層	層	層	層	層	層	層	層			
青花	碗	中国(景德鎮)	底部	16C～17C			1									1	
				16C 後					1							1	
				16C～17C							1					1	
	皿	中国	口縁部			合計		1		1			1			3	

黒釉陶器

種類	器種	名称	産地	部位	年代	地区		う地区				お地区				合計			
						グリット		H15-シ		H14-テ		H14-ト		I13-コ	I10-イ	H10-ツ	H10-ツ	G11-ス	
						層序	層	層	層	層	表採	表採	層	層	層	層	層	層	
黒釉陶器	碗	禾目状天目	中国	胴部	14C後半～15C中											1		1	
				口縁部	14C後半～15C中		1	1										2	
				口縁部	15C前～後半		1					1					1	3	
				福建省	14C後半～15C中葉													1	
	茶洋窯系	南平市	茶洋窯系	胴部	14C後半～15C前半													1	
				柿釉天目	15C前～後半		2				1		1	1				5	
				底部	15C前～後半							1						1	
	袋物			胴部	15C前～後半													1	
						合計	2	1	1	1	1	1	1	2	1	1	1	1	15
							5		1		4		1	1	1	1	1		

褐釉陶器

種類	器種	産地	部位	年代	地区		う地区				お地区				合計			
					グリット		H15-シ			H14-テ		H14-ト		I10-イ	H10-ツ			
					層序	層	層	層	層	廃土	表採	層	層	層	層			
褐釉陶器	壺	中国	胴部	15C前～後半	1	2	1			2	1	1	1	2	1	1	14	
				口縁部	15C中			1		1							2	
				胴部	15C前～後半				1								1	
				合計	1	2	1	1	1	3	1	1	1	2	1	1	17	
							9				3	1		4				

3. 動物遺体

1. はじめに

本調査における動物遺体の出土状況は、他の遺物と同様にう地区においてその大部分が出土している。豊見城市の西に位置する離島の瀬長島は、周囲をリーフに囲まれた穏やかな海があり、島の西部を中心に砂浜が発達している。

前述したとおり、動物遺体の大部分がう地区から出土しており、う地区と他の地区においては、その取り上げ方法が異なっている。う地区以外では、動物遺体を含めた遺物の取り上げ方法は、ピックアップ法によるものである。う地区内では、掘り下げを行っていく段階で、魚骨を含め他微細遺物の出土が顕著となり、掘り上げた土を2mmの篩を用いてその取り上げをおこなった。そのため、本報告書では、ピックアップ法と2mm篩を用いた検出方法として報告を行う。

尚、今回は未同定とされた多くの微細骨に関しては、改めて報告を行いたい。

2. 検出された脊椎動物遺体種名表

節足動物門	Phylum ARTHROPODA
甲殻綱	Class Crustacea
十脚目	Order Decapoda
科・属不明	Fam.et gen.indet
棘皮動物門	Echinodermata
ウニ綱	Echinoidea
脊椎動物門	Phylum VERTEBRATA
軟骨魚綱	Class Chondrichtyes
メジロザメ目	Order Carcharhiniformes
硬骨魚綱	Class Osteichthyes
スズキ目	Order Perciformes
ハタ科	Family Serranidae
属・種不明	Gen.et sp.indet
フエフキダイ科	Family Lethrinidae
属・種不明	Gen.et sp.indet

ブダイ科	Family Scaridae
アオブダイ属	Scarus spp
爬虫綱	Class Reptilia
有鱗目(ヘビ亜目)	Order Ophidia
科・属不明	Fam.et gen.indet
鳥綱	Class Aves
哺乳綱	Class Mammalia
齧歯目	Order Rodentia
ネズミ科	Family Murida
属・種不明	Gen.et sp.indet
偶蹄目	Order Artiodactyla
イノシシ科	Family Suidae
イノシシ/ブタ	Sus scrofa
ウシ科	Family Bovidae
ウシ	Bos taurus

3. 出土した動物遺体について

甲殻綱・十脚目

カニのハサミが2点出土している。内1点は大型のものである。

ウニ綱

ウニの殻が1点出土しているのみである。

軟骨魚骨 サメ類

脊椎骨が1点出土している。加工痕などは認められない。

ハタ科

ハタ科は、前上顎骨が2点出土しており、金子2005年によるハタ科A・Bに属する。

フエフキダイ科

本遺跡における硬骨魚綱において、最も多く出土したのがフエフキダイ科である。前上顎骨(左)により最少個体数は、4個体である。歯骨高の計測値は、7.8、7.4mmの中型の個体と、3.9mmの小型の個体が認められる。

ブダイ科

下咽頭骨、歯骨においてはアオブダイ属のみが確認されている。下咽頭骨の計測値は、15.4mm、歯骨

の計測値は、13.4mmであり、首里城書院・鎖之間の計測値を比較しても、数多くみられるサイズである。

爬虫綱 有鱗目（ヘビ亜目）

脊椎骨が1点確認された。

鳥綱

鳥口骨が1点出土しており、ニワトリと考えられる。H15 - シにおいて2点出土しており、近位置からの出土であったため、同一個体の可能性がある。

齧歯目・ネズミ科

下顎骨が1点出土している。

イノシシ科

哺乳綱の中ではウシと並んで多く出土する。大部分が破片であり、イノシシとブタとの明確な違いは認められなかった。最小個体数は1個体である。

ウシ科 ウシ

ウシは、大腿骨や中足骨、踵骨などが出土している。最小個体数は、1個体である。沖縄本島側から食糧として持ち込まれたものと考えられる。

4. 出土状況

う地区より9割の動物遺体が出土している。H15 - シの基本層序は、二次堆積によるものであり、特出して動物遺体が多く出土する層は認められないが、溝状遺構の下部である②層からは、ウシの骨がまとまって出土しており、同一個体としての可能性も考えられる。H14 - テ・トについては、ピット遺構が複雑に切りあった状態で検出されている。それらのピット内からは、魚骨を中心とした出土が多く認められ、その上部の層からもまとまって魚骨の出土が認められる。

5. 小結

本報告においては、微細資料の魚骨の同定作業がすべて完了してはいないが、現在までに確認されている事について下記のとおり整理できる。

- ・う地区において動物遺体が多く出土している。ピットなどの遺構も確認されることから本地区周辺が生活跡地と深い場所にあったといえる。
- ・H15 - シ、H14 - テ・トのグリッドは隣接するものの、その出土状況には違いが認められる。H15 - シにおいては、大部分が哺乳綱を中心とするが、H14 - テ・トにおいて、魚骨の割合が非常に高い。特にピット内からの出土が多く、何らかの生活遺構が想定される。
- ・出土した動物遺体について解体痕などの傷痕の観察を行ったが、該当する資料は認められなかった。
- ・魚骨に関しては、フエフキダイ科が主体となり、ブダイ科、ハタ科などが僅かに出土している。この点に関しては、未同定の資料の同定作業を含め、再度検討を行いたい。
- ・哺乳綱に関しては、イノシシとウシが同じ程度出土する。ウマは確認できなかった。

今回、う地区、特にH14 - テ・トにおいて篩を用いた魚骨の検出作業が行われたことは、今後のグスク時代における食生活、漁労活動を考える上で重要なデータであると考える。今回は、試掘調査であり、調査面積も限られていたものの、今後の発掘調査において非常に重要な地点となりえると考える。また、今回未同定とした資料に関しても、改めて追加報告を行いより詳細な動物遺体の状況を明らかにしたい。

参考文献

- ・金子浩昌 2005年 『首里城跡 - 書院・鎖之間地区発掘調査報告書 -』「第7節 6 脊椎動物遺体」 沖縄県立埋蔵文化財センター
- ・金子浩昌 1996年 『平敷屋トウバル遺跡』「第27節動物遺体」沖縄県教育委員会

第3表 脊椎動物遺体出土一覧

地区名	グリット	層位	種類	部位(左右)	計測値・残存状況・観察事項など
う地区	I14 - ク	層	イノシシ属	肩甲骨	骨体～遠位端
	H14 - テ・ト	表採	ウシ	上腕骨(右)	遠位端
		層	イノシシ属	上腕骨(右)	骨体(近位部)スパイラルフレイク
		層	イノシシ属	堆体	骨体(近位部)
		層	アオブダイ属	歯骨(左)	L = 13.3mm
				未同定(3点)	
	P 2	層	フェフキダイ科	前上顎骨(左)	
			ブダイ科	主上顎骨(右)	
				未同定(2点)	
		層	トリ	不明	
H15 - シ			フェフキダイ科	歯骨(右)	7.5mm
			フェフキダイ科	主上顎骨(左)	
			アオブダイ属	主上顎骨(左)	
			ハタ科B	前上顎骨(右)	
			ハタ科A	前上顎骨(右)	
				未同定	魚骨多い
		層	ヘビ	堆体	
				未同定(19点)	
		層(P 2外)		未同定(1点)	
			トリ	鳥口骨(左)	完形
う地区			フェフキダイ科	前上顎骨(左)	
			フェフキダイ科	歯骨(右)	
				未同定(17点)	
	P 1	層		未同定(2点)	
	P 3	(十字トレンチ)層	フェフキダイ科	前上顎骨(右)	
			フェフキダイ科	前上顎骨(左)	
				未同定(8点)	
	P 3 - 1	層	甲殻類	ハサミ	
				未同定(5点)	
	P 3 - 2	層		未同定(31点)	
う地区	P 3 - 3	層		未同定(7点)	
	P 3 - 4	層	フェフキダイ科	角骨(左)	
			ネズミ類	下顎骨(右)	
				未同定(11点)	
	P 4	層	甲殻類	ハサミ	
			ウニ	殻	
				未同定(13点)	
		層		未同定(7点)	
			フェフキダイ科	歯骨(右)	3.9mm
			フェフキダイ科	歯骨(左)	7.8mm
H15 - シ			フェフキダイ科	前上顎骨(左)	
			アオブダイ属	下咽頭骨	B = 15.4mm
				未同定	魚骨多い
		廃土	アオブダイ属	歯骨(左)	L = 13.4mm
				未同定(11点)	
		層	甲殻鋼	はさみ	
			トリ	骨体	
				未同定(1点)	哺乳鋼
			未同定(1点)		
		層	イノシシ属	大腿骨	
H15 - シ				未同定(2点)	哺乳鋼・鳥鋼
	②層		ウシ	踵骨(左)	完形
	②層		ウシ	中足骨(左)	完形
	②層		サメ	堆骨	完形
	②層		イノシシ属	肋骨	6点(破片)
	②層		イノシシ属	踵骨(右)	
				未同定(1点)	
		廃土	ウシ	大腿骨(左)	骨体～遠位端
			ウシ	下顎M2(右)	一部破損
			ウシ	堆体	
ハタ科Bは、『首里城跡　書院・鎖之間地区発掘調査報告書』(沖縄県立埋蔵文化財センター2005年)による 本報告の動物遺体の同定は、久貝が行った。			イノシシ属	橈骨(右)	近位端はずれ～遠位端はずれ
			イノシシ属	椎骨	

ハタ科Bは、『首里城跡　書院・鎖之間地区発掘調査報告書』(沖縄県立埋蔵文化財センター2005年)による
本報告の動物遺体の同定は、久貝が行った。



図版1 脊椎動物遺体 1 1:ウシ・大腿骨(左) 2:ウシ・椎骨 3:ウシ・踵骨(左) 4:ウシ・中足骨(左) 5:ウシ・下顎M2(右) 6:イノシシ科・肩甲骨(左) 7:イノシシ科・上腕骨(右) 8:イノシシ科・橈骨(右) 9:イノシシ科・踵骨(右) 10:イノシシ科・椎骨 11:トリ・鳥口骨



図版2 脊椎動物遺体2 1:サメ類・椎骨 2:アオブダイ属・歯骨(左) 3:アオブダイ属・下咽頭骨 4:ブダイ科・主上顎骨(左) 5:ハタ科B・前上顎骨(右) 6:フエフキダイ科・前上顎骨(左) 7:フエフキダイ科・前上顎骨(左) 8:フエフキダイ科・歯骨(左) 9:フエフキダイ科・主上顎骨(左) 10:フエフキダイ科・角骨(左) 11:ヘビ・椎骨

4. 貝類遺体

貝類遺体は、第4表に巻貝、第5表に二枚貝を示した。腹足綱（巻貝）32科109種、二枚貝綱22科54種の最小個体数3003個体が出土した。個体数の把握は巻貝においては完形及び殻頂が残っているものを一個体とし、二枚貝においては完形のものを左右それぞれで集計し、多い方を最小固体数とした。腹足綱と二枚貝綱を比べると、個体数及び種類は腹足綱が多い。巻貝ではマガキガイ、チョウセンサザエが比較的多く、二枚貝はホソスジイナミガイ、ウラキツキガイがう地区の平坦地で平均的に出土している。

貝類生息地分類一覧

：外洋・サンゴ礁域	：河口干潟・マングローブ域
1：潮間帯中・下部	0：潮間帯上部
2：亜潮間帯上縁部	c：岩礫底、砂泥底、砂底
3：干潟	：陸域
4：礁斜面及びその下部	9：林縁部
a：岩板	
c：岩礫底、砂泥底、砂底	
：内湾・転石地域	
1：潮間帯中・下部	
2：亜潮間帯上縁部	
b：転石	
c：岩礫底、砂泥底、砂底	

参考文献

- 『平敷屋トウバル遺跡』 - ホワイトビーチ地区内倉庫建設工事に伴う緊急発掘調査報告 - 沖縄県教育委員会 1996年3月
- 『前原貝塚』 - 村道サ - 線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 - 宜野座村教育委員会 2005年3月
- 『大渡貝塚』 - 国営沖縄本島南部農業水利事業の米須地下ダム建設工事に伴う緊急発掘調査 - 糸満市教育委員会 1998年3月
- 『大渡貝塚ほか発掘調査報告』 糸満市教育委員会 2003年3月
- 久保弘文・黒住耐二『生態 / 検索図鑑 沖縄の海の貝・陸の貝』 1995年 沖縄出版
- 奥谷 喬司『日本近海産貝類図鑑』 2000年 東海大学
- 行田 義三『貝の図鑑 採取と標本の作り方』 2003年 南方新社

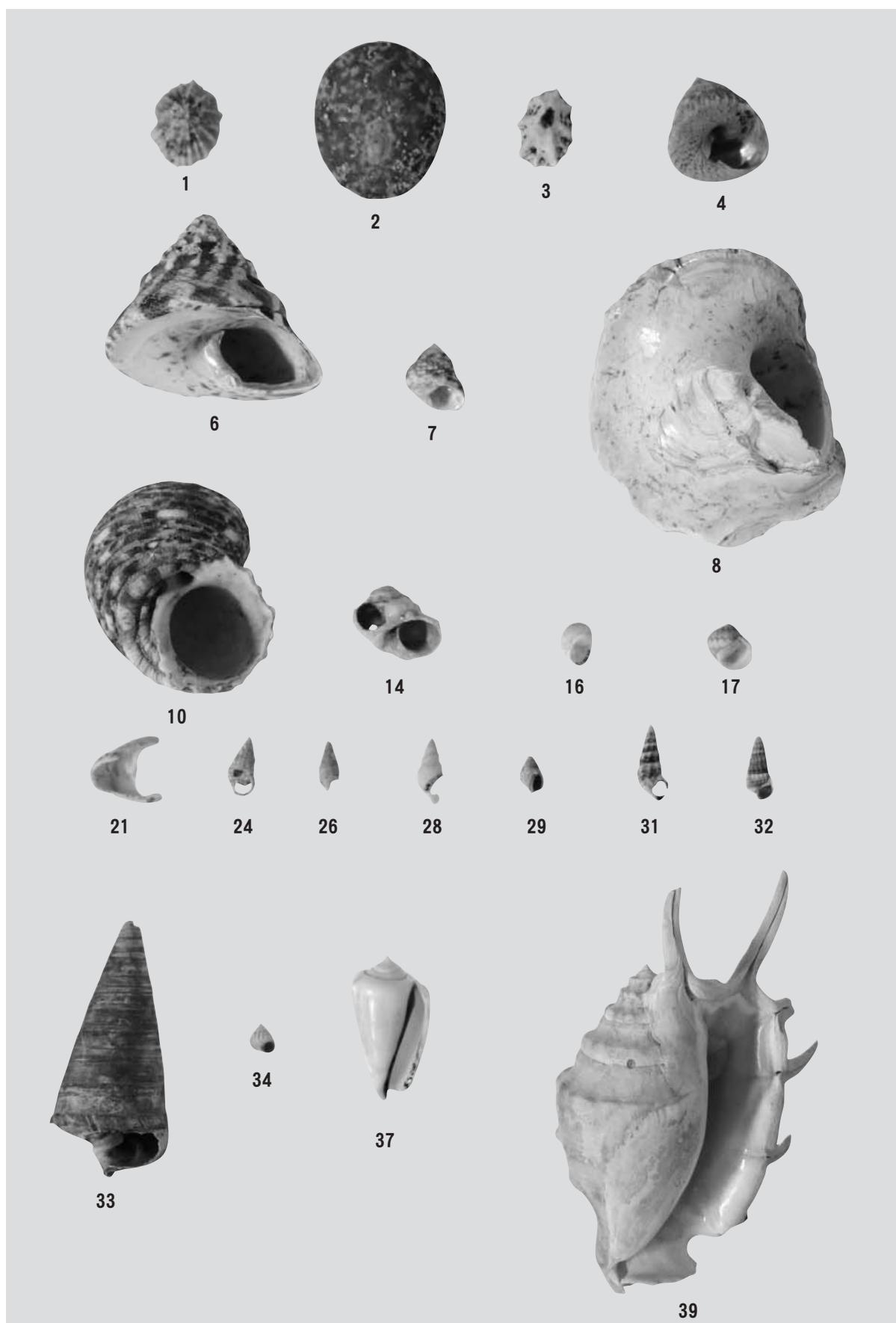
第4表 貝類出土狀況 1a(巻貝)

第4表 貝類出土狀況 1b(巻貝)

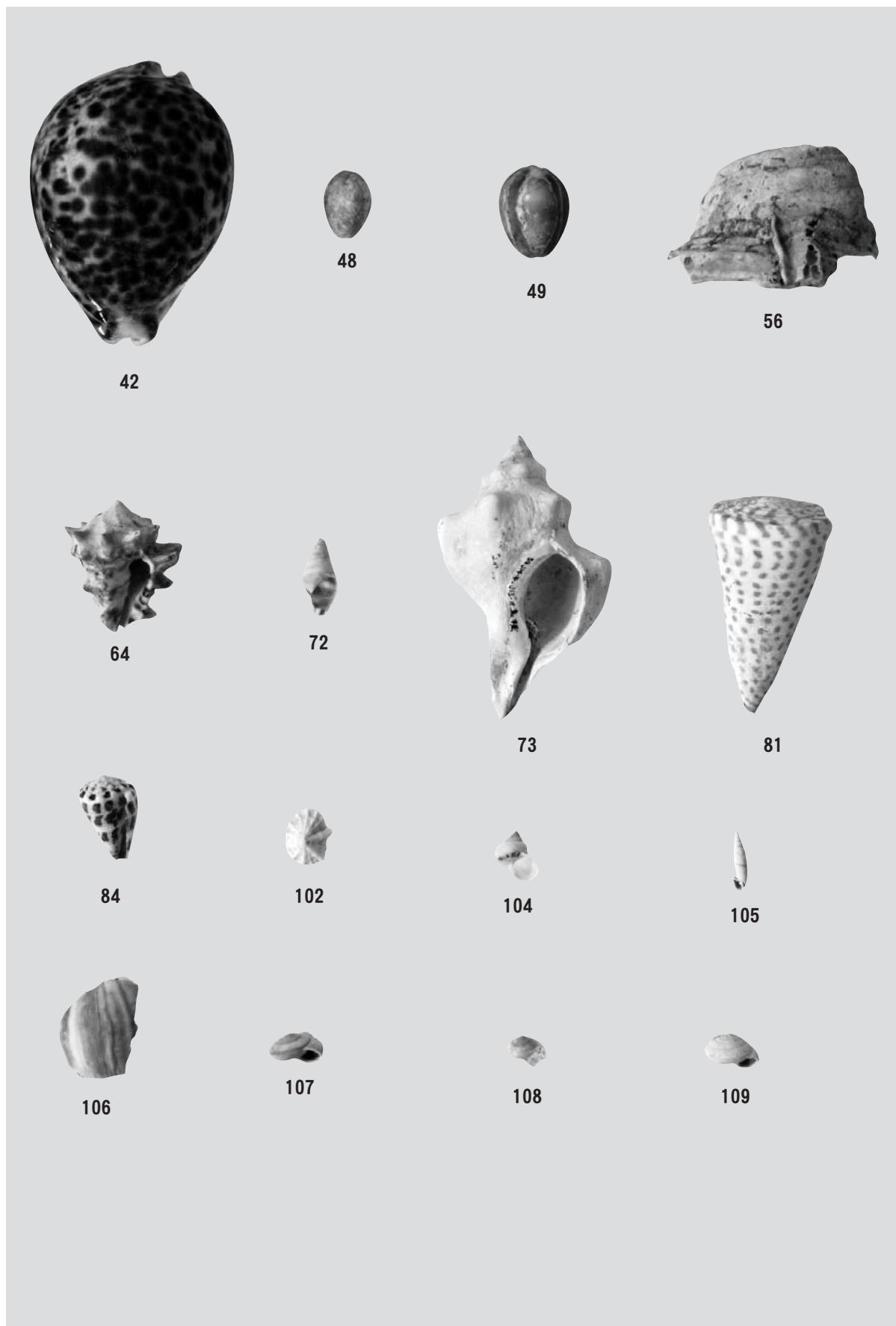
第5表 貝類出土狀況 2a(二枚貝)

番号	網名	科名	種名	地区名		う地区										I13-コ・ソ					I14-サ		I14-サ		I14-サ					
				グリット		H14-テ					H14-テ・ト					I13-コ・ソ					I14-サ		I14-サ		I14-サ					
				層	層	層	層	層	層	P1	P2	P3-1	P3-2	P3-3	P3-4	P3-5	P4	廃土	層	層	層	層	層	層	層	層				
完形	破片	完形	破片	完形	破片	完形	破片	完形	破片	完形	破片	完形	破片	完形	破片	完形	破片	完形	破片	完形	破片	完形	破片	完形	破片	完形	破片			
左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右			
1			オオタカノガイ																											
2			ミカゲイ	-1-a																										
3			ヒコエイ	-2-a																										
4			リュウチカラ脚味ウガイ	-2-c																										
5			タマネギ科	ソメタカリ	-2-c																									
6			イセイ科	リュウチカラ脚味ウガイ	-1-c																									
7			ツツジ科	ミドリワタリ	-1-a																									
8			ムカシハナ	マカイ																										
9			シロツケ科	シロツケ																										
10			ミカゲ科	ミカゲ																										
11			イサキ科	リュウチカラ脚味シコ																										
12			ヒヨコ科	メカイ	-2-a																									
13			イボガキ科	ホウノイシキ																										
14			タマネギ																											
15			ツバメ科	ツバメ	-2-c	5	4	1	2	14	45	1	1	3	23	27	3	6	10	6	6	1	19	24	6					
16			カブリタカノガイ	カブリタカノガイ	-2-c																									
17			カブリタカノガイ	カブリタカノガイ	-2-c																									
18			カコガイ	シロツケ	-2-a																									
19			カコガイ	カコガイ	-2-c																									
20			カツラルゴン科	カツラルゴン	-1-a																									
21			フジイロザクラ	フジイロザクラ	-2-c																									
22			ツバメシキ	リュウチカラ脚味	-1-c																									
23			オオシマイ	オオシマイ																										
24			ガラガラ	ガラガラ	-2-c	1	1	1	4	4	4	2	2	10	5	3	5	5	1	3	4	5	4	12	18	1				
25			シロツケ	シロツケ	-2-c																									
26			シロコガ科	シロコガ	-2-a																									
27			ヒメコガ科	ヒメコガ	-2-a																									
28			ヒメコガ科	ヒメコガ	-2-a																									
29			タマネギ	タマネギ	-2-a																									
30			ハガキ科	リュウチカラ脚味ガイ	-2-c																									
31			イリマツリ	イリマツリ	-1-c	2		1	13	3	4	18	16	8	3	5	4	14	5	1	2	1	1	1	1	1	5	9	1	
32			チドリスマ科	チドリスマ																										
33			ブナハガ科	リュウチカラミズ																										
34			ヒメツツジ	ヒメツツジ																										
35			ニッコロガ科	ニッコロガ	-2-c																									
36			ヒメツツジ	ヒメツツジ	-1-c																									
37			アサガ科	アサガ																										
38			アサガ科	アサガモチキ																										
39			シオザミ科	シオザミ	-1-c																									
40			シロツケ	シロツケ	-0-c																									
41			アラトリカ	アラトリカ	-2-c																									
42			アメカイ	アメカイ	-1-c																									
43			アラビアマカイ	アラビアマカイ																										
44			ホリズミキガイ	ホリズミキガイ	-1-c	6	5	2	1	4	11	6	1	3	1	2	21	9	5	23	13	4	23	17	1	32	22	4	2	
45			イセイ	イセイ																										
46			コウガ	コウガ																										
47			オミエハガリ	オミエハガリ																										
48			オトコスマスマリ	オトコスマスマリ																										
49			シロツケ	シロツケ	-2-a																									
50			イセイ	イセイ	-1-c																									
51			ヒメツツジウツツジ	ヒメツツジウツツジ	-1-c																									
52			スズレミダリ	スズレミダリ	-1-c																									
53			ハネマツ	ハネマツ																										
54			オキジミ	オキジミ	-c																									
55			二枚貝不明	二枚貝不明																										
			合計	合計	2	3	2	1	21	32	70	6	15	15	17	109	92	37	45	34	12	23	39	33	121	118	57	1	1	

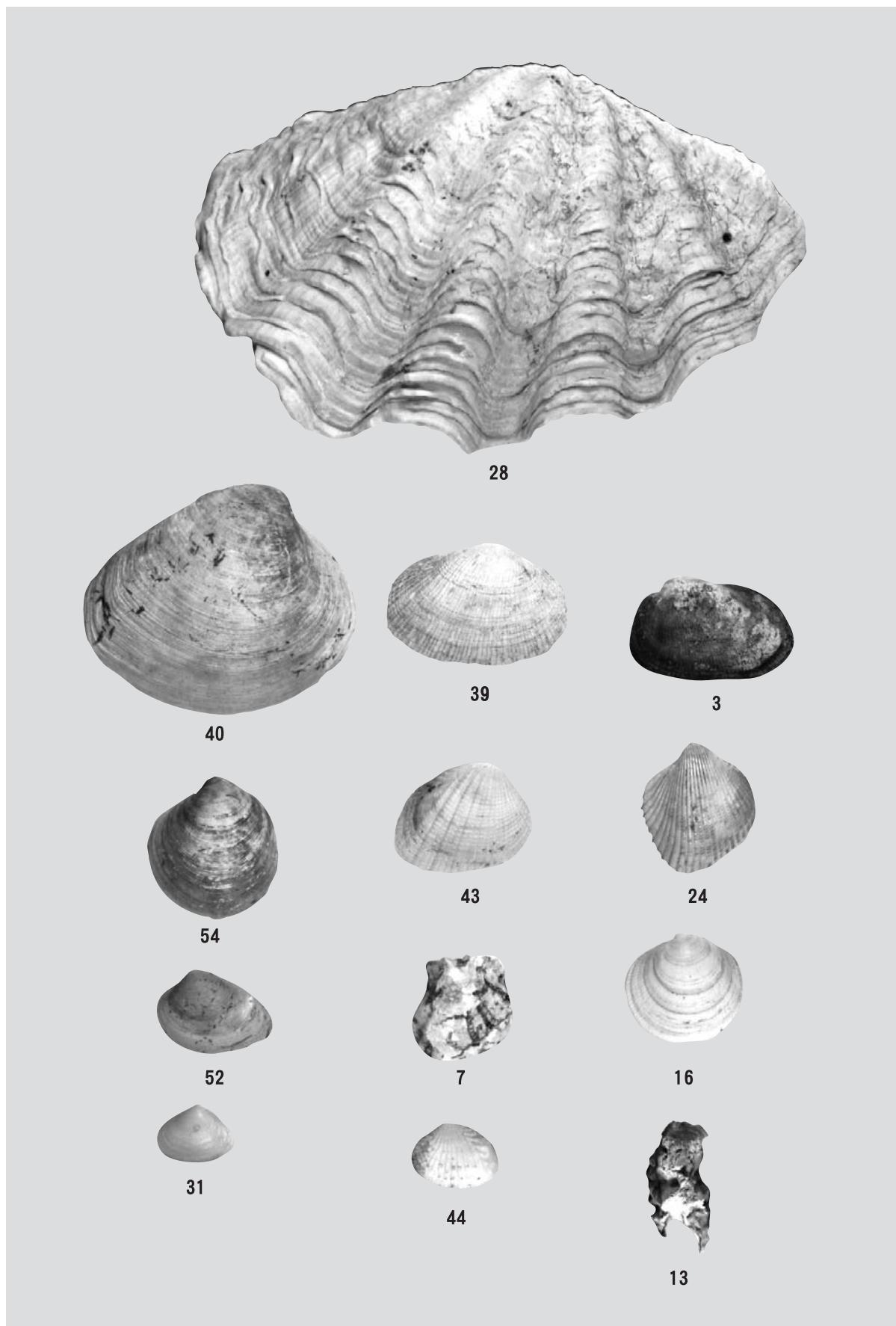
第5表 貝類出土狀況 2b(二枚貝)



図版3 貝(1)巻貝(番号は表と一致)



図版4 貝(2)巻貝(番号は表と一致)

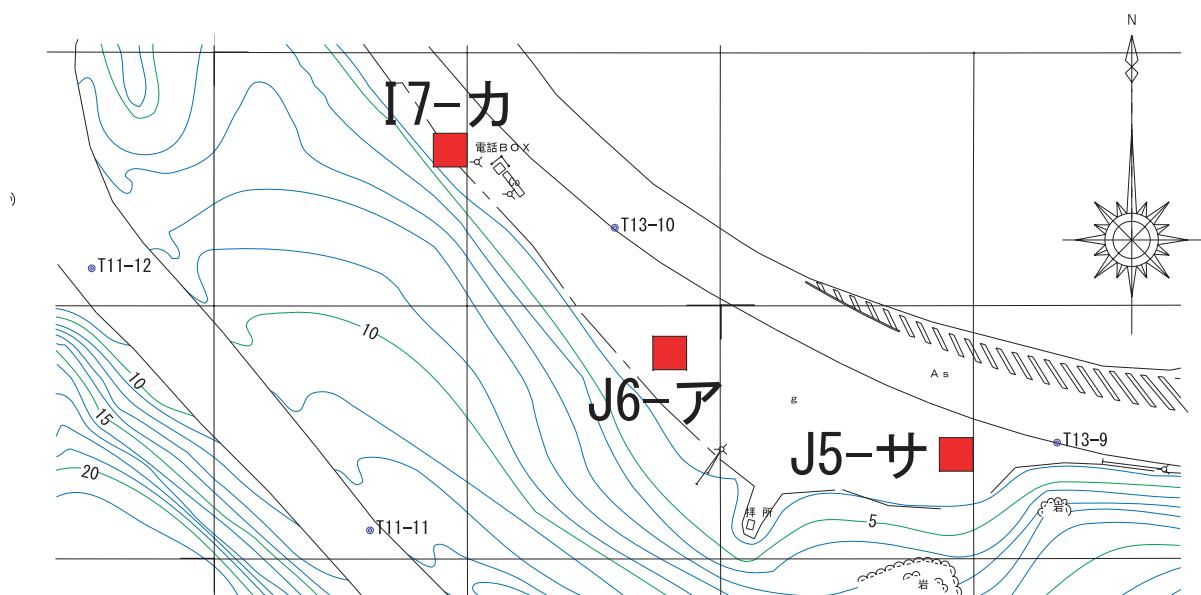


図版5 貝（3）二枚貝（番号は表と一致）

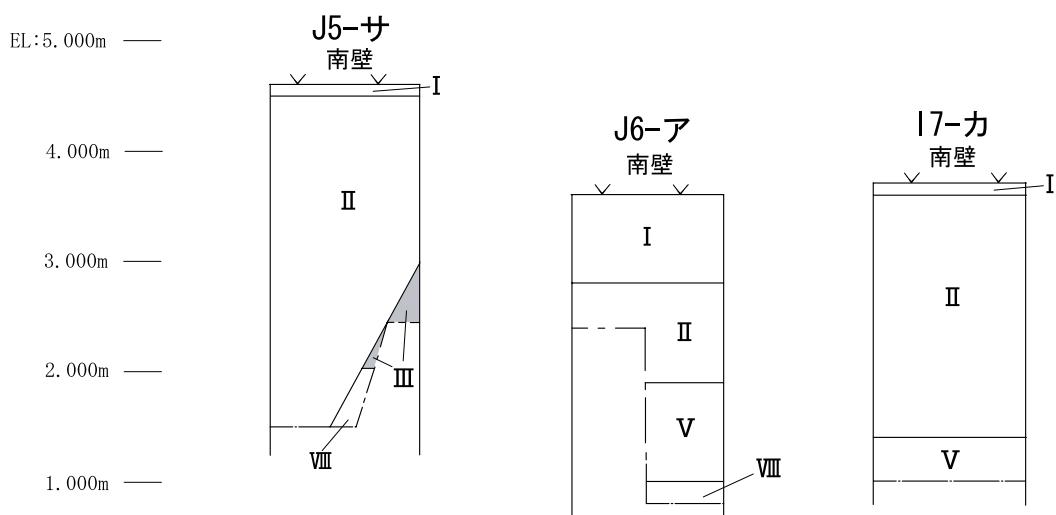
第3節 あ地区

あ地区は、前述したように瀬長島東部の丘陵下に立地する地区であり、J5-サ、J6-ア、I7-カの3グリットによって構成されている。本地区では～、～、層まで確認された。層は、J6-アとI7-カで確認された層で、層は、J6-アでのみ確認された層である。

本地区では、全グリットにおいて、米軍接收時代における掘削や造成を大きく受けている。しかし、J5-サでは、北東に傾斜する形でEL=3.000mで層の近代～戦前の耕作土が確認されたが、他のグリットで確認することはできなかった。



第14図 あ地区地形図



第15図 あ地区簡易層序断面図

1. J5-サ (平成17年度)

本調査区は、あ地区の最東端に位置しており、～層まで確認された。しかし、EL = 2.000mで確認された層の豊見城層まで米軍接收時代の造成の影響を受けていた。

(1) 層序

層：現在の表土（層）

層～層：米軍造成土（層）

層：近代～戦前の耕作土（層）

層：島尻層群豊見城層（層）

(2) 遺構

本グリットにおいては、確認されなかった。

(3) 出土遺物

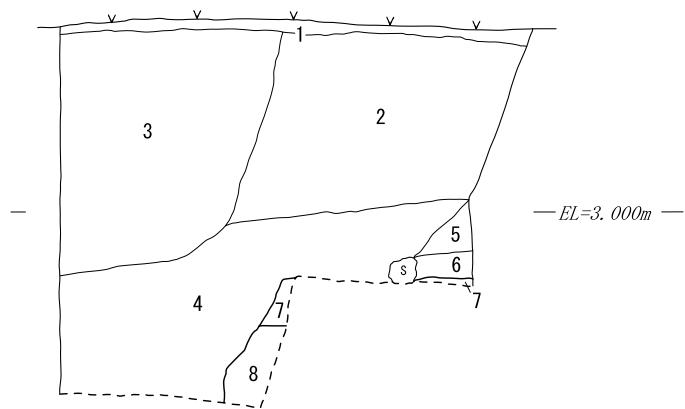
沖縄産陶器、本土産磁器、現代磁器、鉄製品（釘）



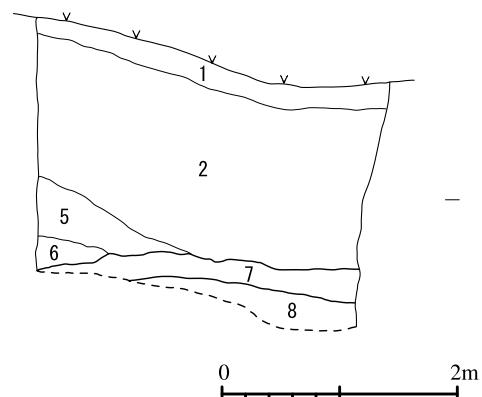
図版6 南壁



図版7 西壁



第16図 南壁



第17図 西壁

2. J 6-ア (平成17年度)

本調査区は、あ地区の中央部に位置しており、～層まで確認された。しかし、EL = 1.900mで確認された層の新砂丘層まで米軍接收時代の造成の影響を受けていた。

(1) 層序

層：現在の表土（層）

層～層：米軍造成土（層）

層：新砂丘層（層）

層：島尻層群豊見城層（層）

(2) 遺構

本グリットにおいては、確認されなかった。

(3) 出土遺物

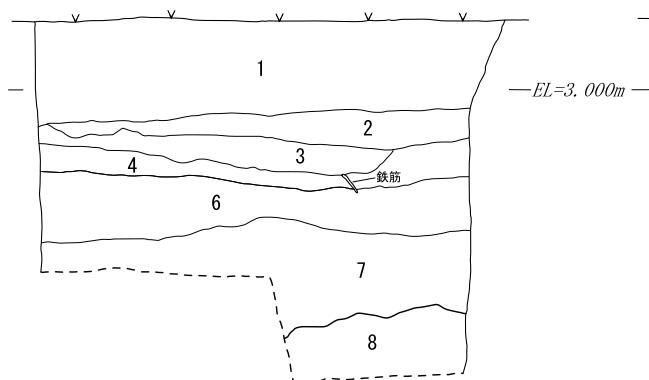
なし



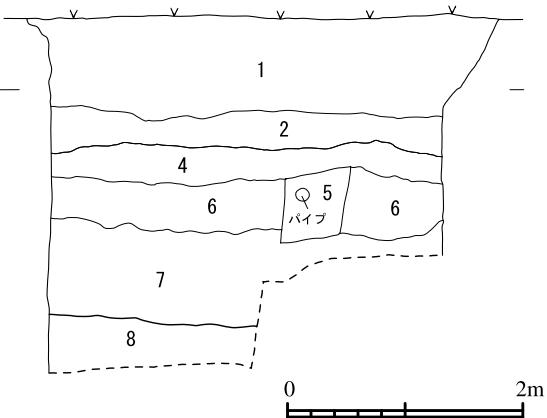
図版8 南壁



図版9 西壁



第18図 南壁



第19図 西壁

3. I 7-カ (平成17年度)

本調査区は、あ地区の最西端に位置しており、～層まで確認された。しかし、EL = 1.800mの層の新砂丘層の直上まで米軍接收時代の造成の影響を受けていた。また、EL = 1.100mで地下水面上にあたり、それ以上の調査は行えなかった。

(1) 層序

層：現在の表土（層）

層～層：米軍造成土（層）

層：新砂丘層（層）

(2) 遺構

本グリットにおいては、確認されなかった。

(3) 出土遺物

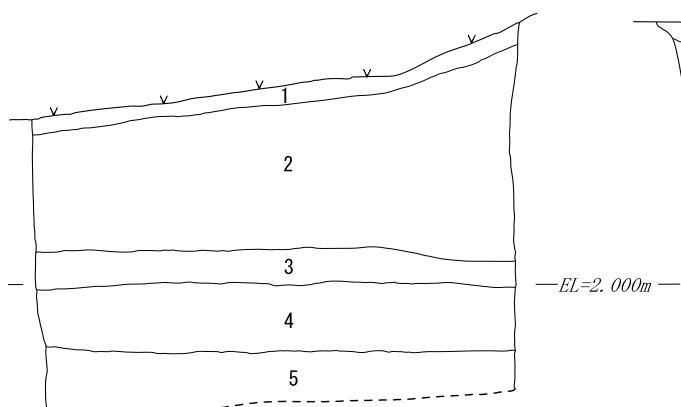
本土産磁器、石器、木片、ガラス片、鉄線、青銅パイプ



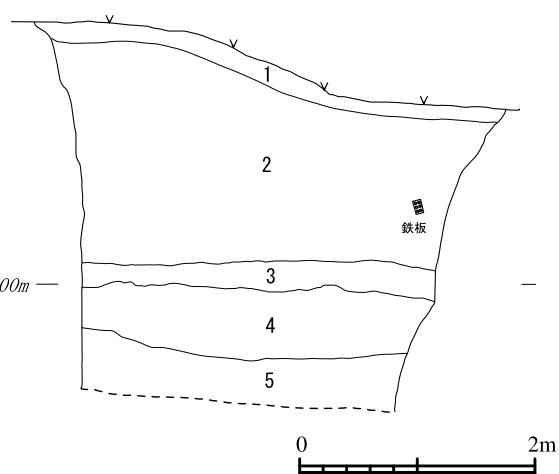
図版10 南壁



図版11 西壁



第20図 南壁



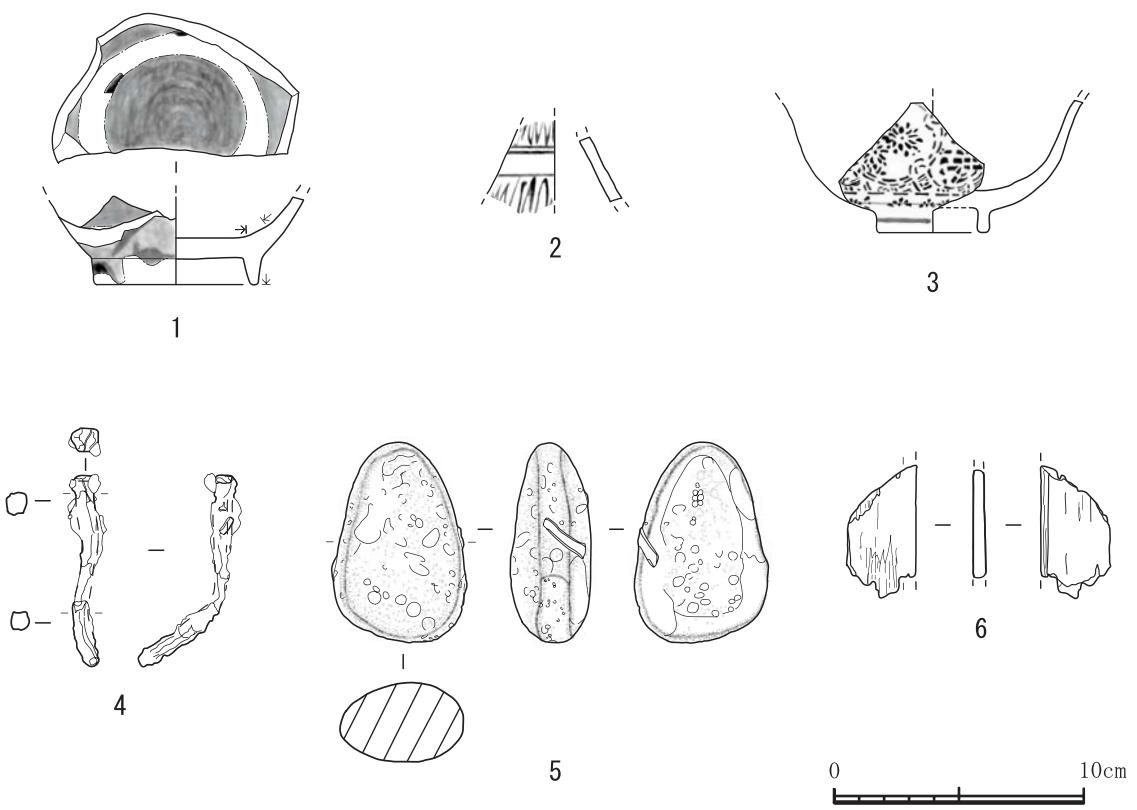
第21図 西壁

第6表 あ地区遺物出土一覧

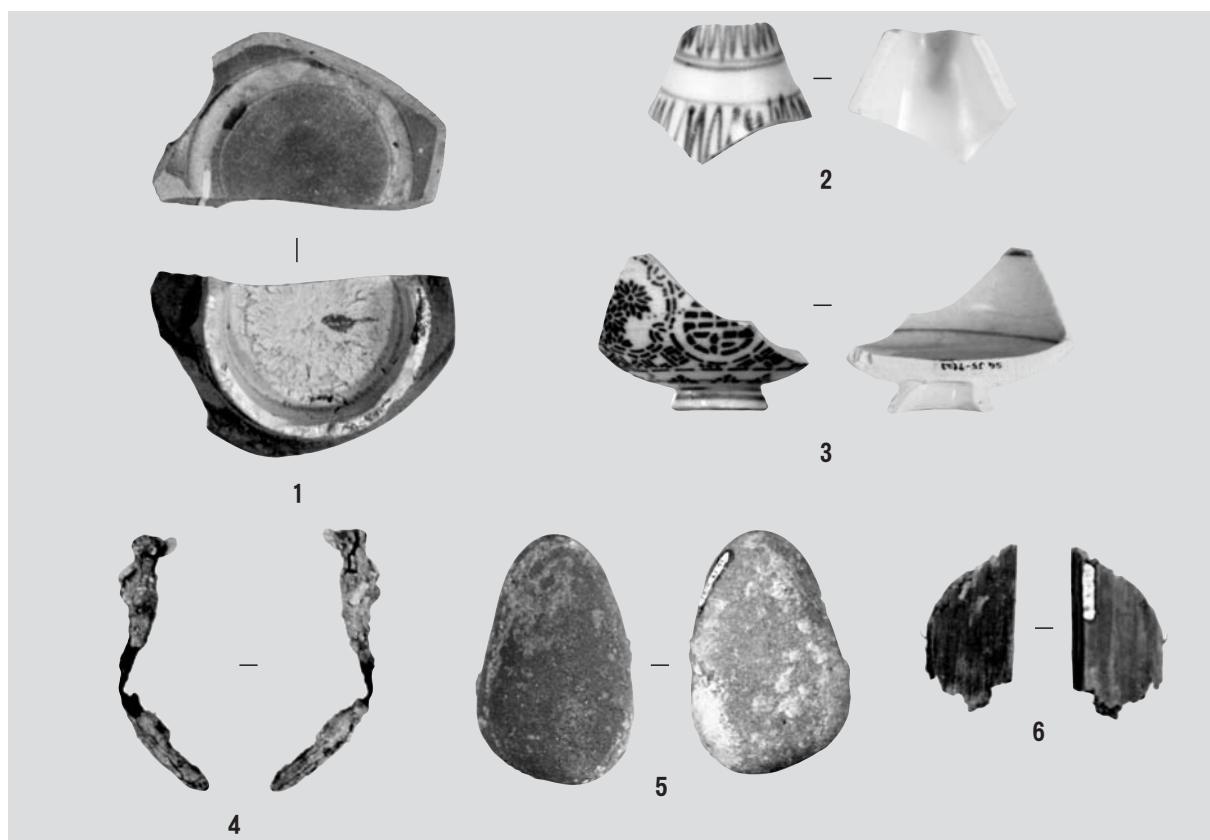
	グリット名	遺物名 層序	沖縄産施釉陶器	本土産磁器	角釘	釘状製品	鉄線	鉄塊	青銅パイプ	石器(敲打器)	木製品	ガラス片	出土遺物層序計	
あ 地 区	J 5ーサ	②層		2		1	1						4	
		③層	1	2	3								6	
	I 7ーカ	②層						1		2			3	
		⑤層			1				2		1	3	1	
合計			1	4	4	1	1	1	2	2	1	3	1	
													21	

第7表 あ地区遺物観察一覧

挿図番号 図版番号	種類	器種	観察事項	出土地点 出土層	
第22図 図版12	1	沖縄産陶器	碗	18・19世紀頃。壺屋焼の碗である。素地は浅黄橙色の細粒子。釉は内面が黄みの明るい灰黄赤色で外面が黄みの暗い灰黄赤色を呈する。見込みに蛇の目釉剥ぎが見られ、外底は無釉。	J 5ーサ ③層
	2	本土産磁器	瓶	17世紀頃の肥前系の網目文瓶である。素地は白色微粒子。コバルト釉によって、頸下部に鋸歯文、胴部に網目文を描き、透明の釉薬を外面全体に施している。	I 7ーカ ⑤層
	3	本土産磁器	碗	砥部焼の碗である。素地は白色微粒子。畠付け部以外は総釉で、外面には斜位に四角形状の文様を巡らし、部分的に花の文様が施されている。	J 5ーサ ③層
	4	釘	角釘	頭部はL字状を呈していたと思われるが、全体的に鋲が著しく判然としない。胴部で折れ曲がり鋲膨れのためか剥離し地金が露呈する。	J 5ーサ ②層
	5	石器	敲打器	自然の川原礫を用いている。表裏面にわりと浅いくぼみを有する。左右測辺も敲打により潰れている。下端部を最も使用しており、敲打痕がみられる。長さ8cm幅4.8cm厚み3.2cm重量180g。	I 7ーカ ⑤層
	6	木製品	不明	板目の割載材?と思われるが小片のため用途については判然としない。表面に加工の痕が認められる。残存長4.3cm 幅2.7cm 厚0.4cm。	I 7ーキ ⑤層



第22図 あ地区出土遺物

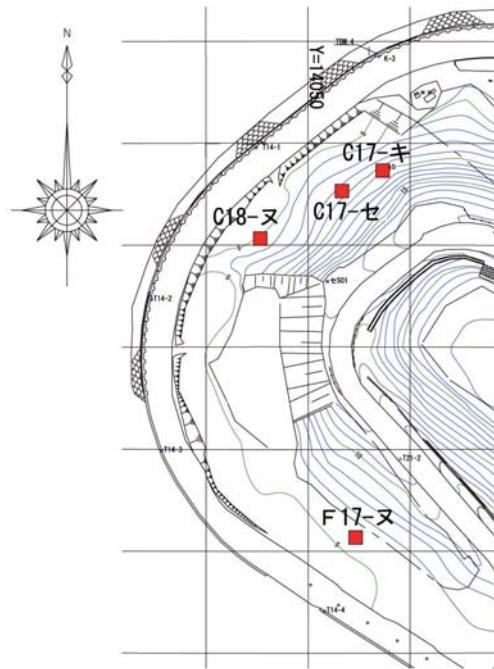


図版12 あ地区出土遺物

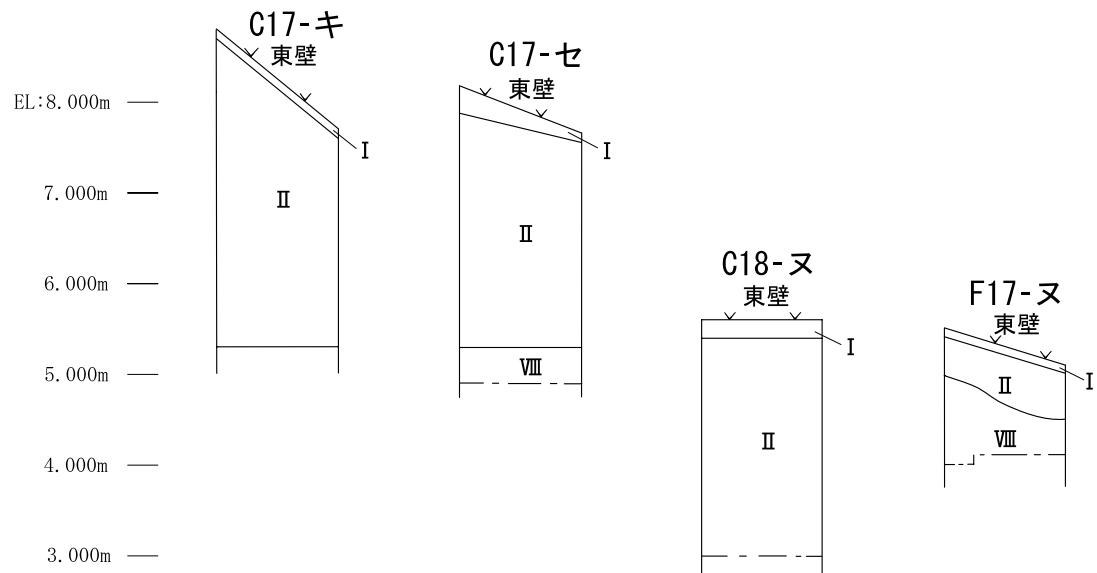
第4節 い地区

い地区は、瀬長島最西部の丘陵に立地する地区であり、C17 - キ、C17 - セ、C18 - ヌ、F17 - ヌの4グリットによって構成されている。本地区では～層、～層まで確認された。

本地区は、全てのグリットで、米軍接收時代における掘削や造成を大きく受けている。



第23図 い地区地形図



第24図 い地区簡易層序断面図

1. C 17-キ (平成17年度)

本調査区は、い地区の最北端に位置しており、～層まで確認された。層のEL = 5.300mまで米軍接收時代の掘削や造成の影響を受けていた。

(1) 層序

層：現在の表土（層）

層～層：米軍造成土（層）

(2) 遺構

本グリットにおいては、確認されなかった。

(3) 出土遺物

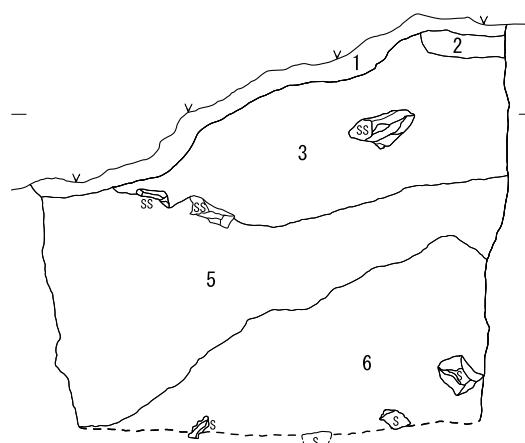
貝類、現代陶器



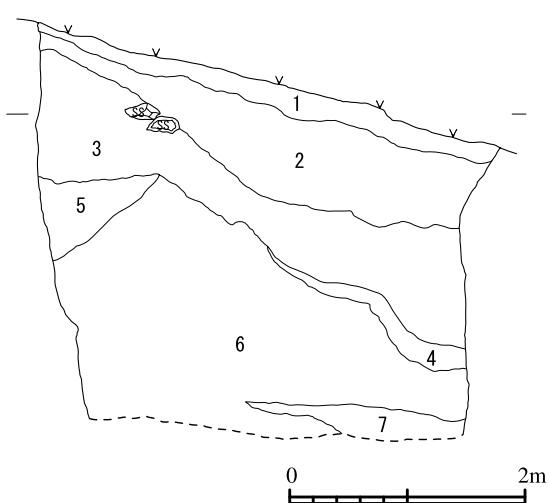
図版13 北壁



図版14 東壁



第25図 北壁



第26図 東壁

2. C 17-セ (平成17年度)

本調査区は、い地区の中央部に位置しており、～層まで確認された。層の豊見城層のEL = 4.70 0m ~ 5.800mまで米軍接收時代の掘削や造成の影響を受けていた。

(1) 層序

層：現在の表土（層）

層～層：米軍造成土（層）

層：島尻層群豊見城層（層）

(2) 遺構

本グリットにおいては、確認されなかった。

(3) 出土遺物

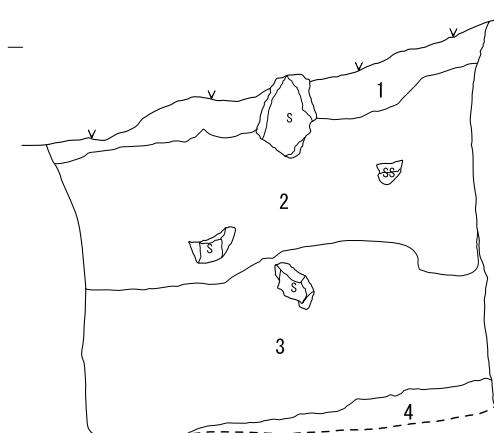
なし



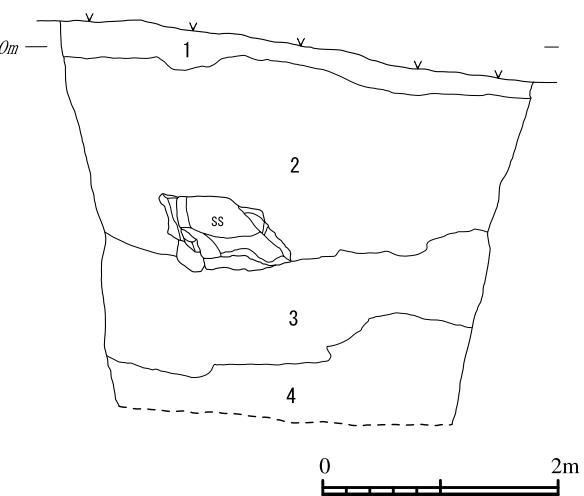
図版15 北壁



図版16 東壁



第27図 北壁



第28図 東壁

3. C 18-ヌ (平成17年度)

本調査区は、い地区の最西端に位置しており、～層まで確認された。層の新砂丘層のEL = 3.300mまで米軍接收時代の掘削や造成の影響を受けていた。

(1) 層序

層：現在の表土（層）

層～層：米軍造成土（層）

層：新砂丘層（層）

(2) 遺構

本グリットにおいては、確認されなかった。

(3) 出土遺物

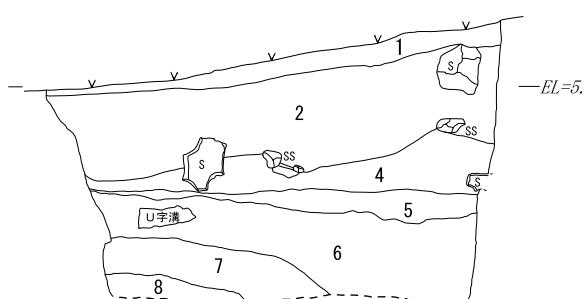
青磁、本土産磁器、貝類、現代陶器



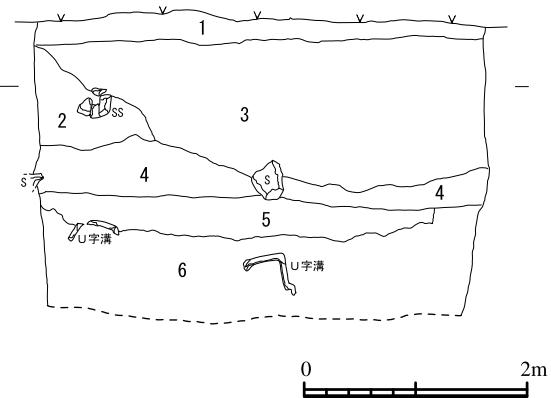
図版17 北壁



図版18 東壁



第29図 北壁



第30図 東壁

4. F 17-ヌ（平成18年度）

本調査区は、い地区の最南端に位置しており、～層まで確認された。層の豊見城層のEL = 4.50mまで米軍の造成の影響を受けていた。また、米軍作成の地形図と照合した結果、斜面地を削平していることもわかった。

(1) 層序

層：現在の表土（層）

層：米軍造成土（層）

層：島尻層群豊見城層（層）

(2) 遺構

本グリットにおいては、確認されなかった。

(3) 出土遺物

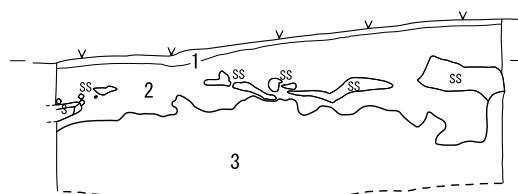
グスク系土器、沖縄産陶器、本土産磁器、明朝系瓦、現代陶器



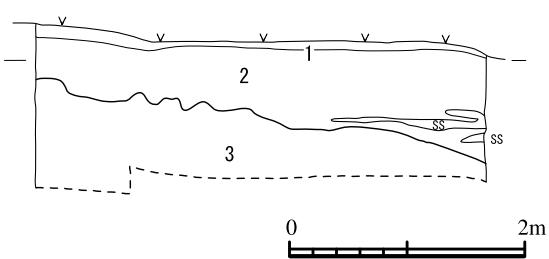
図版19 北壁



図版20 東壁



第31図 北壁



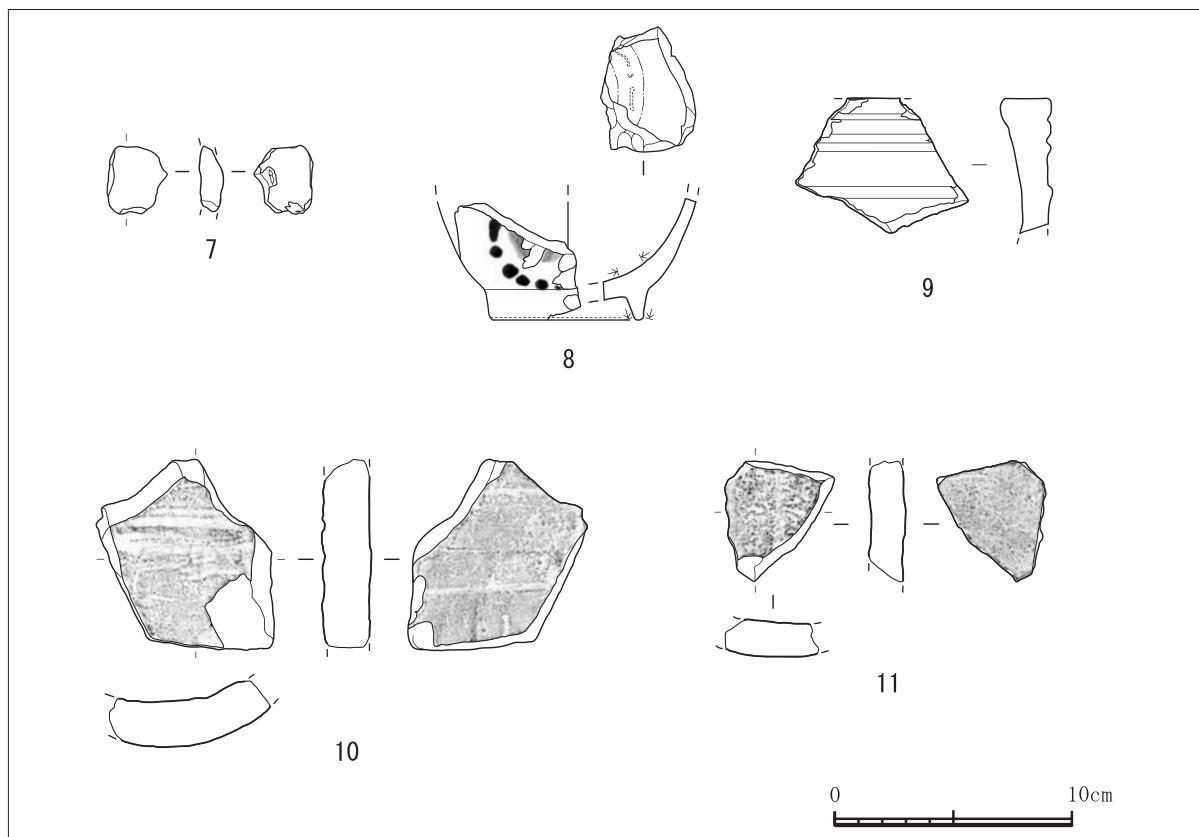
第32図 東壁

第8表 い地区出土遺物一覧

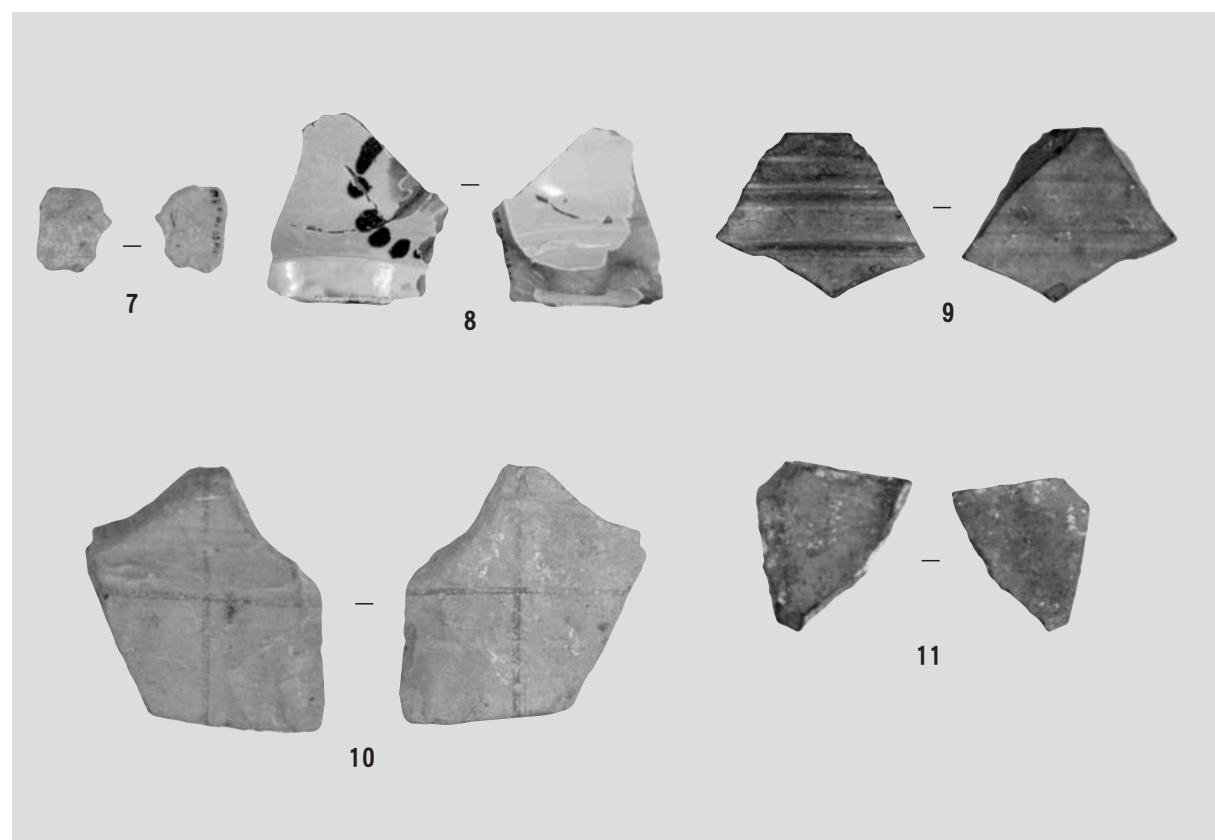
	グリット名	遺物名 層序	青磁	白磁	グスク系土器	沖縄産施釉陶器	本土産陶器	本土産磁器	明朝系瓦	出土遺物層序計
い 地 区	C17 - キ	表採					5			5
	C17 - ケ・C18 - ヌ	表採							1	1
	C17・18	表採		1		2	5			8
	C18 - ヌ	層				1			1	2
		層	2					1		3
	F17 - ヌ	表採			7	1	26		42	3 79
	G17	表採							1	1
合計			2	1	7	1	29	10	43	6 99

第9表 い地区遺物観察一覧

挿図番号 図版番号	種類	器種	観察事項	出土地点 出土層
第33図 図版21	7 グスク系土器	壺	胎土は、にぶい黄褐色。混入物は、白色粒を多く、赤色・橙色粒を少し含む。調整は不明。	F17 - ヌ 表採
	8 沖縄産陶器	碗	文様は丸文で、外側が青の文、真ん中に褐色（楕円形と思われる）の文を配する。釉色は透明、白化粧。畳付けは無釉で、アルミナが残る。見込みは蛇の目釉剥ぎでアルミナの痕が部分的に見られる。素地は、底部の一部で赤褐色を呈している所があるが、全体的に灰色である。	F17 - ヌ 表採
	9 沖縄産陶器	水甕	18・19世紀頃。壺屋焼の水瓶である。器色は両面とも赤みの灰黄赤色で、素地はにぶい赤色を呈する。口唇上部に二本の凸帯、胴部に一本の凸帯を形成する。	F17 - ヌ 表採
	10 明朝系瓦	平瓦	凹面は布目。凸面は横ナデ。胎土はにぶい黄橙色を呈し、白色・橙色・雲母粒を少し含む。	F17 - ヌ 表採
	11 明朝系瓦	平瓦	凹面は布目。凸面は横ナデ。胎土は橙色を呈し、白色・雲母粒を少し含む。	C18 - ヌ 層



第33図 い地区出土遺物

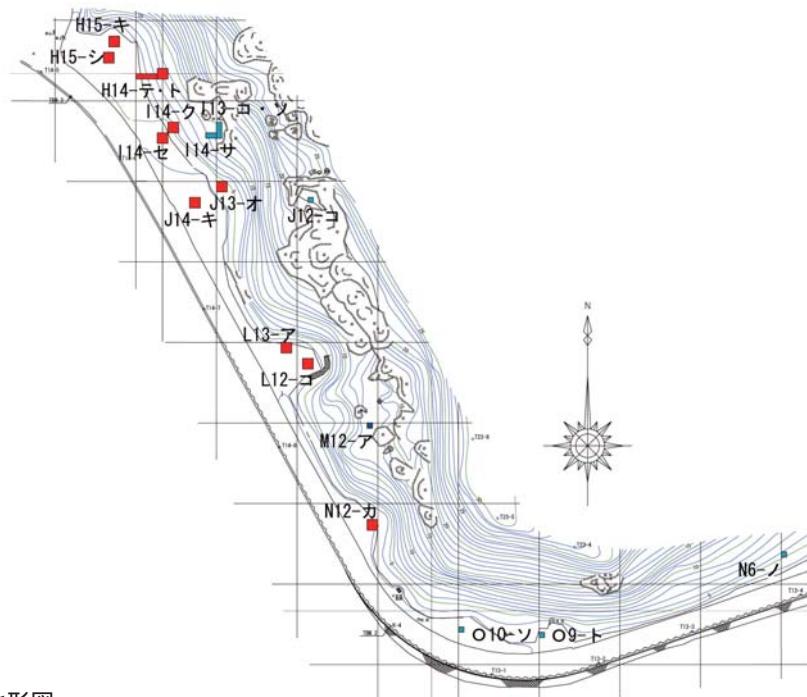


図版21 い地区出土遺物

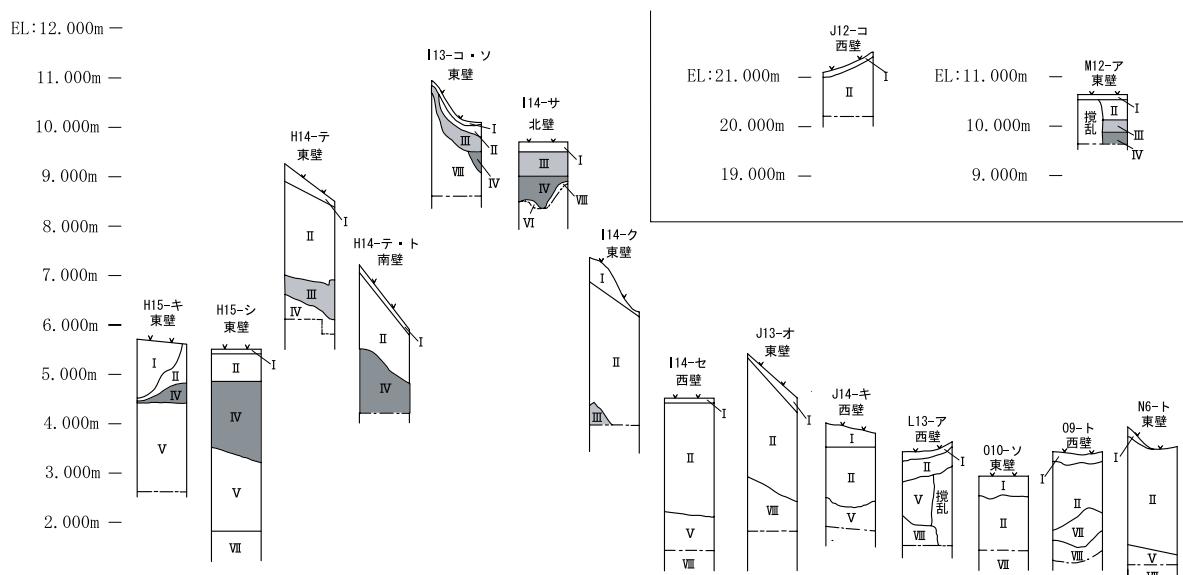
第5節 う地区

う地区は、瀬長島最南部の丘陵下に立地する地区であり、H15 - キ・シ、H14 - テ・ト、I13 - コ・ソ、I14 - ク・サ・セ、J13 - オ、J14 - キ、L13 - ア、L12 - コ、N12 - 力、O10 - ソ、O9 - ト、N6 - ト、J12 - コ、M12 - アの19グリットによって構成されている。本地区では ~ 層まで確認された。H14 - テ、I13 - コ・ソ、I14 - サ、I14 - クで北西に傾斜する形で 層の近代～戦前までの耕作土を確認することができた。また、H15 - キ・シ、H14 - テ・ト、I13 - ソ、I14 - サで北西に傾斜する形で 層のグスク時代の旧表土を確認することが出来た。

H14 - テ・トのグリットにおいては、ピット群や土坑？の遺構も検出された。



第34図 う地区地形図



第35図 う地区簡易層序断面図

1. H 15-キ (平成17年度)

本調査区は、う地区の最西端に位置しており、～層まで確認された。EL = 4.800mで層～層のグスク時代の旧表土の二次堆積土(- 1層)が確認された。

(1) 層序

層：現在の表土(層)

層～層：米軍造成土(層)

層～層：グスク時代の旧表土(- 1層)

層：新砂丘層(層)

(2) 遺構

本グリットにおいては、確認されなかった。

(3) 出土遺物

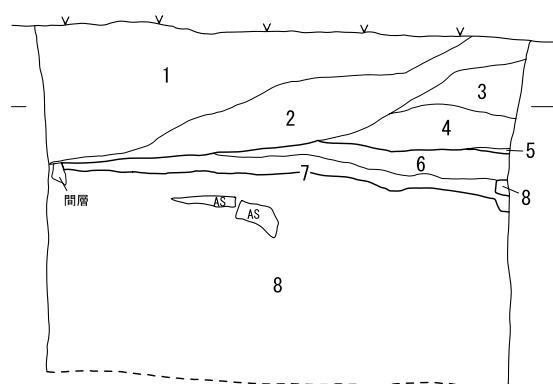
青磁



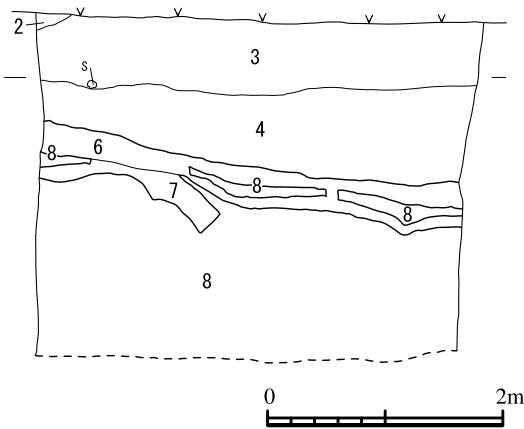
図版22 東壁



図版23 南壁



第36図 東壁



第37図 南壁

2. H 15-シ（平成18年度）

本調査区は、う地区の最西端に位置しており、～⑬層まで確認された。EL = 4.800mで層～⑮層のグスク時代の旧表土の二次堆積土（-1層）が確認された。

（1）層序

層：現在の表土（層）

層～層：米軍造成土（層）

層～⑯層：グスク時代の旧表土（-1層）

⑯層～⑭層：新砂丘層（層）

⑬層：琉球石灰岩（層）

（2）遺構

本グリットにおいては、確認されなかった。

（3）出土遺物

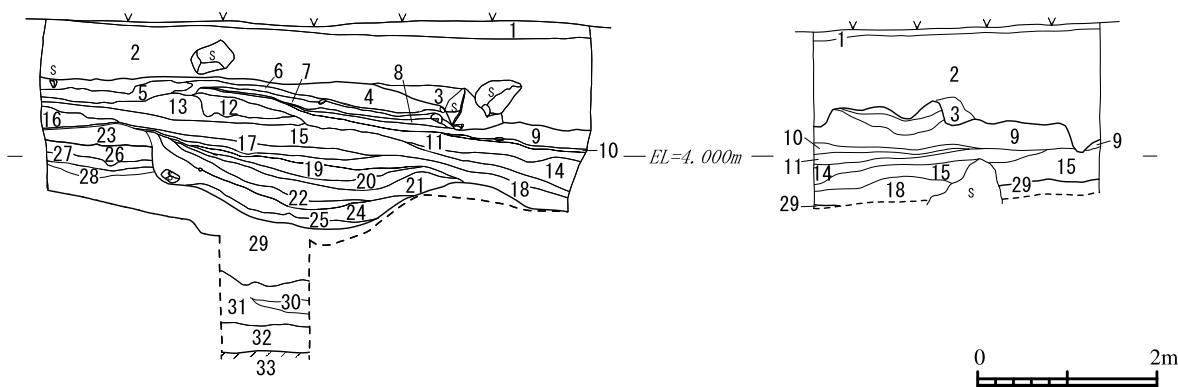
青磁、白磁、黒釉陶器、褐釉陶器、グスク系土器、カムイヤキ、沖縄産陶器、本土産磁器、高麗系瓦、明朝系瓦、石器、貝製品、木片



図版24 東壁



図版25 南壁



第38図 東壁

第39図 南壁

3. H 14-テ (平成17年度)

本調査区は、う地区の斜面地に位置しており、～層まで確認された。EL = 7.000 mで層～層の近代～戦前の耕作土(層)とEL = 6.600mで層～層のグスク時代の旧表土(- 1層)が確認された。また南壁で確認された層では、スミが多く混入していた

(1) 層序

層：現在の表土(層)

層～層：米軍造成土(層)

層～層：近代～戦前の耕作土(層)

層～層：グスク時代の旧表土(- 1層)

(2) 遺構

本グリットにおいては、焼土面？の遺構が確認された。

(3) 出土遺物

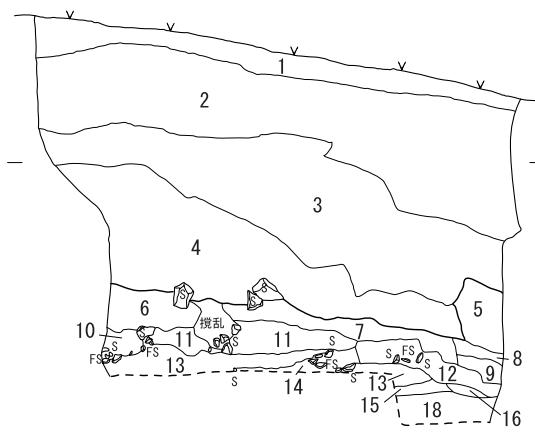
青磁、白磁、青花、黒釉陶器、褐釉陶器、沖縄産陶器、グスク系土器、カムイヤキ、高麗系瓦、明朝系瓦、石器、貝製品、貝類、魚骨、本土産磁器、現代陶器、木片



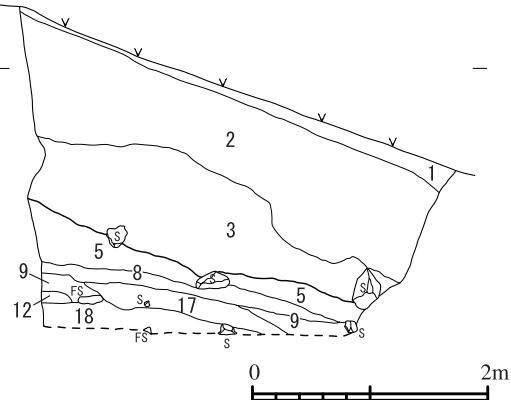
図版26 東壁



図版27 南壁



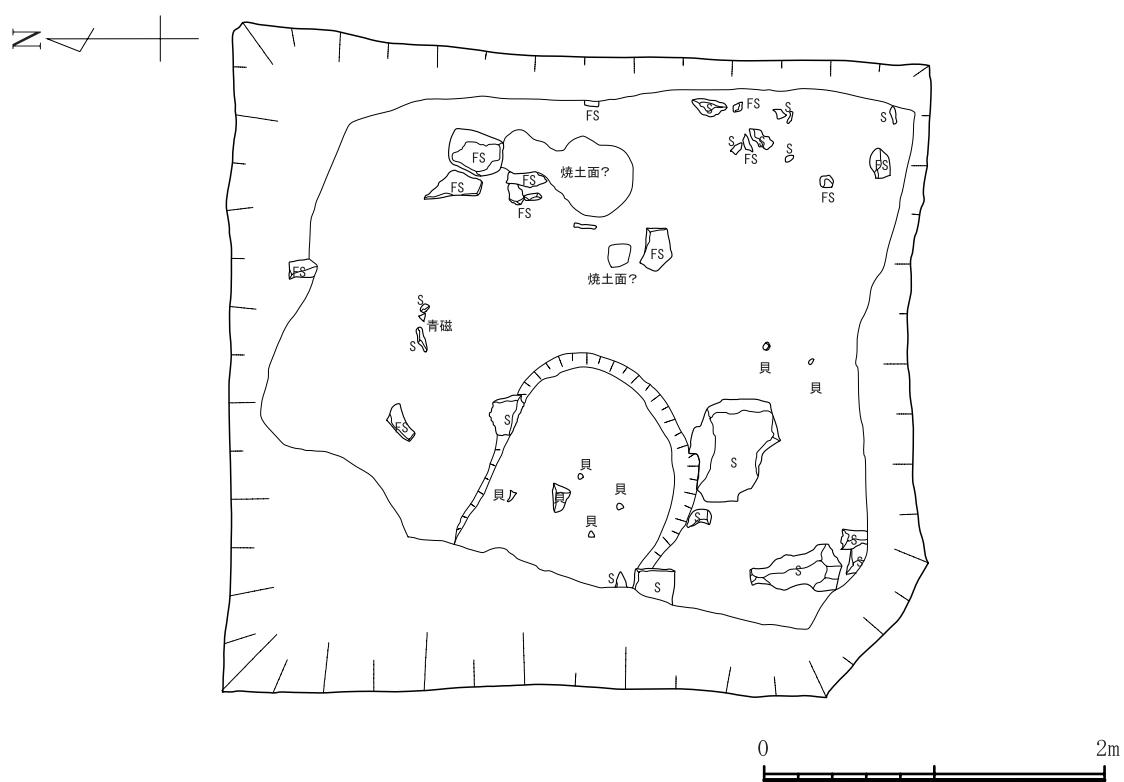
第40図 東壁



第41図 南壁



図版28 遺構検出状況



第42図 遺構平面図

4. H14-テ・ト(平成18年度)

本調査区は、う地区の斜面地に位置しており、～層まで確認された。EL = 5.500mで層～層のグスク時代の旧表土(- 1・3層)が確認された。また、確認された層には、スミが多く混入していた。

(1) 層序

層：現在の表土(層)

層～層：米軍造成土(層)

層～層：グスク時代の旧表土(- 1層)

層～層：グスク時代の旧表土(- 3層)

(2) 遺構

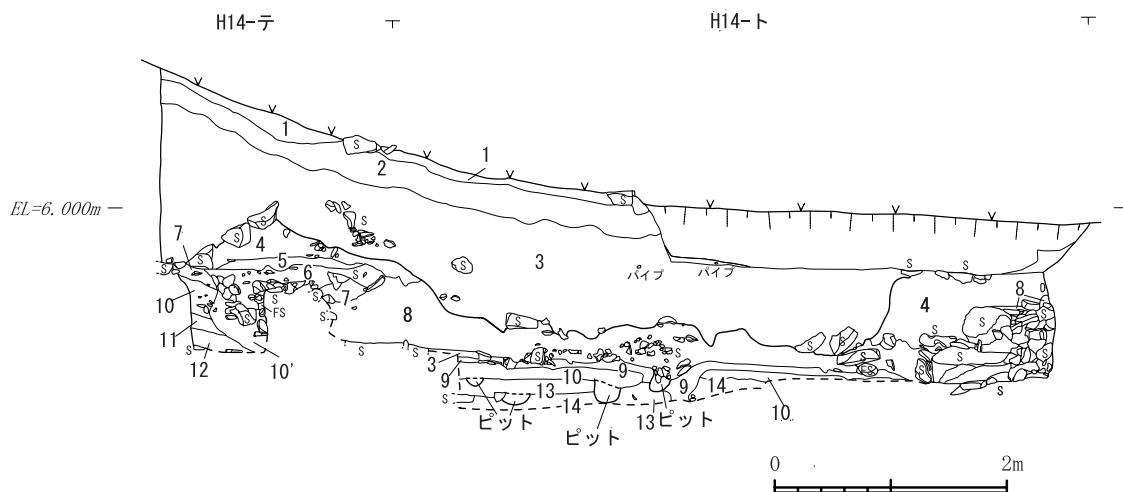
本グリットにおいては、ピット群、土坑？の遺構が確認された。

(3) 出土遺物

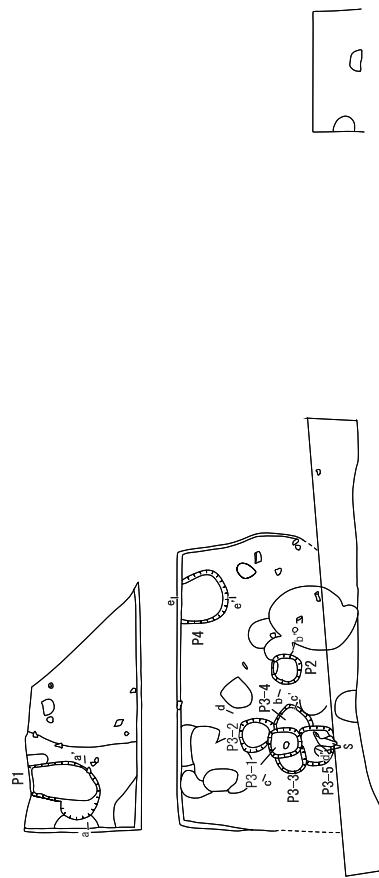
青磁、白磁、黒釉陶器、褐釉陶器、沖縄産陶器、グスク系土器、高麗系瓦、明朝系瓦、石器、貝類、魚骨

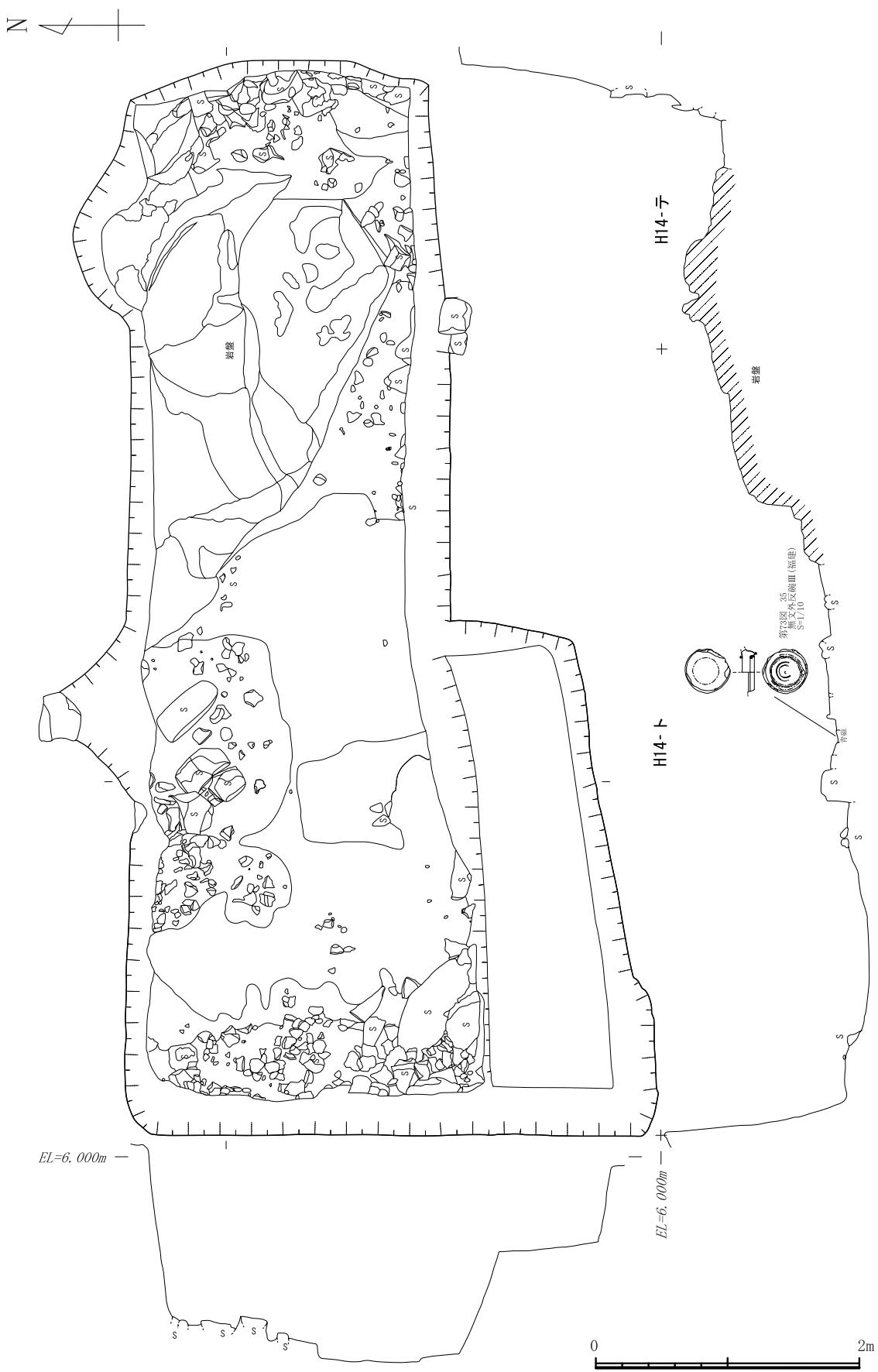


図版29 南壁



第43図 南壁





第44図 遺構平面図



図版30 遺構検出状況（上：遺構面検出状況 下：ピット群検出状況）

H14-テ・トの遺構

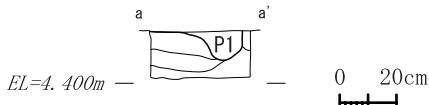
層からピット群が検出された。各ピットの性質を明らかにするため、その内の4ヶ所を選択してピットを半裁した。覆土の状況から、P1及びP2は攪乱を受け、P3及びP4は層のグスクに相当すると考えられる。出土遺物は、集計表を用いて表す。

P1 (第45図、図版31)

10YR4/4 褐色粘質土 土坑深度10~16cm

米軍により攪乱されている。

青磁、貝、獸骨などを少量含む。



第45図 P1 断面図

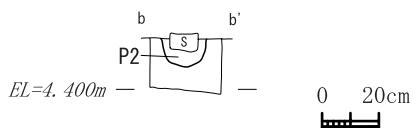


図版31 P1

P2 (第46図、図版32)

2.5Y7/6 明黄褐色砂質土 土坑深度10cm

米軍造成土。締まりがない砂質土で拳大の礫が混入している。貝、獸骨などを少量含む。



第46図 P2 断面図



図版32 P2

P3 (第47図、図版33)

P3-1 10YR4/4 褐色砂質土 土坑深度18cm

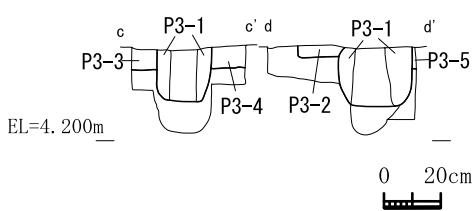
P3-2 10YR4/4 褐色砂質土 土坑深度5cm

P3-3 10YR4/4 褐色砂質土 土坑深度7cm

P3-4 10YR4/4 褐色砂質土 土坑深度8cm

P3-5 10YR4/4 褐色砂質土 土坑深度8cm

褐色砂質土は締まりがなく、スミを大量に含む。貝・魚骨などが全体にまばらに混入している。P3-1は土坑の深度が深く、スミや遺物も多量に含んでいた。



第47図 P3 断面図



図版33 P3

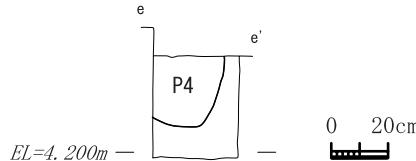
P 4 (第48図、図版34)

10YR4/4 褐色砂質土 土坑深度20cm

褐色砂質土はやや締まり、スミを多量に含んでいる。

遺物は、貝、甲殻類が出土している。

E L = 4.180mまで掘り下げて、ピット2ヶ所を確認した。



図版34 P 4

第48図 P 4 断面図

第10表 ピット遺構出土遺物一覧

番号	種類	青磁	点数	巻貝	点数		二枚貝	点数		獣骨	点数
					完	破		完	破		
P 1	青磁(龍泉)	1	アマオブネガイ		1		ミドリアオリ		1	未同定	2
							イソハマグリ	1			
							アラスジケマンガイ	1	1		
P 2			ニシキウズ		1		ウラキツキガイ	2		エフキダ本科	1
			カンギク		2		シナミガイ	1		ブダイ科	1
			ウミコナニモリ	1			イソハマグリ	2		未同定	2
P 3			ニシキウズ		2					エフキダ本科	2
			オキナワイシダタミ	2						未同定	8
			イシダタミアマオブネ	2							
			マルアマオブネ	5							
			ニシキアマオブネ	1	2						
			クワノミカニモリ	1							
			ハナビラダカホ		1						
							ペニエガイ	1	1	甲殻類	1
P 3 1							リュキュウヒバリガイ	2	4	未同定	5
							ミドリアオリ	1			
							ウラキツキガイ	1			
							カカラガイ		1		
							イソハマグリ	1			
							ホソシイケミガイ	1			
P 3 2							ウラキツキガイ	1		未同定	31
P 3 3							イソハマグリ	1		未同定	7
P 3 4							ナミコマスオ	1			
							ミドリアオリ	1	2	エフキダ本科	1
							イソハマグリ	1		ヌミ類	1
										未同定	11
P 3 5							イソハマグリ	1			
							ペニエガイ	6			
P 4			ニシキウズ		2		ミドリアオリ	4	3	甲殻類	1
			コシダカマガイ	2			マクガイ	2		ウニ	1
			マルアマオブネ	1			イソハマグリ	14		未同定	13
			ニシキアマオブネ	1			ナミコマスオ	1			
			コオニコブシ	3			サメザラ	1			
			アンボンクロザメ	1			アラヌノメガイ	1			
			マダラモ	2			アラスジケマンガイ	1			
							ホソシイケミガイ	2			

5. I 13-コ・ソ（平成18年度）

本調査区は、う地区の斜面下の平坦面に位置しており、～層まで確認された。I13-コ地区の東壁の一部で層の近代～戦前の耕作土（層）がEL = 10.000m付近で確認され、I13-ソ地区で層のグスク時代の旧表土（-1層）がEL = 9.500mで確認された。

（1）層序

層：現在の表土（層）

層～層：米軍造成土（層）

層：近代～戦前の耕作土（層）

層：グスク時代の旧表土（-1層）

層：島尻層群豊見城層（層）

（2）遺構

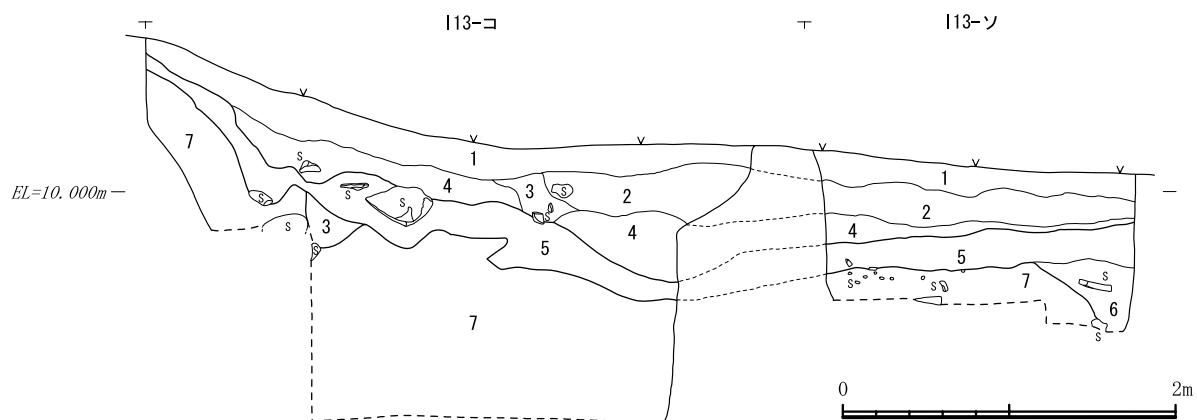
本グリットにおいては、確認されなかった。

（3）出土遺物

青磁、黒釉陶器、沖縄産陶器、グスク系土器、明朝系瓦、金属製品、貝製品、本土産磁器



図版35 13-コ・ソ東壁



第49図 東壁

6. I 14-サ (平成17・18年度)

本調査区は、う地区の斜面地の平坦面に位置しており、～層まで確認された。層～層の近代～戦前の耕作土(層)がEL=9.000mで確認され、層～層のグスク時代の旧表土(- 1層)がEL=8.900mで確認された。

(1) 層序

層：現在の表土(層)

層～層：近代～戦前の耕作土(層)

層～層：グスク時代の旧表土(- 1層)

層：島尻マージ層(- 2層)

層：島尻層群豊見城層(層)

(2) 遺構

本グリットにおいては、確認されなかった。

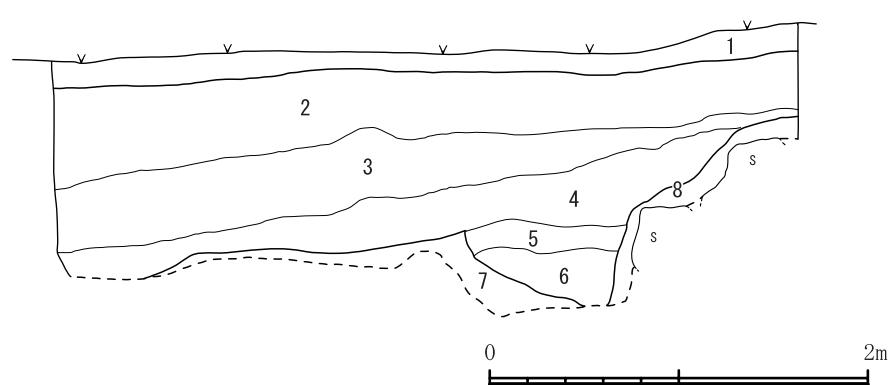
(3) 出土遺物

青磁、白磁、グスク系土器、黒釉陶器、沖縄産陶器、本土産磁器、古銭、明朝系瓦、金属製品、貝製品



図版36 北壁

EL=10.000m —



第50図 北壁

7. I 14-ク (平成17年度)

本調査区は、I14 - サ地区の西側に位置しており、～層まで確認された。層の近代～戦前の耕作土(層)は、EL = 4.600mで確認されたが、丘陵頂上からの二次堆積土と思われる。

(1) 層序

層：現在の表土(層)

層～層：米軍造成土(層)

層：近代～戦前までの耕作土(層)

(2) 遺構

本グリットにおいては、確認されなかった。

(3) 出土遺物

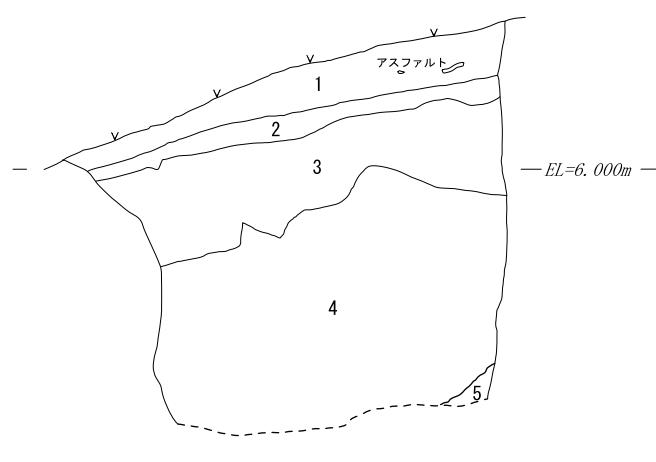
青磁、沖縄産陶器、本土産磁器、明朝系瓦



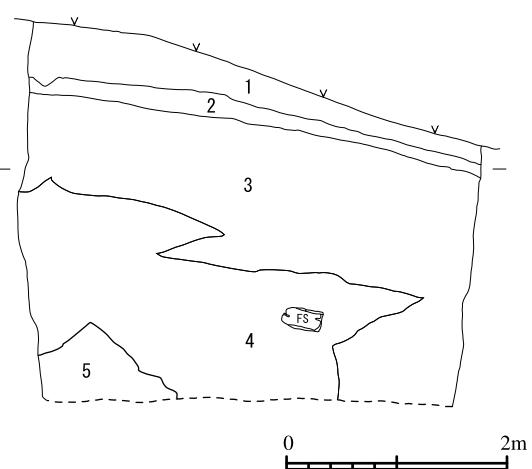
図版37 北壁



図版38 東壁



第51図 北壁



第52図 東壁

8. I 14-セ (平成17年度)

本調査区は、I14 - ク地区の南側に位置しており、～層まで確認された。EL = 2.000mで確認された層の新砂丘層の直上まで米軍接收時代の造成の影響を受けていた。

(1) 層序

層：現在の表土（層）

層～層：米軍造成土（層）

層：新砂丘層（層）

層：島尻層群豊見城層（層）

(2) 遺構

本グリットにおいては、確認されなかった。

(3) 出土遺物

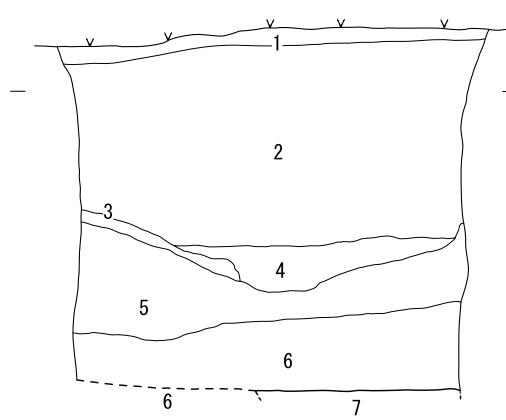
なし



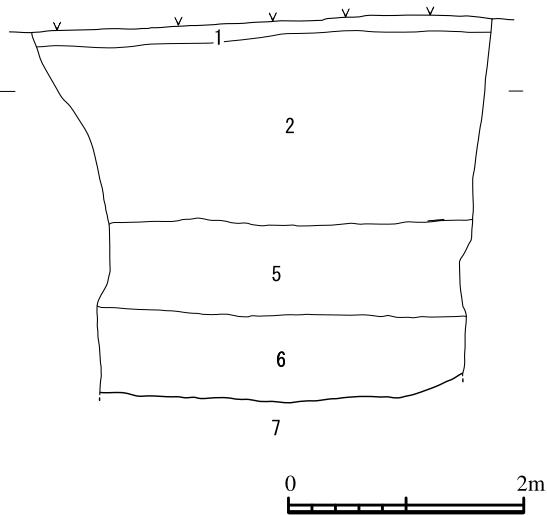
図版39 南壁



図版40 西壁



第53図 南壁



第54図 西壁

9. J 13-オ (平成17年度)

本調査区は、う地区の中央部に位置しており、～層まで確認された。米軍が埋設した配管がEL = 4.200m から出土した。

(1) 層序

層：現在の表土（層）

層～層：米軍造成土（層）

層～層：島尻層群豊見城層（層）

(2) 遺構

本グリットにおいては、確認されなかった。

(3) 出土遺物

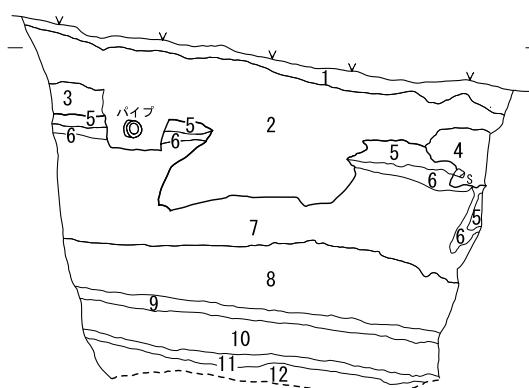
青磁、グスク系土器、沖縄産陶器、石器



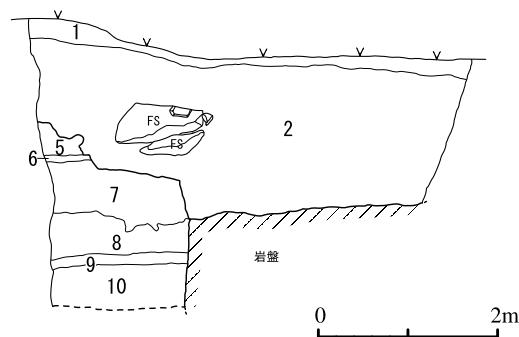
図版41 東壁



図版42 南壁



第55図 東壁



第56図 南壁

10. J 14-キ (平成17年度)

本調査区は、う地区の中央部に位置しており、～層まで確認された。米軍が埋設した配管がEL=2.400mから出土した。EL=2.200mで確認された層の新砂丘層の直上まで米軍接收時代の掘削や造成の影響を受けていた。

(1) 層序

層：現在の表土（層）

層～層：米軍造成土（層）

層：新砂丘層（層）

(2) 遺構

本グリットにおいては、確認されなかった。

(3) 出土遺物

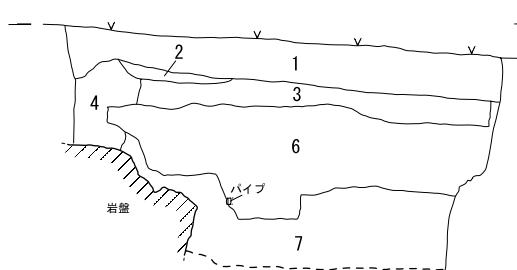
沖縄産陶器、明朝系瓦、石器、現代陶器



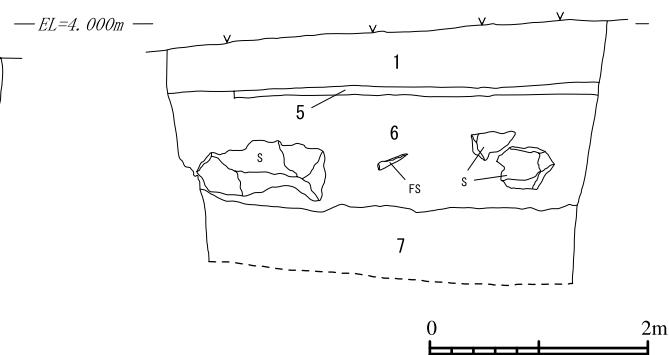
図版43 南壁



図版44 西壁



第57図 南壁



第58図 西壁

11. L13-ア（平成17年度）

本調査区は、う地区の中央部に位置しており、～層まで確認された。グリット北西側のEL = 1.800mまで米軍接收時代における掘削や造成を大きく受けている。

(1) 層序

層：現在の表土（層）

層～層：米軍造成土（層）

層～層：新砂丘層（層）

層～層：島尻層群豊見城層（層）

(2) 遺構

本グリットにおいては、確認されなかった。

(3) 出土遺物

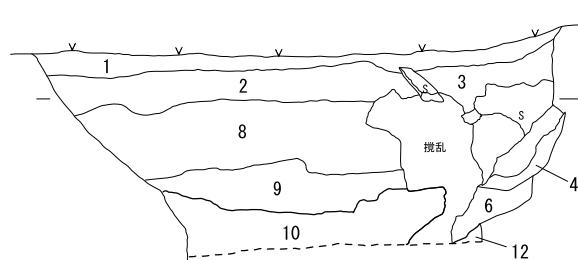
青磁、沖縄産陶器、本土産磁器、明朝系瓦、石器



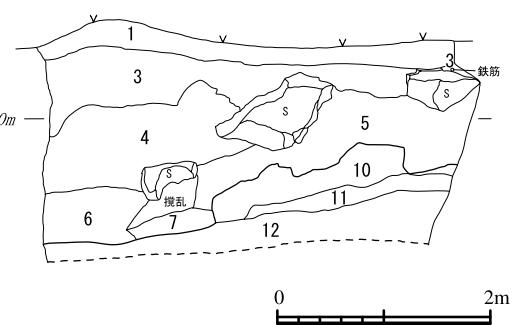
図版45 西壁



図版46 北壁



第59図 西壁



第60図 北壁

12. L12-コ（平成17年度）

本調査区は、う地区の中央部に位置しており、掘削深度1mで米軍の施設と思われる建物跡が確認されたため、これ以上の調査は行えなかった。

(1) 層序

層：現在の表土（　層）

(2) 遺構

本グリットにおいては、確認されなかった。

(3) 出土遺物

なし



図版47 調査前状況



図版48 検出状況

13. N12-カ（平成17年度）

本調査区は、う地区の中央部に位置している。掘削深度30cmで地下水面上に当たったため、層序を確認することができなかった。

(1) 層序

不明

(2) 遺構

本グリットにおいては、確認されなかった。

(3) 出土遺物

なし



図版49 調査前状況



図版50 検出状況

14. ○10-ソ (平成18年度)

本調査区は、う地区の最南部に位置しており、～層まで確認された。EL = 2.500mで確認された層の米軍造成土で米軍の埋設管と思われる配管が確認された。

(1) 層序

層：現在の表土（層）

層～層：米軍造成土

層：琉球石灰岩（層）

(2) 遺構

本グリットにおいては、確認されなかった。

(3) 出土遺物

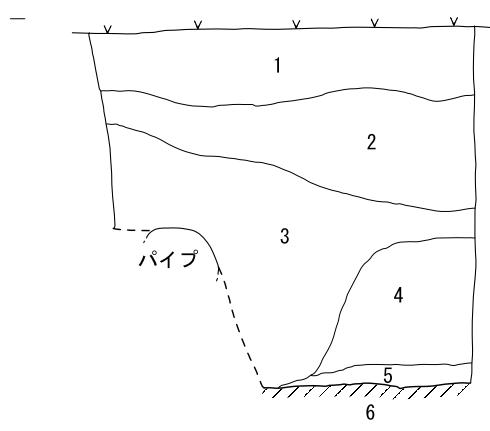
なし



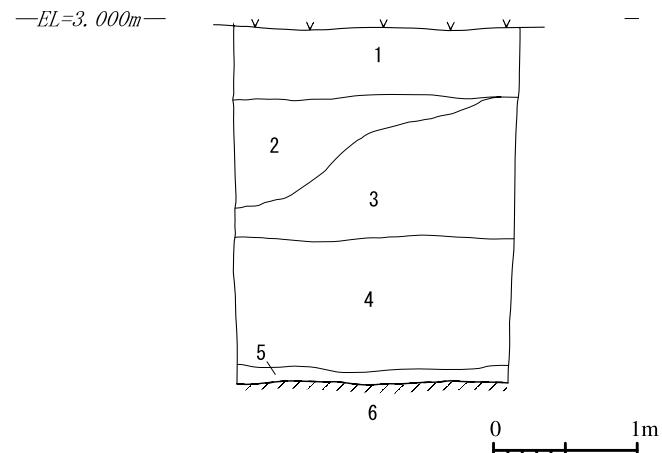
図版51 北壁



図版52 東壁



第61図 北壁



第62図 東壁

15. ○ 9-ト (平成18年度)

本調査区は、う地区の最南部に位置しており、～層まで確認された。EL = 1.800mで確認された層の琉球石灰岩の直上まで米軍接收時代の掘削や造成の影響を受けていた。

(1) 層序

層：現在の表土（層）

層～層：米軍造成土（層）

層：琉球石灰岩（層）

層：島尻層群豊見城層（層）

(2) 遺構

本グリットにおいては、確認されなかった。

(3) 出土遺物

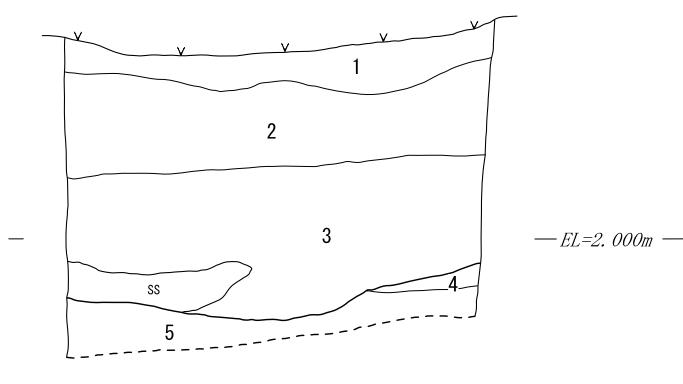
なし



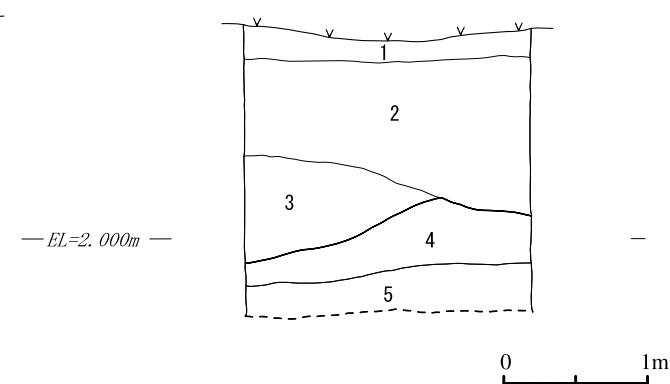
図版53 西壁



図版54 北壁



第63図 西壁



第64図 北壁

16. N 6 - ト (平成18年度)

本調査区は、う地区の最東部に位置しており、～層まで確認された。EL = 1.500mで確認された新砂丘層の直上まで米軍接收時代の掘削や造成の影響を受けていた。

(1) 層序

層：現在の表土（層）

層～層：米軍造成土（層）

層：新砂丘層（層）

層：琉球石灰岩（層）

(2) 遺構

本グリットにおいては、確認されなかった。

(3) 出土遺物

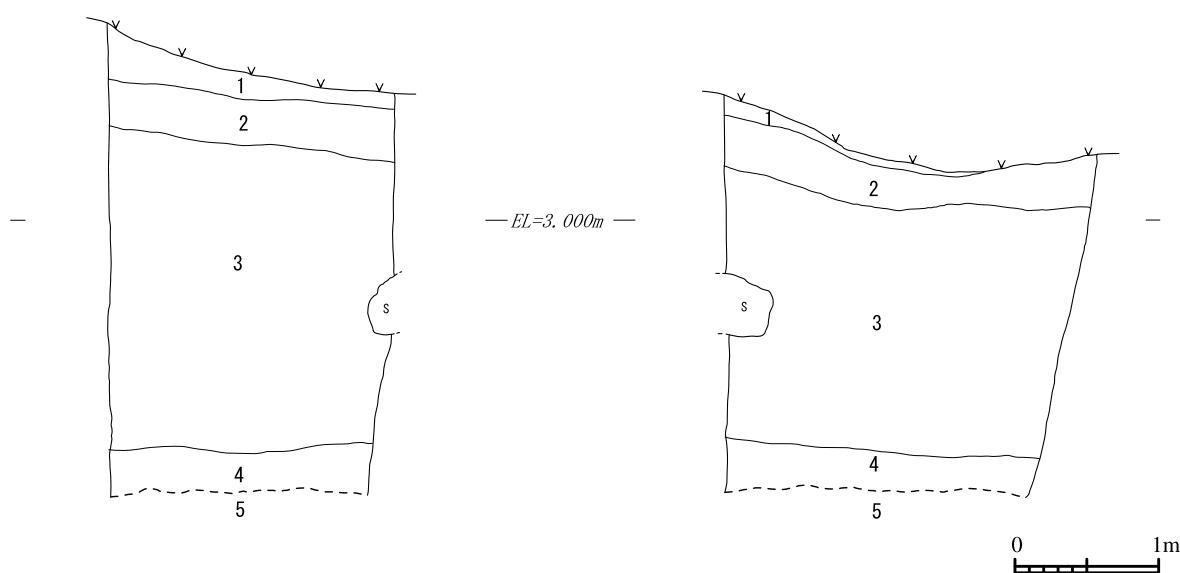
貝製品



図版55 北壁



図版56 東壁



第65図 北壁

第66図 東壁

17. J 12-コ (平成18年度)

本調査区は、う地区の丘陵部の中腹に位置しており、～層まで確認された。EL = 20.900mで確認された層まで米軍接收時代の造成の影響を受けていた。

(1) 層序

層：現在の表土（層）

層～層：米軍造成土（層）

層：島尻マージ層（-1層）

(2) 遺構

本グリットにおいては、確認されなかった。

(3) 出土遺物

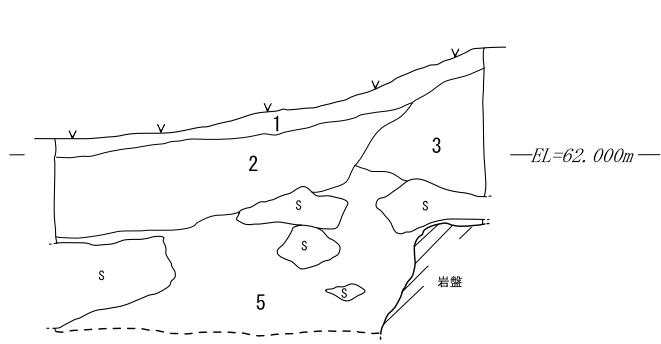
なし



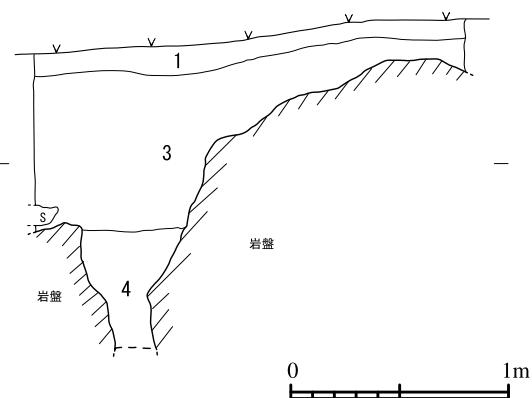
図版57 西壁



図版58 北壁



第67図 西壁



第68図 北壁

18. M12-ア (平成17年度)

本調査区は、う地区の丘陵部の中腹に位置しており、～層まで確認された。EL = 11.800mで層～層の近代～戦前の耕作土(層)が確認され、EL = 11.450mで層のグスク時代の旧表土(- 1層)が確認された。また、確認された層では、スミが混入していることも確認された。

(1) 層序

層：現在の表土(層)

層～層：米軍造成土(層)

層～層：近代～戦前の耕作土(層)

層：グスク時代の旧表土(- 1層)

(2) 遺構

本グリットにおいては、確認されなかった。

(3) 出土遺物

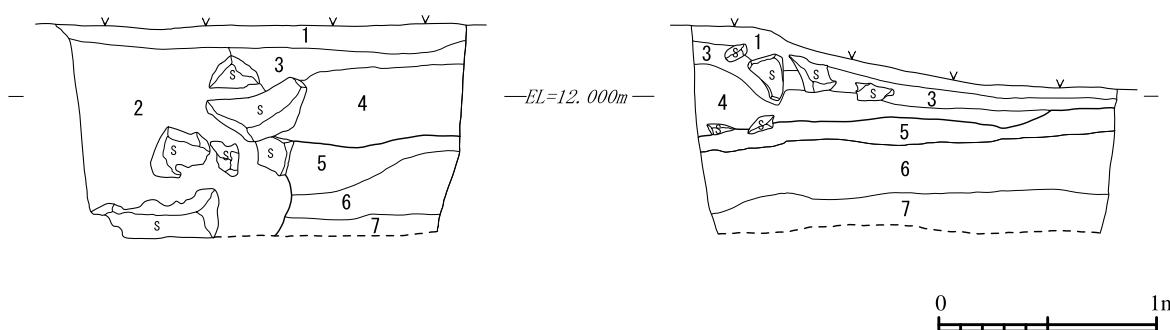
青磁、グスク系土器、沖縄産陶器、本土産磁器



図版59 東壁



図版60 南壁



第69図 東壁

第70図 南壁

第11表 う地区遺物出土一覧 1a

第11表 う地区遺物出土一覧 1 b

グリット名	層序	遺物名		黒釉陶器(天目)	褐釉陶器など	カムイヤキ	グスク系土器	沖縄産施釉陶器	沖縄産無釉陶器	本土産陶器	明朝系瓦	角釘	鉄塊	鉄片	鏹(はばき)	八双金物	至大通宝	かんざし	石器(敲石兼凹石)	石器(砥石)	石器(石皿?)	丸玉(未製品)	臼玉(未製品)	タカラガイ製品	ヤコウガイ製品	木製品	木片	焼土	ガラス片	プラスチック	硬貨	レンガ	ジップ	薬莢	タイル	出土遺物層序計			
		青磁	白磁	青花																																			
I 14 - サ	表採	1							3		4																					8							
	層								1																							1							
	か 層	2							2		1		2		1																10								
	層	3																													4								
	層	18	1				1									1	1	1												23									
	・ 層	1																													1								
	層	1																													1								
	廃土	4																													4								
I 14 - ク	表採								1				2																			3							
	層	1							1	1																					3								
	層	3							1	1			6																	11									
	層	5							4	3		2	2																	17									
	層	6							1	4			4																	16									
I 14 - ク周辺	表採								1			1																			2								
I 14	表採								1	1		2	4																	8									
I 14周辺	表採	2							1	4		4																		11									
I 14・I 13	~ 層								2																						2								
	廃土	3																													3								
J 13 - オ	表採	1					1	1	5	1																				9									
	層								1	3																					1								
	層								2																						2								
	層								3	1		1																		5									
J 14 - キ	表採								5		1	22																		28									
	層											5																			5								
	層											1																			1								
	層											1	10																	19									
J 13 - オ・J 14 - キ	表採								2		2	25																			29								
J 13・J 14	表採											1																			1								
L 13 - ア	攪乱											2	5																		7								
	層	1							1		2																				4								
	層									5			4																		11								
	層								2																						3								
L 12 - コ	表採								1		2	8																			14								
N 6 - ト	層																															1							
M12 - ア	層								3	6	1	5		1																5									
	層	1																													32								
合計		245	12	2	11	12	4	43	54	152	16	34	123	3	689	2	35	2	1	1	1	1	3	1	1	4	1	1	2	1	9	1	1	2	11	1	1	1	1500

第11表 う地区スコリア及び軽石出土一覧 1 c

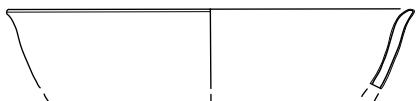
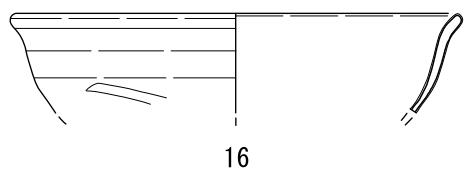
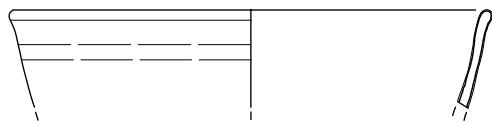
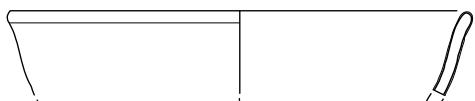
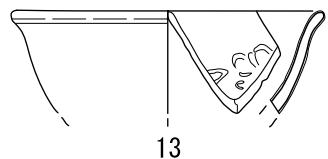
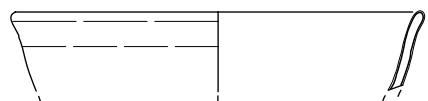
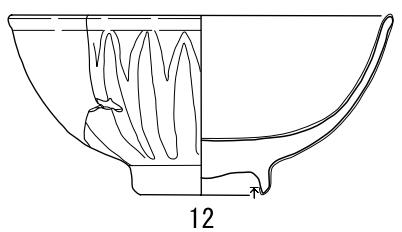
単位: g

グリット名	層序	スコリア	軽石
H15 - キ	層	1525	1225
	廃土	213	

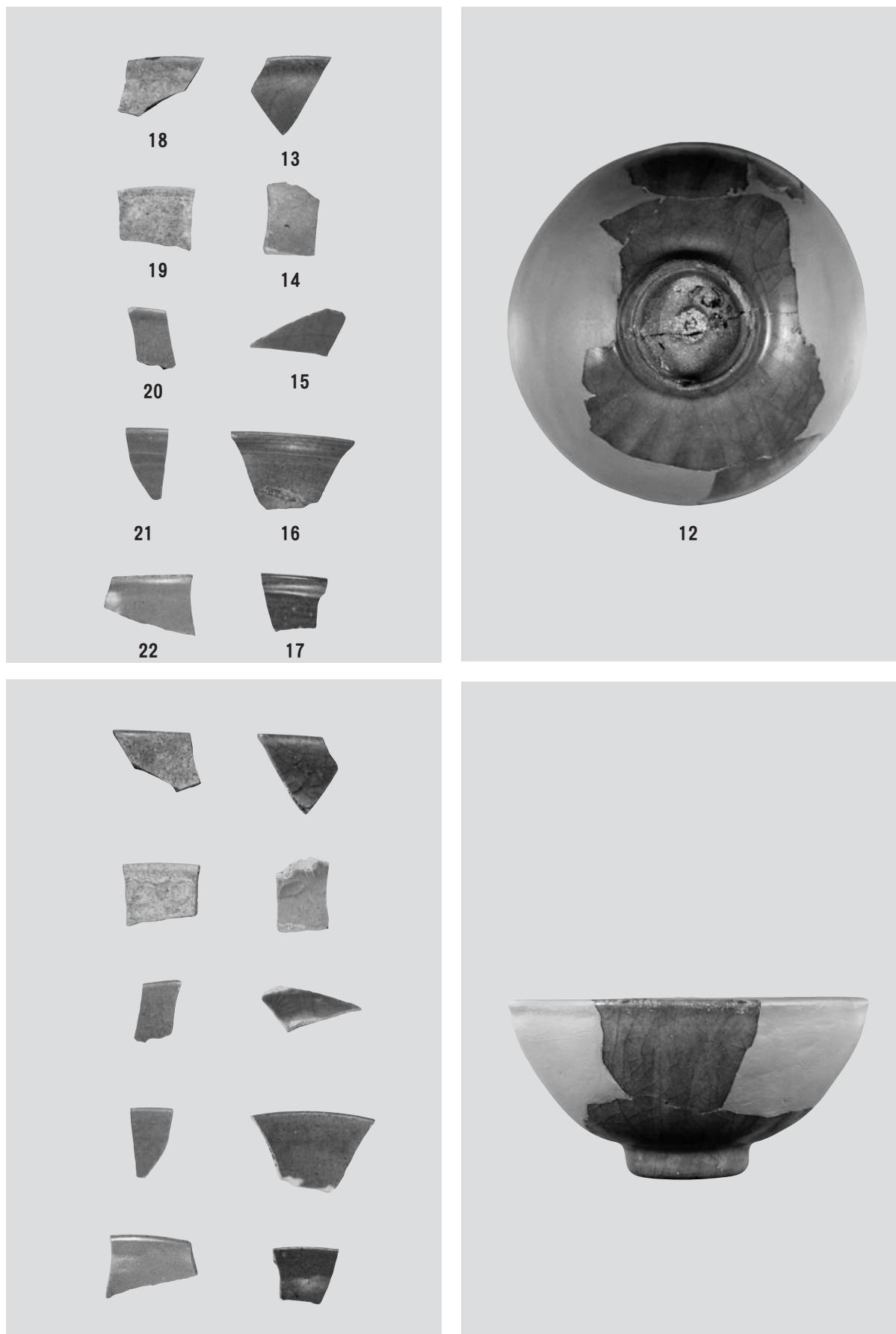
第12表 う地区遺物観察一覧1(青磁)

単位: cm

挿図番号 図版番号	器種	部位	分類	口径 底径 器高	素地	釉色 光沢 貫入	施釉・文様 などの特徴	年代	出土地点 出土層
第71図 図版61	碗	12	無鎬連弁文碗	15.2 4.9 7.2	青みの明るい 灰色で粗粒子。 白色・黒色の 混入物を含む。	黄みの明るい灰緑色	底部施釉分類 Ba	14世紀前 半~15世 紀後半	H14-テ 層
						あり			
						あり			
		13	口縁部	12.4 - -	灰白色の粗粒 子。白色の混 入物を含む。	黄みの明るい灰緑色	無文外反 - a。 内面に型造りの 人形手を施す。 見込みは陽印花。	15世紀後 半	I13 - ソ. I13 - コ. 14 - サ 廃土
						なし			
						細かい貫入			
		14	胴部	- - -	灰白色の粗粒 子。白・黒粒 の混入物を含 む。	黄みの明るい灰緑色	無文外反 - a。 内面に型造りの 人形手を施す。 見込みは陽印花。	15世紀後 半	H14-テ 層
						なし			
						粗い貫入			
		15	無文外反碗	- - -	灰白色の粗粒 子。白・黒粒 の混入物を含 む。	黄みの明るい灰緑色	無文外反 - a。 内面に区画文が見 られ、陰印花で菊 花の文様を施す。	15世紀後 半	H15-シ 層
						若干失う			
						なし			
		16	口縁部	18.2 - -	灰白色の細か い粒子。黒粒 の混入物を含 む。	明るい灰黄緑色	無文外反 - a	15世紀前 半~15世 紀後半	H15-シ 層
						若干失う			
						なし			
		17	無文外反碗	20.4 - -	灰白色の粗粒 子白色の混入 物を含む。	明るい灰黄緑色	無文外反 - a	15世紀前 半~15世 紀後半	H15-シ 層
						あり			
						細かい貫入			
		18	口縁部	- - -	にぶい赤褐色 色の粗粒子。 白色の混入物 を含む。	明るい灰色	無文外反 - b	14世紀後 半~15世 紀前半	H15-シ 層
						なし			
						なし			
		19	無文外反碗	- - -	淡橙色の粗粒 子で白粒の混 入物を含む。	灰黄色	無文外反 - b	14世紀後 半~15世 紀前半	H15-シ 廃土
						なし			
						なし			
		20	無文外反碗	- - -	灰白色の粗粒 子で黒・白色 の混入物を含 む。	黄みの明るい灰緑色	無文外反 - b	15世紀前 半~15世 紀後半	H14-ト 層
						若干失う			
						粗い貫入			
		21	無文外反碗	- - -	灰白色の粗粒 子で黒・白色 の混入物を含 む。	明るい灰黄緑色	無文外反 - b	14世紀後 半~15世 紀前半	H15-シ 層
						若干失う			
						なし			
		22	無文外反碗	- - -	灰白色の粗粒 子で黒粒の混 入物を含む。	明るい灰色	無文外反 - c	14世紀前 半~15世 紀後半	H15-シ 層
						あり			
						なし			



第71図 う地区出土遺物1(青磁)

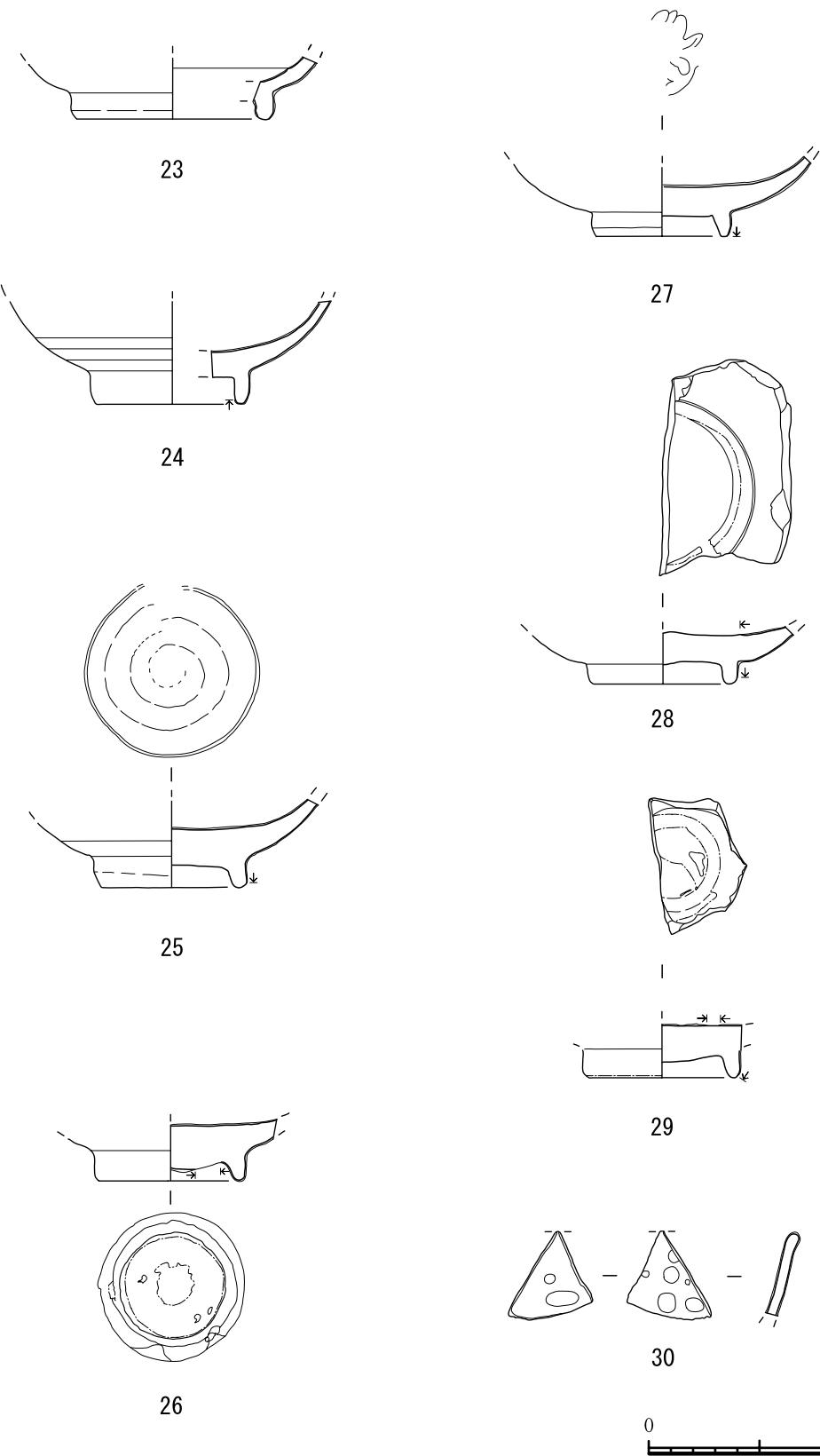


図版61 う地区出土遺物1(青磁)

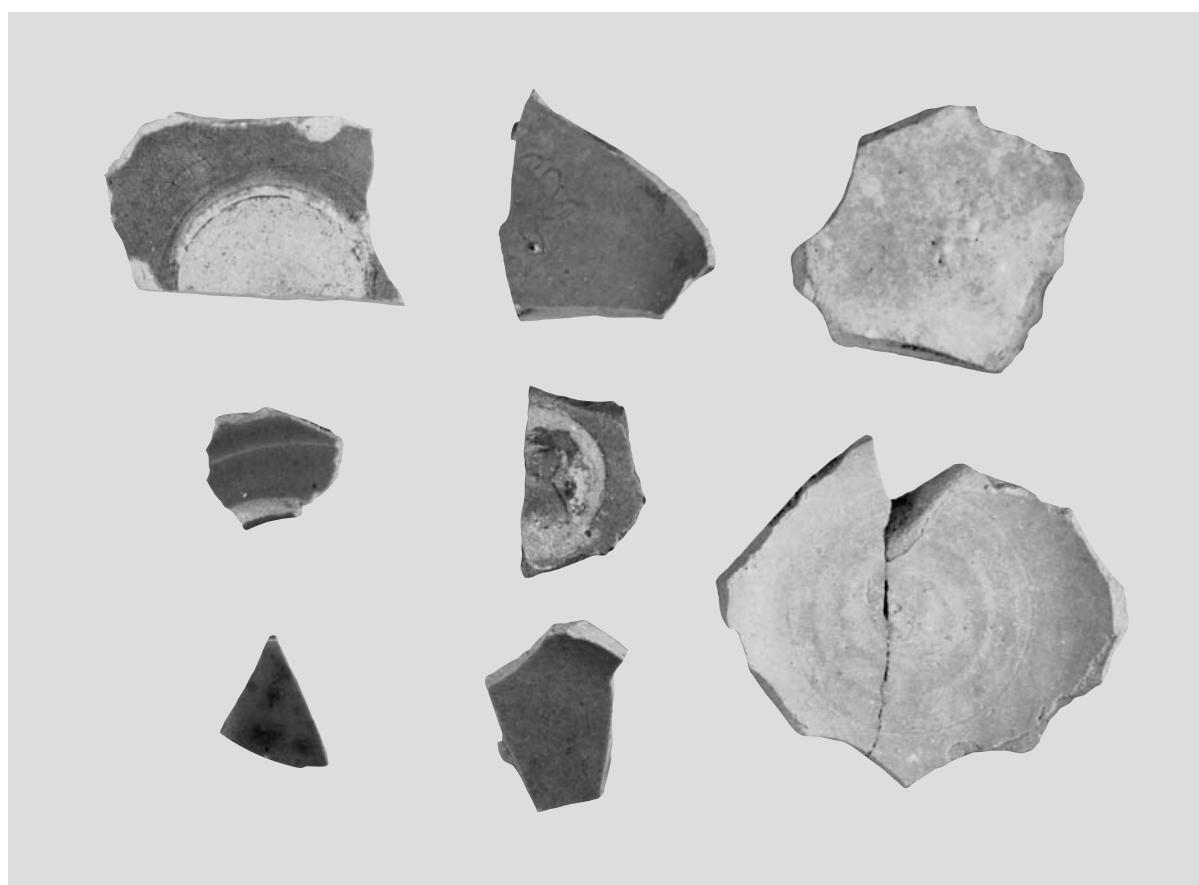
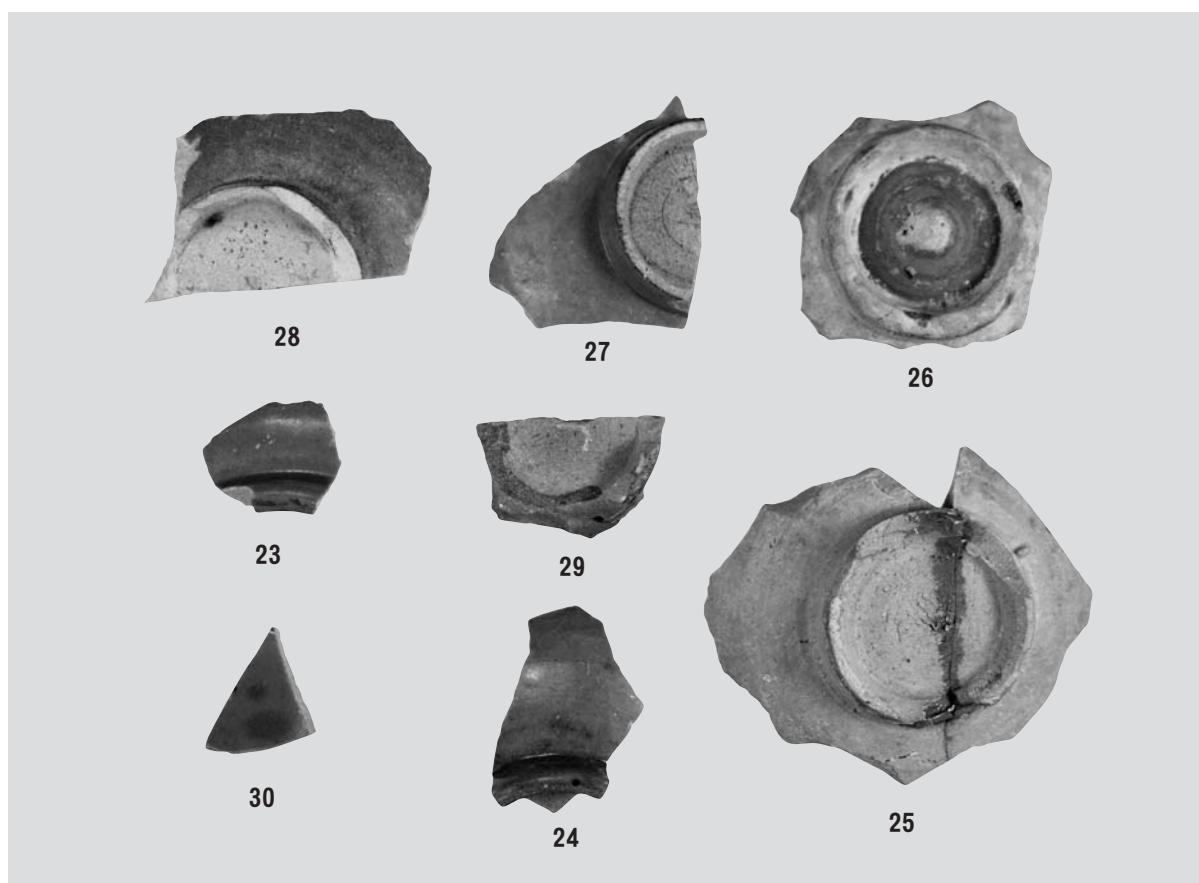
第13表 う地区遺物観察一覧2（青磁）

単位：cm

挿図番号 図版番号	器種	部位	分類	口径 底径 器高	素地	釉色 光沢 貫入	施釉・文様 などの特徴	年代	出土地点 出土層		
第72図 図版62	23	底部	無文外反碗I	— 8.7 —	灰白色の粗 粒子で白・ 黒粒の混入 物を含む。	黄みの明るい灰緑色	底部施釉分類 I 内底に陽圏を1 本廻らす。	15世紀前 半	H15-シ ⑫層		
						若干失う					
						粗い貫入					
	24			— 7 —	灰白色の粗 粒子。		底部施釉分類 I Ba 底部に3条の陰 圏線がみられる。	15世紀前 半	H14-ト ⑩層		
						若干失う					
						粗い貫入					
	25			— 6.4 —	灰黄色の粗 粒子で、白・ 黒粒の混入 物を含む。	明るい灰黃緑色	底部分類 I Ba。 見込み及び外底 に口クロ痕が残 る。外底は平底 になっている。	15世紀前 半～15世 紀中葉	H14-テ ③層		
						なし					
						なし					
	26			— 6.6 —	灰白色の細 粒子で気泡 が多い。	明るい灰色	底部分類 I Ca 見込みに印花文? を施す。	15世紀前 半～15世 紀中葉	H14 上方ガマ 表採		
						なし					
						なし					
	27			— 6.9 —	灰黄色の粗 粒子で、白・ 黒粒の混入 物を含む。	明るい灰黃緑色	底部分類 II Ba 見込みに文様有 り。外底は平底 になっている。	15世紀	H14-テ ④層		
						なし					
						所一に見られる					
	28			— 5.8 —	灰白色の粗 粒子含む。	明るい灰黃緑色	底部施釉分類 II Bb 見込付近に陰圏 線が1条みられ る。	15世紀前 半～15世 紀後半	H15-シ ⑩層		
						なし					
						細かい貫入					
	29			— 6.6 —	灰白色の粗 粒子で白・ 黒粒の混入 物を含む。	黄みの明るい灰緑色	底部施釉分類 II Bc	15世紀前 半～15世 紀後半	H14-テ 表採		
						若干失う					
						なし					
	30	口 縁部	無文外反II (泉州窯系)	— — —	灰黄色の粗 粒子で、白・ 黒粒の混入 物を含む。	黄みの明るい灰緑色	成形が雑なため 所々に釉だまり がみられる。	15世紀前 半～15世 紀後半	H15-シ ⑩層		
						あり					
						なし					



第72図 う地区出土遺物2(青磁)

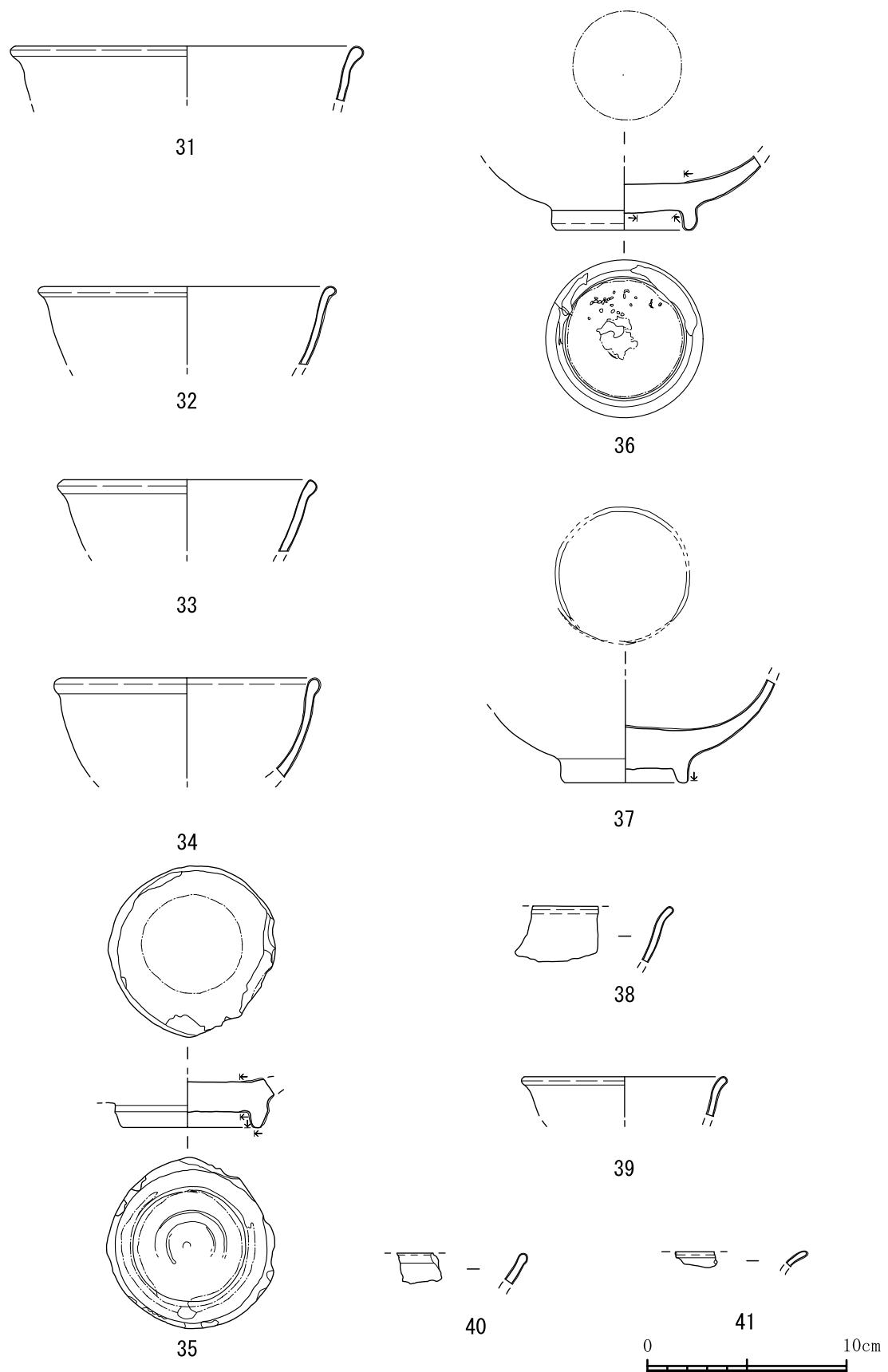


図版62 う地区 出土遺物2(青磁)

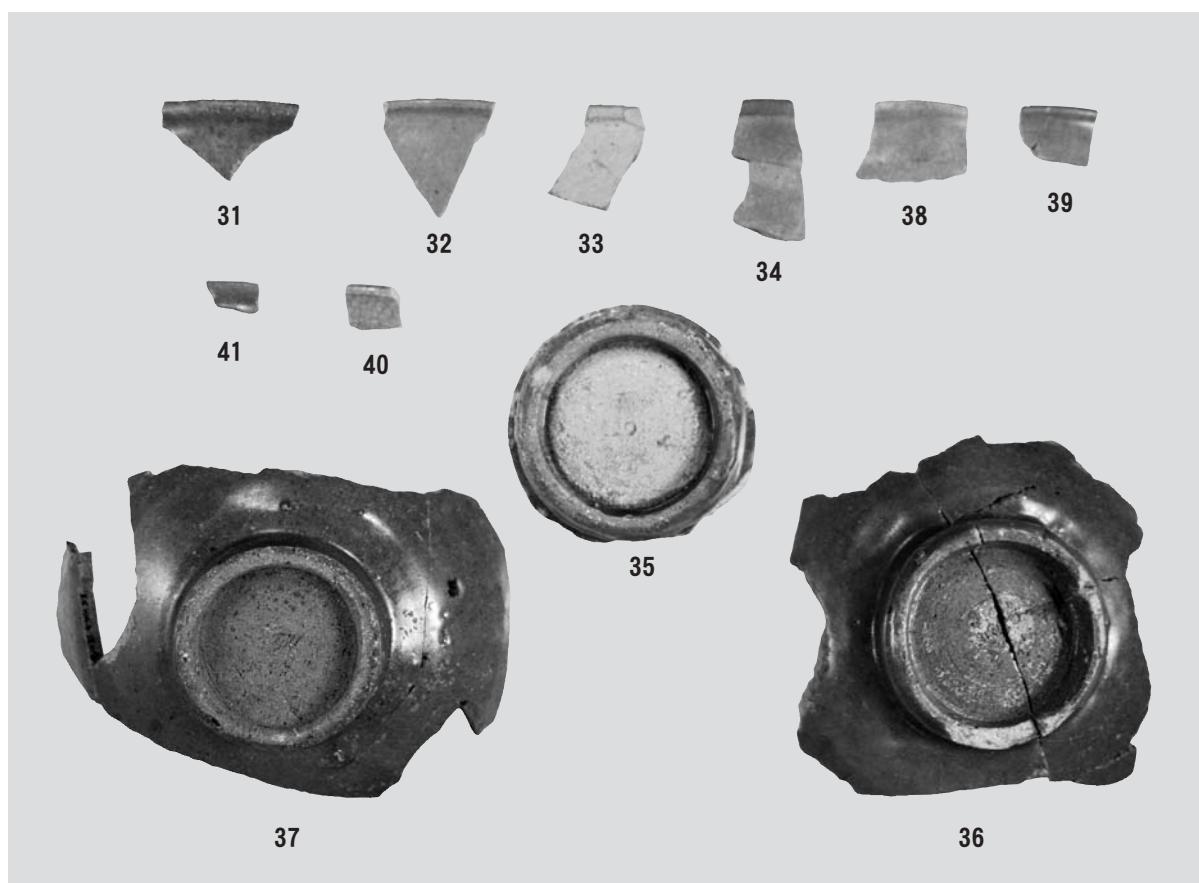
第14表 う地区遺物観察一覧3(青磁)

単位:cm

挿図番号 図版番号	器種	部位	分類	口径 底径 器高	素地	釉色 光沢 貫入	施釉・文様などの特徴	年代	出土地点 出土層	
第73図 図版63	31	口縁部 無文外反碗 (福建省系)	17.8	黄灰色の粗粒子で黒・白・茶色の混入物を含む。	黄みの明るい灰緑色		15世紀前半~15世紀中葉	H14-テ層		
					若干失う					
					細かい貫入					
	32		15	灰白色の粗粒子で白色の混入物を含む。	明るい灰黄緑色		15世紀前半~15世紀中葉	H15-シ層		
					若干失う					
					粗い貫入					
	33		13	橙色の粗粒子。混入物はみられない。	明るい灰色		15世紀前半~15世紀中葉	M12-ア層		
					なし					
					なし					
	34		13.4	灰黄色ので気泡が多い。白色の混入物を含む。	黄みの明るい灰黄赤		15世紀前半~15世紀中葉	H15-シ層		
					なし					
					なし					
第73図 図版63	35	底部 無文外反碗 (福建省系)	6.8	灰白色の粗粒子で白・黒色の混入物を含む。	灰黄緑色	底部施釉分類 B b 底部見込みに窯道具の痕有り	15世紀前半	H14-ト層		
					あり					
					粗い貫入					
	36		6.9	黄灰色の粗粒子で黒色の混入物を含む。	灰黄緑色	底部施釉分類 B c 見込み及び高台内は、平坦である	15世紀前半	H14-テ層		
					なし					
					細かい貫入					
	37		6.2	灰白色の粗粒子で白・黒色の混入物を含む。	黄みの明るい灰緑色	底部施釉分類 B a 底部見込に陰圈線あり	15世紀前半~15世紀中葉	H14-テ表採		
					あり					
					細かい貫入					
第73図 図版63	38	小碗 無文外反小碗	11.5	灰白色の粗粒子で黒粒の混入物を含む。	黄みの明るい灰黄緑色		15世紀前半~15世紀後半	H15-シ廃土		
					なし					
					なし					
	39		11.2	灰白色の粗粒子で白・黒色の混入物を含む。	明るい灰緑色		15世紀前半~15世紀後半	H14-ア表採		
					あり					
					やや粗い貫入					
	40		口縁部 無文直口皿	-	灰白色の粗粒子で黒色の混入物を含む。	明るい灰黄緑色		15世紀	I 14-ク層	
						若干失う				
						細かい貫入				
第73図 図版63	41		皿 無文外反皿	-	黄灰色の粗粒子で白粒の混入物を含む。	黄みの明るい灰緑色		15世紀前半~15世紀後半	I 14-サ層	
						若干失う				
						細かい貫入				



第73図 う地区出土遺物3(青磁)

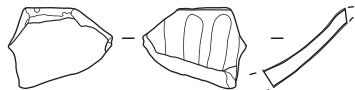


図版63 う地区出土遺物3(青磁)

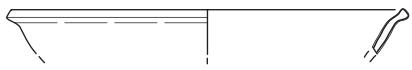
第15表 う地区遺物観察一覧表4(青磁)

単位:cm

挿図番号 図版番号	器種	部位	分類	口径 底径 器高	素地	釉色 光沢 貫入	施釉・文様 などの特徴	年代	出土地点 出土層
第74図 図版64	42	盤	銚 縁 盤	- - -	橙色の粗粒子 で黒粒の混入 物を含む。	浅色	銚 縁 盤 - a	15世紀前 半	I14-サ 東区 層上
						なし			
						なし			
	43	銚 縁 部	銚 縁 盤	21 - -	灰白色の粗粒 子で白色の混 入物を含む。	黄みの明るい灰緑色		15世紀中 葉	H14-テ 層
						若干失う			
						なし			
	44	銚 縁 部	銚 縁 盤	23.5 - -	灰白色の粗粒 子で黒粒の混 入物を含む。	黄みの明るい灰緑色		15世紀中 葉	I14-ケ 層
						あり			
						粗い貫入			
	45	銚 縁 部	銚 縁 盤	25.5 - -	灰白色の粗粒 子で白の混入 物を含む。気 泡が多い。	明るい灰黄緑色		15世紀中 葉	H15-シ 層
						なし			
						なし			
	46	銚 縁 部	直行 銚 縁 盤	25.5 - -	灰白色の粗粒 子で白・黒色 の混入物を含 む。	明るい灰黄緑	盤底部分類 A 内底に陰圏線 と印花文あり	15世紀中 葉	H14-ト 層
						若干失う			
						粗い貫入			
	47	銚 縁 部	銚 縁 盤	23.5 - -	淡黄色微粒子。 茶・黒色の混 入物を含む。	明るい灰黄緑	口唇部に陽 圏線がみら れる	15世紀	H15-シ 層
						若干失う			
						なし			
	48	銚 縁 部	底部 部分類	- 14 -	黄灰色で白色 の混入物を含 む。気泡が多 い。	灰黄緑色	盤底部分類 b 高台内に窯 道具のあと が残る	15世紀中 葉	H15-シ 層
						あり			
						細かい貫入			
	49	銚 縁 部	底部 部分類	- 11 -	浅黃橙色の粗 粒子で白色の 混入物を含む。	浅黄色	盤底部分類 c	15世紀中 葉	H14-テ 廃土
						なし			
						なし			
	50	銚 縁 部	碁 笥 底 杯	7 - -	淡黄色でやや 微粒子。黑色 の混入物を含 む。	明るい灰黄緑	口縁部に1 条の陽圏線 がみられる	15世紀後 半	H15-シ 層
						あり			
						細かい貫入			
	51	銚 縁 部	底部 部分類	- 3.3 -	灰白色でやや 微粒子。気泡 有り。茶色の 混入物を含む。	明るい灰黄緑		15世紀後 半	H15-シ 層
						若干失う			
						なし			
	52	銚 縁 部	盤 口 壺	26.6 - -	灰白色でやや 微粒子。気泡 有り。白色の 混入物を含む。	明るい灰緑		14世紀後 半～15世 紀前半	H14-テ 層
						なし			
						粗い貫入			



42



47



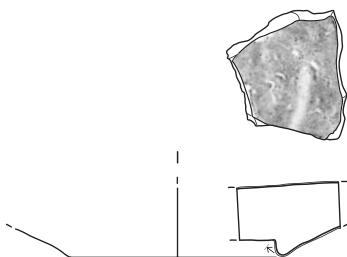
43



48



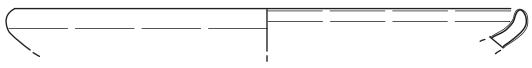
44



49

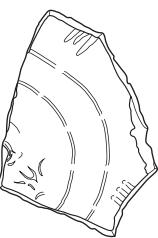


45



52

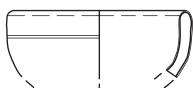
A scale bar marked from 0 to 10 cm.



50



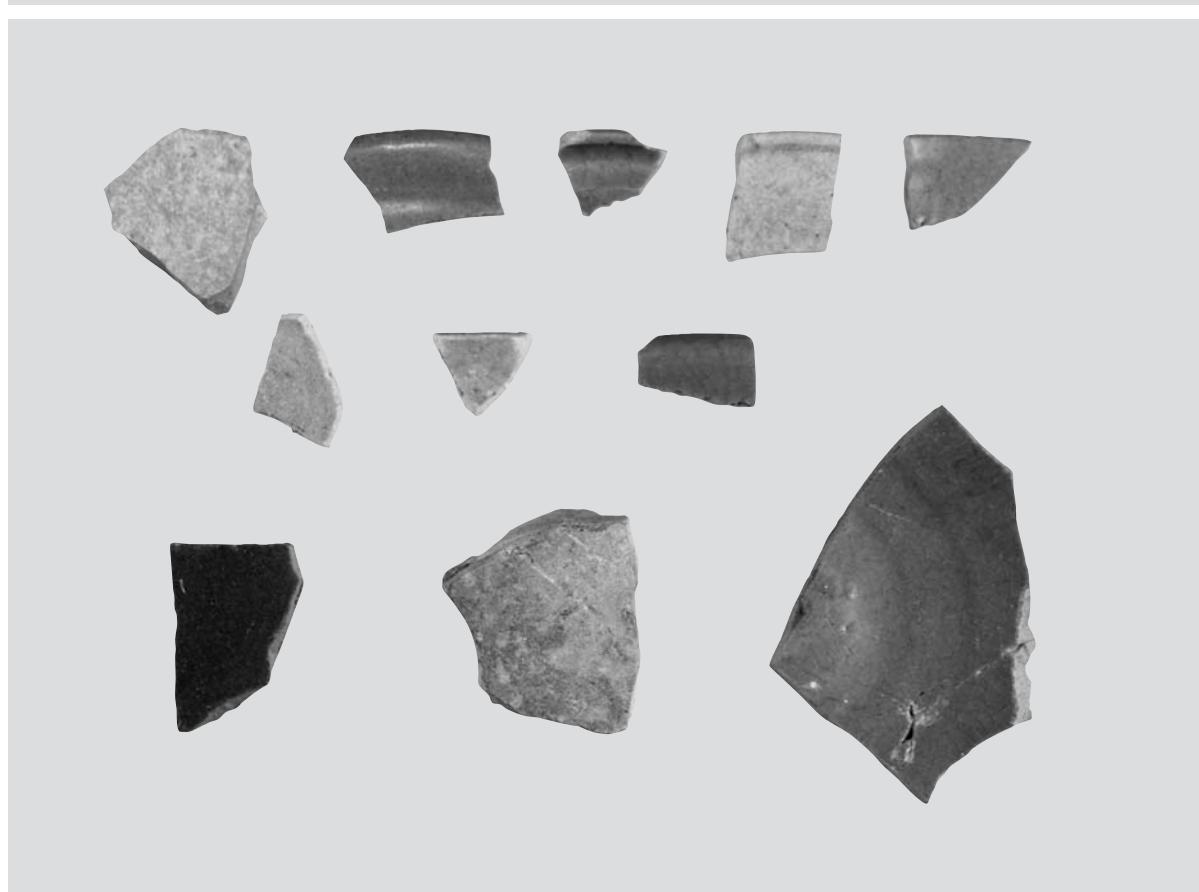
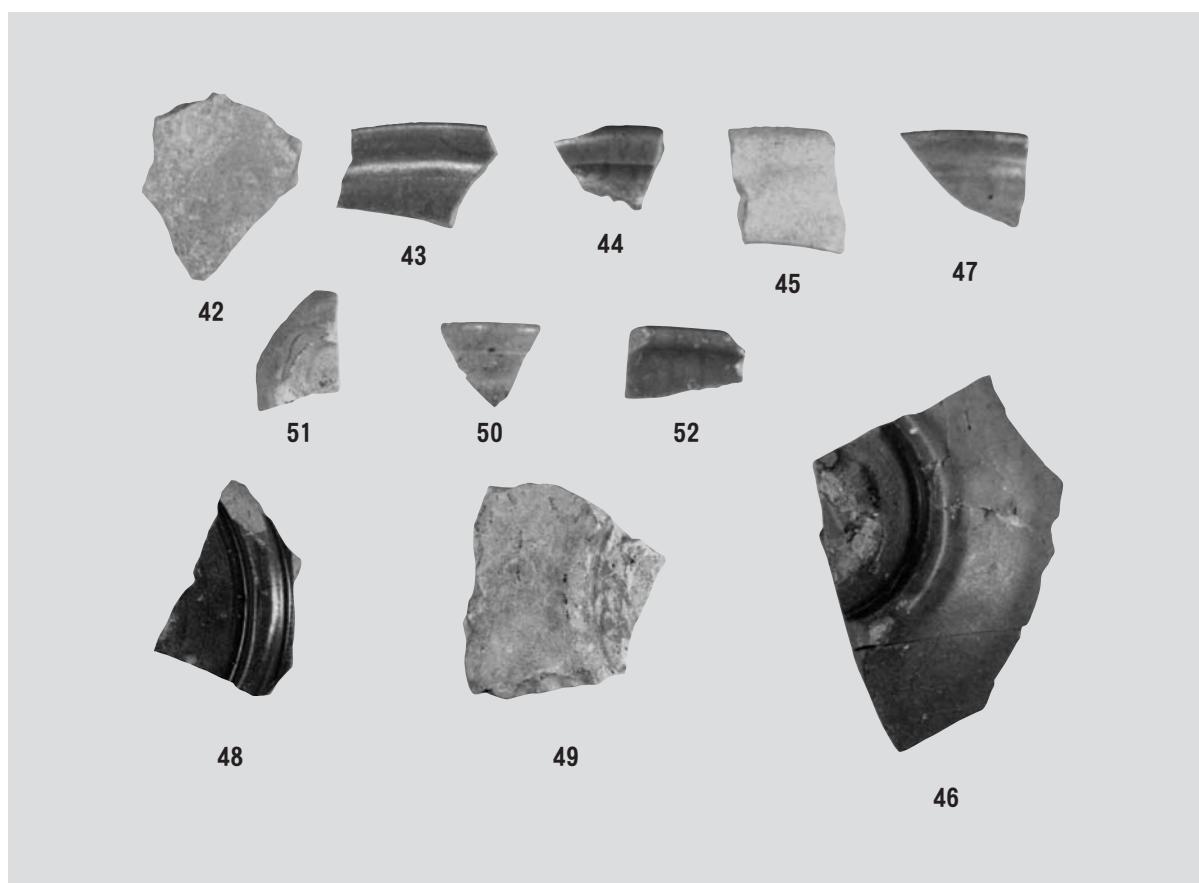
46



51

A scale bar marked from 0 to 5 cm.

第74図 う地区出土遺物4(青磁)



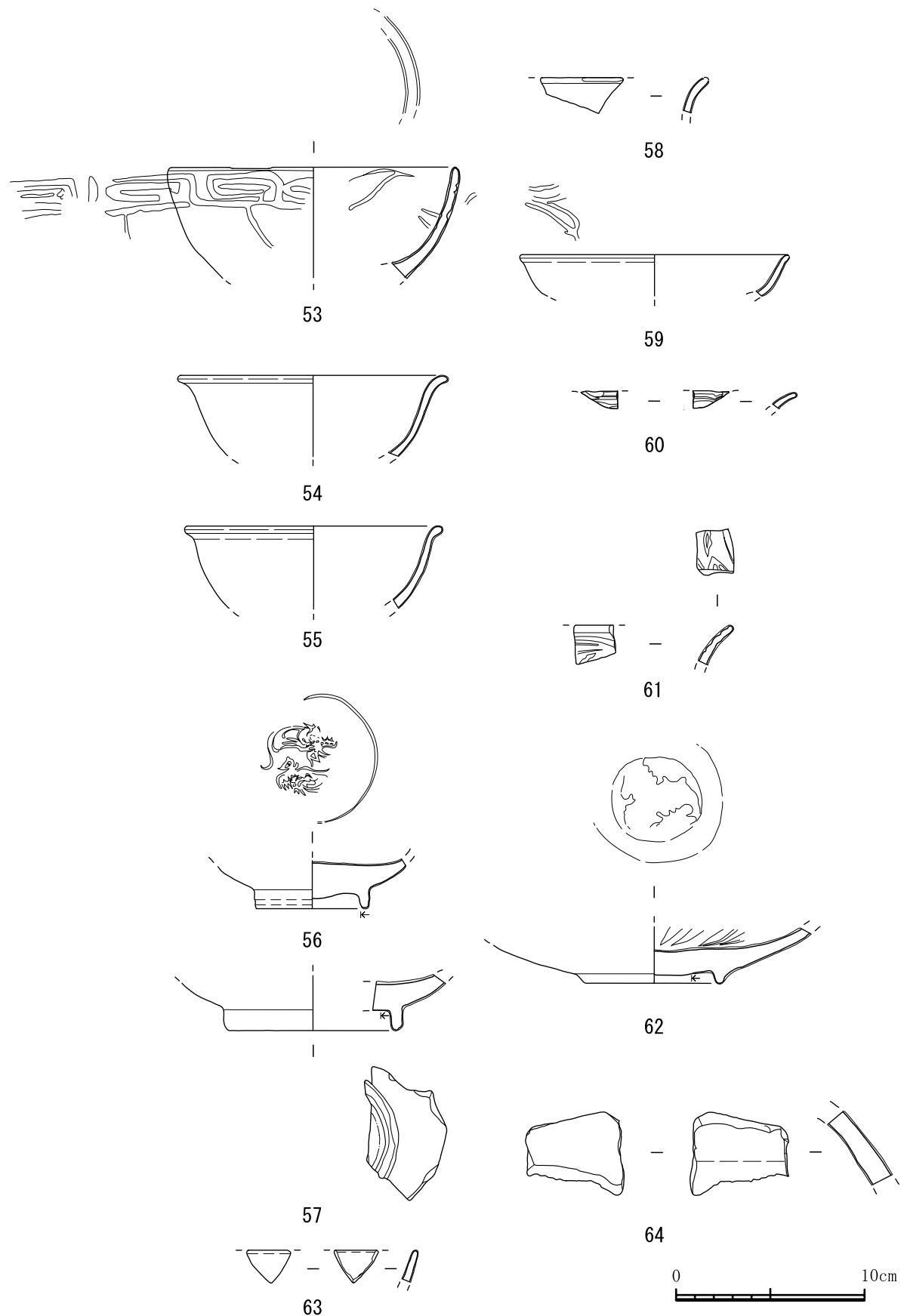
図版64 う地区出土遺物4(青磁)

第16表 う地区遺物觀察一覧 5 (青磁)

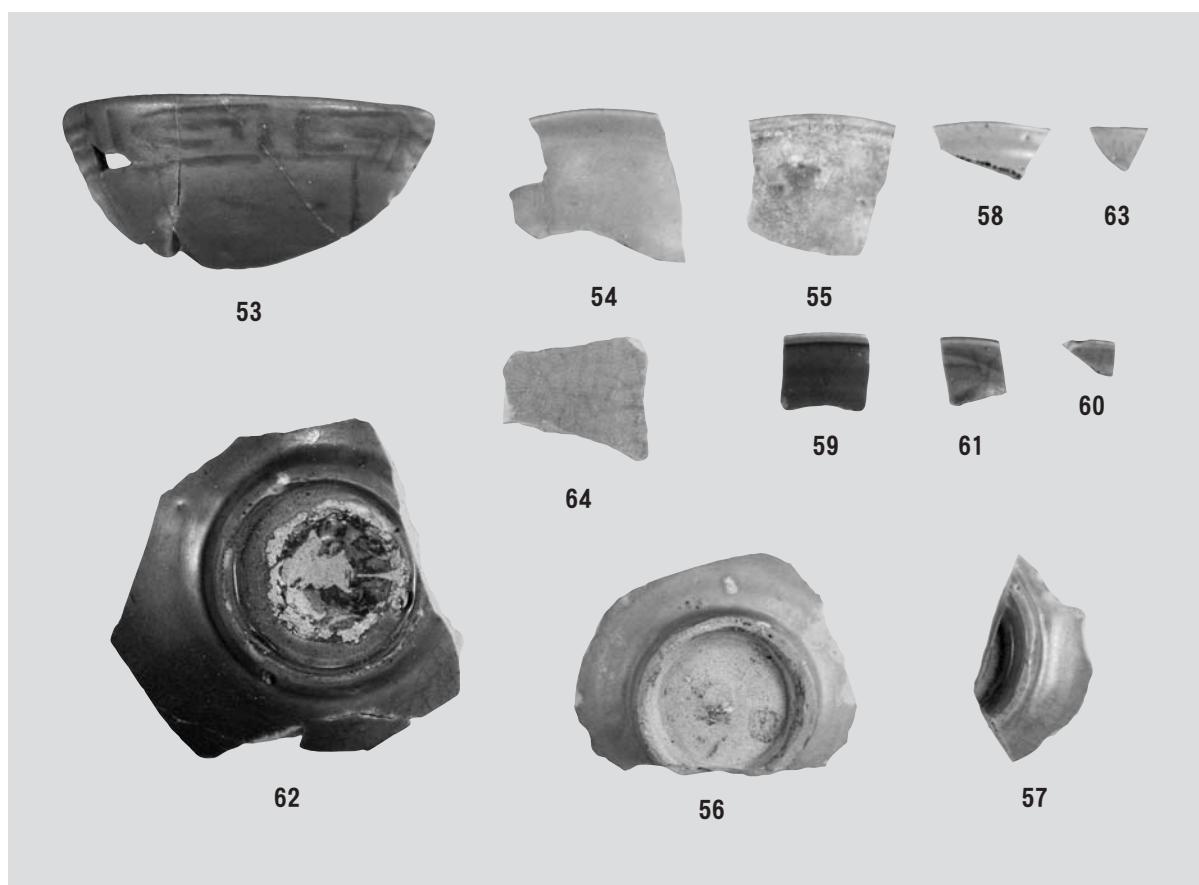
单位：cm

挿図番号 図版番号		器種	部位	分類	口径 底径 器高	素地	釉色 光沢 貫入	施釉・文様 などの特徴	年代	出土地点 出土層
第75図 図版65	53	碗	雷文 帶碗	15.2	白色微粒子 黒色・茶色 粒の混入物 を含む。	黄みの明るい灰緑 若干失う なし	外体面に雷文、 内体面に刻花 花文を描き、 内底に陰圏線2 条廻らす。	15世紀前半	H14-テ 層	
	54			15.4	灰白色でや や微粒子。 黒色粒の混 入物を含む。	緑みのにぶい黄緑 なし なし	無文外反碗	14世紀前半～15世 紀後半	I14-サ 層	
	55			13.7	灰白色でや や微粒子。 黒色粒の混 入物を含む。	緑みのにぶい黄緑 なし 細かい貫入			H15-シ 層	
	56		無文 外反碗	-	灰白色でや や微粒子。 気泡が多い。	明るい灰緑 若干失う なし	無文外反碗 -a 碗底部施釉分類 Ba 見込みに陰圏線と 二羽の鳳凰を施す。	15世紀前半～15世 紀中葉	H15-シ 表採	
	57			-	灰白色微粒 子で気泡多 し。	緑みのにぶい黄緑 若干失う あり			H14-ト 層	
	58	小碗	無文 外反小碗	-	灰白色微粒 子。白・黒 粒の混入物 を含む。	緑みのにぶい黄緑 あり やや粗い貫入		15世紀前半～15世 紀後半	H14-テ 層	
	59	皿	無文 直口皿	14	灰白色微粒 子。	緑みの暗い灰黄緑 あり なし			I14-ク 層	
	60			10.7	灰白色微粒 子。白・黒 粒の混入物 を含む。	外面 黄みの明るい灰緑 内面 明るい灰緑 若干失う なし	稜花皿 a	15世紀中葉～15世 紀後半	H14-テ 層	
	61			-	灰白色の微 粒子で気泡 が見られる。	黄みの明るい灰緑色 若干失う なし			I14-サ 層	
	62	盤	底部	7.3	灰白色でや や微粒子白・ 黒粒の混入 物を含む。	全体 黄みの明るい灰緑 籠彫 灰黄緑色 あり あり 粗い	鍔縁盤 - b 底部は、基質底に近 い外觀を呈する。 見込みに陰印花の双魚文 を施す。高台内(外底) に窯道具の跡が残る。	15世紀前半	L13-ア 層	
	63	杯	口縁部	無文 直口杯	-	灰白微粒子 で黒・白粒 の混入物を 含む。	明るい灰緑色 若干失う なし		I14-サ 層	
	64	壺	胴部	酒会壺	-	黄灰色微粒 子で気泡多 し。	外面 緑みのにぶい黄緑 内面 黄みのうすい緑 なし 細かい貫入		H15-シ 層	

第75回
図版65



第75図 う地区出土遺物5(青磁)

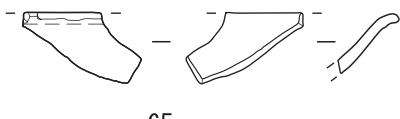


図版65 う地区出土遺物5(青磁)

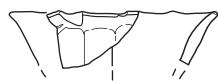
第17表 う地区遺物観察一覧 6 (白磁・青花)

単位: cm

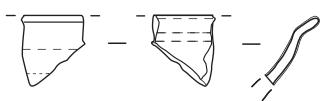
挿図番号 図版番号	種類	器種	部位	分類 産地	口径 底径 器高	素地	施釉 釉色	光沢 貫入	施釉・文様・ 器形などの 特徴	年代	出土地点 出土層
	65	碗	口 縁部	福建省 系ピロース クリ類	- - -	灰白の粗 粒子で赤・ 黒色の混 入を含む。	明オリーブ 灰色	若干失う なし		14世紀中 葉	H15-シ 廃土
	66	碗	口 縁部	福建省 系ピロース クリ類	- - -	灰白色の 微粒子で 白・赤・ 黒色の混 入を含む。	明オリーブ 灰色	あり 大きな貫入		14世紀後 半~15世 紀前半	H14-ト 層
	67	碗	底部	泉州窯 無文外 反碗	- 5.3 -	明るい灰色 の粗粒子で1 mm~3mmほど の白・赤・ 黒色の混 入物を含む。	内外面に 黄みの明 るい灰黄 緑色	あり 細かい貫入	底部分類 Ba。 見込みに窯道 具の痕がみら れる。高台が ピロスクに類似 している。	15世紀中 葉~15世 紀後半	H14-テ 層
第76図 図版66	68	白 磁	碗	福建省 系底部	- 6.2 -	淡黄色の粗 粒子で白・ 赤・黒色の 混入物を含 む。	内底に黄 みの明るい 灰黄緑 色	あり 細かい貫入	底部分類 Bc。 見込みに幅広の蛇の目 かきとりが見られ、 窯道具の跡が残る。 底部が今帰仁タイグに 類似している。	15世紀後 半~16世 紀中葉	H15-シ 廃土
	69	皿	完 形	福建省 系直口 口縁抉 入高台	10.3 4.2 2.5	淡黄色の粗 粒子で赤・ 黒色の混 入物を含む。	透明	あり 細かい貫入	見込みに重 ね焼きの痕 が4ヶ所残る。	15世紀後 半~16世 紀	H14-テ 層
	70	杯	口 縁部	福建省 系八角 杯	8.3 - -	淡黄色の粗 粒子で茶・ 黒色の混 入物を含む。	透明	あり 細かい貫入	Ba 高台 抉入	15世紀後 半~16世 紀中葉	I14-サ 層
	71	杯	底部	邵部窯 系外反 口縁抉 入高台	- 3.3 -	淡黄色の粗 粒子で茶・ 黒色の混 入物を含む。	透明	あり 細かい貫入	見込みに重 ね焼きの痕 が2ヶ所残 る。	15世紀後 半~16世 紀中葉	H14-テ 層
	72	碗	底部	景德鎮	- 5.9 -	白色の微 粒子で茶・ 黒色の混 入物を含 む。	透明	あり なし	底部分類 Ac。高台脇 と高台内に、 コバルトによ る2本の界 線を廻らす。	16世紀~ 17世紀	H14-テ 層
	73	青 花	皿	中国	- - -	明るい灰 色の微粒 子で茶・ 黒色の混 入物を含 む。	透明	にぶい なし	内面に横の 線文、外面 は唐草文様 を施す。	16世紀後 半	H14-テ 層



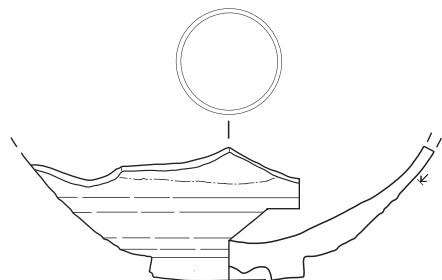
65



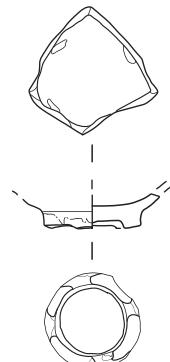
70



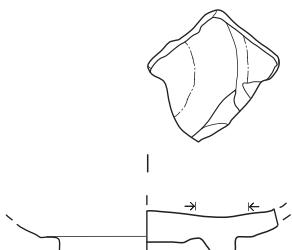
66



67



71

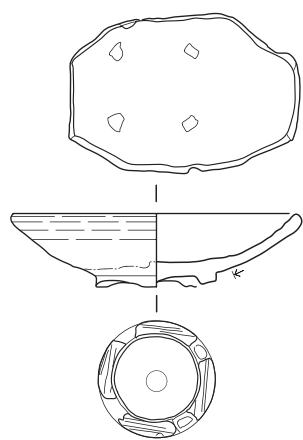


68



72

0 10cm



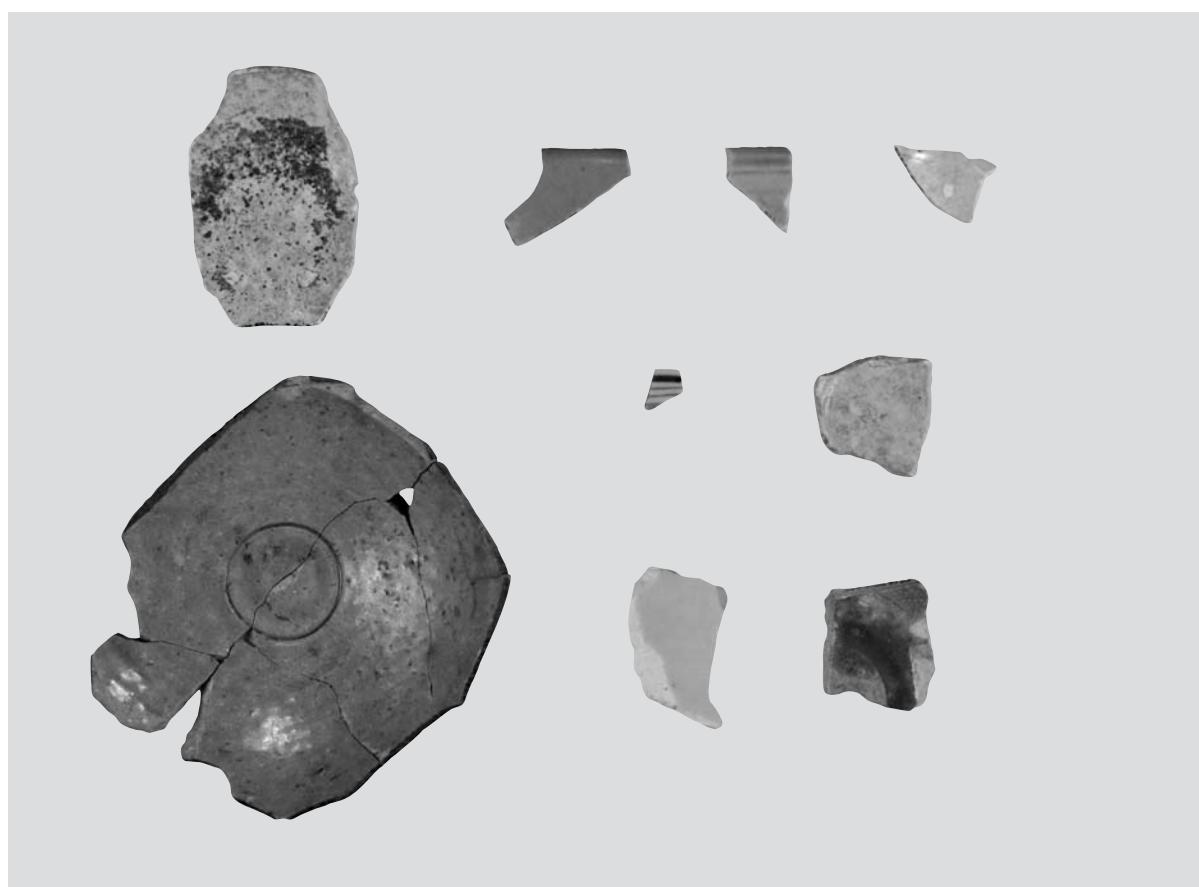
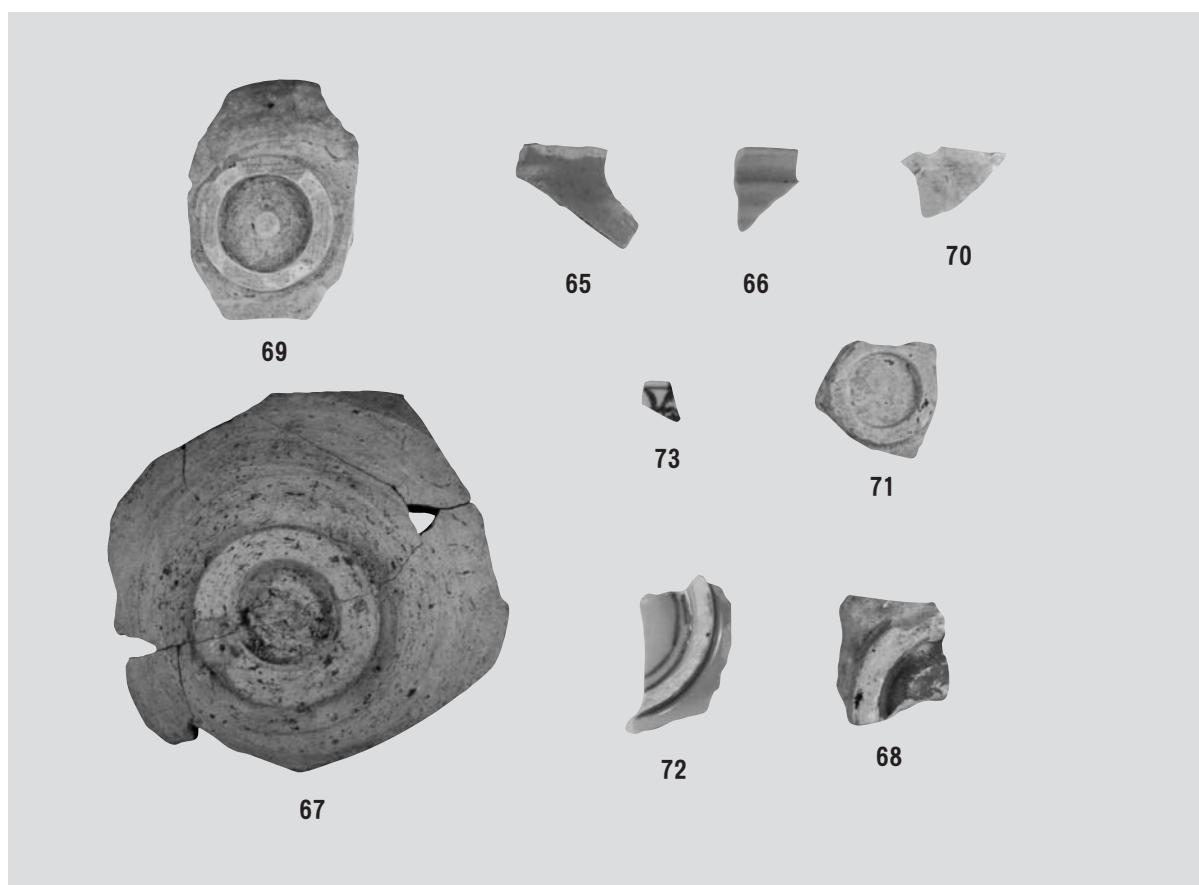
69



73

0 5cm

第76図 う地区出土遺物6（白磁・青花）

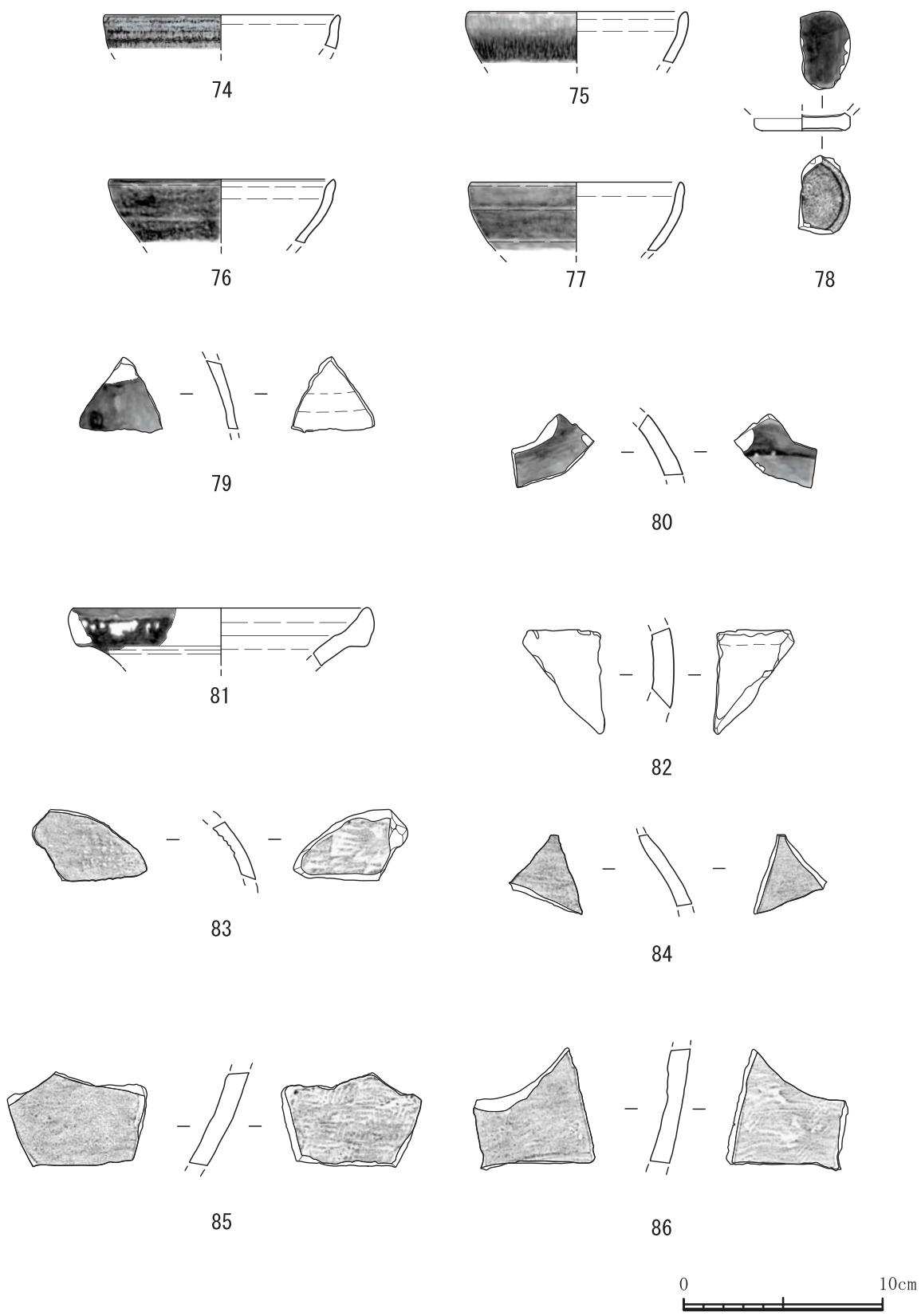


図版66 う地区出土遺物6（白磁・青花）

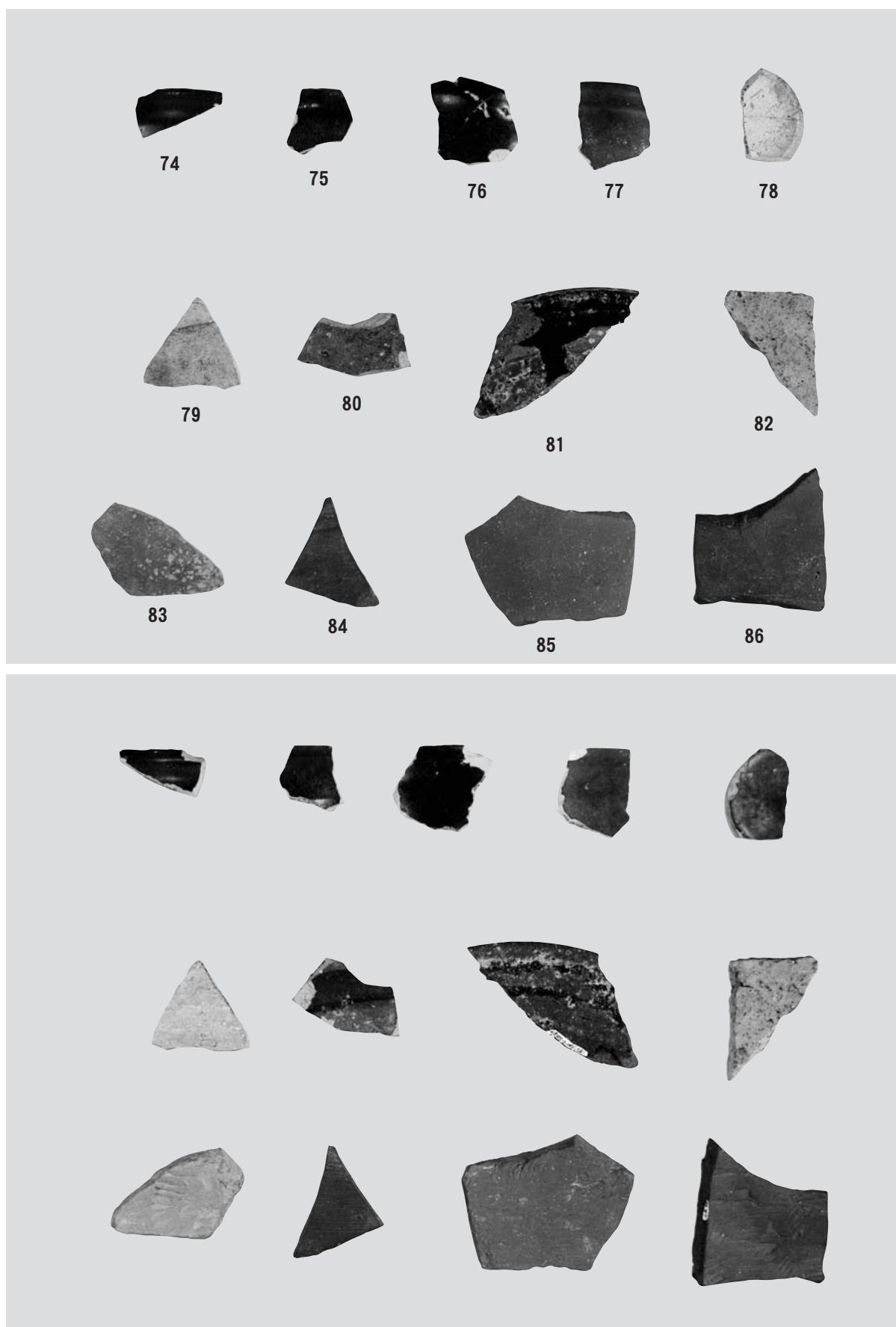
第18表 う地区遺物観察一覧7(褐釉陶器・黒釉陶器・カムイヤキ)

単位:cm

挿図番号 図版番号	遺物	器種	部位	産地	口径 底径 器高	胎土(色調・混入物)	釉薬の施釉範囲及び 色調、文様・光沢	時代	出土地点 出土層		
第77図 図版67	74	中国南平茶洋窯	碗	禾目状天目	口縁 11.7 -	灰黄色の粗粒子で、赤褐色粒・白色粒の混入物を僅かに含む。	禾目状天目。全面に釉薬がかかり、黒色の釉薬を基調に褐色が禾目文様を作り出している。若干光沢あり。	15世紀前半～15世紀後半	H15 - シ層		
	75				口縁 10.9 -	灰黄色の粗粒子で、赤褐色・黒色・白色粒の混入物を僅かに含む。	禾目状天目。全面に釉薬がかかり、暗褐色の釉薬を基調に、にぶい褐色が禾目文様を作り出している。光沢あり。	14世紀後半～15世紀中	H15 - シ層		
	76				口縁 11.2 -	灰黄色の粗粒子で、赤褐色・黒色・白色粒の混入物を僅かに含む。	禾目状天目。全面に釉薬がかかる。黒色の釉薬を基調に、褐色が斑文様を作り出している。若干光沢あり。	15世紀前半～15世紀後半	H14 - ト層		
	77				口縁 10.9 -	淡黄色の粗粒子で、赤褐色・黒色粒の混入物を僅かに含む。	柿釉天目。全面に釉薬がかかる。褐色の釉薬を基調にしている。光沢なし。	15世紀前半～15世紀後半	H15 - シ層		
	78				底部 4.8 -	淡黄色の粗粒子で、赤褐色・黒色粒の混入物を僅かに含む。	柿釉天目。見込みに釉薬がかかり、外面は露胎。暗褐色の釉薬を基調にしている。光沢なし。豊付け外面を面取りしている。	15世紀前半～15世紀後半			
挿図番号 図版番号	遺物	器種	部位	産地	口径 底径 器高	胎土(色調・混入物)	釉薬の施釉範囲及び 色調、文様・光沢	ピンホール 貫入	時代	出土地点 出土層	
第77図 図版67	79	中国	壺	褐釉陶器	胴部 -	粗粒子の色調は黄みの明るい灰黃赤色で、赤褐色・黒色粒の混入物を僅かに含む。	内外面に白化粧を施し、外面に釉薬がかかり、一部露胎。明るい灰黃赤色の釉薬を基調にしている。光沢なし。	内外面に少しある。	15世紀前半～15世紀後半	H14 - テ・ト層	
	80				胴部 -	粗粒子の色調は明るい灰色で、赤褐色粒・白色粒の混入物を多量に含む。	内外面に釉薬がかかり、外面は光沢を持った釉薬で緑みの暗い灰黃緑色を呈している。内面は赤みの暗い灰黃色の泥釉を全体に掛け、円形状に灰黃色の泥釉がかかる。	内外面に少しある。	15世紀前半～15世紀後半	H15 - シ層	
	81		タイ		口縁部 15.0 -	粗粒子の色調は灰黄色で、赤褐色粒・黒色粒・白色粒の混入物を多量に含む。	全面に釉薬がかかるがまばらである。赤みの灰黄色と赤みの明るい灰黄色の釉薬を基調にしている。釉溜まり及び釉垂れは黒色を呈している。光沢あり。	ピンホールが内外面に僅かにある。	15世紀中	H15 - シ廃土	
	82				胴部 -	粗粒子の色調は青みの明るい灰色で、赤褐色・黒色・白色粒の混入物を多量に含む。	露胎 口唇部?に輪積みの痕が残る	ピンホールが内外面に僅かにある。	15世紀前半～15世紀後半	H15 - シ層	
挿図番号 図版番号	遺物	器種	部位	口径 器高 底径	素地	色調(焼成)	調整ほか		出土地点 出土層		
第77図 図版67	83	カムイヤキ	壺	-	胴部 -	微細な白色、茶色粒を含む粗粒子	外面:青灰色 芯部:暗赤褐色	壺胴部片。 外面:丁寧なナデ調整、線状痕。 内面:細かい線状痕。	H15 - シ廃土		
	84				胴部 -	微細な白色、茶色粒を含む粗粒子	外面:青灰色 芯部:暗赤褐色	壺胴部片。 外面:丁寧なナデ調整。 内面:線状痕、綾杉状の当て具痕。	H14 - テ表採		
	85		-	胴部 -	微細な白色粒子を多量混入。粗粒子。	外面:暗灰色 芯部:暗灰色	壺胴部片。 外面:丁寧なナデ調整。 内面:線状痕、綾杉状の当て具痕。	H14 - テ層			
	86			-	微細な白色粒子を多量混入。粗粒子。	外面:赤褐色 芯部:暗褐色	壺胴部片。 外面:丁寧なナデ調整。 内面:線状痕、綾杉状の当て具痕。	H15 - シ層			



第77図 う地区出土遺物7（褐釉陶器・黒釉陶器・カムイヤキ）

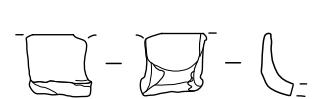


図版67 う地区出土遺物7（褐釉陶器・黒釉陶器・カムイヤキ）

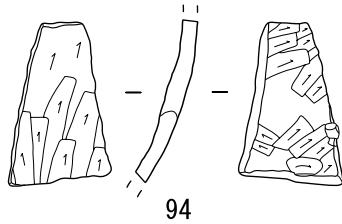
第19表 う地区遺物観察一覧 8 (グスク系土器)

単位 : cm

挿図番号 図版番号	遺物	器種	部位	口径 器高 底径	胎土		器面調整	備考	出土地点 出土層	
					色調・質	混入物				
第78図 図版68	87	グスク系土器	壺	口 縁 部	8.2 - -	外面はにぶい黄 橙色。内面は褐 灰色。	白色・橙色を少 し含む	不明	H 15 - シ 層	
	88		壺	口 縁 部	- - -	内外面とも暗赤 褐色	砂質。ガラス質 の白色鉱物、砂 粒、黒色鉱物を 含む。	内・外面ともナ デ調整か。	H 14 - テ 層	
	89		壺	口 縁 部	- - -	外面は暗赤褐色。 内面は赤黒色。	ガラス質白色鉱 物、白色・赤色 粒を少し含む。	不明	H 14 - テ 層	
	90		壺	胴 部	- - -	外面はにぶい黄 橙色。内面は灰 色。	白色・橙色を少 し含む	内・外面ともヘ ラ調整。	H 15 - シ 層	
	91		壺	胴 部	- - -	外面はにぶい黄 橙色。内面は浅 黄橙色。	白色粒を多く、 赤色を少し含む。	外面はナデ調整。 内面はヘラ調整。	外面に黒く変色 した部分がある。	H 15 - シ 層
	92		壺	胴 部	- - -	外面は赤褐色。 内面は褐灰色。	白色粒を多く、 橙色・雲母粒を 少し含む	外面はナデ調整。 内面はケズリ。	外面に指圧痕が 残る。	H 15 - シ 層
	93		壺	胴 部	- - -	外面は明赤褐色。 内面は褐灰色。	白色粒を少し含 む。	外面はナデ調整。 内面はヘラ調整 か。	外面に指圧痕が 残る。	H 15 - シ 層
	94		壺	胴 部	- - -	外面はにぶい褐 色。内面はにぶ い黄橙色。	白色粒を多く、 橙色を少し含む。	内・外面ともヘ ラ調整。		H 15 - シ 21層
	95		壺	胴 部	- - -	外面はにぶい黄 橙色。内面は浅 黄橙色。	橙色粒を多く、 白色粒を少し含 む。	外面はナデ・ヘ ラ調整。内面は ナデ調整。	内面に指圧痕が 残る。	H 15 - シ 廃土
	96		不明	胴 部	- - -	外面は赤褐色。 内面は明赤褐色。	白色粒を多く、 赤色・橙色粒を 少し含む	外面は横ナデ調 整。内面は横ハ ケメ。		H 14 - テ 層
	97		不明	胴 部	- - -	にぶい黄褐色	白色粒を多く、 橙色・雲母粒を 少し含む	内・外面ともナ デ調整。	内面に指圧痕が 残る。外面に黒 く変色した部分 がある。	H 14 - ト 層
	98		壺	胴 部	- - -	外面は赤褐色。 内面は灰色。	白色・半透明・ 雲母粒を少し含 む。	内・外面ともナ デ調整。		H 14 - ト 層
	99		壺	胴 部	- - -	外面は赤褐色。 内面はにぶい黄 橙色。	白色・橙色を少 し含む	不明		M 12 - ア 層
	100		壺	底 部	- - -	にぶい黄褐色	白色粒を多く、 赤色を少し含む。	内・外面ともヘ ラ調整。	内面に赤褐色の 混入物	J 13 - 才 表採



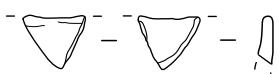
87



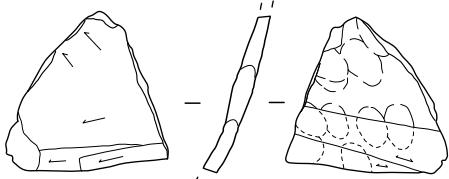
94



88



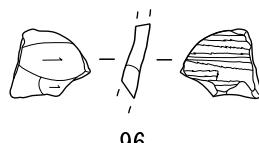
89



95



90



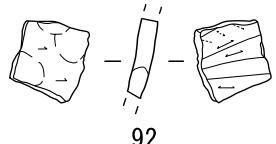
96



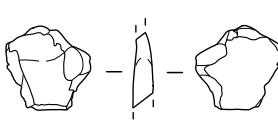
91



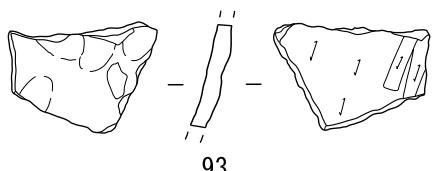
97



92



99

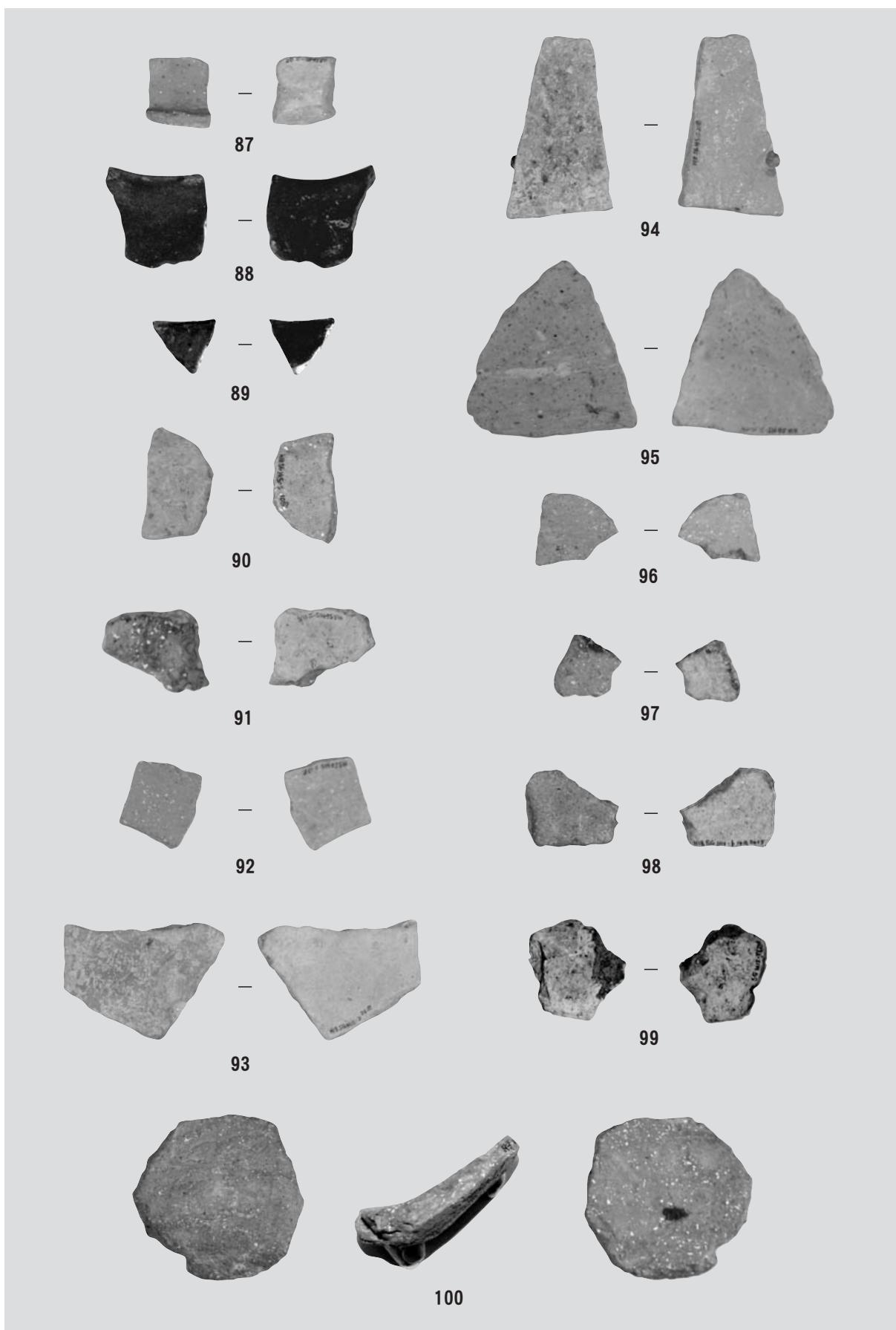


93



100

第78図 う地区出土遺物8(グスク系土器)

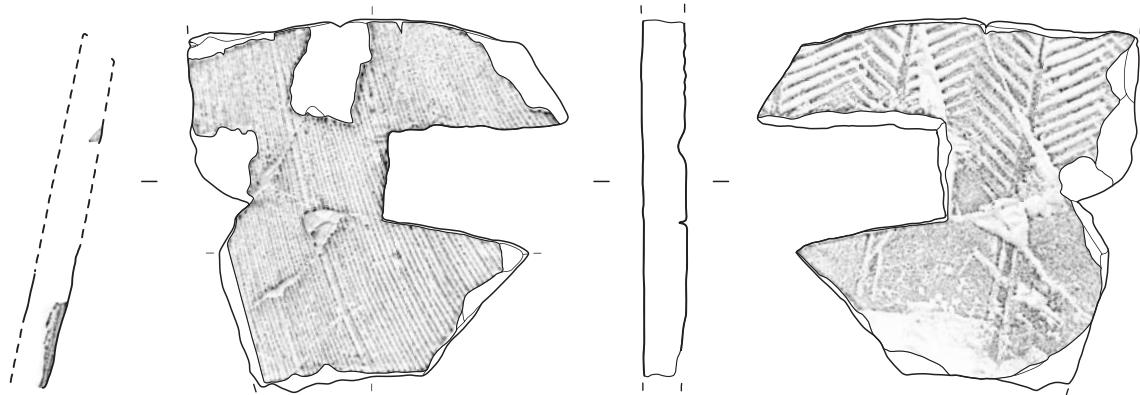


図版68 う地区出土遺物8(グスク系土器)

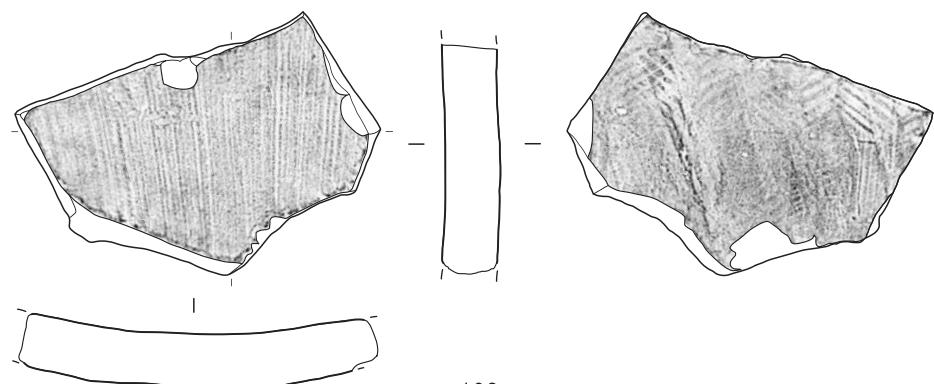
第20表 う地区遺物觀察一覧 9 (古瓦)

単位: cm

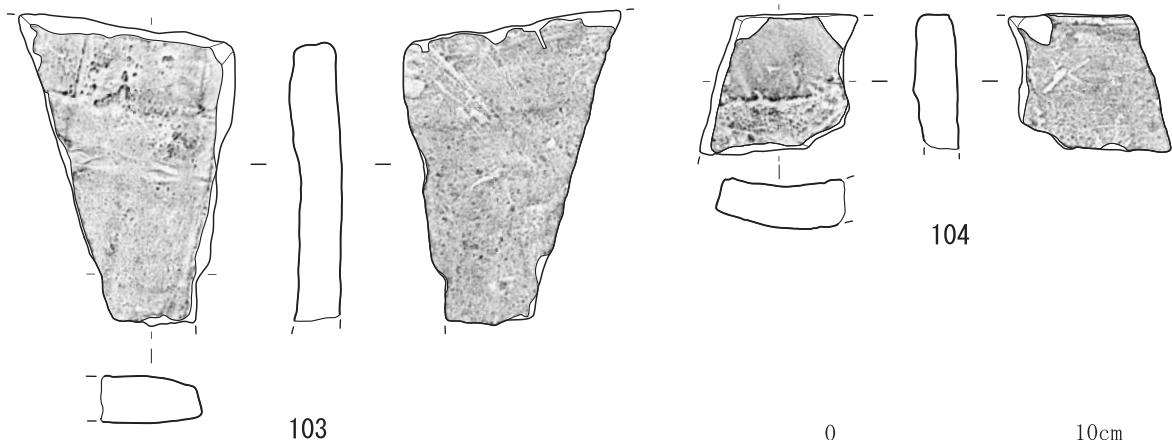
挿図番号 図版番号	分類	器種	胎土		調整	大きさ	出土地点 出土層	
			色調・質	混入物				
第79図 図版69	101	高麗系	平瓦	灰色	白色・黒雲母粒を少し含む。	凸面に羽状文様。 凹面は糸切りと布目。	厚み 1.5	H14 - テ層
			平瓦	橙色。中心は灰色	白色・橙色粒を少し含む。	凸面に羽状文様。 凹面は糸切りと布目。	厚み 2.2	H15 - シ層
	103	明朝系	平瓦	灰色	白色・橙色粒を少し含む。	凹面は布目と紐圧痕。 凸面はナデ。	厚み 1.9	H14 - テ表採
	104		平瓦	灰色	白色・黒色・ 橙色粒を少し含む。	凹面は布目とナデ。 凸面はナデと糸切り痕。	厚み 1.5	H14 - テ表採



101

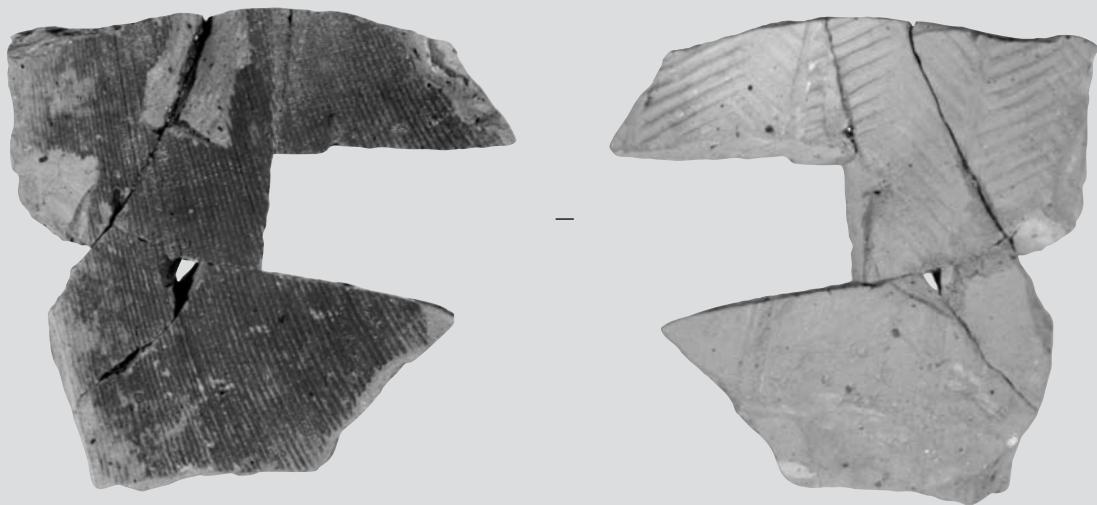


102

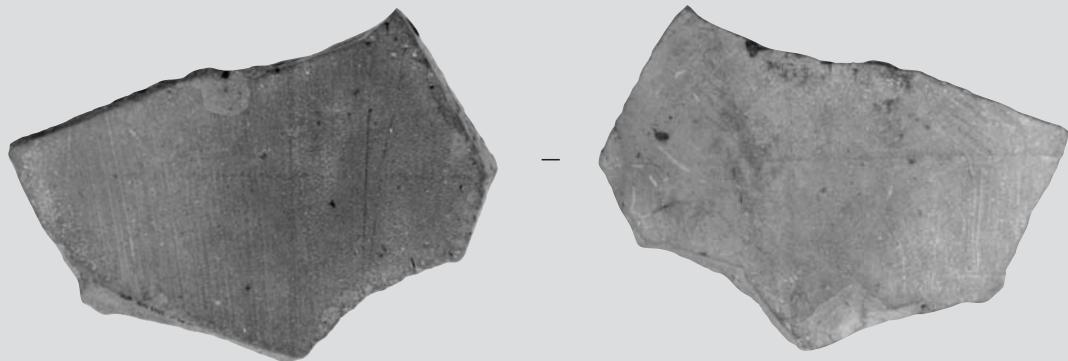


0 10cm

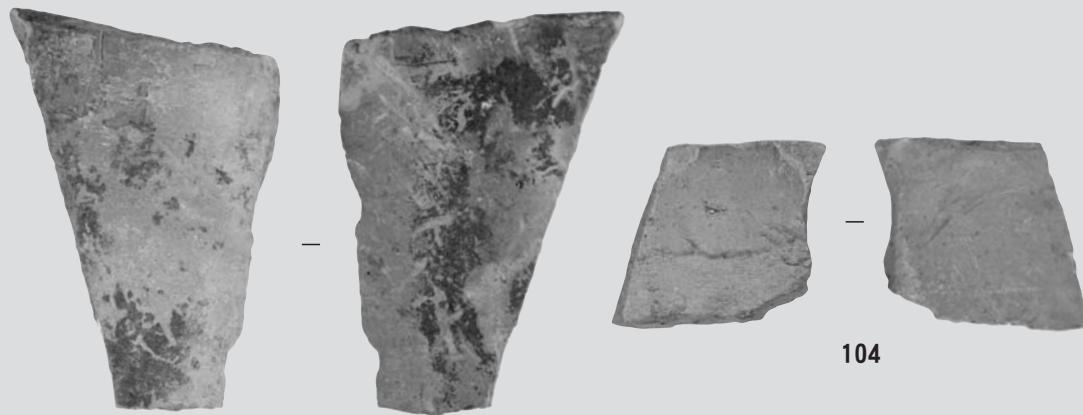
第79図 う地区出土遺物9(古瓦)



101



102



103

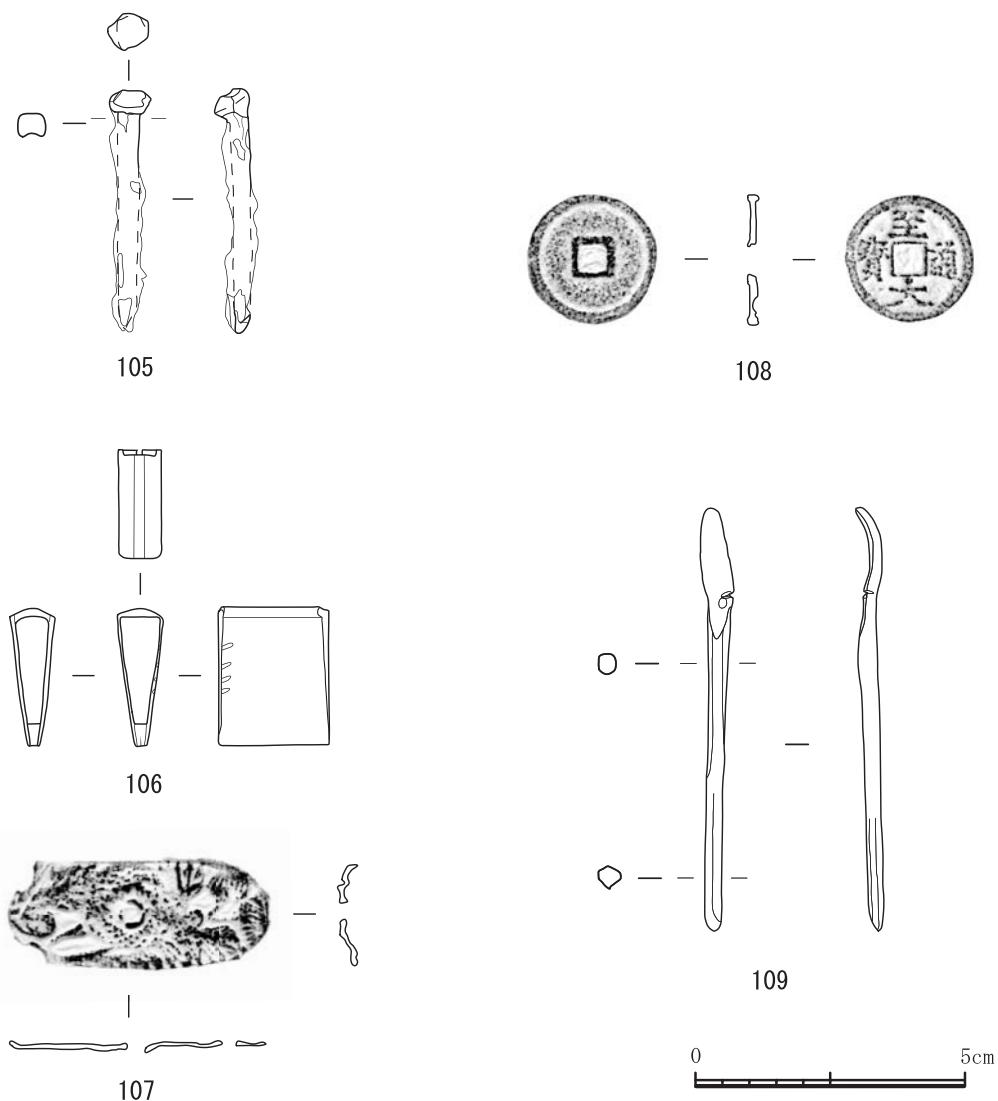
104

図版69 う地区出土遺物9（古瓦）

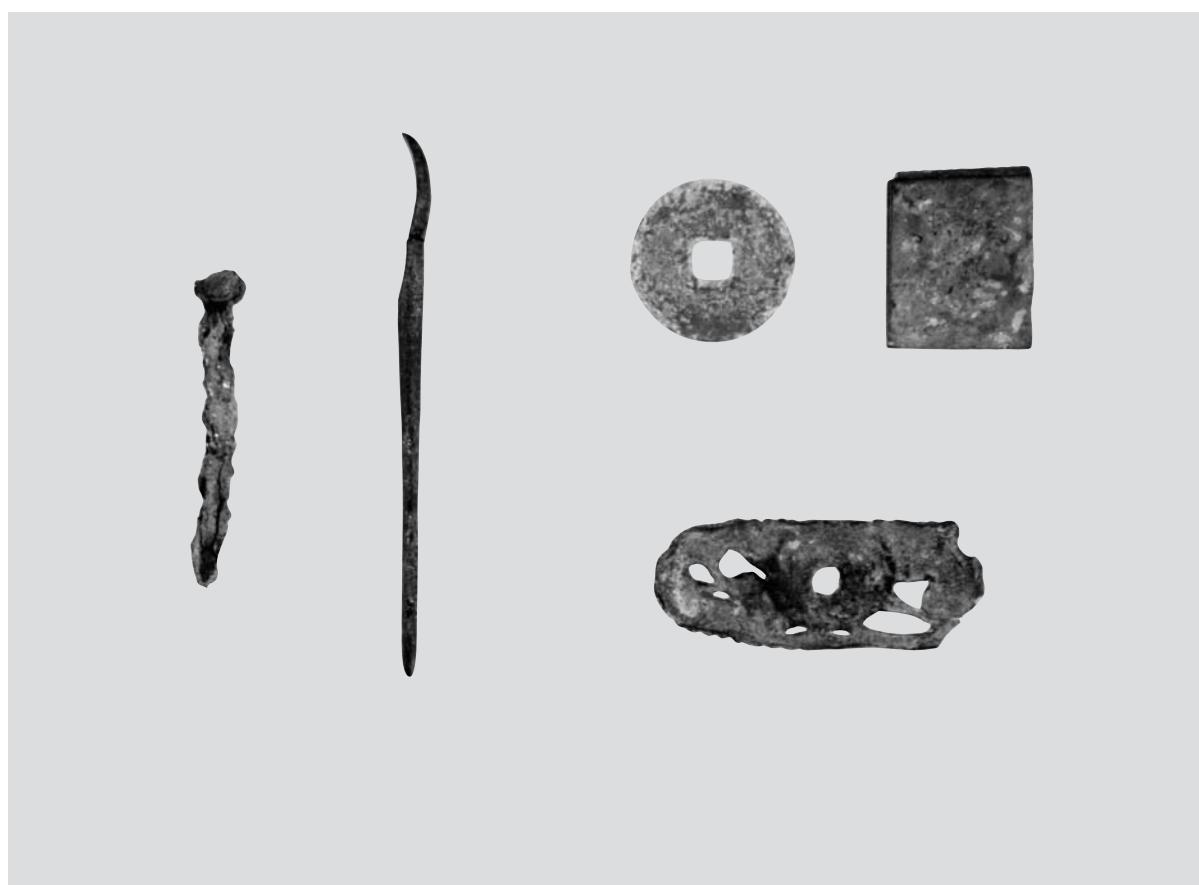
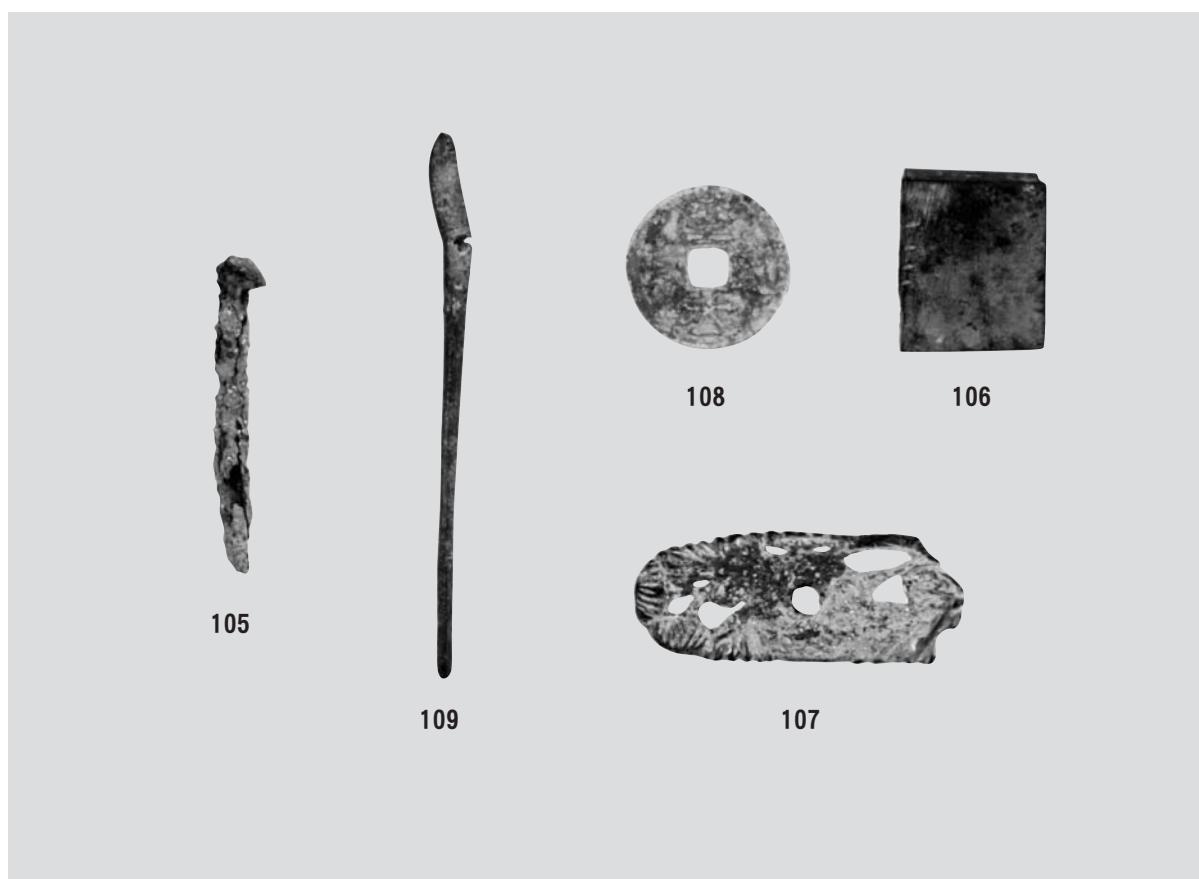
第21表 う地区遺物観察一覧10(金属製品)

単位: cm、g

挿図番号 図版番号	種類	素材	重量	長さ	幅・厚み	観察事項	出土地点 出土層
第80図 図版70	105 釘	鉄	2.3	4.6	幅 0.5 厚み 0.4	頭部がL字状の角釘と思われるが判然としない。鎧膨れや剥離などがみられ、縦横にヒビが走る。	H14 - ト層
	106 鋼	銅	7.3	2.6	幅 0.8 厚み 1~0.5	刀剣の鯉口で、完形品である。左側面に4条の小さな傷が見られる。	I14 - サ層
	107 八双金物	銅	4.8	縦1.9 横4.8	厚み 0.1	鎧の金具の一部で、菊のモチーフを用い、透かし彫りになっている。左上部に一条の深い鑿痕が見られる。全体的に青銅化しているが、表面部に鍍金の痕跡が確認できる。	I14 - サ層
	108 銭貨	銅	3.1	外径 2.4 内径 2.1 孔径 縦横0.7	外縁厚 1.2 内面厚 0.7	「至大通寶」 初鋳年代は1310年。全体が青緑色の鎧に覆われる。摩滅のためか「通」「寶」がやや不明瞭になっているが判読は可能。	I14 - サ層
	109 簪(男性用副簪)	銅	4.1	頭部 2.4 首 2.4 竿 2.6	頭部 5.5 首 4.4 竿 3	短めの簪で全長7.9cm。頭部は耳かき状で、柄(竿)の部分はやや扁平な六角形状に成形されている。首部と竿部の境目は不明瞭である。頭部は一部破損しており、左に緩く婉曲する。	I13 - コ層



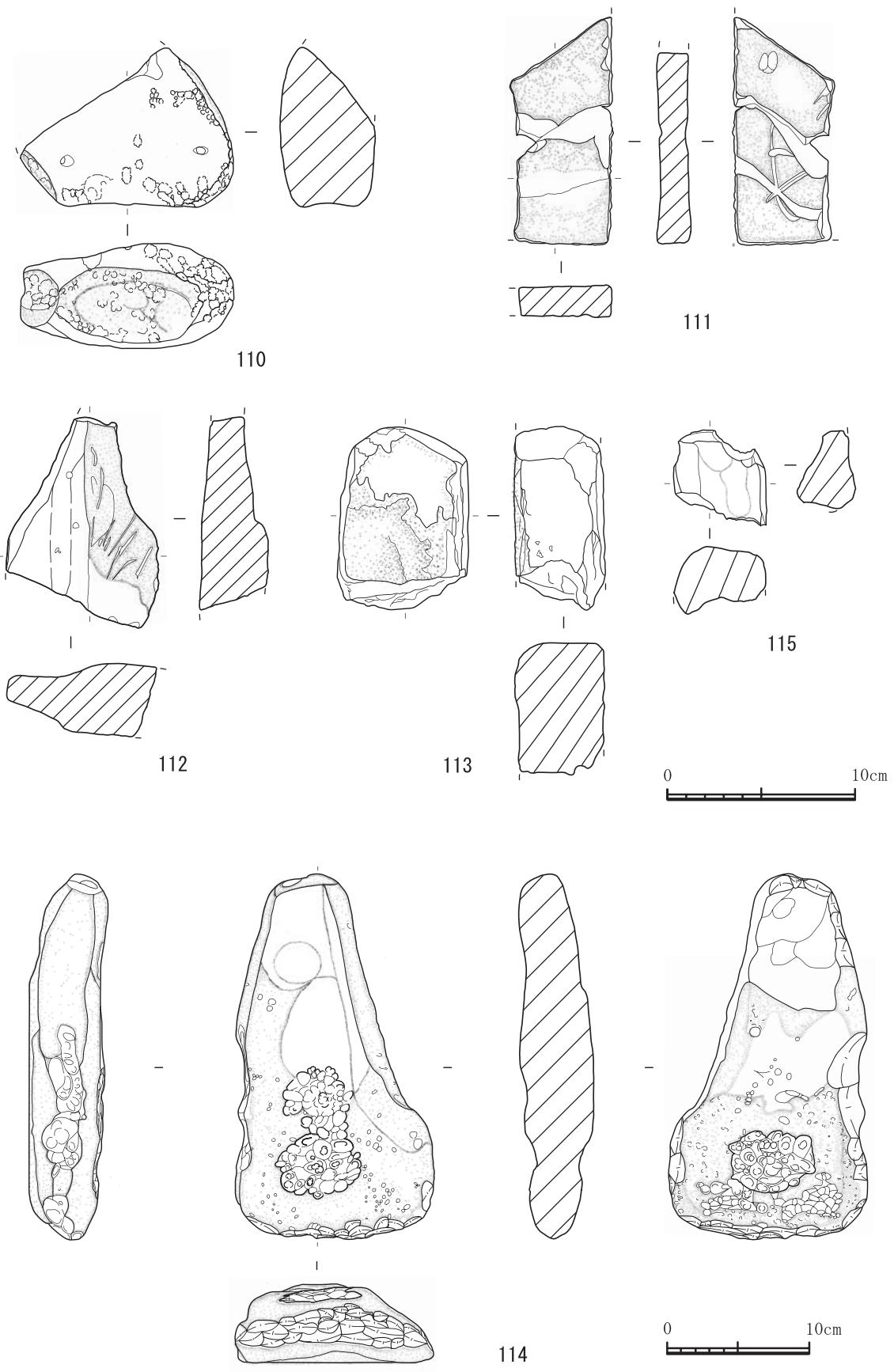
第80図 う地区出土遺物10(金属製品)



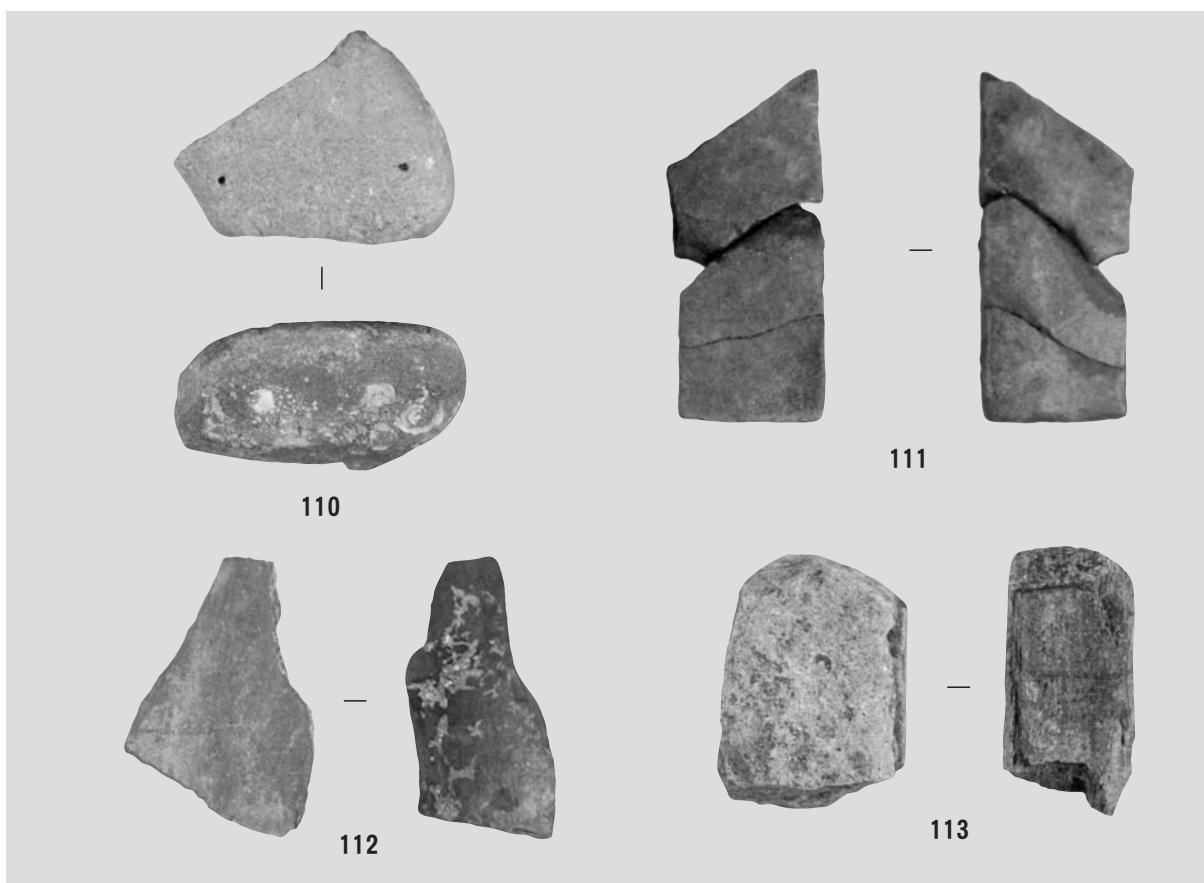
図版70 う地区出土遺物10(金属製品)

第22表 う地区遺物観察一覧11（石器）

挿図番号 図版番号	器種	石質	法量 (cm · g)				観察事項	出土地点 出土層	
			長さ	幅	厚さ	重量			
第81図 図版71	110	敲石	砂岩	8.5	11.1	5	520	破損品。平面形は略三角形、断面形は橢円形をなす礫である。上端部は欠失する。全面に敲打痕を有し、右下端部は使用頻度が高いと思われる。	H15—シ 廃土
	111	砥石	細粒砂岩	12.1	5.5	1.8	195.5	破損品。平面形、断面形は長方形を呈している。上端部および左側面が破損しているため、本来の形状は判然としない。表裏面とも砥面を有し、表面の下端部がややくぼんでいるため使用頻度が高いと思われる。裏面には、刃物痕が数カ所残る。	J13—オ ②層
	112	砥石	細粒砂岩	11.3	8.1	3.9	320	破損品。全体の形状は判然としない、表裏面に砥面を有している。裏面は一部砥面を有すが、自然面のままである。小碌ニゼの特徴で、黒雲母が多量に混入している。風化して赤褐色を呈している。	H15—シ ⑨層
	113	砥石	砂質変岩	9.8	6.9	4.9	540	破損品。平面形及び断面形は方形状を呈する。表面と左側面に砥面を有し、とくに表面は入念に使用されている。左側面の上端は砥面を有し、下端部は自然面のままである。右側面及び裏面は自然面のままである。	H15—シ ⑬層
	114	敲石兼 凹石	細粒砂岩	25.8	14	6.5	2400	大型の礫で偏平をなす。平面形は略三角形をなし、断面形が方形になる。両側面表裏面においては深い凹を形成し、その上部に磨面を呈す。凹は表面に2カ所裏面に1ヶ所、左側面に2ヶ所形成される。表面上端および、下端部の一部が火を受け、赤く変色している。	H14—チ ④層
	115	石製品	礫質砂	4.3	4.9	2.9	86.4	上下端部、裏面を欠失しており全体的な形状は不明である。欠失面には黒色や白色を呈する粒状の鉱物が観察され、手で触ると粒状の鉱物が剥離するほど脆い。表面はやや湾曲し、滑らかな面を有する。右側面はややザラザラとした面を有する。左側面は滑らかである。火を受けたと思われ全体的に黒い。本品の用途は残存資料を見る限り不明である。	H14—ト ⑨層



第81図 う地区出土遺物11(石器)

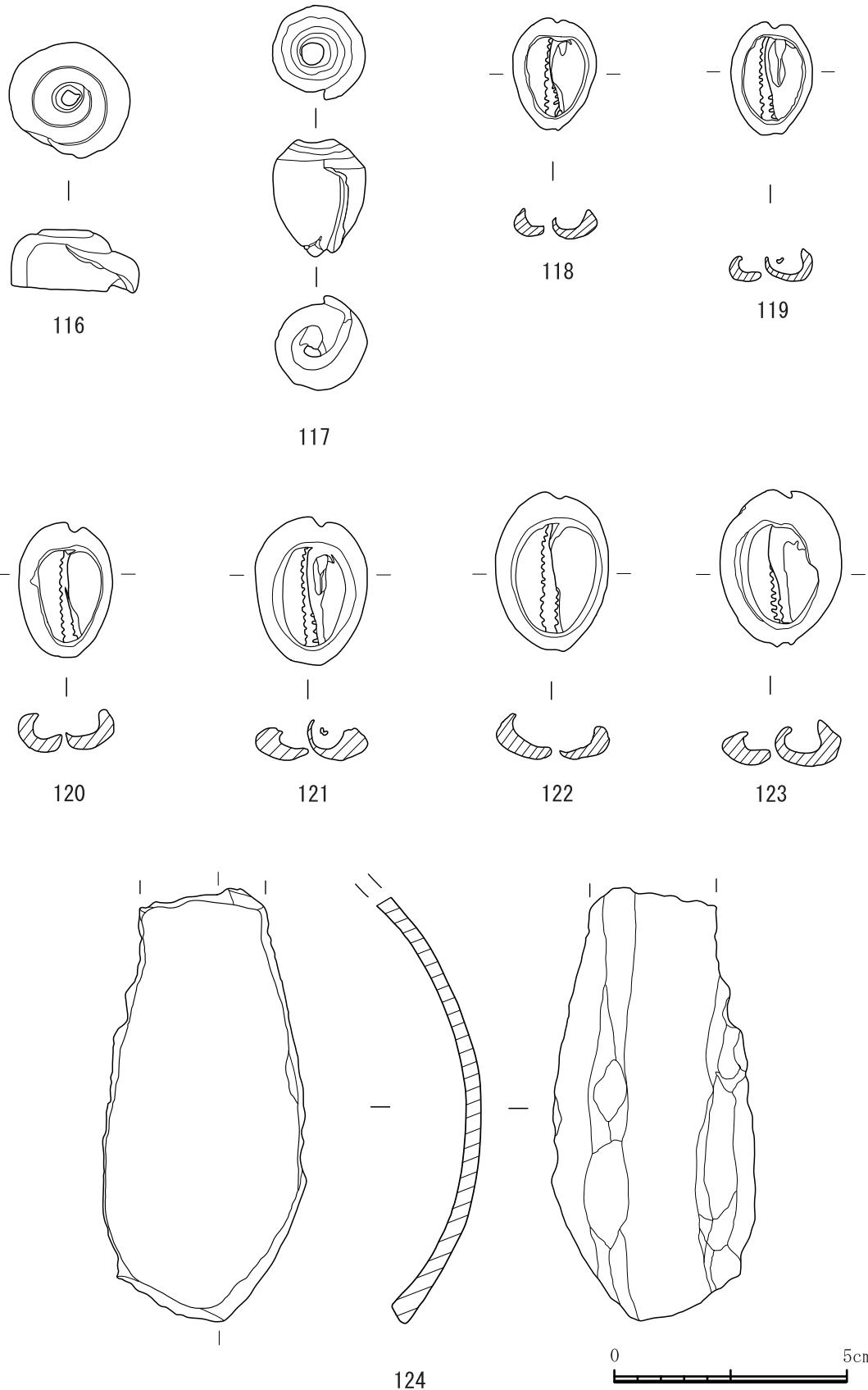


図版71 う地区出土遺物11(石器)

第23表 う地区遺物観察一覧12（貝製品）

単位：cm、g

挿図番号 図版番号		製品名	貝種	残存	法量					観察事項	出土地点 出土層	
孔長径	縦径				縦径	横径	厚み	重量				
	116	丸玉	マガキガイ	未	0.2	1.8	2.6	1.4	9.9	殻頂部が水平に打割され、縁の内側を丁寧に成形している。体部は比較的平坦に磨かれている。	H15-シ 廃土	
	117	臼玉	マダライモガイ	未	0.5	2.6	2.1	2.5	6	殻頂部が平坦に打割されている。	I14-サ ③層	
第82図 図版72		製品名	貝種	残存	法量					観察事項	出土地点 出土層	
					縦 (孔)	横 (孔)	縦	横	厚み			
	118	タカラガイ 製品	ハナマルユキダカラ	完	2.1	1.3	2.9	2.05	0.3	4.1	タカラガイの背面を除去したものである。孔の縁には摩滅がみられ、その使用が認められる。	I 13-コ ②層
	119		ハナマルユキダカラ	完	2.4	1.8	3.2	2.4	0.3	6.8	"	H15-シ ⑩層
	120		ハナマルユキダカラ	完	2.6	2	3.4	2.5	0.3	7.3	"	H15-シ ⑬⑭層
	121		ハナマルユキダカラ	完	1.7	1.3	2.4	1.8	0.2	2.8	"	H15-シ ⑩層
	122		ハナマルユキダカラ	完	1.9	1.3	2.4	1.7	0.2	2.2	"	H15-シ ⑩層
	123		ハナマルユキダカラ	完	2.4	1.9	3.4	2.6	1.3	8	"	M12-ア ⑦層
ヤコウガイ 製品		製品名	貝種	残存	法量					観察事項	出土地点 出土層	
					殻長	殻幅	深さ	重量				
	124		ヤコウガイ	未	9.4	4.4	1.7	37.1		柄上部を欠く欠損品。比較的小さな素材を使用。形状は略方形状を呈する。加工は外側螺肋に研磨がみられる以外は成形の打割痕を残す。	H15-シ ⑨層	



第82図 う地区出土遺物12(貝製品)

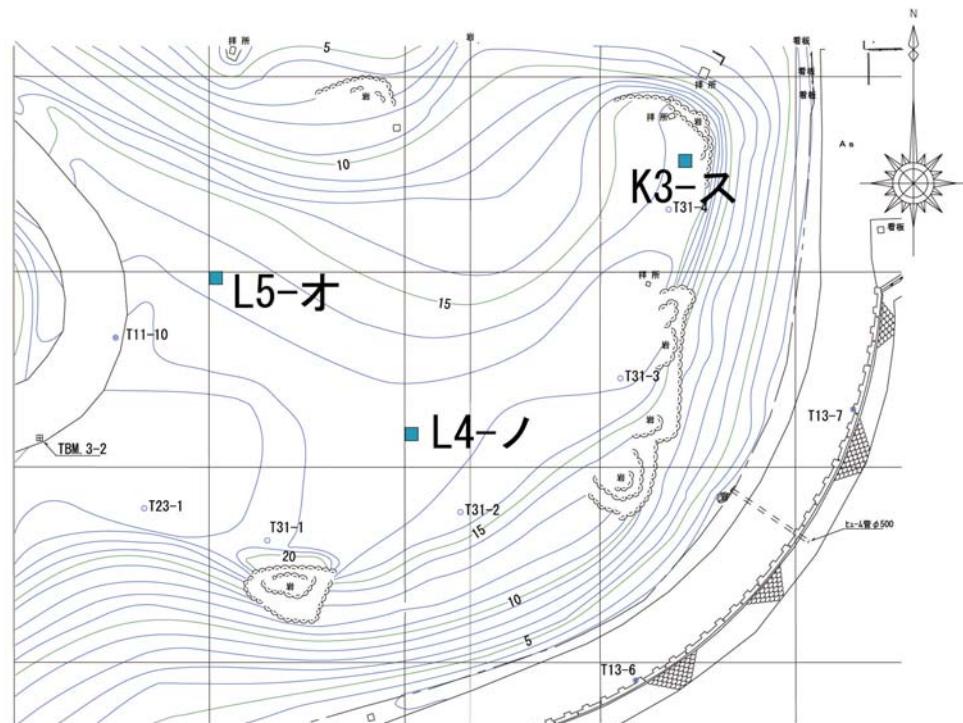


図版72 う地区出土遺物12(貝製品)

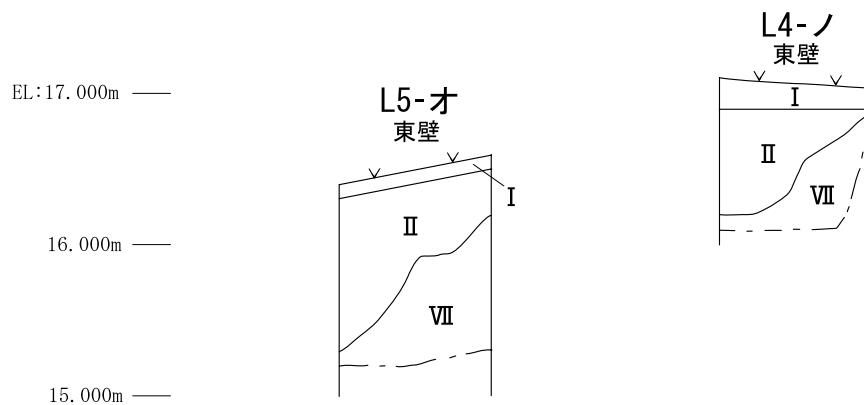
第6節 え地区

え地区は、瀬長島最東部の第2丘陵面に立地する地区であり、L5-才、L4-ノ、K3-スの3グリットによって構成されている。本地区では 層、層、層が確認された。

本地区は、全てのグリットで、米軍接收時代における掘削や造成を大きく受けている。1949(昭和24)年に米軍が作成した地形図(第4図)の同地区の標高より7~8m低くなっていることが確認できた。



第83図 え地区地形図



第84図 え地区簡易層序断面図

1. L 5-オ (平成18年度)

本調査区は、え地区の最西端に位置しており、～層まで確認された。EL = 15.600mで確認された層の琉球石灰岩の直上まで米軍接收時代の掘削や造成の影響を受けていた。

(1) 層序

層：現在の表土（層）

層：米軍造成土（層）

層：琉球石灰岩（層）

(2) 遺構

本グリットにおいては、確認されなかった。

(3) 出土遺物

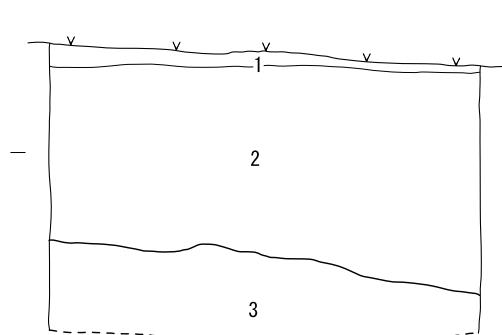
なし



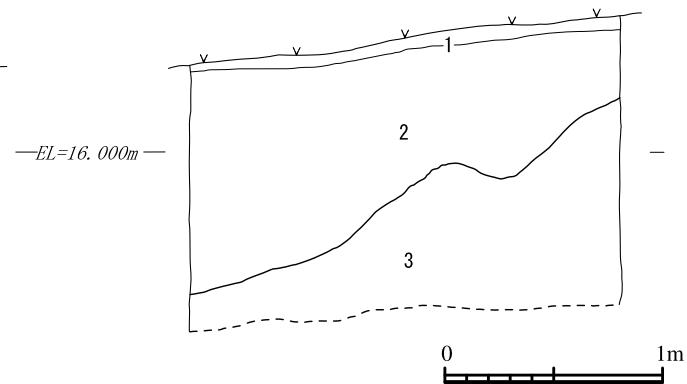
図版73 北壁



図版74 東壁



第85図 北壁



第86図 東壁

2. L 4-ノ（平成18年度）

本調査区は、え地区の中央に位置しており、～層まで確認された。EL = 16.200mで確認された層の琉球石灰岩の直上まで米軍接收時代の掘削や造成の影響を受けていた。

(1) 層序

層：現在の表土（層）

層～層：米軍造成土（層）

層：琉球石灰岩（層）

(2) 遺構

本グリットにおいては、確認されなかった。

(3) 出土遺物

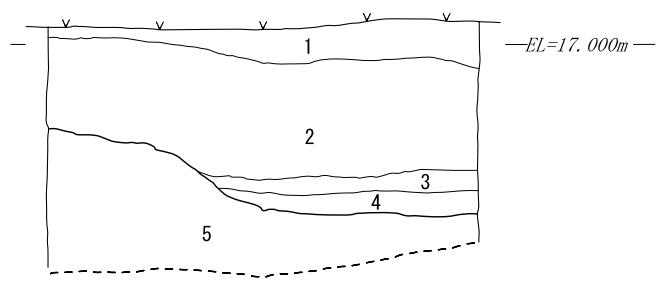
なし



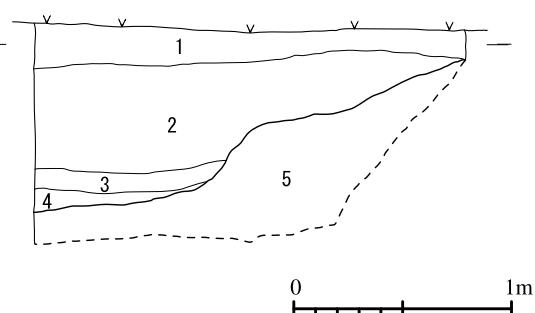
図版75 北壁



図版76 東壁



第87図 北壁



第88図 東壁

3. K 3-ス (平成18年度)

本調査区は、え地区の最東端に位置しており、層しか確認することができなかった。

(1) 層序

層：現在の表土（層）

(2) 遺構

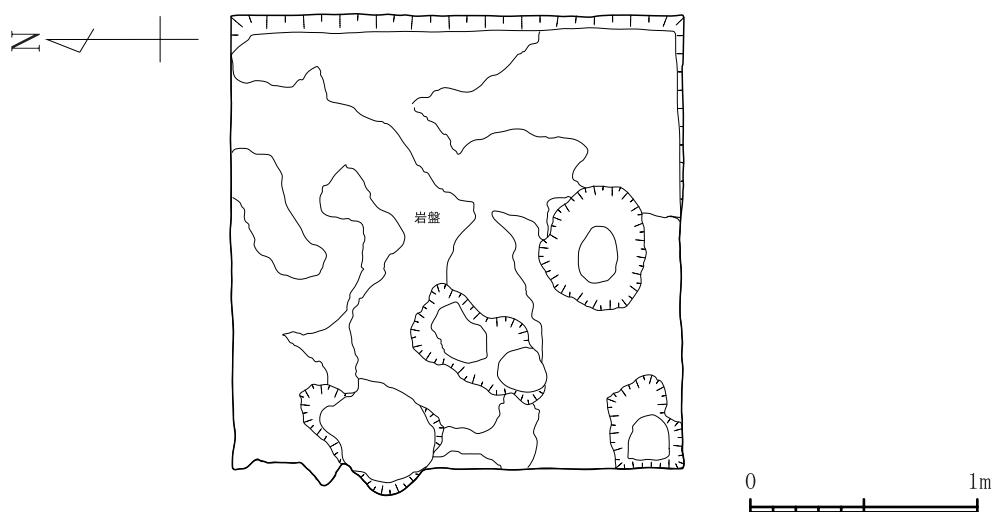
本グリットにおいては、確認されなかった。

(3) 出土遺物

なし



図版77 検出状況

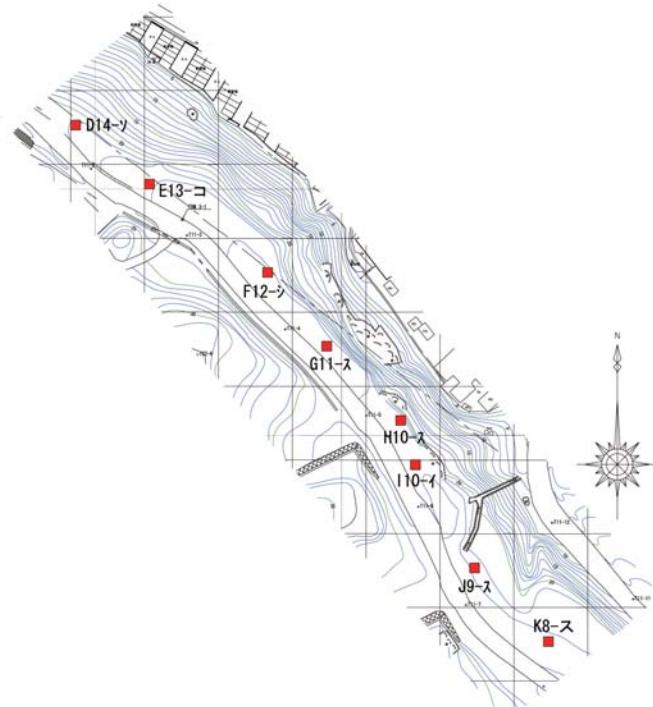


第89図 検出状況

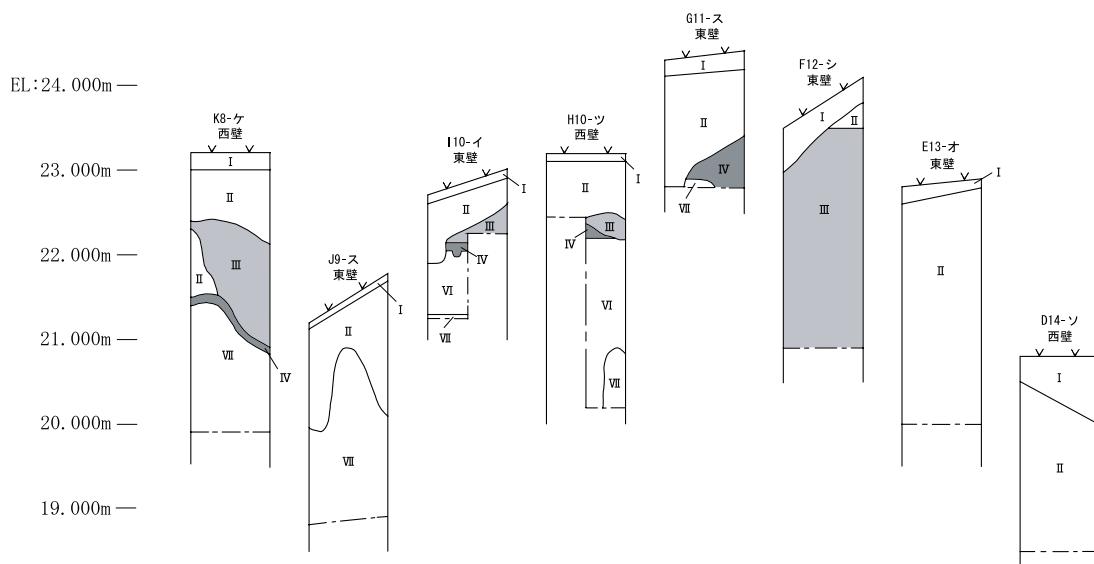
第7節 お地区

お地区は、瀬長島中央部の第2丘陵面に立地する地区であり、K8-ケ、J9-ス、I10-イ、H10-ツ、G11-ス、F12-シ、E13-オ、D14-ソの8グリットによって構成されている。本地区では～層、層～層まで確認された。K8-ケ、H10-ツ、F12-シで北西に傾斜する形で層の近代～戦前の耕作土が確認できた。また、I10-イ、H10-ツ、G11-スで北西に傾斜する形で層のグスク時代の旧表土を確認することが出来た。

I10-イ、G11-スにおいては、ピットの遺構も検出された。



第90図 お地区地形図



第91図 お地区簡易層序断面図

1. K 8-ケ (平成18年度)

本調査区は、お地区の最東端に位置しており、～層まで確認された。EL = 22.500mで層の近代～戦前の耕作土を北西に傾斜する形で確認した。また、同じく北西に傾斜する形でEL = 21.500mの高さで層のグスク時代の旧表土(- 2層)を確認した。

(1) 層序

層：現在の表土(層)

層～層：米軍造成土(層)

層：近代～戦前の耕作土(層)

層：グスク時代の旧表土(- 2層)

層：琉球石灰岩(層)

(2) 遺構

本グリットにおいては、確認されなかった。

(3) 出土遺物

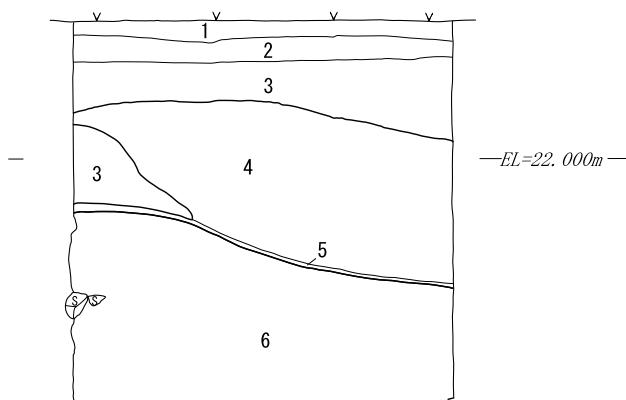
沖縄産陶器



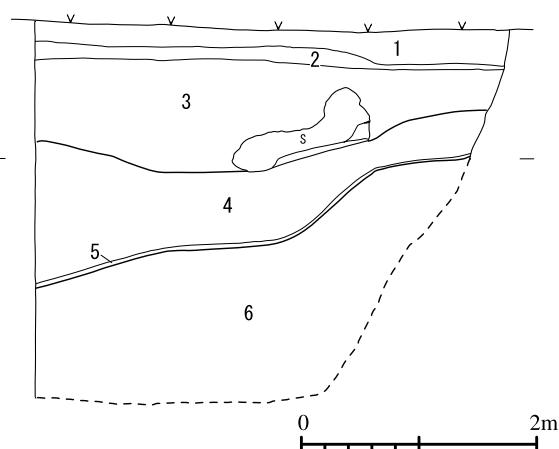
図版78 西壁



図版79 北壁



第92図 西壁



第93図 北壁

2. J 9-ス (平成18年度)

本調査区は、お地区の東部に位置しており、～層まで確認された。EL = 20.000mで米軍接收時代の埋設管と思われる配管を確認した。

(1) 層序

層：現在の表土（層）

層～層：米軍造成土（層）

層：琉球石灰岩（層）

(2) 遺構

本グリットにおいては、確認されなかった。

(3) 出土遺物

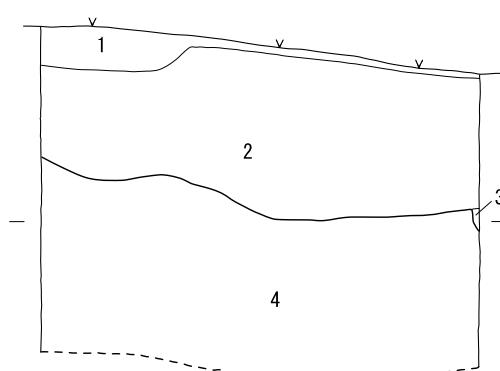
なし



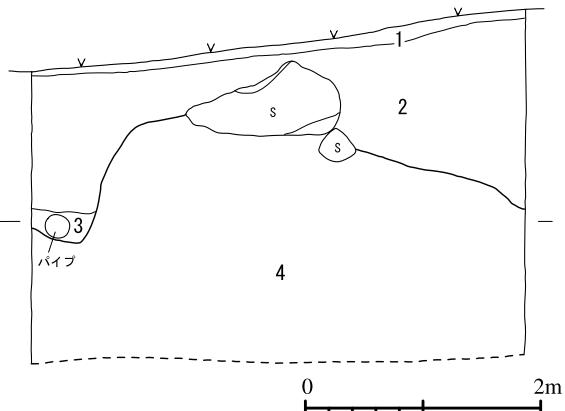
図版80 北壁



図版81 東壁



第94図 北壁



第95図 東壁

3. I 10-イ (平成18年度)

本調査区は、お地区の中央に位置しており、～層まで確認された。EL = 22.500mで確認された層のグスク時代の旧表土(- 2層)を確認した。北東側の一部で米軍接收時代の埋設管と思われる配管により 層～層は削られていた。

(1) 層序

層：現在の表土(層)

層～層：米軍造成土(層)

層：近代～戦前の耕作土(層)

層：グスク時代の旧表土(- 2層)

層～層：島尻マージ層(- 1層)

層：琉球石灰岩(層)

(2) 遺構

本グリットにおいては、北壁及び東壁でピットが確認された。

(3) 出土遺物

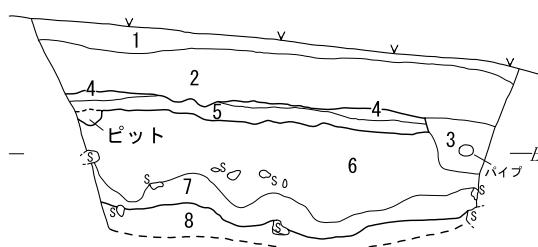
青磁、白磁、青花、グスク系土器、黒釉陶器、褐釉陶器、沖縄産陶器



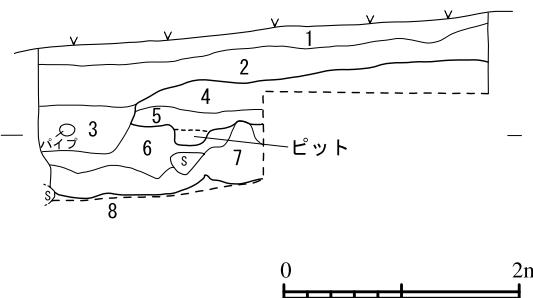
図版82 北壁



図版83 東壁



第96図 北壁



第97図 東壁

4. H10-ツ（平成18年度）

本調査区は、お地区の中央に位置しており、～層まで確認された。EL = 22.500mで層～層の近代～戦前の耕作土（層）を確認した。また、EL = 22.400mで層のグスク時代の旧表土（-2層）を確認した。

(1) 層序

- 層：現在の表土（層）
- 層：米軍造成土（層）
- 層～層：近代～戦前の耕作土（層）
- 層：グスク時代の旧表土層（-2層）
- 層～層：島尻マージ層（-1層）
- 層～層：島尻マージ層（-2層）
- 層：島尻マージ層（-3層）
- 層：琉球石灰岩（層）

(2) 遺構

本グリットにおいては、確認されなかった。

(3) 出土遺物

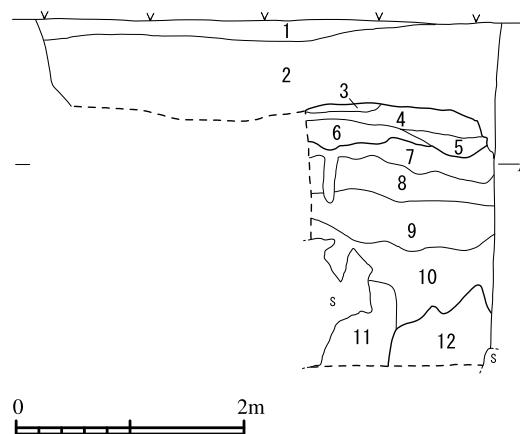
青磁、黒釉陶器、褐釉陶器、沖縄産陶器、石器



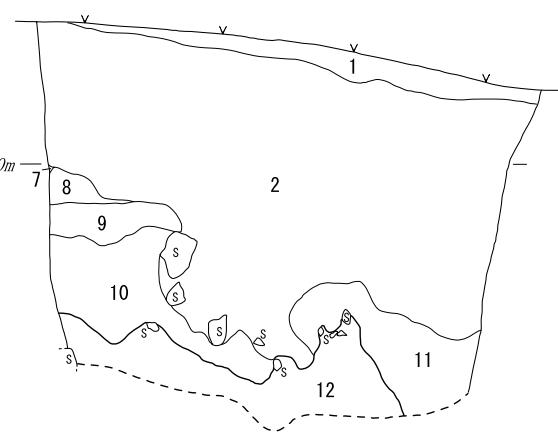
図版84 西壁



図版85 北壁



第98図 西壁



第99図 北壁

5. G11ース (平成18年度)

本調査区は、お地区の中央に位置しており、～層まで確認された。EL = 23.200m ~ 23.400mで確認された層～層でグスク時代の旧表土(- 2層)を確認した。

(1) 層序

層：現在の表土(層)

層～層：米軍造成土(層)

層～層：グスク時代の旧表土(- 2層)

層：島尻マージ層(- 1層)

層：琉球石灰岩(層)

(2) 遺構

本グリットにおいては、グリットの中央でピットが確認された。

(3) 出土遺物

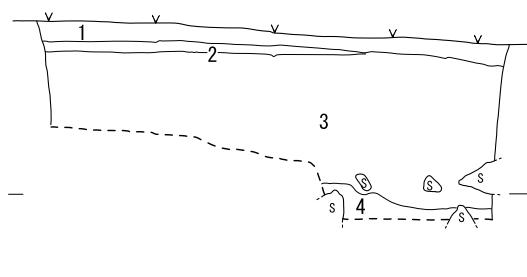
青磁、黒釉陶器、本土産磁器



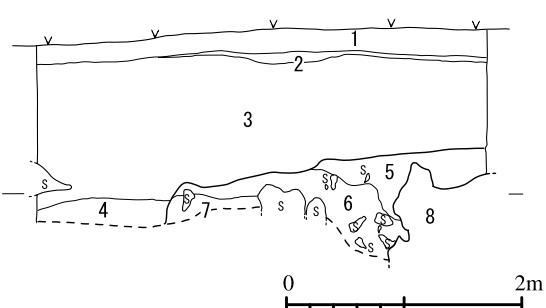
図版86 北壁



図版87 東壁



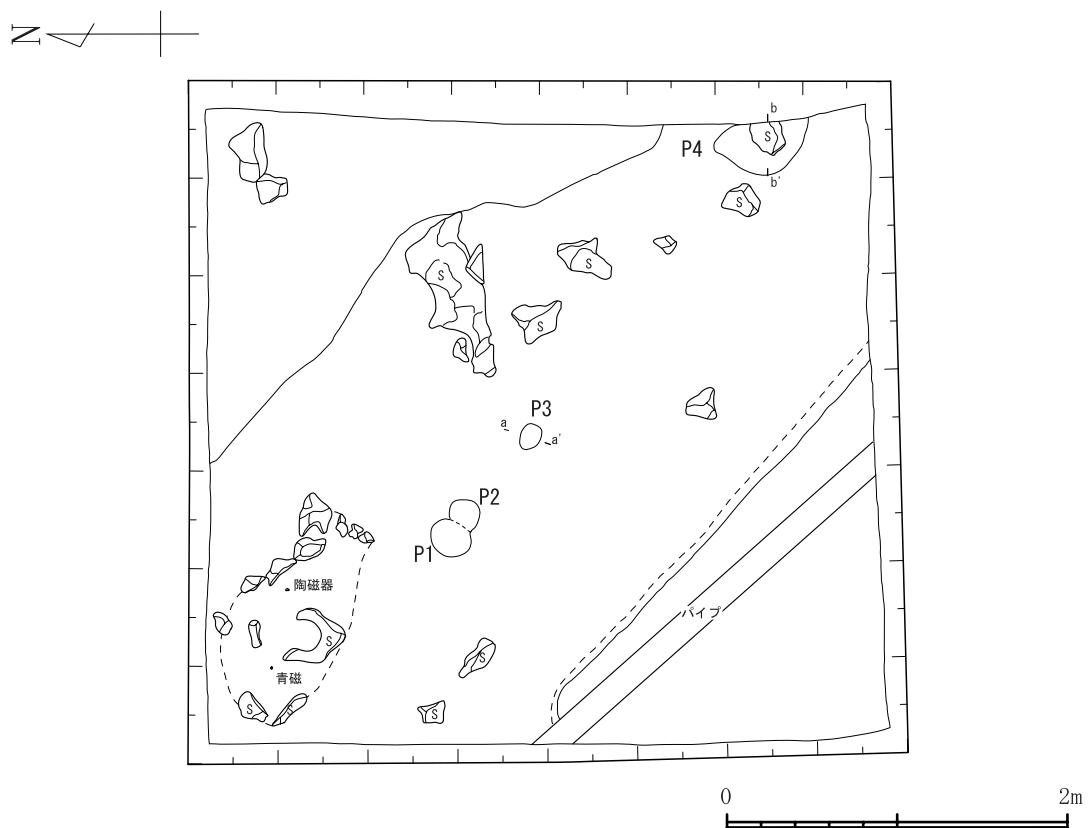
第100図 北壁



第101図 東壁



図版88 遺構検出状況



第102図 遺構平面図

G11ースの遺構

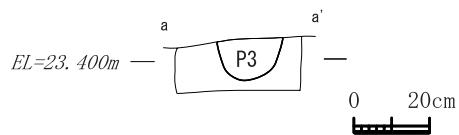
基盤の 層から 4 つのピットが確認され、各ピットの性質を明らかにするため、その内の 2ヶ所を選択してピットを半裁した。覆土の状況などから上層のグスクに相当するピットと考える。遺物は出土していない。

P 3 (第103図、図版89)

7.5YR3/4 暗褐色シルト質 土坑深度11cm

7.5YR3/4 暗褐色シルト質を基本とし、7.5YR4/4褐
色シルト質の団粒 (0.5~10mm) マージを含んでお
り、ややまだら状である。

1mm 以下の石灰岩粒と黒色粒子 (マンガン?) を僅
かに含んでいる。



第103図 P 3 断面図

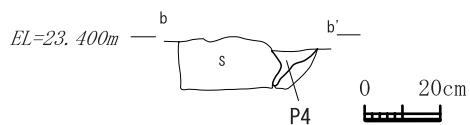


図版89 P 3

P 4 (第104図、図版90)

10YR3/3 暗褐色シルト質 土坑深度10cm

10YR3/3 暗褐色シルト質に、マージを僅かに含む。



第104図 P 4 断面図



図版90 P 4

6. F 12-シ (平成18年度)

本調査区は、お地区の西側に位置しており、～層まで確認された。EL = 23.700mで確認された層の近代～戦前の耕作土(層)を確認した。

(1) 層序

層：現在の表土(層)

層：米軍造成土(層)

層：近代～戦前の耕作土(層)

(2) 遺構

本グリットにおいては、確認されなかった。

(3) 出土遺物

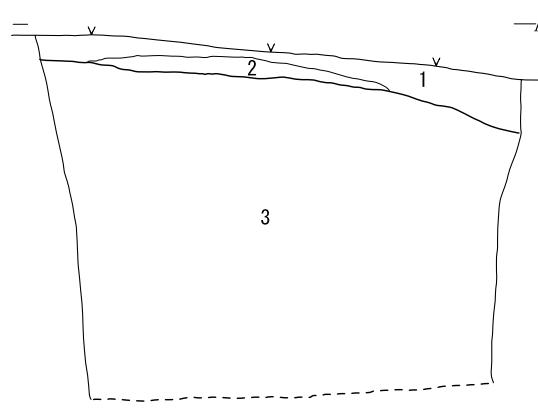
青磁、本土産磁器



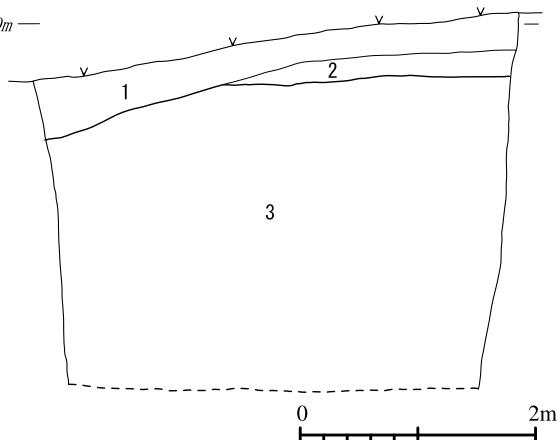
図版91 北壁



図版92 東壁



第105図 北壁



第106図 東壁

7. E13-オ (平成18年度)

本調査区は、お地区の西側に位置しており、～層まで確認された。EL = 20.000mまで米軍接收時代の掘削や造成の影響を受けていた。

(1) 層序

層：現在の表土（層）

層～層：米軍造成土（層）

層：島尻層群豊見城層（層）

(2) 遺構

本グリットにおいては、確認されなかった。

(3) 出土遺物

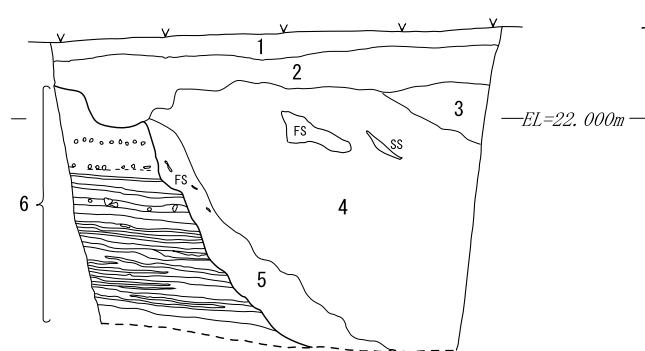
なし



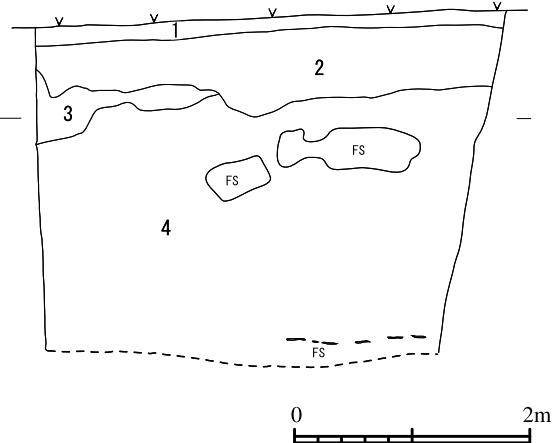
図版93 北壁



図版94 東壁



第107図 北壁



第108図 東壁

8. D14-ソ (平成18年度)

本調査区は、お地区の最西端に位置しており、～層まで確認された。層の表土の下に米軍接收時代の造成と思われる黄白色砂質土を確認したが、崩壊する恐れがあつたため簡易的な調査を行つた。

(1) 層序

層：現在の表土（層）

層：米軍造成土（層）黄白色砂質土

(2) 遺構

本グリットにおいては、確認されなかつた。

(3) 出土遺物

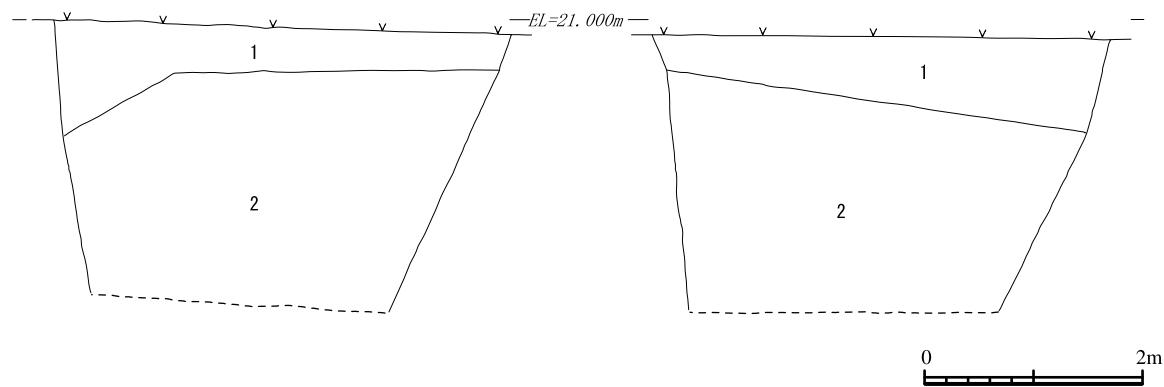
なし



図版95 南壁



図版96 西壁



第109図 南壁

第110図 西壁

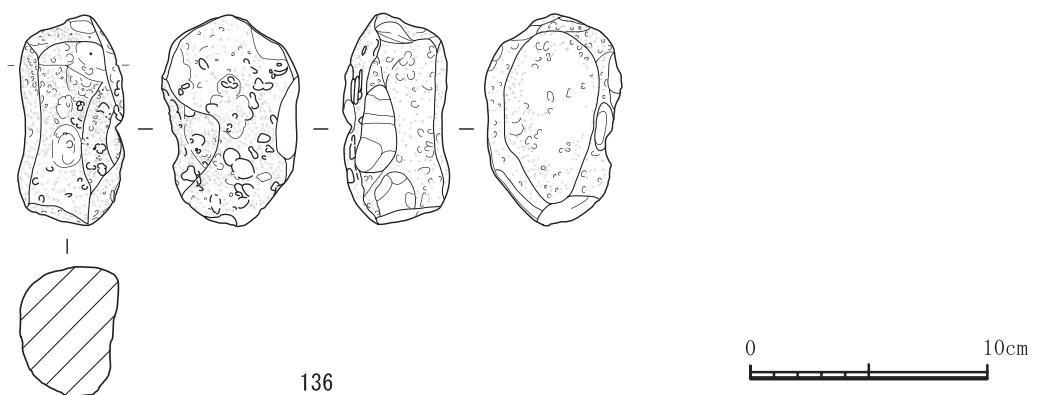
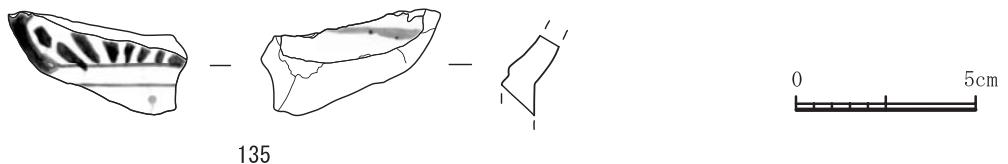
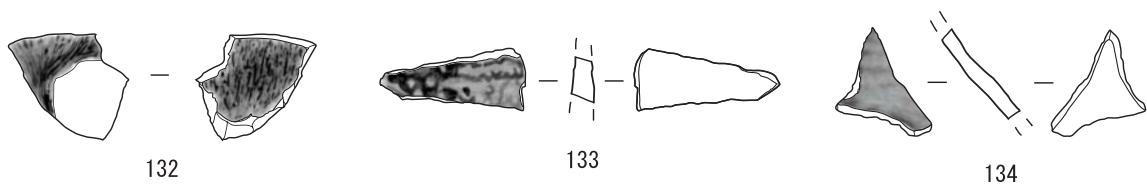
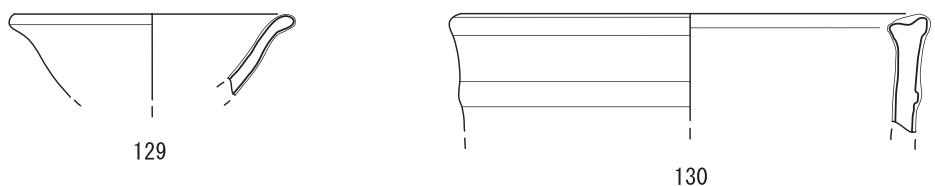
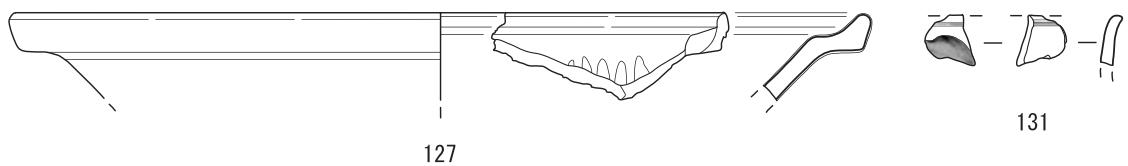
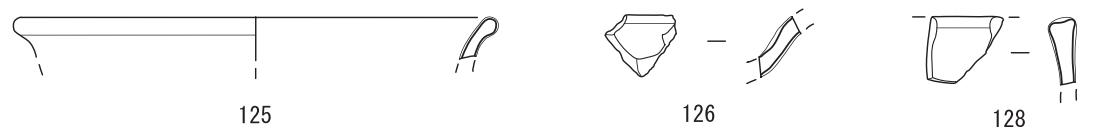
第24表 お地区遺物出土一覧

	グリット名	層序	遺物名	青磁	白磁	青花	黒釉陶器(天目)	褐釉陶器など	沖縄産施釉陶器	沖縄産無釉陶器	陶質土器	本土産磁器	石器(敲打器)	石器(石皿)	出土遺物層序計
お地区	K8-ケ	表採							1						1
	I10-イ	表採									1				1
		層	1					2						1	4
		層	5	1	1	1	1	1	2	4	1				16
		層	2	1				1							4
	H10-ツ	層	4			1							1		6
		層	1												1
		廃土	3				1	1							5
	G11-ス	表採										1			1
		層	1				1								2
	F12-シ	表採	1												1
合計			18	2	1	4	5	3	4	2	1	1	1		42

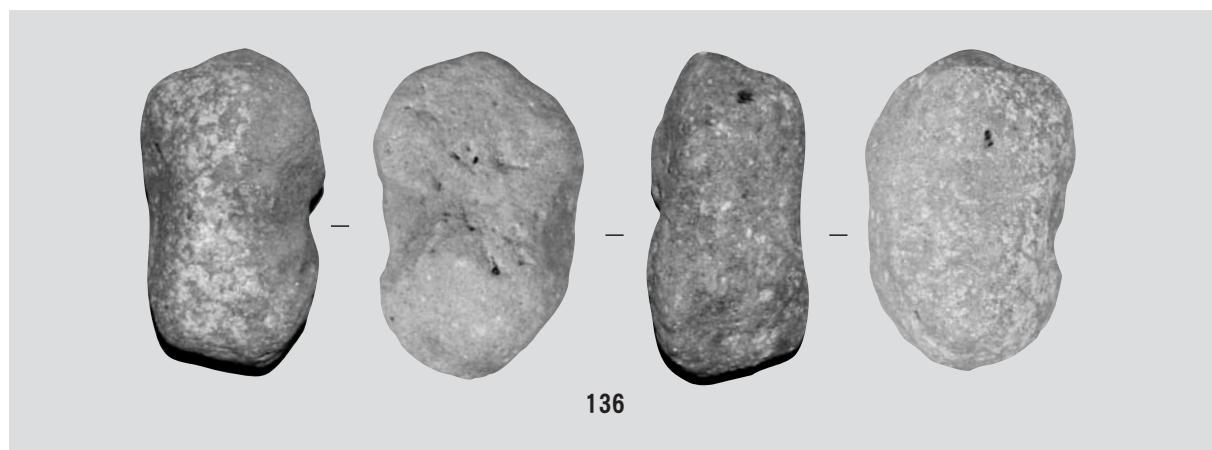
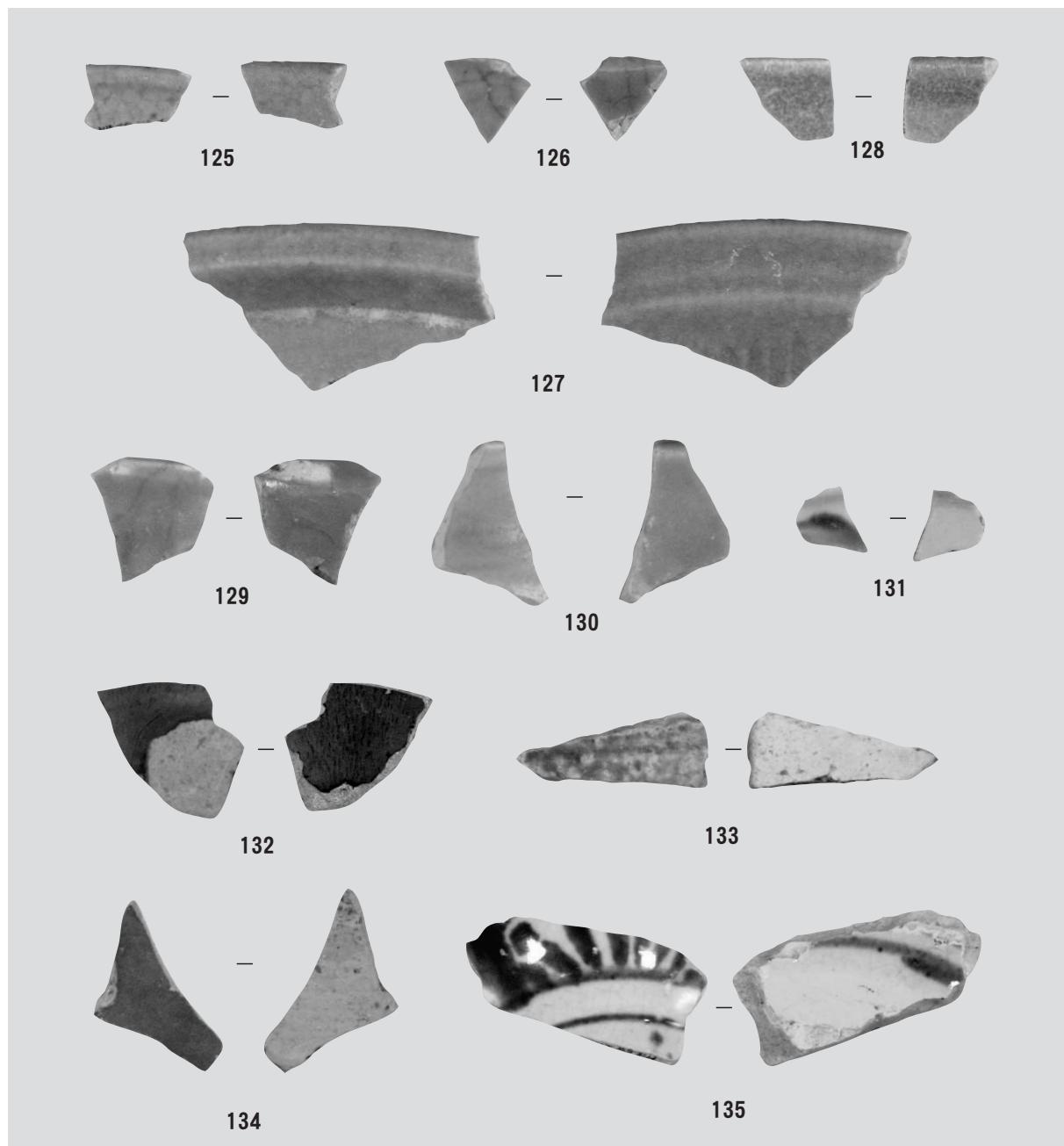
第25表 お地区遺物観察一覧

挿図番号 図版番号	種類	器種	観察事項	出土地点 出土層
第111図 図版97	125	青磁 碗	福建省系。無文外反碗 - b にあたる。素地は淡黄色で粗粒子。釉色は明るい灰黄緑色。外面に粗い貫入が見られる。口径は13.5cm。15世紀前半～後半。	I 10-イ 層
	126	青磁 皿	福建省系。無文口折皿にあたる。素地は灰白色の粗粒子で茶色の混入物を含む。釉色は黄みの明るい灰緑色。15世紀前半～15後半。	H 10-ツ 層
	127	青磁 盤	福建省系。鍔縁盤 - a にあたる。素地は灰白色微粒子で茶色の混入物を含む。釉色は明るい灰黄緑色。内外面に細かい貫入が見られる。口径は24.1cm。15世紀中葉～後半。	F 12表採

挿図番号 図版番号	種類	器種	観察事項	出土地点 出土層	
第111図 図版97	128	青磁	香炉	福建省系。三足香炉にあたる。素地は灰白色粒子で茶色の混入物を含む。内外面に細かい貫入が見られる。全体的に風化しており、緑みのうすい黄色を呈しているが、本来の釉色は緑みの暗い灰黄緑色。15世紀前半～後半。	H 10-ツ 層
	129	青磁	小碗	龍泉窯系。無文外反小碗にあたる。素地は灰白色と淡黄色の微粒子が混ざり、白色、茶褐色の混入物を含む。釉色は黄みの明るい灰緑色。15世紀前半～後半。	I 10-イ 層
	130	青磁	香炉	龍泉窯系。三足香炉にあたる。素地は灰白色微粒子で、茶色の混入物を含む。釉色は黄みの明るい灰緑色。外体面上部に幅2mmの凸帯文が見られる。口径は13.4cm。14世紀後半～15世紀前半。	G 11-ス 層
	131	青花	小杯	外反口縁杯である。口唇部外面上部に釉溜まりがみられ、その下に文様が見られるが小破片のため不明。外反する口唇部内面に1条の界線を巡らす。素地は灰白色的細粒子で、茶・黒の混入物を含む。。コバルトの発色はやや鮮明で、灰青色を呈す。貫入はみられない。16世紀～17世紀。	I 10-イ 層
	132	黒釉陶器	碗	産地不明。禾目状天目にあたる。素地は灰色と白色の粗粒子で、褐色粒の混入物を僅かに含む。全面に釉薬がかかる。黒色の釉薬の上に褐色の釉薬が施され、褐色の釉薬が禾目文様を作り出している。若干光沢あり。14世紀後半～15世紀中葉。	H 10-ツ 層
	133	褐釉陶器	壺	中国産である。胎土は明るい浅黄橙色と黄灰色で黒色・半透明の混入物を含む。外面には全体的に黄色みをおびた釉がかかるが、釉だまりの部分は暗オリーブ色を呈している。内面は泥釉がかかる。外面に貫入が少し見られる。15世紀前半～後半。	I 10-イ 層
	134	褐釉陶器	壺	中国産である。胎土は橙色で赤白色粒の混入物を含む。外面には暗灰黄色の釉がかかる。内面は露胎。15世紀前半～後半。	I 10-イ 層
	135	沖縄産陶器	碗	壺屋でつくられた施釉の陶器である。高台脇から胴部にかけて呉須（ふかい青紫）で二本の圈線を巡らし、その上部に菊花？の文様を施す。見込み付近に一本の圈線が見られるが、二重の圈線が巡らされていたと思われる。見込みの蛇の目釉剥ぎ部分に白化粧が残る。素地は淡黄色。釉種は白化粧+呉須+透明釉で施釉。	I 10-イ 層
	136	石器	敲打器	平面形が橢円形、断面は隅丸方形を呈する細粒砂岩である。上下端内側、表裏面に敲打痕を有する。上下端は平坦をなすほどに敲打され裏面においては中央部にくぼみを有する。両側面には抉りがみられ、握り部を作り出している。長さ8.9cm、幅5.8cm、厚さ4.4cm、重量275g。	H 10-ツ 層



第111図 お地区出土遺物

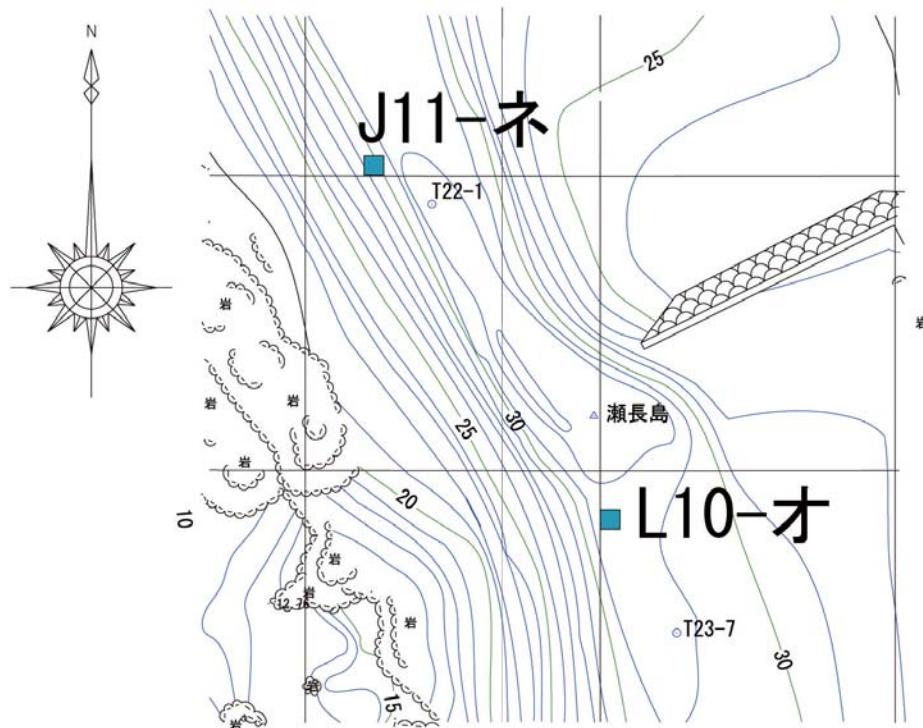


図版97 お地区出土遺物

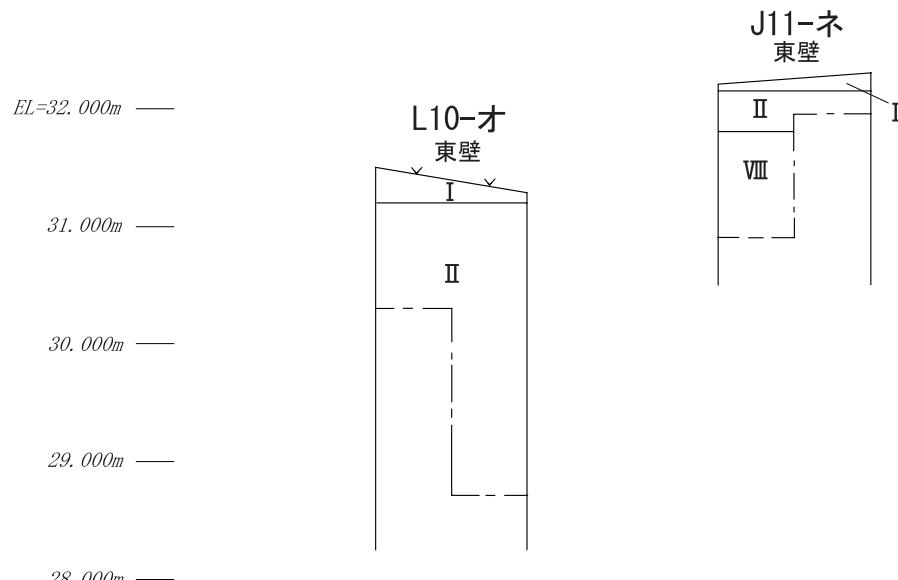
第8節 か地区

か地区は、瀬長島中央部の頂上に立地する地区であり、L10 - 才、J11 - ネの2グリットによって構成されている。本地区では 層、層、層が確認された。

本地区は、全てのグリットで、米軍接收時代における掘削や造成を大きく受けている。1949（昭和24）年に米軍が作成した地形図（第4図）の標高より7～8m低くなっていることが確認できた。



第112図 か地区地形図



第113図 か地区簡易層序断面図

1. L10-オ (平成18年度)

本調査区は、か地区の最東端に位置しており、～層まで確認された。EL = 28.700mまで掘り下げたが、全て米軍の造成土であった。

(1) 層序

層：現在の表土（層）

層～層：米軍造成土（層）

(2) 遺構

本グリットにおいては、確認されなかった。

(3) 出土遺物

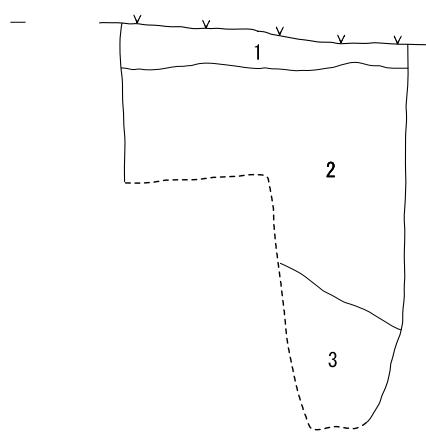
なし



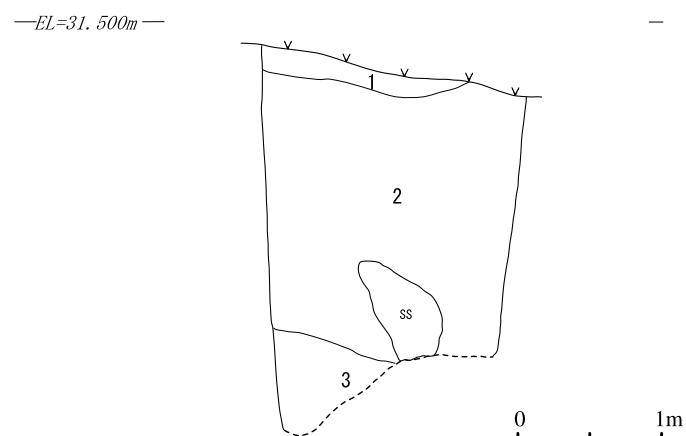
図版98 東壁



図版99 南壁



第114図 東壁



第115図 南壁

2. J 11-ネ (平成18年度)

本調査区は、か地区の最西端に位置しており、～層まで確認された。EL = 31.800mで確認された層の豊見城層(層)まで米軍接收時代の掘削や造成の影響を受けていた。

(1) 層序

層：現在の表土(層)

層～層：米軍造成土(層)

層：島尻層群豊見城層(層)

(2) 遺構

本グリットにおいては、確認されなかった。

(3) 出土遺物

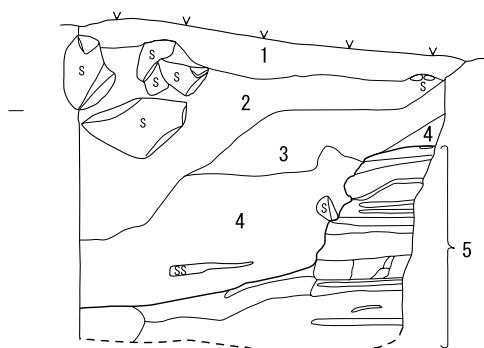
戦争遺物



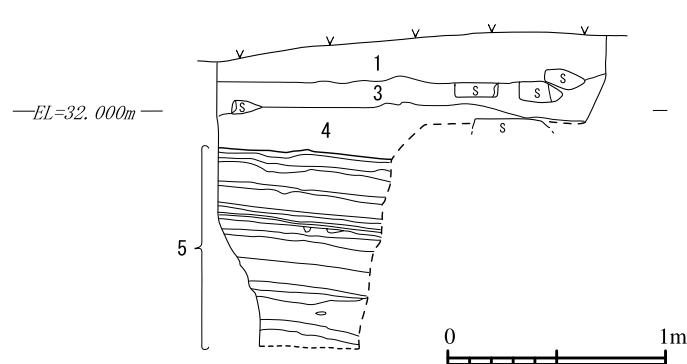
図版100 北壁



図版101 東壁



第116図 北壁

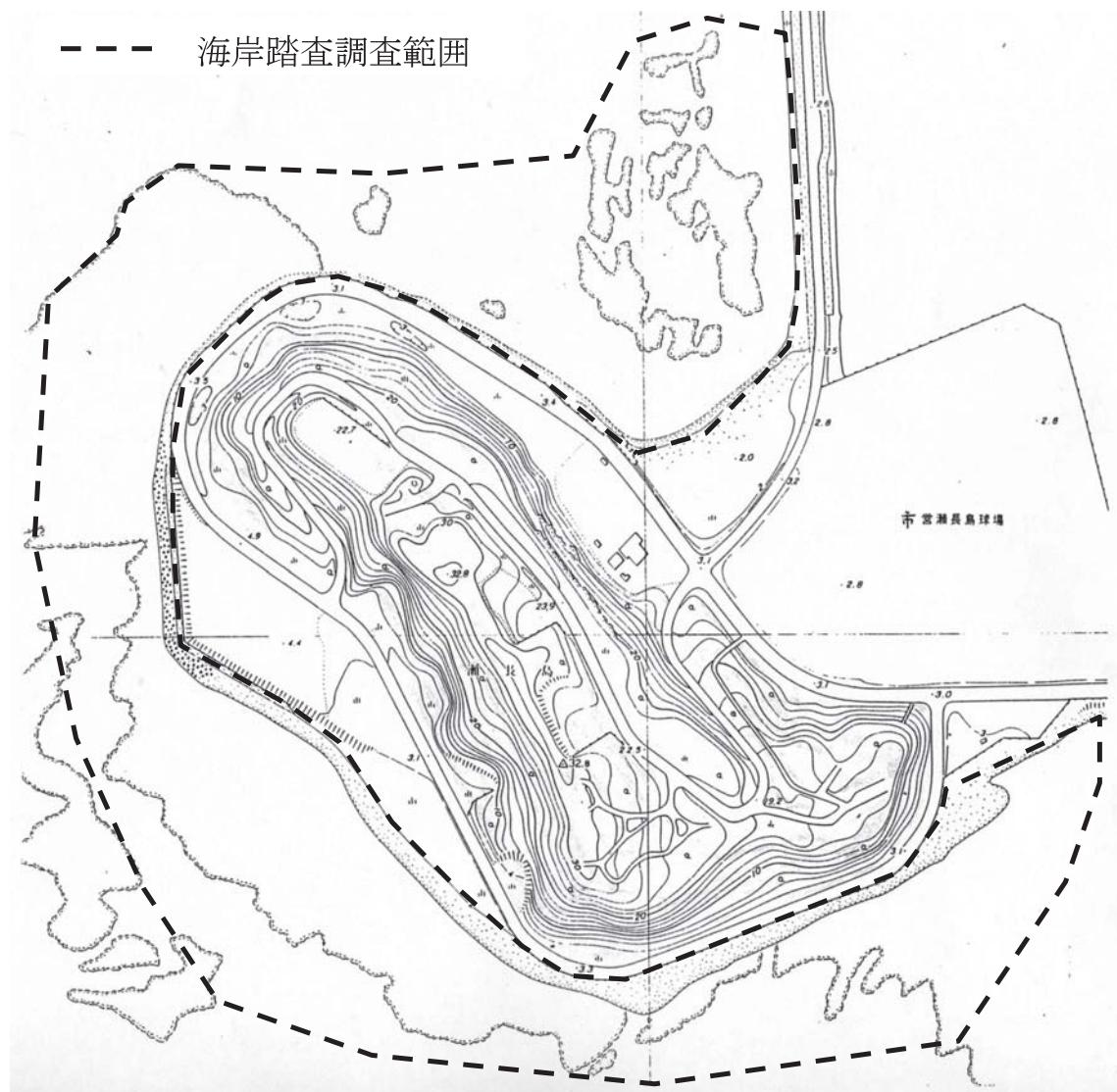


第117図 東壁

第9節 海岸踏査

海岸踏査は、瀬長島の南東側から北側の海岸を踏査する方法で3回実施した。瀬長島の南東側から北西側はビーチロック、北側は浅瀬の砂浜が広がっていた。

平成18年10月23日に実施した1回目では、南東側の海岸で石斧や青磁片などを採取することができた。しかし、平成19年3月22日と同年4月19日に実施した際には、遺物を採取することはできなかった。



第118図 海岸踏査調査区



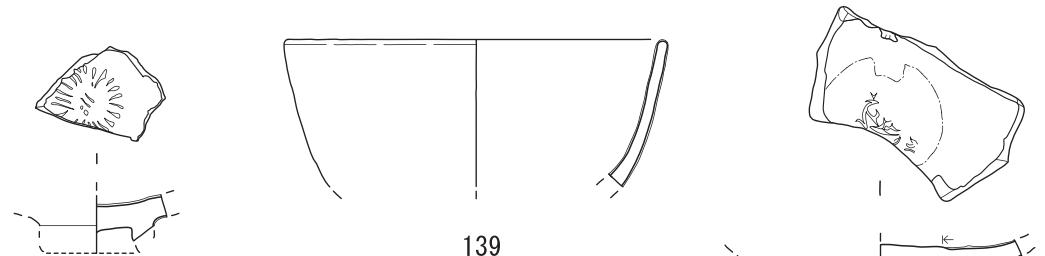
図版102 海岸踏査遺物確認状況

第26表 海岸踏査確認遺物一覧

沿岸地区	層序	遺物名	青磁	白磁	褐釉陶器	カムイヤキ	沖縄産施釉陶器	沖縄産無釉陶器	陶質土器	本土産磁器	瓦	石斧	貝	採集遺物計
	国有地 南西		9	1	1			4	2	5				22
	北東		9	2		1								12
	南東		1				1	7			2		5	16
	M 2											1		1
	合計		19	3	1	1	1	11	2	5	2	1	5	51

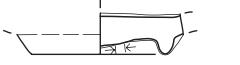
第27表 海岸踏査確認遺物観察

挿図番号 図版番号	種類	器種	観察事項	採集地点
第119図 図版103	137	青磁	碗 福建省系。無文外反碗である。見込に菊花の陰印花が施される。素地は灰白色の粗粒子で白色・黒色粒の混入物を含む。釉色は黄みのうすい緑色。15世紀前半～中葉。	南西(国有地)
	138	青磁	碗 福建省系。無文外反碗である。張りのある腰部をもつ器形である。高台内を露胎し、平坦に仕上げる。見込みを釉はぎして、印花文?を施している。素地は灰白色粗粒子で白色の混入物を含む。釉色は内外面に粗い貫入が見られる。底径は6cm。15世紀前半。	南西(国有地)
	139	青磁	碗 龍泉窯系。無文直口碗である。素地は灰白色の細粒子で釉色は明るい灰緑色を呈する。胴部に細かい貫入が見られる。口径は15.4cm。15世紀後半～16世紀前半。	南西
	140	青磁	皿 龍泉窯系。皿底部である（外反する口縁部がつくかと考えられる）。高台内に蛇の目搔き取りの痕が残る。素地は灰白色微粒子で茶色粒の混入物を含む。釉色は明るい灰緑色で内底面に粗い貫入が見られる。底径は5.6cm。	南西(国有地)
	141	青磁	盤 福建省系。高台をもつ、盤の底部である。素地は橙色の粗粒子で白色粒の混入物を含む。釉色は灰黄緑色で内外面に粗い貫入が見られる。底径9cm。15世紀前半～後半。	北東
	142	青磁	碗 龍泉窯系。連弁文碗の胴部である。素地は灰白色微粒子で白、黒の混入物を含む。釉色は黄みの明るい灰緑色で内外面に粗い貫入が見られる。外面には2本線による蓮弁文、内面はヘラ描文を描く。15世紀前半～中葉。	北東
	143	青磁	碗 福建省系。無文外反碗の底部である。高台内及び畠付は釉がかかっていない。素地は黄灰色の粗粒子で白色の混入物を含み、気泡が所々に見られる。釉色は外面は黄みの明るい灰緑色で内面は明るい灰緑色を呈する。底径4.8cm。14世紀中葉～後半。	北東
	144	白磁	皿 脇部が得られた。内底面に一条の圈線が見られる。素地は灰白色的細粒子で茶色粒の混入物を含む。釉色は明るい灰色を呈する。15世紀前半～後半。	北東
	145	加イヤヰ	壺 器壁は薄く、焼成が堅緻である。外器面には格子目当て具痕が確認できる。	北東
	146	石器	石斧 平面形は、短冊状を横断面形は扁平の橢円形状をなす。打割により母岩から素材を取り、整形加工したものである。頭部及び両側面部、裏面には成形時の剥離痕を残す。刃部から身部にかけて研磨を施す。両刃部は弱い稜をなすほど入念に研磨が施されるが、身部上半にいく程、自然面を残す。側縁も刃部に近い所が研磨され、残存している。長さ16.9cm・幅6.5cm・厚み2cm・重量360g。	M 2

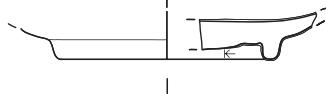


137

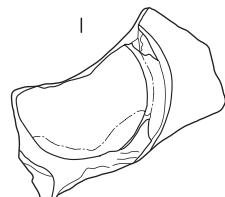
139



140



141



138



142

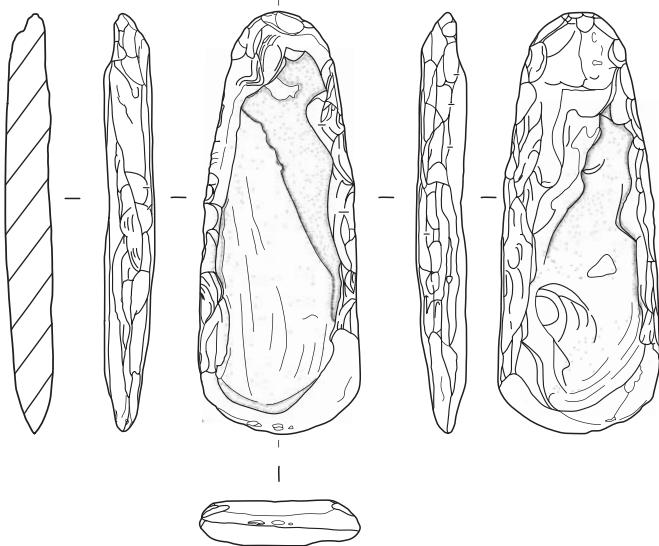


143

144

145

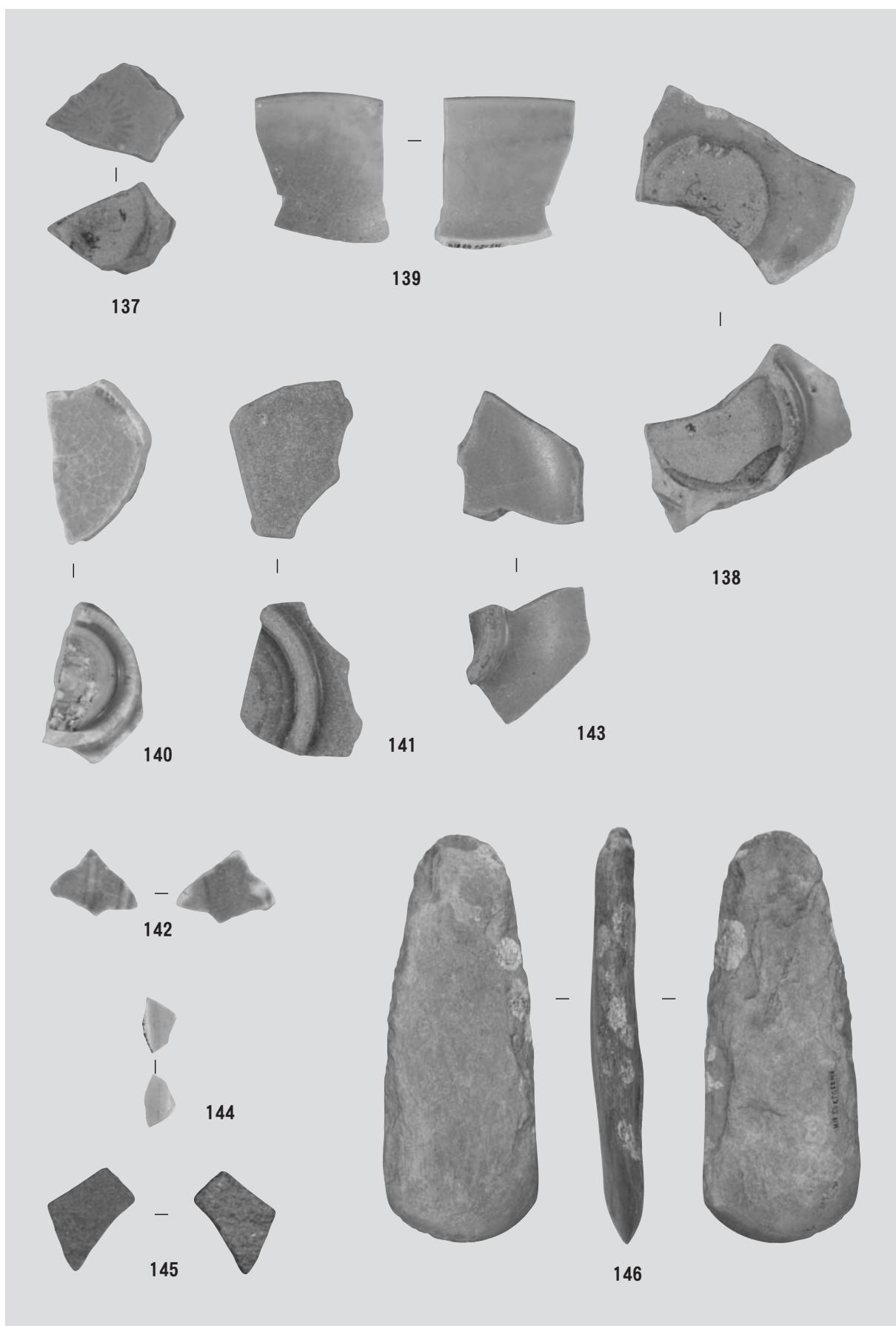
146



146

0 10cm

第119図 海岸踏査確認遺物



図版103 海岸踏査確認遺物

第V章 その他の遺跡

第1節 戦争遺跡

瀬長島は、戦後すぐに米軍に接收され、那覇飛行場の弾薬庫などの補助施設として利用されていたため、埋蔵文化財同様、これまで戦争遺跡の詳細な調査も行われていなかった。

今回の調査で、戦争遺跡の分布調査も併せて行った。

調査の結果、瀬長島南東側の丘陵斜面地で戦時中に構築されたと思われる壕を1基確認した。また、丘陵頂上付近でも戦時中に構築されたと思われる壕を1基確認した。

瀬長島南東側で確認された壕は、砂岩層を掘り込み、入り口がL字状に構築されていた。また、丘陵頂上付近のH13地区で確認された壕は、琉球石灰岩と砂岩層の境目に構築されていた。



第120図 戦争遺跡分布図



図版104 戦争遺跡確認状況（上：L3地区 下：H13地区）

第VI章 瀬長グスクから出土した貝類の生息環境

名 和 純

瀬長グスクから得られた貝類の殻は、腹足綱108種、二枚貝綱54種の合計163種であった。これらの貝類の生息環境は、次の7タイプに分けられる。1. 森林：2. 河川：3. マングローブ：4. 内湾干潟：5. 岩礁海岸：6. 礁池干潟～礁池：7. サンゴ礁。以下に生息環境ごとに出土状況を述べる。

森林：森林を生息場所とする陸産種は、アオミオカタニシ、ツヤギセル、オキナワスカワマイマイ、パンダナマイマイ、イトマンマイマイ、アフリカマイマイの6種となっている。このうち最も多く得られているイトマンマイマイは、自然度の高い森林に生息する種とされている（黒住，2005）。この種は、沖縄島中南部においては、現在は僅かな場所に生息しているにすぎないが、石灰岩の隙間などから化石が多量に見出される（久保・黒住，1995）。こうしたことから、瀬長グスク形成当時は、イトマンマイマイの大きな個体群を維持できるだけの豊かな森林環境がこの付近に発達していた可能性がある。なお、2個体のみ得られているアフリカマイマイは移入種であり、表層からの混入と考えられる。

河川：河川を生息場所とする種は、トウガタカワニナが僅かな個体数得られているのみである。

マングローブ：マングローブを生息場所とする種は、センニンガイ（1個体出土）とシレナシジミの2種が得られている。センニンガイは、現在はフィリピン以南の熱帯域のマングローブ湿地に生息域のある種であり、沖縄島からは約2000年前に絶滅したとされている（小澤他，1995）。シレナシジミは、現在でも沖縄島各地の自然度の高いマングローブ湿地に生息しているが、瀬長グスク周辺には現生していない。これらのことから、グスク形成当時は、周辺域に安定したマングローブ湿地が形成されていた可能性がある。

内湾干潟：内湾干潟を生息場所とする種は、カンギク、マルアマオブネ、カヤノミカニモリ、イボウミニナ、ヘナタリ、シマベッコウバイ、オキシジミ、スダレハマグリ、アラスジケマンガイが出土している。このうち、カンギク、マルアマオブネ、イボウミニナ、アラスジケマンガイは、まとまった個体数で得られている。

岩礁海岸：岩礁海岸（岩礁潮間帯上部）を生息場所とする種は、オオベッコウガサ、ツタノハガイ、リュウキュウウノアシ、オキナワイシダタミ、イシダタミアマオブネ、アマオブネ、コンペイトウガイ、ゴマフニナ、ヒラカラマツ、オハグロガキが出土している。このうち、オキナワイシダタミ、イシダタミアマオブネ、アマオブネの3種は多量に得られている。

礁池干潟～礁池：礁池干潟および礁池を生息場所とする種には、最も多くの種が含まれている。まとまった個体数で出土した種は、ニシキウズ、クワノミカニモリ、クモガイ、マガキガイ、ハナマルユキダカラ、ハナビラダカラ、イトマキボラ、コオニコブシ、マダライモ、ベニエガイ、ミドリアオリ、ウラキツキガイ、カワラガイ、イソハマグリ、リュウキュウマスオ、ホソスジイナミガイなどであった。なかでも、イソハマグリ、カワラガイ、ウラキツキガイ、ホソスジイナミガイの4種の二枚貝類は、突出して多量に得られている。カワラガイとウラキツキガイは、現在の沖縄島では沖縄市泡瀬干潟や恩納村屋嘉田潟原といった最も自然度の高い礁池干潟にのみまとまった個体群が維持されている。そのため、グスク形成当時は、瀬長グスク付近に自然度の高い豊かな礁池干潟が存在していたと考えられる。

サンゴ礁：サンゴ礁を生息場所とする種は、多くの種が出土している。そのうち、主な種は、サラサバティ、チョウセンザザエ、ヤコウガイ、ホシダカラ、ホラガイ、アンボンクロザメ、シラナミなどとなっている。このうち、チョウセンザザエとシラナミは、まとまった個体数で得られている。

上述のとおり、瀬長グスクから出土した貝類の生息環境は、幅広い海岸環境にまたがっている。これらの環境は、陸から海にかけて、森林 マングローブ 内湾干潟 岩礁海岸 礁池干潟 サンゴ礁と連なる大スケールのエコトーン（移行帶）としてとらえることができる。このように、グスク形成当時、広大で豊かに保たれていた一連の海岸環境が余すところなく利用されていたと考えられる。なかでも、礁池干潟の二枚貝類を多量に含むことが瀬長グスクの出土貝類を特徴付けている。これらの二枚貝類（カワラガイ、

ウラキツキガイ、ホソスジイナミガイなど)は、瀬長グスク北側地先の大嶺干潟に現在も生息している。大嶺干潟は、瀬長グスク形成当時の環境を知ることのできる貴重な干潟といえよう。

引用文献

- 黒住耐二, 2005. イトマンマイマイ. 改訂『沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 動物編 レッドデータブック』 沖縄県環境保健部自然保護課
- 久保弘文・黒住耐二, 1995『沖縄の海の貝・陸の貝』 沖縄出版
- 小澤智生・井上恵介・黒田登美雄, 1995『南西諸島のマングローブにおけるセンニンガイの消長と後氷期気候変動』 名古屋大学古川総合研究資料館報告11, 22 - 33.

第VII章 理化学分析成果

パリノ・サーヴェイ社

はじめに

豊見城市瀬長島に所在する瀬長グスクの試掘調査では、いわゆる「高麗系瓦」とされる瓦片が2点出土している。この瓦は、出土状況等などから14世紀～15世紀頃のものと考えられ、その特徴から浦添ようどれで確認されている「天」などの銘がある瓦と同様なものとされている。

高麗系瓦は、これまで朝鮮半島からの輸入品であると考えられてきたが、近年の沖縄本島における発掘調査成果（例えば名護市教育委員会（1992）など）や、その分析事例（浦添市教育委員会,2005・山本ほか,2007）などから、高麗瓦は沖縄本島内で製作された可能性のあることも呈示されている。一方、上原（2002a）は、瓦の文様や記銘方法から、高麗時代の瓦の造瓦技術の琉球への伝播を述べながらも、上原（2002b）により、済州島出土の高麗時代の古瓦に認められる技術的系譜は、沖縄諸島出土瓦とはやや遠いという指摘をしている。いずれにしても、高麗系瓦の窯跡が確認されていないことにより、現在でも、沖縄本島から出土する高麗系瓦の生産地については、大きな課題とされている。

瓦の材料すなわち胎土の特性を明らかにし、そこから材料の採取地の地域性や製作者の違いなどを解析する胎土分析は、上記課題に対しても有効な分析手法であると考えられる。上述した山本（2007）の分析事例は、首里城跡より出土した各種の古瓦（14世紀後半～15世紀前半とされる）について分析を行ったものであるが、結果として、1) 発掘調査所見により「明朝系」、「高麗系」、「大和系」と分類された試料が、胎土分析では、互いにかなりよく似た鉱物組成・岩石片組成を示し、区別することができない、2) これらの鉱物組成・岩石片組成から推定される地質は、沖縄本島北部の名護市北西部付近に想定される、という知見を得ることができた。これらの知見からは、首里城跡出土の瓦は、大陸や朝鮮半島および日本本土など各地の瓦が集まっているという状況よりも、全て沖縄本島内のある限定された地域で生産されたという状況を示唆している。

本報告では、瀬長グスクより出土した高麗系瓦について、首里城跡より出土した各種の古瓦と同様の手法による胎土分析を行い、その比較検討により、高麗系瓦の製作に係わる資料を作成するものである。

1. 試料

試料は、瀬長グスクより出土した2点の高麗系瓦とされた接合試料である。各試料には注記があり、1点は「H14-テ 層」、1点は「H15-シ 層」とされている。ここでは、これらを試料名とする。

2. 分析方法

胎土分析には、現在、様々な分析方法が用いられているが、大きく分けて鉱物組成や岩片組成を求める方法と化学組成を求める方法がある。前者は粉碎による重鉱物分析や薄片作製による顕微鏡観察などが主に用いられており、後者では蛍光X線分析が最もよく用いられている方法である。

今回の試料のように比較的粗粒の砂粒を多く含み、低温焼成と考えられる瓦の分析では、鉱物組成や岩片組成を求める方法が、胎土の特徴が捉えやすいこと、地質との関連性を考えやすいことなどの利点があることから適当と考える。さらにこの方法の中でも薄片観察は、胎土中における砂粒の量はもちろんのこと、その粒径組成や砂を構成する鉱物、岩石片および微化石の種類なども捉えることが可能であり、得られる情報が多い。なお、これまで、これら薄片からの情報は定性的に記載されることが多かったが、ここでは、下記のポイント法による粒子の計数により、定量的に表す方法を採用する。これにより、胎土の特性をより詳細に識別することが可能となる。例えば、後背の地質を共有する地域内では、土器胎土の鉱物組成や岩石組成が互いに類似するが、胎土中の砂の粒径組成を捉えることにより、地域内での局地的な胎土の違いや時期や器種等による胎土の違いを見出せる可能性もある。以下に手順を述べる。

薄片は、試料の一部をダイアモンドカッターで切断、正確に0.03mmの厚さに研磨して作製した。薄片は偏光顕微鏡による岩石学的な手法を用いて観察し、胎土中に含まれる鉱物片、岩石片および微化石の種類構成を明らかにした。

データの呈示は、松田ほか（1999）が示した仕様に従う。砂粒の計数は、メカニカルステージを用いて0.5mm間隔で移動させ、細礫～中粒シルトまでの粒子をポイント法により200個あるいはプレパラート全面で行った。また、同時に孔隙と基質のポイントも計数した。これらの結果から、各粒度階における鉱物・岩石別出現頻度の3次元棒グラフ、砂粒の粒径組成ヒストグラム、孔隙・砂粒・基質の割合を示す棒グラフを呈示する。

3. 結果

薄片観察結果を表1、図1～3に示す。各試料に認められる主な鉱物片は、石英と斜長石であり、少量のカリ長石を伴う。これらの鉱物片以外に、H14-テ層では微量の黒雲母が認められ、H15-シ層では微量の角閃石と不透明鉱物が認められた。岩石片では、両試料ともにチャートと多結晶石英を比較的多く含むが、H14-テ層には微量の頁岩と粘板岩が認められ、H15-シ層には微量の砂岩が認められた。

碎屑物の量比は、H14-テ層が約20%、H15-シ層が25%ほどあり、後者の試料の方が若干碎屑物を多く含む。一方、胎土中の砂粒の粒径組成では、両試料ともに細粒砂～極細粒砂に集中するが、H14-テ層は極細粒砂にモードがあり、H15-シ層は細粒砂にモードがある。

4. 考察

両試料の胎土の鉱物・岩石組成は、主要な鉱物・岩石では類似するが、微量含まれる鉱物と岩石において、種類の違いが認められる。特に岩石片において、H14-テ層に認められる粘板岩は変成岩であり、H15-シ層に認められる砂岩は堆積岩である。したがって、各試料の胎土が由来する堆積物の地質学的背景が異なる可能性がある。なお、これらを比較する沖縄島の地質については、主に木崎編（1985）および日本の地質「九州地方」編集委員会（1992）などの記載を参照した。

H14-テ層の胎土において、地質を示唆する碎屑物は、チャート、頁岩、粘板岩である。これらのうち、頁岩と粘板岩という組み合わせからは、沖縄島の北部～中部西岸域に分布する、中生代白亜紀から新生代古第三紀にかけて形成された名護層と呼ばれる、主に頁岩と千枚岩および緑色岩からなる地質が推定される。粘板岩は、千枚岩よりもやや結晶度の低い変成岩であり、名護層中にも産する岩石である。チャートについては、沖縄島では、古生代末から中生代に及ぶ堆積岩を主とする地質である本部層、今帰仁層、与那嶺層を構成する岩石の一部として分布しているが、これらの地質の分布域は、ほぼ本部半島に限られている。したがって、H14-テ層の胎土が示す地質学的背景を沖縄島内に求めるすれば、名護層分布域と本部半島が接する名護市北西部付近を想定することができる。なお、微量の黒雲母は、中部・北部の西岸沿いに岩脈や岩株、岩床として点々と分布している黒雲母石英斑岩に由来する可能性がある。

山本ほか（2007）による首里城の古瓦の分析では、高麗系、明朝系、大和系の各瓦試料のほとんど全てが、黒雲母を含み、チャートと変成岩を特徴とする岩石片組成を示しており、その地質学的背景は、上述したH14-テ層の胎土と同様のことが推定された。すなわち、瀬長グスクにおけるH14-テ層とされた高麗系瓦については、その生産過程において、首里城で出土した多くの古瓦との関連性が非常に高いことが考えられる。

また、浦添ようどれ出土の高麗系瓦を試料とした分析では、薄片観察により、胎土中の鉱物片・岩石片の状況を定性的に捉えている。試料には、「癸酉年」、「大天」、「天」などの銘が確認されているが、胎土は、いずれもほぼ同様であった。すなわち、鉱物片では石英、カリ長石、斜長石および角閃石と白雲母が確認され、岩石片では主にチャートと花崗岩類および結晶片岩が認められている。H14-テ層の胎土と比べると、鉱物片では黒雲母と白雲母の違いがあり、岩石片では、花崗岩類と多結晶石英および結晶片岩と粘板岩という違いがある。ただし、いずれの違いも、それぞれ同一の地質に由来する鉱物および岩石でもあることから、H14-テ層は、浦添ようどれ出土の高麗系瓦とも、その胎土において共通性が高いと言うことができる。

H15 - シ 層の胎土の特徴は、鉱物片では角閃石と不透明鉱物、岩石片ではチャートと砂岩であり、上述したチャートの沖縄島での分布を考慮すると、その地質学的背景はやはり本部半島付近の地質となる可能性はある。しかし、土器胎土中に含まれるような細礫以下のチャートの岩石片は、沖縄島南部に広く分布する新第三紀の堆積岩からなる島尻層群を構成する砂岩中にも含まれている（神谷ほか,1997）。したがって、現時点では、H15 - シ 層の胎土の地質学的背景は、本部半島だけではなく、瀬長グスクの位置する沖縄島南部も含めた広い範囲が想定される。また、山本ほか（2007）による首里城の古瓦の分析では、変成岩を含まない胎土の古瓦試料は認められていない。これらのことから、H15 - シ 層とされた高麗系瓦については、その生産に係わる事情が、H14 - テ 層の瓦や首里城出土の古瓦とは異なっていた可能性がある。

今回分析を行った高麗系瓦の胎土の由来の違いは、各試料の胎土が由来する堆積物の地質学的背景が異なることに起因する。これは瀬長グスクの高麗系瓦の生産や流通の違いを反映している可能性があり、興味深い結果である。ただし、試料数の少ない現時点では、上述したような、微量に出現した鉱物や岩石片の評価を課題として継続した分析を進めていく必要がある。また、沖縄県内の河川砂や路頭試料等についても分析を行い、基礎データの蓄積した上で比較検討も望まれる。

引用文献

- 神谷厚昭・我謝昌一・山田真弓,1997,南風原町の地質.南風原町史 第2巻 自然・地理資料編,南風原町,25 - 65.
- 木崎甲子郎編著,1985,琉球弧の地質誌.沖縄タイムス社,278p.
- 松田順一郎・三輪若葉・別所秀高,1999,瓜生堂遺跡より出土した弥生時代中期の土器薄片の観察 - 岩石学的・堆積学的による -.日本文化財科学会第16回大会発表要旨集,120 - 121.
- 名護市教育委員会社会教育課,1992,名護市文化財調査報告10 宇茂佐古島遺跡 - 宇茂佐第二地区区画整理事業に伴う埋蔵文化財範囲確認調査報告書 -.107p.
- 日本の地質「九州地方」編集委員会,1992,日本の地質9 九州地方,共立出版,371p.
- 上原 静,2002a,韓国からみた琉球諸島の高麗瓦.世界に拓く沖縄研究,第4回沖縄研究国際シンポジウム実行委員会,166 - 174.
- 上原 静,2002b,沖縄諸島における高麗瓦の系譜 - 韓国済州島出土の高麗瓦との比較 -.南島文化,24,49 - 62.
- 浦添市教育委員会,2005,浦添市文化財調査研究報告書 浦添ようどれ - 瓦だまり遺構編 - 史跡浦添城跡復元整備事業に伴う発掘調査報告,157p.
- 山本正昭・上田圭一・矢作健二・石岡智武,2007,首里城跡御内原西地区発掘調査出土瓦の胎土分析とその検証.沖縄県立埋蔵文化財センター紀要第5号 沖縄埋文研究5 (印刷中) .

表1 古瓦胎土分析表

試料	砂粒区分	砂粒の種類構成											合計	
		鉱物片						岩石片				その他		
		石英	カリ長石	斜長石	角閃石	黒雲母	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	多結晶石英	粘板岩		
H14 - テ 層	砂	細礫											0	
		極粗粒砂											0	
		粗粒砂											0	
		中粒砂	5		3		1		2			1	12	
		細粒砂	29	4	11			9	1		4	1	59	
		極細粒砂	34	3	19			9	2		9	1	77	
		粗粒シルト	21		10			1				1	33	
		中粒シルト	15		4								19	
		基質											751	
		孔隙											28	
H15 - シ 層	砂	細礫											0	
		極粗粒砂									1		1	
		粗粒砂											0	
		中粒砂	7					1			4		12	
		細粒砂	39		12			9			6		66	
		極細粒砂	37	2	12	1		1	7		3		63	
		粗粒シルト	29		10								39	
		中粒シルト	18		1								19	
		基質											535	
		孔隙											27	

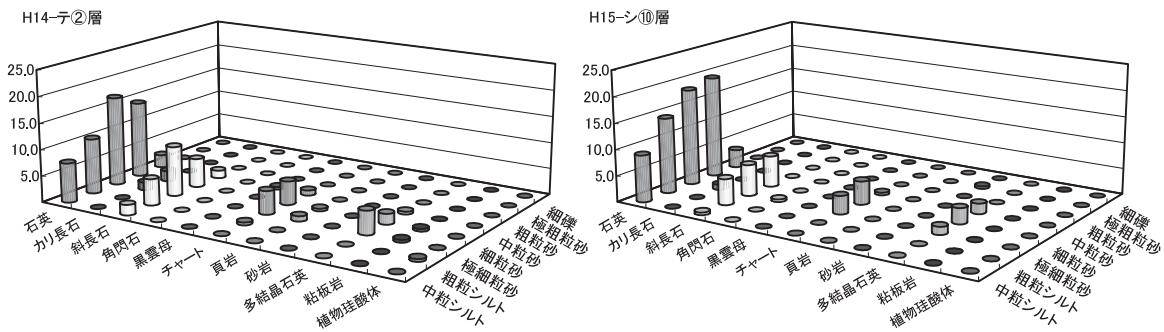


図1. 各粒度階における鉱物・岩石出現頻度

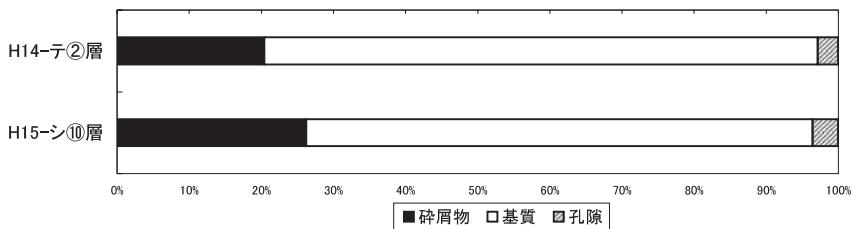


図2. 碎屑物・基質・孔隙の割合

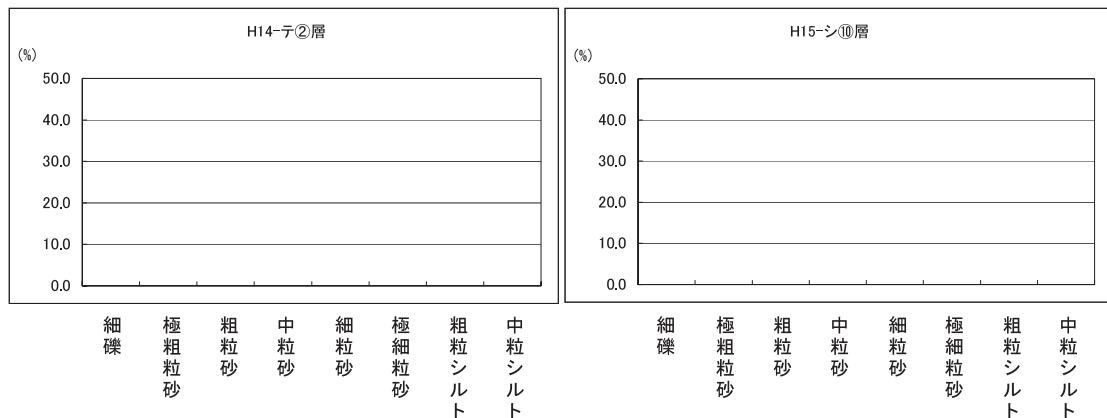
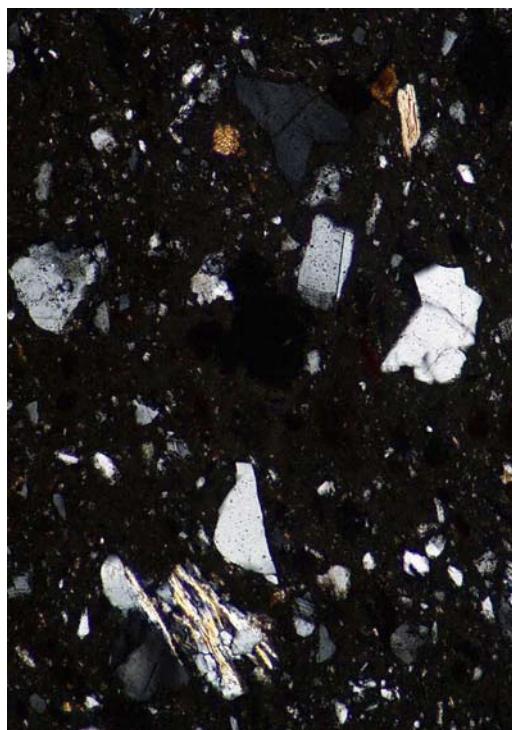
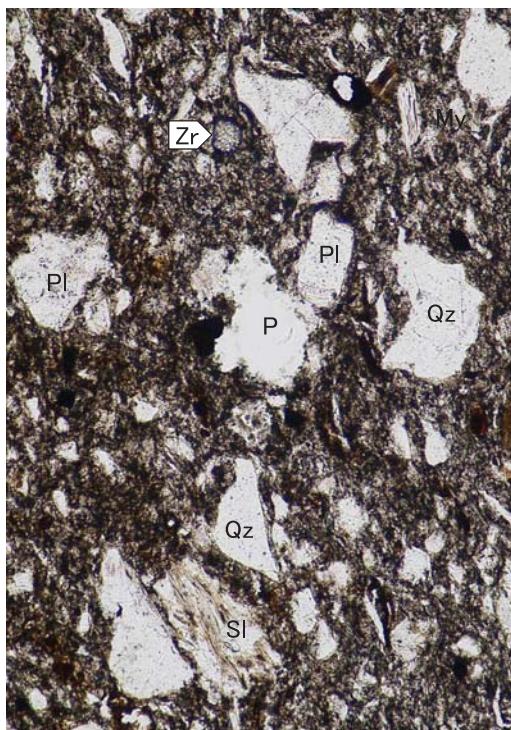
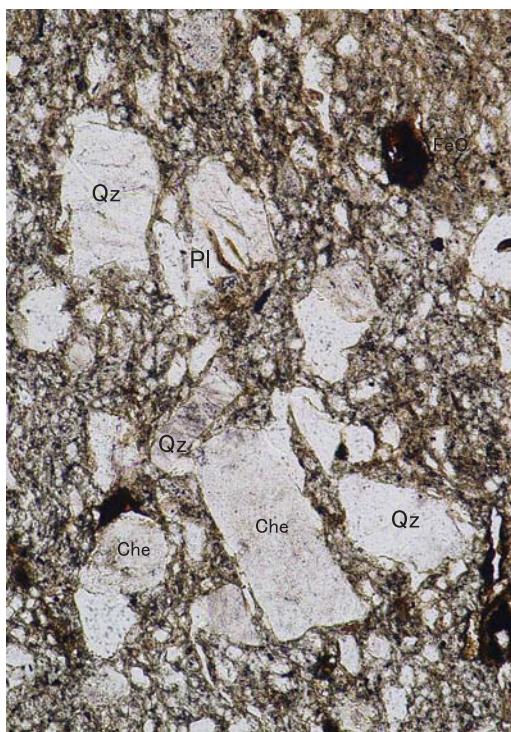


図3. 胎土中の砂の粒径組成

図版1 胎土薄片



1.5GH14-テ2層



2.5GH15-シ10層

Qz:石英. Pl:斜長石. Zr:ジルコン. Mv:白雲母. Che:チャート. SI:粘板岩.
FeO:酸化鉄. P:孔隙.

0.2mm

写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

第VIII章 総 括

以上、これまで平成17年度から平成18年度にかけて実施した、瀬長島内の試掘調査の成果について述べてきた。2年間で38箇所の範囲確認調査を実施しており、これにより調査地域内における周知の埋蔵文化財の分布状況、性格やその範囲について、より詳細に把握することができ、新規の埋蔵文化財包蔵地の検討に必要な資料も得られたと思う。しかしながら瀬長島内の範囲確認調査を実施するにあたっては、国土交通省大阪航空局那覇空港事務所より一部の地域で重機使用の制限が課せられた状況下等での調査であったため、4m四方や2m四方といったごく小規模な調査面積では、検出された遺構や確認された堆積層の性格・範囲、時期について判断することは困難を極めた。本調査は、範囲確認調査のため調査面積が限られているが、他遺跡との比較を行いながら、ここで、これまでの調査の成果を整理して若干の要点に触れ総括としたい。

範囲確認調査の方法は、瀬長島を通る世界測地系の南北の座標軸を基軸として30mメッシュを基本に調査地域の地形や聞き取り調査の資料を考慮して重機掘削や手掘調査により範囲確認調査を実施してきた。戦後、30余り米軍基地として島内に施設が建設され、返還時に埋められた同施設に架かったものは試掘坑の状況を見て調査が不可能な場合は、調査の継続を断念した。よって当初想定していた調査結果を得られない地区もあった。また、私有地の瀬長ファミリーランドと戦後、米軍によって埋め立てられてできた南西側の国有地については、調査対象から割愛した。

基本層序については、調査概要の項でも述べたように、あ地区からか地区の調査成果から、各調査区域に共通する 層から 層までの堆積層が確認されている。そのうち琉球石灰岩（ 層）を基盤層とする地区は、え地区からお地区の第2丘陵面で確認することができた。また、島尻層群豊見城層（ 層）を基盤層とする地区は、丘陵下の旧海岸線のう地区と丘陵頂上部のか地区、第2丘陵面のお地区西側の一部で確認することができた。その他のあ地区、い地区では、米軍の造成の影響を大きく受けている。

遺構はピット群及び土坑が確認された。ピット群は第2丘陵面のお地区 I10 - イ、G11 - ス、丘陵下の旧海岸線のう地区 H14 - テ・トで検出されている。また、土坑はピット群が検出されたお地区 G11 - ス、う地区 H14 - トで検出された。瀬長グスクがあった丘陵より一段低い第2丘陵面であるお地区の I10 - イ、G11 - スで遺構が確認されたことは、大きな成果といえる。このことにより、瀬長グスクの東側にグスクに関係のある何らかの建物があったということが窺える。また、旧海岸線のう地区 H14 - トで確認された遺構も瀬長グスクに関係が深いものと考えられるが、しかし、いずれも調査面積が限られていたので建物のプランを把握することはできなかった。

出土遺物はグスク時代に属する遺物が殆どであった。陶磁器から年代観を見ると、14c代～15c代の青磁、白磁、染付等が得られた。産地別に見ると中国産が圧倒的であり、その他、タイ産や肥前系の陶磁器が出土した。遺物の出土量・種類等から14c～15c代が本遺跡の活況を呈したものと思われる。出土遺物で特に興味深いものとしては、豊見城市では初めての出土となる高麗系瓦が2点出土したことである。2点とも高麗系瓦の天瓦であり、何らかの意図があって持ち込まれたと思われるが、今後の資料の追加を待ち、あらためて検討していきたい。

動物遺体も注目される資料である。グスク時代の代表的な遺跡である今帰仁城跡では、篩水洗を行った貴重なデータが得られている。これによると今帰仁城跡では、前時代と比較して大型の魚類が捕獲されており、シイラ科などの魚種も見られるようになる。これは、按司階級と一般民衆との食生活の差として捉えられている。しかしながら、瀬長グスクにおいては、顕著に大型の魚種や固体は認められず、ブダイ科、ベラ科、ハタ科を中心とした、リーフ内での漁労形態が見て取れる。その一方で、ウシやリュウキュウイノシシ/ブタといった、本来島内には生息しない動物が確認され、食糧として本島側から運びこまれたものと考えられる。その点では、按司階級として食生活が成り立っているといえる。（註1）

また、貝類遺体も注目される資料と考えられる。瀬長グスク形成当時の自然環境を垣間見ることができる。今回の調査で確認された貝類の生息環境は幅広く、広大で豊かに保たれていた海岸環境を利用してい

たと考えられる。

文献からみた瀬長グスクについて「第2章第3節歴史的環境」で触れているので紹介したい。

瀬長グスクについては、『琉球国由来記』(1713)には、「瀬長按司ハ王位の御婿ニテ…(巻八・那霸由来記イベガマノ事)」とあり、また、「往古ハ瀬長按司居住ノ跡アリ…(巻十二・各処祭祀)」と瀬長按司がいたグスクであったとする記述がある。『琉球国旧記』(1731)では、「中山王、精兵を発して攻め滅ぼす。(巻之五・古城)」とあり、瀬長按司が反乱を起こし、当時の中山王に討ち滅ぼされたとする記述がある。文献史料と出土した資料をつきあわしてみると、本遺跡のメインの時期の14c~15cと合致することがわかった。

おそらく、本遺跡は出土遺物の年代観や文献史料をつきあわすと、グスク時代の短い期間だけ生活が営まれていたと推察される。

(註1) 『今帰仁城跡周辺遺跡』 - 今帰仁城跡周辺整備事業に伴う緊急発掘調査報告 - 2005年7月

報 告 書 抄 錄

ふりがな	せながぐすくほかはんいかくにんちょうさほうこくしょ							
書 名	瀬長グスク他範囲確認調査報告書							
副書名	瀬長グスク他範囲確認調査事業							
巻 次								
シリーズ名	豊見城市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第8集							
編著者名	大城竜也・伊波かおり・名嘉山美野・久貝弥嗣・名和純・パリノ・サーベイ株式会社							
編集機関	豊見城市教育委員会文化課							
所在地	〒901-0232 豊見城市字伊良波392番地 TEL 098-856-3671							
発行年月日	2008年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °	東径 °	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
瀬長グスク他範囲確認調査	沖縄県 豊見城市 字瀬長	市町村 472-123	遺跡番号	26° 10 30	127° 38 32	20050808 、 20051107 、 20060703 、 20070929	248 、 232	瀬長島における試掘調査による範囲確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
瀬長グスク	グスク跡? 集落跡?	中・近世	ウジマ畠 ピット群	土器・青磁・白磁・ 褐釉陶器・タイ産陶器・ 石器・沖縄産施釉陶器・ 沖縄産無釉陶器・ 金属製品・古銭・貝製品・ 獸骨等			新規の埋蔵文化財包蔵地が確認されたほか、 今後の調査で周知の遺跡の範囲が拡大する可能性がある。	

豊見城市文化財調査報告書第8集

瀬長グスク他範囲確認調査報告書

- 瀬長グスク他範囲確認調査事業 -

発行年 平成20年(2008)3月31日

発行 豊見城市教育委員会

編集 豊見城市教育委員会文化課

〒901-0292 豊見城市字翁長854番地1号

TEL 098-856-3671

印刷 有限会社 トヨサキ印刷

〒901-0211 豊見城市字饒波1023番地2号

TEL 098-840-6644